
終末幻想伝 ジャスティスソード

卯月昇華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終末幻想伝 ジャステイスソード

【Nコード】

N0849H

【作者名】

卯月昇華

【あらすじ】

高校生の桐山クダイは、ある晩、好奇心から近くの廃校へ忍び込む。そして、そこで見たものは異世界から来た騎士と魔王。騎士は破れ際に、使う者の心にわずかでも悪があれば、災いをもたらすという伝説の剣ジャステイスソードをクダイに託す。クダイは魔王に襲われる瞬間にジャステイスソードを構えると、魔王をカメラのストラップに封じ込めてしまった。魔王の名はケファノス。ジャステイスソードの災いを受けないクダイを、ケファノスは元の姿に戻る為に無理矢理協力させる。やがて、それが始まりでクダイとケファ

ノスは、大きな運命の渦へと飲み込まれて行く。

序章

真下は炎の海。踏み外せばなんの苦労もなく死ねる。

だが進まねばならない。細く長い道の先には、世界を脅かす魔王がいるのだから。

銀の鎧に身を包み、顔も覆い隠す仮面をつけ、イグノアは一人歩いている。

「ケファノス……………」

崖の淵に堂々たる玉座。そこに頼杖をついている者。

「来たか」

魔王ケファノス。こちらは濃い紫の鎧。やはり顔はフルフェイスのマスクを被り素顔は伺えない。

「最後の決着をつけに来た」

「人間風情がデカく出たものだ」

「地上はお前には渡さん！」

イグノアは腰の剣を抜く。

「ほう、ジャスティスソードか……………そんなものを持つて来るとは……………」

魔王ケファノスを唸らせた剣。刀身が黄金の気品ある伝説の剣が鋭

い光を放つ。

「ジャスティスソードは魂さえ砕く剣。斬られれば、輪廻の軌跡に乗ることは叶わない。お前を倒し、全ての魔族を全滅させる。魔族も今日で最後だ」

「愚かしい。貴様ら人間は自分勝手の極みだな」

ケファノスが玉座から立ち上がると、その後ろで炎が噴き上がった。

「ジャスティスソードは魂を砕くだけが能力ではない。余はかつて一度だけその力を見ている。その時の使い手は、ジャスティスソードを使いこなせずに自らが塵となった。はたして貴様に使いこなせるか？正義の刃を」

ケファノスの言葉に躊躇いが出る。

どんな戦いが起きようとも、ジャスティスソードを手にしようとした者はいない。遠い過去の逸話には、不幸しかないことも知っている。

だが、目の前の魔王を倒すには、その力に頼らざるを得ない。

「ジャスティスソードは小さな悪も許さない。故に、扱う者がわづかでも心に悪を宿していれば、その者にも災いが起こる。覚悟が出来ているならかって来るがいい」

ケファノスも剣を手にし答えを待つ。

悪を持たない人間などいない。イグノアも人間である以上、必ず悪は持っている。しかし、

「覚悟はもとより出来ている！」

戦いを拒んでもケファノスに自分がやられる。ならば…と、ジャステイスソードを構え戦いを挑む。

「行くぞ！ケファノス！！」

地面を蹴り飛ばすように走る。

「狂剣を振るうか………嘆かわしい」

果敢に挑んで来るイグノアと剣を交える。

火花が激しく散るも、どちらも退かない。

「負けるわけにはいかない………！」

「人間とは悲しい生き物よ。自我が強い故になにもかもを手に入れようとする」

鏖ぜり合いが続く。距離を取れば勝負がついてしまうことに、イグノアは恐れていた。

「いつか貴様ら人間は、互いの血で地上を濡らすだろう」

予言するかのようにケファノスは言った。

「黙れっ！人間はそこまで愚かではない！」

ジャステイスソードに力を込める。奇跡でもいい、命果てようともケファノスを倒したい………そう願った時だった。

突如、ジャステイスソードが瞼を突き破るような強い光に包ま

れる。

「こ……これは……!？」

ケファノスの方からイグノアと距離をとる。

「うぐ……ぐああ……」

だが、イグノアはジャステイスソードを手にしたままうめき声を上げている。

眩しさから状況を視認するのは困難だった。イグノアに何が起きているのかわからないまま、それは起きる。

ケファノスとイグノア。魔王と勇者の二人の身体が、ジャステイスソードの光に反応して宙に浮く。

「クソッ……身体が動かん……!」

自由にならなくなったケファノスの身体。

徐々に大きくなる不思議な金属音が、イグノアのうめき声を掻き消し、意識を奪う。

勝敗の着かぬまま、やがて二人は光に吞まれて行き姿まで消す。

ジャステイスソードと共に……。

第一章 闇夜の出会い

夜というのは特別な時間を演出してくれる。特に夏は。

昼間の暑さを追いやり、少し湿ったようなひんやりとした空気。それとあの独特な匂い。草木の寝息すら聞こえて来そうな闇の香りは、好奇心を掻き立てる。

桐山クダイも好奇心を掻き立てられた一人だ。

若干17歳の少年は、カメラを携え廃校になった校舎に来ていた。最新のデジタルカメラには、アフロヘアの天使のストラップがぶら下がる。

「へへ。ワクワクする」

そんな状況だからやろうとする事は一つ。

「絶対、心霊写真撮ってみんなをアツと言わせてやる」

だそうだ。

クダイは写真に興味があるわけではない。ただ、幽霊がいるかいないかをクラスメートと言い合い、証拠を押さえる為に安易にやって来たのだ。

「よっこらしょっと」

裏手の窓を外し、中へと『侵入』する。もちろん許可など得てるわけではないので、懐中電灯なる便利アイテムは持ち合わせていない。抜き足差し足したのも最初だけ。後は我が物顔で誰もいない校舎を徘徊する。

生前は中学校を謳っていた廃校。まずは科学準備室。そして科

学室。一通り見て回り、次は音楽室と、いかにもという場所を探索する。

「チエツ、ここにもいないや」

そもそも、動物園じゃあるまいし、見ようと思って見れる”人達”ではない。

「そう簡単にはいかないか。また明日にしようかな」

腕時計を見ると、かれこれ一時間は探索したことを示しているし、夜もすがらクダイは帰ることを決意する。

好奇心も冷めると夜中の学校、それも廃校という場所がいかにな気味かを思い知る。

「あれ？」

階段を降りていると、窓の向こう側でちらつと何かが光った。

窓に近寄り目を凝らしてみると、光った場所はどうやら体育館。冷めていた好奇心が騒ぎ出す。

「もしかしてもしかするかあ？」

間違いなく何か光った。何かが反射したような光ではなく、LEDライトのように一点に集約した光。

一度は無くした期待を胸に、一目散に体育館を目指す。

この廃校は、少年達の夏の夜のイベント……つまり肝試しの会場でもあり、今までも何度か侵入したことがある。暗闇の中、月明かりだけでも校内を移動出来る。

「どうしよう……そつと開けた方がいいかな……？」

いきなり開けて驚かせるのもなんだと思ってるのか、赤く錆びた鉄の扉を少し開け中を覗く。

「……………なんだあれ？」

クダイの視界に飛び込んで来たもの、それは二人の騎士が戦う姿。もつとおどろおどろした幽霊を期待してただけに、冷静にものを見れる。

カメラをスタンバイし、画面越しに二人を見守る。

「まさか西洋のオバケが出て来るなんて……………」

本気の戦いをしている。

黒には見えるが、おそらくは紫の鎧だろう。時折、月光を浴びてそれがわかる。もう一方は銀の鎧で、手にする黄金の剣が目を引く。

見れば見るほど映画のワンシーン。シャッターを押すのも忘れ見とれていると、紫の鎧の騎士が力強く剣を振るい、銀の鎧の騎士を吹き飛ばす。

「う……………うあっ！」

ところが声を上げたのはクダイ。

銀の鎧の騎士の背中がカメラの画面を塞いだと思ったら、扉を突き破ってクダイにぶつかって来た。

幸い、扉の直撃は防げた。

「い、いってえ……………」

クダイはゆっくり上半身を起こすと、隣で倒れている銀の鎧の騎士が腕を掴んで来た。

「ひ…………ひい……………」

情けない声を上げ必死に振り払おうとするが、ひんやりと冷たい鉄甲で強く掴まれ振りほどけない。

「は、離せよ！」

「く……………こ……………これを……………」

問いには答えず、黄金の剣を差し出して来た。

「この…………ジャスティスソードで……………ケファノスを倒して……………くれ……………」

そう言い残すと、泡のような粒子に包まれ消えてしまった。

「い、いないよ……！」

言う間もなく、気配を感じて頭を動かす。

「あ、あわわわわ……………」

もう一人の騎士のオバケが立っていた。

「ここはどこだ」

「ひっ……………」

「答える。ここはどこだ」

クダイは生まれて初めて殺気というものを知った。答えても答えなくても殺される。間違いなく。

「腰抜けが……………」

紫の鎧の騎士は剣を振りかぶる。

無意識にクダイは黄金の剣に手を伸ばす。

「くくくくく、来るなっ！」

「やめておけ。その剣は正義の名の下に使い手を不幸にする。見た目とは裏腹に残酷な性格をした狂剣だ」

仮面の奥から赤く光るものが二つ。瞳だろう。

クダイはずっしりと重い剣を引き寄せる。

「聞く耳はもたん……………」

もうクダイに用はないと判断、一気に自身の剣を振り下ろした。

「うわああああっ！！」

クダイは叫びながら目をつむり、黄金の剣を力いっぱい引き上げる。剣と剣が衝突した瞬間、稲妻が落ちたようなフラッシュが起きた。

耳鳴りのような音が鳴り、クダイの身体は熱くなる。

「うおっ……………か……………身体が!!」

紫の鎧の騎士が何か言ったが、クダイには聞き取る余裕はなく、やがて音が収まった。

「……………。」

静けさがまた訪れ、クダイは目を開ける。

そこに”オバケ”の姿はなかった。

「……………ま……………幻?」

とは思ったら、黄金の剣を握っている。そして……………”オバケ”の声だけがする。

「幻なものか!クソッ!どうなってるんだ!」

わけもわからずクダイは辺りを見回すと、なんとカメラに付けていたアフロヘアの天使のストラップから声がしていた。

「う…嘘だろ……………」

カメラを持ち上げ、まじまじとストラップを見つめる。

「小僧め……………!まさかジャスティスソードを使うとは!」

間違いない。あの紫の鎧を纏った騎士の声だ。

「ぼ、僕知らないよ!」

夢中で抵抗しただけだ。難癖つけられても迷惑だ。

「だからやめろと言ったのだ!」

につこり微笑んだ天使からは、一向にかなり声がやむことはない。

真夜中の廃校。軽い好奇心が呼び寄せたものは得体の知らない亡霊。

これがクダイとケファノスの出会い。

長い冒険の始まりだった。

第二章 胸騒

ジャステイスソード……悪を嫌う正義の剣。いつ誰が造ったのかも不明の伝説の剣。とても強力な力で魂さえも砕くという。

代わりに、使う者の心に悪があれば、その者の魂さえも消滅させるか、相応の災いをもたらす……らしい。

クダイはケファノスの説明にいまいち理解出来なかった。

「それじゃ、僕にも災いが起きるの？」

学校の裏庭で、弁当をたいらげながらアフロヘアの天使に聞いた。

「それがジャステイスソードの代償だ。しかし、ジャステイスソードを使つての代償は、時間を待たずに訪れる。今回も、過去に一度だけ見た時も、それに纏わる逸話の全てが証明している。なのに……」

ケファノスはクダイを見つめる。

ジャステイスソードを使つて、ケファノスをアフロヘアの天使のストラップに閉じ込めてから既に数時間。クダイには災いが訪れた気配はない。

「ぼ、僕は死にたくないからね！」

ジャステイスソードの説明もさながら、ケファノスはクダイに成り行きを説明するのも苦労した。

異世界から来たこと。ケファノスが魔族の王であること。イグノアが人間側の代表者で、名だたる勇者であったこと。

とにかくいろいろ説明した。

「なににせよ、余はこんな姿で一生を過ごすわけにはいかん。クダイ、お前には余を手伝ってもらおう」

魔王と恐れられた者が、何が悲しくて貧相な天使の人形にならなければならないのか。

幸い、わずかに魔力は残っており、今もぷかぷかと浮いている。

「な、なんで僕が！」

「ジャステイスソードを使ったのはお前だ。ジャステイスソードはその使い手が死ぬまで次の使い手を選ばぬ。元の身体に戻るには、ジャステイスソードは必須。すなわちお前も必要だと言うことだ」

「ふざけないでくれよ……………どわっ！」

ケファノスがクダイの額に体当たりをかました。

「お前に選択権はない。従わねば殺すまでだ。魔力を失ったとは言え、人間一人殺すくらいわけはない」

「そんな事言われてもさあ……………僕にどうしろって……………どわっ！」

「文句の多い奴だ」

二度目の体当たりは手を抜いてはやった。

ケファノスにとってクダイはなくてはならない。殺すのは簡単だが、次の使い手がクダイのようにジャステイスソードを使って、その代償を負わずいれるとは限らない。どうしてもクダイの協力がいる。

「もう既に災いに見舞われてる気がするよ」

ため息をついてクダイは空を仰ぐ。

この現実をどう受け止めるべきか。そんな簡単に割り切れない。

「でもどうやって身体を取り戻すのさ。僕は何もわからないんだから、ケファノスがなんとかしてくれないと困るね」

「余をこの世界に連れて来たのはジャステイスソードだ。なんの因果を求めたかは知らんが、全ての鍵はジャステイスソードにある」

そう言くと、空間に波紋が出来てそこからジャステイスソードが現れる。

「わ、わ！やめろよ！こんなもん見つかったらどうすんだよ！」

クダイの身長は170センチ。背丈と同じ長さの刃物なんか持つてたら、警察に捕まり兼ねない。いや、確実に捕まる。

手をバタバタさせてケファノスに仕舞わせる。

「ようー！クダイ！」

いきなり声をかけられビクツとする。

ジャステイスソードも宙に浮くストラップも見つかるわけにはいかないの、なんとか自分の身体で隠そうとした。

「や、やあ、ヨウヘイ」

「何やってんだこんなところで？探したんだぞ」

「え？あ、ああ、ちょっと考え事を」

ちらつと後ろを見ると、ジャスティスソードはそこにはなく、ケフアノスもクダイの後ろにピッタリとくっついていた。

「変な奴」

「それよりなんか用？」

「おっと、忘れるところだった。お前、昨日、心靈写真撮るとか意気込んでたけど、どうなったんだ？」

ヨウヘイは意地悪そうにニヤつく。

「いや……………それが……………」

いたにはいたが、まさか異世界の魔王と勇者がいたとは言えないし、ケフアノスを紹介するわけにもいかない。

「疲れて寝ちゃったんだ」

「なんだよ。ちょっと期待してたのに」

「ごめん。時間ある時、また挑戦するよ」

「頼むぜ。学校新聞にネタがなくて困ってたんだから」

どうやらニヤついてたのは、心靈写真をかなり待ち望んでいたかららしい。

すこぶる残念な表情を浮かべ、

「ま、なんかあったらすぐ教えてくれよな！」

そう言つて戻つて行つた。

「ふう」

「誰だ？」

クダイの肩にちょこんと乗っかり、ヨウヘイの姿を眺めていた。

「友達だよ。蘇磨^{すま}ヨウヘイって言つて、新聞部の部員なんだ。ヨウヘイがどうかしたの？」

「気のせいだとは思つが、あやつから『屍人^{かばねびと}』の臭いがした」

「カバネビト？なにそれ？」

「死んだ人間に取り憑いて悪さをする魔物がいる。その臭いがヨウヘイからした」

「何言つてんだよ。ヨウヘイはちゃんと生きてるよ」

「だから気のせいだと思つたんだ。ヨウヘイは生きてる。屍人が憑くのは死人だけだからな」

肉体を失い勘が鈍つたのか、自信がなかった。

肉体が無いところも感覚が狂うものかと苦い気持ちになる。

「はあ、午後の授業が始まる。行こう」

クダイは予鈴に導かれるように教室へと向かう。

（気のせいならよいのだが…）

生きた人間からは感じない屍人の臭い。ケファノスは胸騒ぎを覚えていた。

第三章 異世界の住人

「魔族や魔物達の動きが活発になってます。イグノア様はケファノスを倒せなかったのでは……………」

白いローブを纏った神官は若い男に言った。

「あまり考えたくはない推測ですね。イグノア様はジャステイスロードを持っています。魔王と言えど、勝つのは難しいと思うのですが」

若い男は塔のてっぺんから遠い空を眺めていた。

緑色の綺麗な髪。優しい顔と穏やかな声。口調からも知性を感じさせる。

「やはりイグノア様一人では無理だったのではないのでしょうか？」

「ふむ」

男は神官に背を向けたまま、なにやら考える。

「ダンタリオン様……………」

ダンタリオンと呼ばれた男は、風と会話をする。世界の情報は、全て風が伝えてくれる。

「イグノア様と魔王ケファノスとの戦いで、空間に歪みが出来ているそうです」

「は、はあ……？」

「魔物達がこの世界から外に出て行く可能性があります。早急に歪みを防がねばならないでしょう」

「あ、あの……イグノア様は？」

「その歪みに消えたそうですよ。魔王と共に」

終始穏やかに話したダンタリオンだったが、大きな不安を拭えなかった。

クダイは今夜も廃校に来ていた。哀れにも、アフロヘアの天使のストラップになった魔王に連れられて。

「なあ、帰ろうよ。見たいテレビがあるんだよ」

ケファノスが前を歩き、イグノアとの戦いで壊れた扉の上をスーッと通り抜けて体育館の中に入る。

クダイはつまずかないように、気を配りながら暗闇の中を進む。

「ケファノスってば！聞いてんの？早く……」

ケファノスはクダイの文句を無視して急に止まった。

「やっぱりそうか」

何かを見つけたらしく、納得している。

「なんかあったの？」

「見る」

ケファノスに言われて目を凝らすと、そこには黒いもやもやとしたものがうごめいていた。

「うわっ、気持ち悪っ！」

それは生き物のようにも見える。

クダイはケファノスより前には出ようとはしない。

「な、なんだろ？」

「デイメンジョンバルブだ」

「何それ？」

「お前の住むこの世界と、他の世界を繋ぐ時間脈。時間というのは生き物で言う血液だ。その流れは常に規則正しく流れ、世界の調和を計っている。だが、時に何かの原因でデイメンジョンバルブが現れ、他の世界を繋いでしまうことがある」

「それってつまり……………」

「ここを通れば余は自分の世界に帰れる」

それを聞いてクダイはホツとした。こんな得体の知れない奴と一緒ににはいられない。エサをやることがないのはいいのだが、変な事に巻き込む気にいることは確か。さっさとお帰り願いたい。

「よかったじゃん！」

感嘆の声を上げ、ディメンジョンバルブの前に行く。

「僕なんかより優秀な部下が魔王様には着いてるんだろっし、頼るなら僕じゃない方がいい」

クダイは胸を張り、帰還を勧めた。

「ふざけるな。ジャステイスソードの持ち主は今はお前だ。お前にも一緒に……………」

言いかけると、ディメンジョンバルブの奥から気配を感じた。

「僕は行かないよ。僕には僕の……………」

「クダイ！離れろ！！」

ケファノスはディメンジョンバルブから斜め後方に素早く離れるが、

「話は最後まで聞けよ！」

クダイはそぶりもなかった為、背中にまともに衝撃を受けた。

「うわあっ！！」

前に一回転して転び、すぐに起き上がって後ろを見る。

「くうっ……………いってえ〜」

しかし、何も無い。

「クダイ！上だ！！」

ケファノスがクダイの元に降りて来て叫んだ。

びつくりして慌てて上を見る。すると、

「キエエエエエッ！！」

薄気味悪い声を出す、鳥？人間？がいた。

「ななななな、なんだ…あれ……」

「ガーゴイル！」

聞いたことがある。西洋のなんかに出て来るモンスターだ。

ガーゴイルは暗闇の中で切れるような目をギラギラさせてクダイを見ている。

「お、お前の仲間じゃないのか！？」

モンスターと言えば魔王の手下。ケファノスの命令なら従う……

ものだばかり思っていた。

「ガーゴイルは単なる魔物だ。魔物使いでもなければ言うことは聞かん」

冷静に言ってくれる。

「魔王だったらなんとかしろよ！ああいう輩の王様だろ！？」

もつともな意見には違いない。

「黙らせるのは簡単だ……こんな姿でなければな」

何と言っても、魔王様は今では天使の人形なのだ。憎たらしいことにアフロヘアでスマイルした。こんなセンスの無いデザインが、よくもまあ製品になったもんだと感心するくらいの。

「見た目で黙らせるのかよ！？」

「そういうことを言ってるのではない！肉体が無くなった事で、魔力が半分以上だ。おまけにジャスティスソードを時空間の中に仕舞う為に、残りの魔力は常に使った状態だ。今の余はガーゴイルに勝つことすら困難……」

それは何気に窮地に追い込まれていることを告げていた。

「そ、そんなぁ……」

へなへなとクダイは膝から崩れる。

「キエエエエエエ……ッ!!」

業を煮やしたのか、ガーゴイルが突然クダイに向かって突っ込んで来る。

「ひっ!」

情けない悲鳴と共に横に転がって回避する。

ガーゴイルは床にぶつかり、大きな穴を開け床下まで突っ込んだ。

「クダイ! ジャスティスソードを使い!」

ケファノスはそう言っ、時空間からジャスティスソードを出す。

「バカなこと言わないでよ! 僕に戦えって言うの!？」

ケンカすらしたことがないのだ。伝説の剣だろうがなんだろうが、戦うなんて偉業に近い。

「このままでは殺されるぞ!」

脅してはない。さっきは偶然避けただけの話で、次は無い。

床下からガーゴイルが飛び出て来る。

ズシンッと音を立てて床に足を着き、舌をペロリと出した。

「無理だよ……」

どんなクソゲーでも、自分と相手のレベルが釣り合わなければ、逃げるという選択が出来るのが当たり前だ。

「キエエエエエツ!!」

クダイの苦悩も知らず、ガーゴイルは爪を立てて向かって来た。

「クダイ!!」

「う…………ええいつ!もうどうにでもなれ!!」

クダイはジャスティスソードを手に取った。

- キイイイン -

またあの音が響いた。何かに共鳴してるような音。

「キエエエエエツ!!?」

ガーゴイルが飛び掛かろうとした時、ジャスティスソードの刃がビームのような光を発して、ガーゴイルを貫いた。

「あ……………」

とぼけた声でクダイはぽかんと口を開けた。

そして、ガーゴイルはその身体を焼かれて灰になった。

「や…………やった…………倒した…………」

ただジャスティスソードを構えただけだった。それだけでガーゴイルを倒してしまった。

（こやつ……ジャスティスソードの力を一瞬とは言え、解放したというのか？）

信じられないのはケファノスも同じだった。剣として使うのではない。アイテムとして使うなど聞いたことがない。

「おやおや、これはどうしたことでしょう」

聞き慣れない声に、クダイとケファノスが振り返る。

「なぜあなたがジャスティスソードを？」

そこにいたのは、真っ白い鎧に身を包んだ緑色の髪をした若い男。

「貴様は…ダンタリオン！」

その男の名前をケファノスが叫んだ。

突如現れた魔物と異世界の住人。クダイはこれから訪れるだろう運命に、まだ気付いていなかった。

第四章 賢者と呼ばれる男

「はて？可愛いらしいお人形さんですが、お知り合いでしたでしょうか？」

ダンタリオンは首を傾げアフロヘアの天使を見つめる。

「誰？知り合い？」

クダイは小声でケファノスに話しかける。

「若くして賢者にまで成り上がった喰えん奴だ」

若くして賢者になったことが、どうして喰えないのかはわからないが、その言い方から、仲間でないことは確かだ。

「どこかで聞いた声ですね。まさかとは思いますが……魔王ケファノス」

一見、微笑みを崩してないように見えたが、ケファノスの名を口にした時、険しい表情をした。

「なぜ貴様がここにいる」

ケファノスの口調も少し乱暴気味だ。

「なぜ？私はガーゴイルを追ってここまで来ただけです。あなたこそ、随分変わり果てたお姿ですが……イグノア様はどうなさったのです？」

「消えたよ」

「消えた？これはまたどちらへ？」

「さあな。あの世か……それとも存在すら失くなったか」

「まさかその少年が……」

クダイはダンタリオンに睨まれた。

「ぼ、僕じゃないです！ケファノスが！」

ケファノスを指差して否定した。

「猿芝居はやめたらどうだ。ジャステイスソードは使い手に災いをもたらす。そのくらい貴様が知らんわけがなかるう」

ケファノスはクダイの裏切り（？）に動じることもなく、ダンタリオンに返し言葉を放つ。

「では、イグノア様はジャステイスソードの災いのせいだとおっしゃるのですね？」

そう言って、ダンタリオンは剣を抜く。

「なんの真似だ」

「イグノア様がジャステイスソードの災いで消えたとしても、最終的にはあなたを倒せば事が済む」

「……………」

「今のあなたなら負ける気がしません」

そのやり取りをクダイは黙って見守る。

成り行きを見守るわけではなく、黙っていれば巻き込まれずに済むと、そう思っていたのだが、

「こつちにはジャステイスソードがある。それでも殺る気か？」

ダンタリオンはまたクダイを睨む。

「フツ。彼が？ご冗談を。華奢で、まるで構えがなっていない」

「そう思うか？だがこやつはジャステイスソードの災いを受けん」

「そんな話……………信じるとでも？」

「嘘だと思ふのなら試してみるのだな。事実、余をこのような姿にし、たった今ガーゴイルを倒した。それでもまだ存在している」

ダンタリオンが信じられないのは、ジャステイスソードは誰にでも使えるが、心に悪のある者はその代償を払わなければならない。人間である以上、いや、神であつてもわずかな悪は必ずある。クダイに災いがないというのは、クダイの心に悪が潜んでないことになる。

それが信じられないのだ。

「……………」それが本当なら、興味深い。ジャステイスソードを

使いこなせる者など、どこにもいなかったのですから」

ダンタリオンは剣を鞘に収め、戦うことを諦めたようだ。

「では二人共、私と一緒に来てもらいましょう」

「え？ な、なんで僕まで……………」

「ジャステイスソードを持っているからですよ」

意味ありげに笑うと、ケファノスを見て、

「異論はありませんね？」

「……………よかるう」

このまま自分の城へ戻っても、部下に説明して理解させる自信はない。従った方が無難と踏んだ。

「では、参りましょう」

そう言つて、ダンタリオンはデイメンジョンバルブの中に入ろうとした。その時、

「いけない！」

デイメンジョンバルブが閉じ始まる。ダンタリオンは慌ててこじ開けようとするが、努力の甲斐なく閉じてしまった。

「なんてことだ……………」

ケファノスが落胆の声を漏らした。

唯一の帰り道が断たれたのだ。

「あの………」

ダンタリオンはゆっくり振り返ると、

「今夜、泊めていただけませんか………」

気まずそうに言った。

第五章 嵐…その前に

「喰えん奴」……ケファノスがダンタリオンをこう呼んだわけがわかった。

クダイは、とりあえずダンタリオンを自宅に連れ帰った。

クダイの家は母子家庭。なのに一軒家に住んでいるので、客の一人二人くらい泊めてやるのは苦ではない。半分は善意で連れて来たのだが、

「こんなに素晴らしい料理を、ご子息は毎日食べてらっしゃるのですか？」

「まあ！お上手ねえ」

「いえいえ。心からそう思ってるんですよ。美味しい料理に、綺麗で優しいお母上。ご子息が羨ましい」

どっから出て来るんだ？と、クダイは呆れ返っていた。

「さあさあ、もう一杯サービスしちゃうわ」

ダンタリオンもダンタリオンなら、母親も母親。その気もいいところだ。

「なんなんだよ……アイツ」

クダイはケファノスに聞いた。

「世渡りのうまさだけは天下一だからな。あれで賢者でなければ、

ただのバカだ」

「賢者ってそんなに偉いの？」

賢者という言葉を妙に崇高に使うので気になっていた。

「賢者とは魔法に優れ、知性がなければその称号を得られん。ダンタリオンには更に剣の腕もある。騎士並に。知名度だけならイグノアより上だ」

キッチンと並びの座敷からダンタリオンを観察していると、

「クダイ君、君もこちらでお母上の料理を堪能してみては？」

ニコニコしながら誘ってきやがった。

「僕はいらない。さっきカップ麺食べたから」

一緒に食卓を囲むなど御免被る。

「お母上の料理より、そのカップメンというのは美味しいのですか？」

「食べてみたら」

素っ気なく返した。

「ダメよ、クダイ。ダンタリオンさんはうちとは育ちが違うんだから。そんな栄養のないもの食べさせるわけにはいかないわ」

なんだそりゃ。ツツコミを入れたところだが、面倒なのでやめて自室に戻ることにした。

「どちらに？」

白々しくダンタリオンが言つと、

「寝るんだよ」

立ち止まって言つてやった。

「いやあゝ、いいお湯でした」

コイツには遠慮というものが無いのか？クダイはそう言いたいのを我慢して、ため息をついた。

「自分の世界に帰れなくなったのに、随分お気楽だね」

皮肉たつぷりに言つてやった。

「考えても仕方ありませんから。また明日の晩にでもあの場所に行つてみましょう」

「一人で行けよ」

「そうはいきません。ディメンジョンバルブを造ったのがジャステイスソードの力なら、やはりジャステイスソード無くしてディメンジョンバルブは現れない。そして、あなたはジャステイスソードを使いこなせる唯一の存在。それをお忘れなく」

さつきまでの世渡り上手はどこへやら。含んだような笑顔で釘を刺しに来る辺りは、よくも悪くも知性を感じる。

「余裕だな」

ダンタリオンに焦りがないので、ケファノスも気に入らない。

「そういうわけではありませんよ。こう見えても、かなり焦ってるんですから」

「どうだかな。人間は信用ならんが、貴様は余計に信用ならん」

「まあそう言わずに。しばらくは停戦ということだ」

「フン」

ケファノスは鼻を鳴らして黙ってしまった。

「それよりも、便利な世界ですねえ。水も火も……」

ダンタリオンは扇風機を見て、

「風さえ簡単に起こすとは」

クダイの世界に感服していた。

「ダンタリオンの世界ってどんななのさ」

魔王と賢者なんて言葉が生きるくらいだ、どんな世界は想像出来る。ただ、一応聞いてやるだけ。

「私の世界にはこんな便利な道具はありません。それに、この世界ほど空気は汚れてはいない」

「ふうん。僕はわかんないけど」

生まれてからずっとこの街にいるのだ、空気がどうかなんて気にしたことはない。

「私の世界にはもっと木々がたくさんありますし、町がこんなに圧迫されてはいません。便利ではありませんが、住みいい世界です。そんな世界でも、破壊の限りを尽くす輩もいる」

ダンタリオンはケファノスを見た。視線を感じて、ケファノスもダンタリオンを見る。

「ほざけ。貴様ら人間は、醜いという理由だけで我々魔族に攻撃を仕掛けて来たではないか。どこまでも身勝手なのは人間だ」

「それは違います。あなた方、魔族が人間を襲い、地上を奪おうとしてるのではないですか」

「余は地上を奪おうなどと思ったことは一度もない」

「初耳ですね」

二人の間には解釈にズレがあり、おそらくこれが初めての意見交換なのかもしれない。

「まあいいでしょう。ここであなたと話しても、私がどうこう決める立場にはありませんし、彼に迷惑もかかりますしね」

もう十分に迷惑はしている。

「さあ、もう寝ましょう。夜更かしは身体によくありません」

そう言うと、ダンタリオンはクダイのベッドに潜り込む。

「そこは僕の……」

「あつ、明かりを消して下さい」

図々しいにもほどがある。が、気の弱いクダイがそんなことを言うわけもなく、おとなしく電気を消した。

これがこの世界での最後の一夜だった。

第六章 屍人

「おはようございます」

いつもは静かな朝の桐山家が、今朝は少しうるさかった。何事かと、クダイがキッチンに行くと、満面の笑みでダンタリオンが挨拶をして来た。見慣れた服は亡くなった父親のものだろう。それとエプロンのおまけつきで。

「何やってんの」

「見てわかりませんか？朝食を作ってるんです」

それはわかる。クダイが聞きたいのは、なぜダンタリオンがそれをしてるのかということ。

「私、こう見えて料理が得意なんです」

「いや、聞いてないし」

どうもこの男は苦手だった。マイペースかと思えば、タベのように真に迫った話をする。そう思っていると図々しい態度も見せる。

「世渡り上手でなければただのバカ」。ケファノスの言葉が胸に染みる。

「それにしても便利な道具がいっぱいですね。思わず料理にのめり込んでしまいます」

料理に関しては心から楽しんでいるようだ。

「あら、クダイ。今日は早起きね」

「何やらせてんだよ」

同じくエプロンをして現れた母親に、クダイはダンタリオンの背中を指差した。

「何って、朝ごはんの準備、手伝ってくれるって言うから。ダンタリオン君ね、料理が得意なんですって！いいお友達じゃない！」

「友達じゃないよ」

ミィハーと化した母親に何を言っても無駄だろう。

ダンタリオンは、とても朝食には見えない豪華な料理をテーブルに並べる。

「さ、クダイ、いっぱい食べて下さい」

クダイの顔がピクピクと引き攣った。朝から男の手料理、それも昨日会ったばかりの男のものを食べる羽目になるとは。

「ささ、どうぞ遠慮なく」

早起きしたせいか、腹が鳴った。思春期の男の子が空腹に勝てるわけもなく、クダイはダンタリオンの手料理を口にした。

「あ、お弁当もありますから」

言いたいことは山ほどあったが、言ったところであまり効果はなさ

そうだ。

「ケファノス」

クダイに呼ばれて、ケファノスがワイシャツの胸ポケットから顔を出す。

「なんだ」

「悪いけど今日は家にいてよ。ダンタリオン（あいつ）連れて行けないし、母さんは仕事だから家に一人で置いとけないしさ」

「……………」

まさか魔王たる者が留守番を頼まれるとは……………。

「今日は博物館に社会科実習だから早く帰って来るから、見張ってくれよ」

うんともすんとも言わずにいたが、拒否権が無いのはわかっていた。

「おやおや、密談ですか？」

微笑まれて腹の立つことがあるなんて、この世にあるとは思わなかった。

ダンタリオンのわざとらしい微笑みは無視して、クダイは朝食を一気に平らげ、

「それじゃ、行くね」

クダイは、鞆を手にして勢いよく飛び出して行った。

「元気ですねえ」

そう言つて、ダンタリオンはスープを啜る。

「うん、これは美味しい」

インスタントのコーンスープなのだが、大分お気に召したようでもう一袋を開けお湯を注ぐ。

「ダンタリオン」

留守番と”おもい”を頼まれたケファノスが、不機嫌そうに言った。

「なんででしょう?」

一方で、ダンタリオンはご機嫌だ。

「お前に見てもらいたいものがある」

ダンタリオンは一瞬、食事する手を止めたが、すぐにまた再開する。

それが了承のサインだと、ケファノスはわかっていた。

町並みはもちろん、人の数、服装、ありとあらゆるものが自分達の世界とはまるで違う。驚きもあるが、やはり興味が先に立つ。

「いやはや、まさか魔王からデートに誘われるとは」

ダンタリオンはケファノスに誘われるがままに街を歩いていた。

ケファノスはというと、ダンタリオンの、やはり上着の胸ポケットに身を潜めている。

「黙って歩け」

「まあまあ、そう言わずに。それより、どこに連れて行かれるのでしょうか?」

「クダイのところだ」

「クダイの?行き先はわかってらっしゃるんですか?」

知らない世界で好き勝手行動出来る魔法はない。かと言って、クダイに特別な気配は感じなかった。

きっと、ケファノスにしかわからない魔法が何かで追跡してるのか、あるいはダンタリオンにはわからないオーラのようなものを、クダイが持っているのかもしれない。

「実は気になることがある。そいつをお前に確かめてもらいたい」

なんのことやらわからないまま歩いていると、大きな白い建物の前に大勢の学生がいて、その中にクダイがいた。

「おお！あれはクダイでは」

「待て」

ダンタリオンが飛び出して行く前に制止する。距離は遠くない。数十メートル。木の陰から覗き見る。

「なぜ止めるのです？」

とぼけてはいるが、賢者にまで成った男。そうそうが天然であるとは思えない。

「お前に確かめてもらいたいのは、クダイと一緒にいるあの男だ」

クダイと一緒に楽しそうに会話している少年。ヨウヘイだった。

「ほう。私に劣らずハンサムな少年で。彼が何か？魔王の怒りにでも触れたとか」

「……………」

「失礼。愚言でした」

賢者とだけあって、不快した相手が倒すべき魔王であっても礼を尽くす。

そして、真剣にヨウヘイを眺め、

「至って普通の少年のように見えますが……………」

「昨日、あの少年から屍人の臭いがした」
かばねびと

「まさか。屍人は死人にのみ憑く魔物。生きた人間に憑くなど聞いたことがありません」

見解はケファノスと同意だが、だからこそ自分に確かめてほしいのだと思い、今一度ヨウヘイを見る。

「余も気のせいだとは思うが、あの臭いを勘違いするとは思えん」

「……………ここからではなんとも判断しかねますね。賢者として人間。嗅覚は所詮、人並みですから」

生きてることは確かだ。ヨウヘイが死人ならば一目でわかるし、そんなに表情豊かに会話は出来ない。

「すいません。お役に立てませんで」

「……………」

「しかし、なぜあなたほどの者が屍人を気にするのです？魔物とは言え、せいぜい死人に取り憑いて悪さをする程度。敵である私に頼むことではないのでは？」

「……………貴様にだけは言ってもいいだろう。どこの誰かは知らんが、屍人を利用してよからぬことを企む輩がいると聞く。少し気になっただけだ」

「私達がこの世界に来たことが関係すると？」

「それはわからん。だが、屍人の糧である魔気がこの世界では感じない。屍人は魔気のある世界にしか存在しないはず……………」

「言われてみれば、屍人どころか魔気の無い世界ですね。汚れてはいるけど、あくまで環境的な話。言い換えれば、濁った水の中にいるような…………そんな世界です。ここは」

「……………」

多くは語らないが、ケファノスの中では何か追求したいものがあるようだ。

タベのことも、人間側と魔族側の双方の言い分に食い違いがあるのも事実。初めてケファノスと語り、ダンタリオンの中でも引つ掛かるものが生まれた。

「しかし、デイメンジョンバルブを造ったのはジャスティスソードなのでしょう？正直、偶然にしか思えないのですが」

「クダイがジャスティスソードの災いを受けないのかも？」

「それは……………」

「なにもかも偶然で片付くのなら、これほど楽なことはない」

魔王たる自信。ケファノスの第六感が告げている。

「どうやら探る必要があるようだな」

第七章 サン・ジェルマン伯爵

「また行くのかよ」

クダイは疲れた身体に鞭を打ち、ケファノスとダンタリオンに連れ出されていた。

「ご協力をお願いしますよ。何せ、私達も早く帰りたいもので」

ダンタリオンは申し訳なさそうに宥める。そうするのは、鎧を纏うのをクダイは反対したのだが、無理を通した経緯もあってのことだ。行き先は当然、廃校の体育館。

「僕はダンタリオン達の世界には行かないからね」

「そんなことをおっしゃらずに、観光気分でかまいませんから」

なんとか機嫌を損ねないようにしていると、

「放っておけ。いちいちクダイのわがままに付き合うことはない」

ケファノスが冷たく言った。それを聞いたクダイは、

「どっちがわがままなんだよ！僕は被害者だぞ！勝手に人を巻き込んでおいて何て言い草だ！」

憤慨した。

「うるせーっ！！今何時だと思ってやがんだっ！！」

そして近所からの怒号。

「夜に騒ぐと怒りを買つのは、どこの世界も同じなんですねえ」

ダンタリオンは眉を上げて、気にするなと言いたげに微笑んだ……
…まあ、出会ってからずっと微笑んだままなのだが。

「君達がいなくなれば、夜に騒ぐこともなくなるよ」

たった三日で、一ヶ月分は疲労してる。誰が何と言おうとそれだけは譲れない。

「こいつは……」

廃校の前まで来て、ケファノスが人影に気付き止まる。

「偶然……ではなさそうですねえ」

ダンタリオンもその人影が誰かわかった。

人影は門を乗り越え、廃校へと侵入して行く。

「何？また魔物でもいた？」

乗り出すような姿勢でクダイが顔を出す。

「行けばわかりますよ」

ダンタリオンも門まで走り乗り越える。

「行くぞ」

ケファノスはその必要はない。門の隙間を進めばいいだけ。

「自分勝手な奴らだ」

ぶつぶつと文句を言いながら、クダイも門を乗り越えた。

「何もないじゃないか」

人影は独り言を呟いた。

口ぶりから、誰かに何かを聞いて来たような雰囲気だ。
体育館の中を行ったり来たり、物でも探すようにうろろしている。

そうしてるうちに、急に大きな物音がした。

「誰だっ!？」

人影は出入口に向かって怒鳴る。
すると、誰かが入って来る。

「……………クダイ!」

隣にはもう一人男がいる。

「ヨウヘイ、こんなところで何やってるんだ？」

ちょうどいい具合に月明かりが挿す。舞台を照らすスポットライトのように。

「何って……別に」

ヨウヘイは隠し事でもするように語尾をつぐんだ。

「別の世界への入口でもお探しですか？」

「なんだコイツ」

緑色の髪をした男に、ヨウヘイは胡散臭さを感じた。

「ダンタリオンって言うんだ」

「ダンタリオン？」

クダイに紹介され、ますます胡散臭く感じる。

「どうだ、ダンタリオン」

二人だと思っていると、小さな物体が現れ喋り出す。

「ス………ストラップ？」

よく見ると明らかにストラップ。

「あ、コイツはケファノスって言って……………」

ややこしくなるから隠れてると言っただけだった。焦ったクダイは説明しようとしたのだが、そんなことはケファノスには関係なかった。

「余の言ったことに間違いはなかったであろう」

「そうですね。屍人の臭いがします」

ダンタリオンもクダイの都合は関係ないらしい。

「お前、なぜ屍人の臭いがする？」

ケファノスの直球に、クダイは目を塞いだ。もっと言い方ってもんはないのか。

「な、なんでストラップが喋ってるんだ？」

ヨウヘイの言い分の方がもっともだ。誰でもそう思う。

「き、気にすることないよ！」

クダイはケファノスを捕まえようとしたが、ひょいとかわされてしまった。

「お答えになってももらえませんか？手荒な真似はしたくありませんので」

手荒な真似を手段に選んでるなんて聞いてない。大体、ここにはデ
イメンジョンバルブがまた開いてるかの確認に來ただけだ。たまた
まいたヨウヘイは関係ない。

「屍人を知ってるのか……………何者だ？」

ヨウヘイはケファノスとダンタリオンを警戒する。クダイのことは
どうでもいいらしい。

「質問してるのはこっちだ。答えねば力ずくということになるが
？」

ケファノスが言うと、ダンタリオンが剣に手を持っていく。いつで
も抜けるように。ということだろうか。

「待つてよ！ヨウヘイが何したって言うんだよ！」

「下がっていて下さい、クダイ」

ダンタリオンが手でクダイを追いやる。

「クッ……………どうなってんだ！」

ヨウヘイは追い込まれた犯人のように後ずさる。

「答える気はなさそうだな」

「では少々手荒に行きましょう」

ケファノスと同調して、ダンタリオンが剣を抜く音が響く。

「ダンタリオンー!!」

クダイの言葉は耳に入らず、ヨウヘイに詰め寄り、

「失礼」

柄で腹に一撃見舞った。

「ぐはっ……………」

クダイは、崩れるヨウヘイを守るように割って入る。

「やめろよ！何すんだよ！」

敵意を剥き出してダンタリオンを睨みつけた時だった、

「危ないっ！」

クダイを横に押し倒す。

「いてっ！だから何すん……………」

クダイの目に映ったのは、強い光に弾き飛ばされるダンタリオンの姿。

派手に弾き飛ばされたが、剣で防ぎきった為、ダメージは負ってないようだ。

「すごい力だ……………」

当の本人も、自分が受けた力に感銘すら抱いている。
その光の元は、

「あの野郎……話が違うじゃないか」

ヨウヘイだった。

顔付きが変わる。眉間にしわを寄せ、唸る獣のように歯を食いしやる。

「ヨウヘイ……？」

いつもと雰囲気の違いヨウヘイに、クダイもただならぬ殺気を感じる。ケファノスと出会った時と同じように。

悪い夢なら覚めてほしい。でないと現実逃避したくなる。

「ケファノス!!」

クダイの制止を聞かずにヨウヘイの前まで行く。

「ケファノス?そうか、お前が魔王か……」

「余を知っているところを見ると、裏に誰かいるようだな」

探られるのを拒んだのか、隙を見てダッシュする。

「ちょ……」

「どけ!」

クダイを突き飛ばし、驚くことに壁をぶち破ってグラウンドに出て行く。

「追え！」

「あなたに言われるまでもない」

ケファノスが叫ぶと、一番に飛び出したのはダンタリオン。

というよりも、まともなのは彼しかない。

「行くぞ、クダイ」

そしてケファノスも出て行く。

何かなんだかわからないまま、クダイもヨウヘイを追う。

確かなのは、想像以上に厄介なことになっていること。

クダイはダンタリオンが暴拳に出ないように必死で追い掛け、グラウンドのと真ん中まで来ると、ヨウヘイとダンタリオンが対峙している。

「観念しましたか？」

ダンタリオンは見たことないような構えで剣を構えている。

「いい機会だと思ってな。屍人の力、どれほどのものが確かめてやる」

心境の変化はわかりやすかった。どうにかして得た力を試してみたいのだ。それが無謀かどうかは別にして。

「やっぱり屍人の……しかし不思議ですねえ、生きた人間に屍人

が憑くことなどありえないのですが」

キラリと切っ先が光る。

微笑んでそれらしい表情を見せないその分、刃が胸中を表しているようだ。クダイはそれを察した。

「ダンタリオン……………はぁ……………はぁ……………ま、待ってよ……………マジで」

あまり体力がないのが浮き彫りだ。息を肩でするような距離は走っていない。

「クダイ……………こんなに面白い奴らを一人占めだなんて、つれないじゃないか」

ヨウヘイからも嫌味を言われる始末。

「そんなつもりは……………」

「まあいいさ」

ヨウヘイは両手を広げる。そこに、闇夜でもわかる黒い霧が集まって来る。ダンタリオンの表情が少し曇った。真剣になったのだ。

「ダークエナジー……………誰が裏にいるんだ」

「ケファノス……………」

小さいので、暗闇ではどこにいるか見失ってしまう。クダイの肩に乗り、全てをダンタリオンに任せている。

「なんだよ、その……ダークエナジーって？」

「闇にだけ存在する物質。闇に生きる者、とくに屍人には無くてはならない物質だ」

ヨウヘイが集めたダークエナジーをダンタリオンに仕掛けようとした時、

「やめておけ」

一人の紳士が現れた。

紳士と言いたくなるような格好。杖をつき、手には白い手袋をしている。トップハットを被り、ゆっくり歩いて来た。

「邪魔すんなよ」

ヨウヘイの知り合いらしい。

「彼は賢者中の賢者。今のお前が勝てる相手ではない」

月明かりにその素顔が晒された。

「あなたは……！」

「やはりお前だったか……」

ダンタリオンもケファノスもその紳士を知っている。

歳は五十代半ば。日本人ではなかった。

「これは魔王どの。随分とお姿が変わりましたな」

紳士が紳士らしく微笑んだ。

「久しぶりだな……サン・ジェルマン伯爵」

ケファノスがそう呼んだ紳士。

クダイがこれから戦っていく最大の敵だった。

第八章 誘引

「こんなところで何をしてる」

ケファノスが声色を変えてサン・ジェルマンに問うところを見ると、あまり会いたいと思える人物ではないことは、クダイでも理解出来た。

プラス、ダンタリオンに微笑みは戻っているが、どこことなく殺伐とした雰囲気を出している。

「魔王どのお話するようなことはありません」

丁寧に、わかりやすい口調で話すが、ケファノスとダンタリオンが知ってるということは、こっちの人間じゃない。

「誰？」

自己紹介もなさそうなので、クダイはケファノスに囁く。

「様々な時代と世界を行き来する能力を持つ者だ」

一言で紹介され、どういう人間かはわかったが、

「え？それってどういうこと？」

デイメンジョンバルブを通らなければ世界の行き来は不可……の
はず。しかしその能力を持つという。今の状況さえ混乱気味なのに、
余計に知恵熱を出させようというのか。

「奴は時間脈……つまりディメンジョンバルブを故意に開き、時間軸を旅しながら生きる騎士よ」

「騎士………鎧、着てないよ」

また小声で言う。

同じような説明を二度するというのは、ケファノスはサン・ジェルマンについて詳しくないのかもしれない。

「少年、騎士と名のつく者の全てが、鎧や剣を持っていると思わんことだ。騎士とはその心に授けられる称号。信頼出来るかどうかの物差しよ」

サン・ジェルマンは、トップハットの位置をくいつと直す。

「余をこの世界に連れて来たのは、ジャスティスソードではなくお前の仕業か？」

「いいや。私は知らない。この世界にいた時に、たまたまディメンジョンバルブが現れたのでな、何事かと調べていたのだが………そうか、ジャスティスソードが………」

目に力が入っている。サン・ジェルマンは思考を回転させて、深く何かを考えている。

「サン・ジェルマン、あなたはそのヨウヘイという少年に屍人を？」

耐え切れずしゃしゃり出て来たのは、お調子者の賢者。

どうにも黙っていることが出来ない質^{たち}なのは、本来の性格なのかもしれない。

「屍人の潜在能力は目を見張るものがある。それを受け入れる器を探し、長い時間を旅して来たのだ。その器こそがこの少年よ」

サン・ジェルマンの紹介に気をよくしたのか、ヨウヘイは口角を上げた笑いで前髪を跳ね、

「選ばれたったてことさ」

「ヨウヘイ……」

別人のようなヨウヘイを、クダイは心配になる。

「何を企んでる」

核心をつくケファノスは、肉体があったならサン・ジェルマンを手にかけたんじゃないだろうか？

クダイはそう感じた。それだけに、ヤバイ男なのだろう。実際、ダントリオンが今も額に汗を滲ませ、剣を握る手に力を入れている。

「時間軸の融合」

伯爵の称号を持つサン・ジェルマンの後ろに、小さな黒い渦が現れ、すぐに直径二メートルほどの大きさになる。ディメンジョンバルブだ。

「夢を見る歳でもあるまい」

ケファノスの皮肉すら心地いいのか、

「見えるうちが華。そういう言葉もある」

涼しげに笑って見せた。

「人間と魔族が戦争をするように仕組んだのはあなたなのですね、伯爵」

タベのケファノスとの会話で、人間と魔族の間のすれ違いがあることを知った。なぜかダンタリオンはそこにこだわっているようだった。

「私の行動を逐一気付かれては困りますのでな。まあ、カモフラージュの為に、種族間戦争を利用させていただいた。もっとも、魔王のだけは冷静に私を見ていたようだが」

「なるほど。それはくだらないことをしてくれましたね」

ダンタリオンは剣を鞘に戻す。

「伯爵、あなたの企みはわかりました。しかし、こちらにはジャステイスソードがあります。何を企もうと、正義の刃の前に平伏すことになるでしょう。彼によってね」

「はあ！？何勝手なことやってんだよ！」

危なく聞き逃すところだった。

ダンタリオンの調子の良さは油断出来ないことを、クダイは学んだ。

「ほほう。だがジャステイスソードは使い手を不幸にする。どんなに強力な剣であっても、諸刃であっては意味がない」

「残念だな、クダイはどういうわけかジャスティスソードの災いを受けん。お前の首も、狙うに苦労はしないということだ」

クダイは目を点にして、ケファノスをただただ見つめるしかなかった。

ダンタリオンと言い、出会って日が浅い自分を勝手に仲間のようない方をするのだから打つ手がない。

「へえ……クダイがねえ」

興味が出たらしい。ヨウヘイはディメンジョンバルブの方を向くと、

「なあ……クダイ」

「なんだよ」

「勝負しようぜ」

「勝負？」

「俺はサン・ジェルマンと時間軸の融合ってやつを目指す」

「何バカな……」

「ジャスティスソードって伝説の剣なんだろ？ だったら、そいつで俺達を止めてみな」

突然の友人の宣戦布告をどう受け止めたらいいものか。

「これは面白い。魔王どのと有名な賢者どのがイチ押し少年ならば、さぞかし有能なのだろう。余興は派手な方がいい。是非、クダイ少年には頑張ってもらいたい」

サン・ジェルマンは本気で期待している。派手な余興を。

「ではお三方、またお会いしましょう」

トップハットを押さえる感じで挨拶を終えると、ヨウヘイを連れデイメンジョンバルブの中へ。

「ヨウヘイ!!」

追うべきか、追わざるべきか、クダイの気持ちは完全なる無視だった。

「行きますよ！伯爵の企みを聞いた以上、見過ごすわけにはいきません！」

真っ先にダンタリオンがデイメンジョンバルブに飛び込んだ。

「行くぞ、クダイ」

「待つてって！僕は行くとは言っていない！」

「これはお前の世界にも関係することだ」

「んなこと言われても、よくわからないよ」

「時間軸の融合……あらゆる次元のあらゆる世界が統一されると

いうことは、全ての時間の終わりを意味する」

そんなにすんなり受け入れられるかと、怒鳴ってやろうとも思ったが、

「お前なら止められるかもしれんだ」

真剣な表情……はしてないが、堅い意志を感じた。

「……………わかったよ」

納得はしてないが、もとより好奇心の強いクダイ。ケファノス達の世界にも興味はある。

ディメンジョンバルブの前で一呼吸して、

「危ないことになったらすぐ戻るからな」

「好きにしろ」

ケファノスと共に異世界の扉へと入って行くと、まるで二人を待っていたかのように、ディメンジョンバルブは閉じる。

おぼつかない足取りの子供のような不安を抱え、クダイは流されるまま身を任せた。

第九章 夜の扉

ディメンジョンバルブを通って別の世界に来るまで、十秒とかからなかった。あつという間に入れ代わった景色は、夜ではなく太陽が我が物顔をしている昼間の森の中。

草木の香りが立ち、見たこともない花達の香りまでもが、五感を刺激する。

「ホントに来ちゃった……………」

それは、クダイにも一発でわかる異世界の景色。

「サン・ジェルマンはどこに行った？」

辺りにそれらしき奴もいなければ、足跡すらない。ディメンジョンバルブはその姿を消し退路を断つ。ケファノスはぐるりとクダイの周りを周回し、ヨウヘイを連れて行った紳士を探しているところに、

「すみません。逃げられてしまいました」

と、ダンタリオンが頭を掻きながら戻って来る。

「ヨウヘイは？ヨウヘイもあのサン・ジェルマンって奴と？」

「ええ。そのようです。ご友人だけでも思っただのですが……………なかなか素早い方で」

一宿一飯の恩義でも感じていたのか、捕まる気はあつたらしい。クダイの顔を見るなり気まずそうにした。

「奴め………時間軸の融合だと？ナメた真似を」

苛立ち落ち着かないケファノスだったが、不穏な空気を感じクダイとダンタリオンの元まで下がる。

「どうされました？」

ダンタリオンの問いにケファノスが答える前に、

「ダンタリオン様！」

十数名もの人数で構成された騎士隊が現れた。

「これはこれは皆様。見回りご苦労様です」

手慣れたような挨拶のやり取り、それは言うまでもなくここがダンタリオンの国である証だった。

騎士隊隊長………だと思いが、馬から降りると他の者もそうしてダンタリオンの前にひざまずく。

「氣を使わないで下さい」

多分、本音なのだろうが、『下』の者はそうはいかない。

「そういうわけには参りません。それより、ダンタリオン様は確か魔王城へ偵察へ行かれていたのでは………どうしてここに？」

「まあその………なぜかここにいるんですよねえ」

チラッとクダイを見る。

「そちらの少年は？」

「私の友人です」

ケファノスは気付かれないうちに、クダイの胸ポケットに隠れる。
そこが居場所としてベストなのかもしれない。

「でもよかったですよ。あなた方が現れてくれたおかげで、ここがエルガム国であるとわかりました。早速、国王に報告があります。参りましょう」

ダンタリオンは騎士隊の乗って来た馬に飛び乗ると、

「クダイ、あなたも乗って下さい」

そう言って手を差し出し、自分の前に引っぱり上げる。

「おわっ！」

初めて乗った馬の背中が、正直、居心地がいいとは思えなかった。
見晴らしだけは満足出来そうだったが。

「では先導をお願いします」

柔らかな口調でも、明らかに命令をしている。その命令に速やかに行動する騎士隊。ダンタリオンの地位の高さが伺える。

クダイにとっては見知らぬ地。いつしか自分の世界に戻ることを忘れていた。

「すげ〜……………」

感嘆の声はクダイだ。

活気ある町を早々と抜け、着いた先は城。

衛兵達がダンタリオンを見るなり敬礼をし道を開ける。

その光景に、「ほえ〜」とか「ふお〜」とか、クダイは感心したり頷いたりしていた。

「着きました」

ダンタリオンが終着を告げ、馬から降りる。

「クダイ」

不格好に馬から降りてると、ちょっとだけ真面目にダンタリオンが言った。

「ここからは厳格にお願いします。陛下は話のわかる方ですが、ざつくばらんとはいきませんので」

「う、うん」

これだけ敬われているダンタリオンでさえ緊張している。礼儀だけはちゃんとしたと思った。

そして、クダイの胸ポケットに顔を近づけ、

「ケファノス、今しばらくおとなしくしていて下さい」

「……………」

まずい状況になっている。

今までは慣れない世界で上辺だけの協力はしていたが、ここでのケファノスは人間の敵。

ダンタリオンがそのことを告げる可能性はある。

最悪なことに、今のケファノスには立ち向かって勝つことは完璧なるゼロ。

クダイに頼んでも無駄。

城内へ進むクダイの胸の中、算段をすればするほど危機感が溢れる。

まさか魔族を統括する王である自分が、こんなところで天に任せるしかないことがやけに悲しい。

そんなことを考えていると、揺れが収まる。クダイが歩みを止めたのだ。

「陛下がお待ちです」

衛兵の声と同時に、重い音がした。

何も言わずダンタリオンは赤いカーペットをすたすたと歩き、

「陛下、ただ今戻りました」

騎士隊がやったように、ひざまずく。

それを見て、クダイもおろおろしながらひざまずいた。

「随分と早かったな」

国王は以外にも若く、せいぜい四十後半。金ぴかの玉座に座り、サン・ジェルマンと同じ紳士のような雰囲気を持っている。

「はっ。いろいろと事情がありまして」

ダンタリオンは顔を上げた。

「ほう………して、その少年は？」

心拍数が加速する。どう自己紹介しようか悩んでいると、

「彼はクダイと申しまして、イグノア様の忘れ形見です。

ダンタリオンはそう紹介した。

「なんと………今、なんと申した？」

玉座から勢いづく。

「クダイは………イグノア様の………」

「そうか………魔王ケファノスには勝てなかったか………」

腰が抜けたように玉座にもたれる。

そのケファノスを胸ポケットに入れているクダイは、ひどく汗

をかく。

ようやく自分の置かれた状況を理解した。

クダイをイグノアの忘れ形見と紹介したからには、ダントリオンはクダイを仲間とするつもりだろう。だが、ケファノスは……。

「勘違いをなされてます……陛下」

「何が勘違いなのだ」

「イグノア様はケファノスに敗れたわけではありません」

「では誰に……」

「ジャステイスソードです」

「なんと……それはジャステイスソードの災いに……」

「はい。間違いありません」

「……それをどこで知った？」

「クダイがそれを見ていたそうです」

国王はクダイに、

「誠か？」

ギロリと睨むのはまだ信用してないからだ。

「は、はい。あの、ぼ、僕に後を頼むって……」

あながち嘘ではない。頼むとは言わなかったが、ジャスティスソードを託されたのは事実。

「イグノアとはどこで知り合った？」

「え？え〜っと、体育館……………」

「タイイクカン？そんな地名、聞いたことがない」

追い込まれているのに、ダンタリオンは一切助け船を出して来ない。

「まあよい。で、ジャスティスソードは？」

「！！」

まずった。ダンタリオンにも汗が流れる。ジャスティスソードはケファノスが時空間に仕舞ってある。

「どうした？ジャスティスソードを見せねば信用は出来ぬぞ」

「陛下！実は……………」

ダンタリオンがハッターで乗り切ろうと意を決した時、

「こ、ここにいます」

クダイがジャスティスソードを見せた。

国王は真偽を確かめるように、自らジャスティスソードを手にする。

「……………うむ。本物だ」

そう言っただい返す。

「ダンタリオンよ、彼がイグノアの忘れ形見と言っても、ジャステイスソードを使えばまた彼に災いが訪れては……」

「ご心配なく。このクダイという少年、既にジャステイスソードを使っではいますが、不思議なことに災いが起こらないのです。そして、彼はデイメンジョンバルブを通してやって来た異世界人なのです」

難を逃れ、声を張り上げる。

「なんと！異世界人！？おまけにジャステイスソードを使いこなせると言うのか！？」

「剣の腕はさておき、そういうことになります」

周りがざわめく。クダイ自身はあまりピンと来ない。たかが豪華な剣にしか思っただから。それよりもきつと、異世界から来たということにざわめいてるのかもしれない。

「ふむ。それは心強い」

死んだイグノアはどうでもいいのかと思うくらい、ジャステイスソードを使える異世界のクダイに注目が集まる。

国王は咳ばらいをし、

「ならば改めねばなるまい。余はエルガム国王、エルガム十四世だ。クダイ、お前を歓迎しよう」

厳しかった表情を笑顔に変えた。

「あ、僕は桐山クダイです。よろしくお願いします」

「異世界から来たとは……………」

肩書が気に入ったのか、ジャステイスソードを使えるのが気に入ったのかは定かではないが、エルガム国王は間違いなくクダイに興味を持った。

「陛下、一つお聞きしたいことが」

「なんだ、ダンタリオン。申してみよ」

「はつ。サン・ジェルマン伯爵のことなのですが」

「おお。久々に聞いた名前だ。伯爵がどうかしたか？」

「はい。実は……………」

ダンタリオンは出かけた言葉を飲み込み、

「お元気でしょうか？」

そう言った。しかしそれが聞きたかったわけではないことくらい、クダイにもケファノスにもわかっていた。

「さて？最近は連絡を取ってないのでわからん。どうした急に？」

「いえ。思い出すことがあったものですから」

「まあ伯爵のことだ。いずれひょっこり顔を出すだろう」

エルガム国王は二回、大きく手を鳴らし、

「誰か！客人を部屋まで案内しろ！」

部屋の準備を急がせる。

「聞きたいことはあるが、なんにせよ疲れたであろう。夕食まで休むとよい。ダンタリオン、お前もだ」

「ありがとうございます」

ダンタリオンが立ち上がると、ちょうどそこへダンタリオンが纏っている鎧と同じく、白い鎧を来た騎士が現れる。

「陛下、お呼びで」

金色が鮮やかな髪的青年だった。

「シャクスか。ダンタリオン達を部屋まで案内してやれ」

「はっ」

シャクスはクダイを見ると、

「こちらへ」

言葉少なに誘導し、クダイとダンタリオンはシャクスに着いて行く。
順調なくらい事が進んでいる気がした。

あらかじめ準備されてるかのような展開に、ケファノスだけは
不安を抱いていた。

第十章 連鎖

「うわあ、こりゃすごいや!」

小学生並の感想を素直に言った後は、

「そりゃあ!」

ふかふかのベッドへダイブを決める。そんなクダイの行動に、シャクスは少しムツとした顔を見せ、

「夕食まではまだ時間があります。間際になったら迎えに上がりますので、部屋でおとなしくしていて下さい」

まるで重ならないセリフを口にし、

「ねえ!お城の中とか見ちゃダメ?」

まるで空気を読まないクダイの言葉に、さすがにキレかったのがダンタリオンに諭される。

「まあまあ。お城なんてそんな簡単に入れる場所ではありませんしダンタリオンは、はしゃぐクダイに、

「クダイ、お城の中は後で私が案内しますから、少しだけ我慢して下さい」

いつもの1.5倍増しの微笑みで言った。

「わかった。じゃあここでおとなしくしてるよ」

それを聞くと、シャクスは軽く頭を下げ一応、客人への礼を尽くし部屋を後にした。

「では後ほど」

ダンタリオンもどこへやら行った。

「もう出て来てもいいんじゃない？」

特にケファノスを気遣ったわけじゃないが、意識のあるものが胸で黙ってられても気持ち悪い。

「行ったか」

「よかったね、魔王だってバレなくて。あ、後さ、王様がジャステイスソード見せろって言った時、すぐに出してくれて助かったよ。よくみんなに気付かれなかったよね。ま、一先ず安心かな」

「……………」

「不満なの？」

「いや。ただ、なぜダンタリオンは余を庇ったのかと思ってな」

それは本人に直接聞いてもらうしかない。だが、魔族の”言い分”というものを聞いてしまったからではないかと、クダイはそう思った。

あの晩、ケファノスはダンタリオンに言った、「地上を奪おうな
どと思ったことは一度もない」と。そして、戦いを仕組んだのがサ
ン・ジェルマンであるのなら、人間と魔族が戦う理由はない。きつ
とそう思っただろうと。

「ダンタリオンが来たら聞けばいいよ」

「……………」

サン・ジェルマンのことも、ダンタリオンはエルガム国王に何か聞
こうとしていたようだが、躊躇い思い止まっていた。

「僕、少し寝るから。起こさないでよ」

ここ二、三日まともに寝ていない。その疲れもあり、クダイはすぐ
に寝息を立てた。

「……………」

ケファノスは言い知れぬ予感、不安の先に、決してよくないことが
起こると確信していた。

「久しぶりですねえ。同じ主君に仕えていながら、あまり顔を合わせることはありませんね。まあ、この広い城内ですから仕方ないんでしょうねえ」

広大な敷地を眺め、ダンタリオンは無言のシャクスに得意の笑みを向けた。

「あの少年がジャステイスソードを使えるとは思えん。お前の勘違いじゃないのか」

伝説の剣を使える少年があれでは、”使いたい”と思っても使えない者達が浮かばれない。

災いの伝説さえなければ、実力のある者達が手にするだろう。

そうしないのは、イグノアのように自分を犠牲にしても目的が成就されとは限らないからだ。

「あんなガキがジャステイスソードの使い手など……」

「悪い癖ですよ、シャクス。伝説の剣とは言われてますが、数多くの戦士がジャステイスソードを使って来ました。結果はどうあれ、ジャステイスソードに奇跡を求めた者は、その身を滅ぼしていった。しかし、クダイはジャステイスソードに選ばれたのです。彼に頼るのではなく、彼と力を合わせて戦えばいいんです。それにですね、戦う相手はひよっとしたら魔族ではないかもしれませんよ？」

「なんだと？どういう意味だ」

ダンタリオンがサン・ジェルマンのことをエルガム国王には言わなかったのは、サン・ジェルマンがエルガム国王の友人であるからだ。シャクスなら……まだ迷いはある。

「もしもの話をしましょう。もし、人間と魔族が争うことにより自分に都合のいい人物がいたら……………どう思います?」

「どつて……………心当たりがあるのか?」

ダンタリオンはお調子者ではあるが、的を射た発言しかしないのを知っている。

「深く考えないで下さい。もしもの話ですから」

二人には立場がある。ダンタリオンは賢者。シャクスは、

「聖騎士のあなたに言うことではありませんでした」

聖騎士の称号を得ている。旧知の仲でありながら、互いの立場がものを言いにくくしているは事実。

取り巻く環境がそうさせてしまう。

「あなたと話せてよかったですよ」

何も言わない方がいい。言い聞かせる自信がない。

クダイやケファノスともきちんと話してないのだ。サン・ジェルマンとヨウヘイのことを。

いずれにせよ、シャクスならわかってくれる。焦って事をし損じるよりは、多少の熟成も必要か。

その夜の夕食会は豪勢だった。国王ですら絶賛していたのだ、クダイにも自分が歓迎されているのが身に染みた。

自分の世界に帰ることすら忘れ夢中で食べまくった。
悦に浸れたのはそれまで。夕食会は終わり、やがて眠りについ
た。

「クダイ、起きろ」

「ん〜むにゃむにゃ……」

「クダイ」

「もう食べられないよ……」

「……………」

真夜中。ケファノスは熟睡しているクダイを起こすのに苦戦してい
た。

もう何回声をかけたか。さすがに実力行使に出るしかない。
クダイの額目掛けておもいきりぶつかってやった。

「イデッ!」

がばつと起き上がり、

「何すんだよ!」

文句を言ってやった。この上ないくらい頭に來た。

「静かにしろ」

人の眠りを妨げておいてこの態度。魔王であっても許し難い。

「自分が起こしといてなんだよ！」

またぶつかってやる。

「ぐわっ！」

「黙れと言ってるのだ」

ふてぶてしい。これで起こした理由が”トイレ”だったら殺意を覚えるが決定した。

「いったあ……なんだよ、せつかく気持ちよく寝てたのに」

よく出来たベッドだった。クダイの部屋のものとは全然違う。

”寝る”ことが前提ではなく、”眠らせる”ことが前提なくらい心地いいベッド。”売る”ことが目的のパイプベッドなど、相手にならない。

「剣を取れ」

ジャステイスソードがクダイの前に置かれる。

「なんかあったの？」

剣を取れと言うからにはただ事ではない。それにしてもなぜ真夜中なのか。ここ最近、夜がやたらと忙しい。

「やられたな」

ケファノスはじつと扉を見つめる。

「な、何？何？」

あたふたとしてると、扉が勢いよく開いて騎士が何人か入って来る。

「動くな！」

電気のない世界だ。照らすものはキャンドル。

「魔王ケファノス、出て来い！」

予測してたのか、躊躇いもなく騎士達の前に出て行く。

「お、お前が魔王？」

恐怖も威厳もない姿。小さいし。せめてそれらしい姿であってほしかった。

「我々が来ることを知っていたようだな」

すんなり事が運んでるような気がしていた。

「バカめ！城を乗っ取れると思ったのか！」

誰かに吹聴されたのだ。クダイはジャスティスソードを構えて歩み寄る。

騎士達は咄嗟に後ろへ下がる。

それを見計らい、ケファノスが騎士達を魔法で攪乱した。

「クダイ、今だ！逃げるぞ！」

「わわ、待ってよ！」

部屋を飛び出し廊下に出ると、

「逃げられると思ったか」

「シャクスさん！」

シャクスが部下を連れて立っていた。

「そんな姿で俺達を騙そうとは。魔王も堕ちたな。それとクダイ、お前のような奴にジャステイスソードを使わせるわけにはいかん。引っ捕らえる！」

シャクスの命令に即座に襲い掛かって来る。

「うわあああ！」

なりふり構わずジャステイスソードを振り回す。目をつむって。

ジャステイスソードを警戒し過ぎて誰ひとりクダイに近づけない。先入観というのは無いにこした方がいいのかもしれない。

「クダイ、走れ！」

「え？」

ケファノスに言われて目を開けた時、激しい光が放たれシャクス達

の目を眩ませた。

怯んだ隙を突いて逃げる。

「な、何をやってる！追え！！」

遠ざかるクダイの背中を見てシャクスが怒鳴る。

手の平ほどもない身体から、これほど強い魔法を放つとは思わなかった。目を眩ませるだけが目的でなければ、全員死んでいた。

騎士達がリズムよく鎧を鳴らし駆けて行く。

「おのれケファノス……………」

シャクスは反対方向へ走り、先回りを試みる。

「な、なんなんだ一体……………」

運よく城の中庭までは来れた。

「ダンタリオンが密告でもしたんだらう」

「裏切ったってこと！？」

「元から仲間でもなんでもない。当然と言えば当然の流れだ」

だがケファノスの声色には心なしが、淋しげにも取れた。

「そんな……信じてたのに」

悪い奴じゃない。見るからに。それだけにショックは大きい。
追い討ちをかけるように、シャクスが暗闇から浮き出る。

「何を信じてたって？」

剣が鞘に擦れる音がした。幾度もそうして来たのだろう。慣れたように最後は勢いをつけて抜いた。

「……もはやこれまでか」

ケファノスはクダイに戦うようにせがもうと思ったが、シャクス相手ではどうにもならないだろうと諦めてしまった。

「ジャステイスソードは返してもらっ。それは使えるべき者が使うべき剣だからな」

剣が振り上げられた。

「嫌だ」

「ほっ。まさか殺り合う気ではなからうな」

ジャステイスソードをシャクスに向ける。

「クダイ……………」

意外な行動に、ケファノスは目を疑うしかなかった。

しかし、クダイにも言い分はある。ケファノスの肉体を取り戻すには、ジャステイスソードは不可欠なのだ。会って日の浅い二人でも、他人に命を奪われる言われはない。仲間かどうかはさておき、むざむざ殺されるわけにはいかないのだ。

「僕達は何もしてない！それに、ジャステイスソードはケファノスにとつては必要なんだ！絶対に渡さないぞ！」

小刻みに振動するクダイの手は勇気と呼ぶ。

「やれるものならやってみろ」

振り上げた手に力を入れる。真つ二つに斬りつけてやろうと。

「待ちなさい」

シャクスの殺気を断つように、ダンタリオンが邪魔をした。

鎧は着てない。白いマントと、私服らしき地味な格好。

「クダイに手を下すのなら、私が容赦しません」

剣を抜き、クダイの前に立つ。

心臓を刺されても、退く気はない。

「反逆罪に問われるぞ」

「シャクス、昼間私が言ったこと、サン・ジェルマン伯爵は全ての

時間軸を融合させ時間に終わりをもたらすつもりなのです。どのような方法かはわからないのですが、確かに私達にそう言いました。こんな事をしてる場合ではないんです」

「ほざけ。伯爵から聞いたぞ、ケファノスと結託して地上を支配する気だと」

「やっぱり来たんですね。伯爵が」

「ダンタリオン、今なら庇ってやれる。剣を収めろ」

「お断りします」

「ダンタリオン！」

「例え親友であっても、正義の無い行いに加担することは出来ません」

きっぱりと言い放つ。

共に国の為に歩んで来た。でもそれは国に正義があるから。サン・ジェルマンに言いくるめられてしまう国では、いつか必ず滅ぶ時期ではないのだ。シャクスに言っても今はわかってもらえない。

「ダンタリオン、騎士達が来るぞ」

ケファノスはここでの戦いに賛成はしない。早く逃げさせるのが得策だろう。

「わかりました。二人共、私に着いて来て下さい」

二歩、三歩と下がり駆ける。

クダイとケファノスも、シャクスを警戒しながらも続く。

「待て！本気で逃げる気か！」

逃げれば追わなければなくなる。どこまでも。その先には死のみ。

ダンタリオンは立ち止まりはしたが、

「逃げるわけではありません。真実を証明する為に行くのですよ」

振り返らなかった。

「何が起きてるんだ……………」

確証の無いことは言わない、ダンタリオンが貫いた意志。

それは余韻を残す。幻を目の当たりにしたような感覚、不可解な謎を解き明かすように。

第十一章 追う者、追われる者

野宿の醍醐味なんて無いと思ってた。それも逃亡して迎えた朝。朝露が頬を直撃し、目覚めを告げた。朝方の空気が湿っていたのか、青い香りが強く感じるくらい漂っていた。

「おや、おはようございます」

ダンタリオンに朝の挨拶をされるのは二回目。ただ、今朝はいささかの疲れを見せていた。

「ふわあ……腹減ったなあ」

「暢気な奴だ。起きてすぐ食い物か」

ケファノスは朝一番のクダイを”讃えて”やった。

「悪いのかよ」

「タベあれほど食べてたではないか」

「夜は夜。朝は朝なの」

育ち盛りとはそういうもの。

そんなクダイに、ダンタリオンは自分とシャクスを重ねてた。

「な、なんだよ、人の顔見てにやけてさ」

「いえいえ。私にも若かりし時代があつたものと思ひ出しましてね」

「ダンタリオンって何歳なの？」

若いのはお互い様だろう。

「私は二十七歳です。そういうあなたはいくつなのですか？」

「僕は十七だよ」

思い出すのはちょうど十年前。辺りを包む香りと同じ、青い匂いがしていた時代だ。

「まだ私もシャクスも、がむしやらに文武に励んでいました。歩む道は違えど、国を守る人物になろうと。志しを共にして」

「そつえばシャクスさんは賢者じゃないの？」

「シャクスは聖騎士という立場です」

まあ、大層な肩書ではあるが、具体的に普通の騎士と何が違うのかわからない。

聞くまでもなく、賢者様の方から説明はなされる。

「基本的に聖騎士も賢者も魔法は使います。騎士に関してはそれを強要はしません。ですから、騎士が使う魔法は効力が弱くレベルの低い魔法ばかりです。聖騎士は攻撃も回復も、より高い魔法を使いますが、やはり剣技に重きを置いています。賢者は、剣も高度な技術を得てはいますが、やはり魔法が基本になります。魔法使いなどと呼ばれる者よりも、難易度の高い魔法を使えます」

ちょっと偉そうに最後は念を押し、

「そして、騎士、聖騎士、賢者は、全て宮廷……国の機関における役職です。騎士は主に治安の維持に努め、聖騎士は軍関連、賢者は司法に属しています。その他にも、神官、宮廷戦士などの……」

「いや、も、もういいよ。ありがとう」

社会の勉強でもしてるのかと思った。

要は国家公務員。以下でも以上でもない。その中での力関係など、表向きはどうあれドロドロしてるに違いない。その程度なら、容易に想像は出来る。

「で、これからどうする？」

二人が儀礼を済ませるのを待ってたのか、ケファノスが現実を告げる。

「うーん……私達、お尋ね者になってしまいましたからねえ」

遅かれ早かれ追っ手は来る。少なくとも、エルガム国にはいられない。

「軽く言っな！軽く！僕は自分の世界に帰りたいんだよ！」

「おや？あなた、タベジャスティスソードでケファノスの肉体を取り戻すとか言ってますでした？」

「い、言ってない！ジャスティスソードが必要だって言っただけだ！」

「やっぱりそうではないですか」

「違う！違う違う違う違う違う違う違う！..」

「ではお友達はどうします?」

「それは.....」

「ね？あなたは必要な人間なんです。少しだけでもお付き合い下さい」

「で、でもでもでもでも！..」

黙って見てるのも疲れる。

「騒々しい.....」

ケファノスの周りにはまずいないキャラだろう。

「いい加減にしろ。腹が減ったんじゃないのか?」

ダンタリオンはクダイで遊んでるだけ。クダイを宿めないと話は進まない。

「減ったよ!」

ムスツとしてそっぽ向いた。

「ダンタリオン、余とクダイは宛にはならんぞ」

「大丈夫ですよ。隣のダバイン国に私の知人がいます。そこまで頑張りましたよ」

「お前の知人なら先回りされてる可能性もあるんじゃないのか？」

「ありますね。しかし、今の私達は先が見えてません。行くしかないでしょう」

手探り状態で旅は出来ない。頼れるものは頼る。ケファノスの苦悩は深かった。

「では行きましょう」

ダンタリオンから聞くこの言葉。どこかに行く時は、彼が仕切るのだろう。連れが頼りない少年とストラップのマスコットでは、致し方ないようだ。

「どうしました？」

何かを期待した目でダンタリオンを見てる。

「魔法は？」

「魔法………はて？」

「じれったいなあ。そのダバインって国に一瞬で行ける魔法使うんだろ？早く見せてよ！」

こんなにも輝く瞳は久々に見た。気をよくしたが、

「そんな便利な魔法はありません」

無いものはどんなに期待されても無い。

「嘘ばっか」

「嘘ではありません。瞬間移動の魔法はありますが、せいぜい家屋十軒分くらいです」

「……………マジ？」

「マジとは？」

魔法に優れた者を賢者と呼ぶ……………んじやなかっただろうか？そういえば、ダンタリオンが魔法を使ったところをまだ見てない。

「はあ……………歩くってことか。で？どんくらい歩くの？」

「ん~~~~三日は……………」

「み、三日あつ！？」

「はい」

あんぐりと口を開けたまま徘徊……………いや、歩き出した。

「いい運動になりますよ」

連れ添うようにダンタリオンも。

「やれやれ……」

ケファノスだけは歩かないが。

シャクスは正式にクダイとダンタリオン、ケファノスの討伐を命じられた。

準備の間だけは、ダンタリオン達は遠くへ行ける。などと親友を案じてしまう。

「バカな奴だ。何の為にここまで来たんだ」

苦しい時も、支え合って来た。それを無駄にするなど考えられることではなかった。

だが、ダンタリオンがケファノスの手先になったとは考え難い。彼の言う通りサン・ジェルマンが嘘を言ってるのだとしたら……。

「シャクス様、準備が整いました」

部下が来てしまった。

「わかった。出発しよう」

真実は国にあり。騎士の称号を授かる時に誓う言葉。

親友を討つなど本意ではないが、反逆罪に問われてしまった以上、国に従うしかない。

出来るならもう少し時間を稼いでやり、ダンタリオンに真実を証明させてやりたいと思う。

追われるダンタリオン、追うシャクス。

心は軋んでいる。

第十二章　新しい仲間

三日かけてエルガム国からダバイン国に入った。これと言って景色に変化はなく、ダンタリオンが言わなければ国境を越えたことすらわからなかった。

更にダンタリオンの知人の住む町まで行けば、一段落つけると思っていたのだが、

「これは……………」

ダンタリオンですら言葉と笑みを失った。

「町が……………焼けてる……………」

クダイが発した通りの光景。町が何者かに攻撃を喰らった後だろうか。それでもなければ説明がつかないほど凄惨なものだった。

「サン・ジェルマンとヨウヘイだな」

町に入るのを躊躇う二人をよそに、ケファノスは一人焼け野原を進んで行く。

「なんでそんなことがわかるんだよ」

サン・ジェルマンはともかく、ヨウヘイがこんな酷いことをしたとは思いたくない。

「他にいいい」

クダイの疑問は疑問にはならない。この世界では人間と魔族が戦っていたのだ。しかしケファノス不在の魔族が人間を襲うとは、ケファノスには考えつかない。

「ケファノスがなくなった魔族はどうなんだ？人間だってまだ魔族と戦ってんじゃないのか？」

反対の意見はクダイから。

問いにはダンタリオンが答えた。

「城で部下から聞きました。魔族は至っておとなしいそうです。人間側も今は様子見、イグノア様が死んだことが広まるまではね」

先を進む二人の背中に、

「こっちですよ」

正しい道を教える。

道もへつたくれも無くはなっているが、記憶が道標になっている。何歩あるけがいいとか、果ては教会脇のパブはぼつたくるとか、観光案内をしたら金になるかもしれない。

「ねえ、ダンタリオン。この町には誰がいるの？」

本当は走りたいのだろうが、クダイの体力を案じてそうしない。

知人が生きてるか確かめたいはずだ。

「ここには……………」

ダンタリオンの足が止まった。

そこは普通の家。焼けてさえないければ。
骨組みだけが残された残骸を見て、悲痛な表情を見せた。

「ここには、かつて私が愛した女性が住んでいました」

過去形。これだけ壊滅してれば、やはり死んでるだろう。

中を散策する。せめて遺体を葬ってやりたいと。

「活発な女性でした。剣の腕も中々のもので、あのシャクスでさえ一度負けてますから」

「す、すごい人だね……」

「ええ。とても優秀でした」

それだけ言っと、黙々と遺体を探す。

クダイもケファノスも、かけてやれる言葉を見つけられずじまつた。

「ちょっと、人ん家で何やってんの！」

後ろから声がした。それも『人ん家』と言った。

「火事場の泥棒って本当にいるのね！」

そう言つてクダイの胸倉を掴んだ女性は視線の先に、

「あ、あんた……………ダンタリオン？」

背が高く、スタイルもいい。胸も豊かで髪を後ろで一本に結ってい

る。

「オルマ……………」

奇跡か偶然かは二人に決めてもらえばいい。ただひとつ言えるのは、

「生きてたんですね」

笑みが戻り、嬉しさのあまりダンタリオンはオルマに抱き着こうとした。

バシンッ！

見事な快音が鳴り響く。

「おやおや、相変わらず手厳しい」

「いきなり抱き着く方がいけないでしょ！」

クダイは目をパチクリとさせた。

愛した女性〃元カノ。ではないらしい。

「まったく、変わらないねえ……………あんたも」

「あなたですよ。相変わらず美しい」

わかった。何がわかったか。ダンタリオンは女性を前にすると調子が断然良くなる。クダイの母親に対してもそうだったが、褒めずにはいられないらしい。

ホッとしていいのか、呆れた方がいいのか。でもなぜか安心し

ただのだけは確かだった。

「やはり伯爵とヨウヘイでしたか」

オルマから事情を聞き、町を焼いたのがサン・ジェルマンとヨウヘイであるとわかった。

ダンタリオンは考え込むように黙ってしまう。

「それにしても……………」

そしてオルマは、クダイとケファノスを見る。

「ジャステイスソードを使える人間と、魔王……………ふん」

妙な組み合わせのコンビに興味があるようだ。

まあ、興味を持たせるまで説明するのは大変だった。

クダイはともかく、ケファノスの名を聞いた途端、剣を抜いて暴れ出す始末。ケファノスも逃げる気もなく、その態度がオルマの怒りに油を注いだ。

ダンタリオンがなんとか落ち着かせ事を収めたが、クダイは見た目と裏腹に気象の激しいオルマに警戒していた。

「まあ、あたしはダンタリオンを信じるよ。調子のいい奴だけど、嘘だけは言わないからね」

「そう言っただけで頂けるとありがたいですね」

シャクスが先に来てたとしても、同じことを言ってくれただろう。だから頼ったのだ。

「よしっ！決めた！」

オルマは立ち上がり、

「あたしも一緒に行くよ」

「え？」

苦手なタイプだけにクダイは素直に喜べない。強気な女は馴染めないのが本音。

「なんだい？その顔は」

「い、いえ、別に……」

視線を逸らしたクダイに詰め寄り、

「あたいがいちゃなんか都合悪いわけ？」

「そ、そうじゃなくて………なんか巻き込んであれかなあ………
なんて……ハハ………」

オルマはクダイの背中を平手で叩くと、

「なあんだ、気にしてくれてたのかい？ 気に入った！ 仲間としては文句ないね！」

気分を良くした。

「力を貸していただけのですね？」

「当たり前じゃないか。自分の町をこんなにした奴を、許せるわけないからね」

ダンタリオンはオルマに手を差し出し、

「お世話かけます」

「遠慮は無しだかね！ あたしがそういう堅苦しいの嫌いなもの知ってるだろ」

固く握手をした。

二人だけがわかる何かがあるのだろう。思い出とか、想いだとか。クダイにとっては憂鬱な存在になりそうだったが。

語らずにわかる友を持つまで、まだ人生の経験が足りない過ぎだということとは、本人も承知している。

「ダンタリオン！！」

そんな雰囲気壊すように、ケファノスが叫んだ。

理由を聞くまでもなかった。

遙か上空に煙が昇り、真っ赤な炎が見える。その方向は、

「城………」

オルマが言った。

「オルマとやら、サン・ジェルマンが来たのはいつだ？」

真剣な口調とは不釣り合いな姿をぶかぶかさせるケファノス。

「来たのは二日前だけど？」

「しくじったな。狙いは最初から城だ」

「どういう………」

「町をやったのはヨウヘイだな？」

「え？ええ、そうよ。黒い霧みたいなので………」

「ヨウヘイの力を試させたのだ。そして今度は、さしずめ試験でもさせてるんだろ？」

サン・ジェルマンがヨウヘイを屍人^{かばねびと}の”器”と呼んだ意味は理解出来ないが、”その能力”がヨウヘイにあるのなら、本来、屍人を集めるにはこの世界しかない。ここに来て四回、夜を過ごした。二日前なら二回。どれだけ屍人が集まったのか、それとも集まった屍人の量と力の大きさを計っているのか、あまりいい趣味ではなさそうだ。

「どっちにしても行くんだろ？」

「ほう。逃げ腰にならないのか？」

「ケファノス、皮肉はいい。こんなこと……やめさせなきゃ」

ヨウヘイのことになると、クダイも黙ってはられない。

ヨウヘイに何があったのか、それを知りたい。

「持て」

クダイにジャスティスソードを渡す。

「ここから？重くて疲れちゃうよ」

「武器というのは、伝説だからとかは関係ない。どれだけ手に馴染んでいるかだ。優れた剣でも、手に馴染まないのでは不都合が多い」

回りくどい言い方だったかもしれない。

「触れていることだ。」それ”がお前を選んだのだ。戦いになれば、お前が頼るのは余でもダンタリオンでもない。ジャスティスソードだ」

「触れている……こと」

やっぱり重い。振るうには筋力が足りない。

でもしっかり握る。その姿は到底、様にならない。だから魔王は敢えて言う。

「クダイ……ジャスティスソードはお前の物だ」

疲れも癒えぬまま城へ走る。
新しい仲間を迎えて。

第十三章 かつての勇士

「な、なんの真似だ！サン・ジェルマン！！」

ダバイン国王はサン・ジェルマンとヨウヘイを前に、騎士を引き連れ剣を向ける。

「なんの……？見てわかりませぬかな？私の優秀な弟子の力を試しているのです」

業火に包まれた城の中、涼しげに言った。

「ふざけるなっ！我が城をこのようにしてどういっつもりか聞いている！！」

「どうもこうも、今言った通りですが」

「裏切り者めっ！かつての同志が……時空の騎士の名が泣くぞ！」

ダバイン国王の怒号も虚しく響くだけ。

「なんだよ、仲間なのか？」

ヨウヘイがサン・ジェルマンに聞いた。

「まだこの地に秩序が無い時代、戦火にまみれていた頃に今世界を担う国王達と共に戦ったのだ」

「へえ」。誰と？」

エルガム国での手厚い歓迎、裏はあるとは思っていた。

「魔王ケファノス」

「それじゃサン・ジェルマンとこの世界の王様達は……………」

「余を倒す為に戦った勇士だ」

以外な過去……………なのかどうかは知らないまでも、クダイには唸る
くらいの歴史だった。

「結局、勝敗は着かず、世界の一部分を魔族に譲り話がついた……
…でしたね」

ダンタリオンが知っているのは当たり前か。

「なんで一部分なわけ？」

「その話はまた今度だ」

クダイのいつもの疑問癖をケファノスは退けた。

「酷いわ……………」

オルマの目に飛び込んで来たのは、何人も重なって串刺しにされた無惨な光景。明らかに悪意があつての仕業。

「これをヨウヘイがやったのか……………」

直感がそう告げる。

クダイはジャステイスソードを叩きつけ、

「あんの野郎……………何やってんだよ！」

人としてやってはならないこと。それさえ色褪せてしまうような悪行に、怒りを抑えられない。

「お前でも怒ることがあるのだな」

ケファノスは少しだけ感心した。怒りは力の原動力になる。その感情をクダイも人並みに持っているのだから上等だ。

「でもこの炎の中、どうやって進むんだ？」

ジャステイスソードなら炎を払うことも出来るのかもしれないが、クダイにはまだその手段が浮かばない。

「何言つてんだい？コイツがいるじゃないか」

オルマは親指を立て、くいつと緑色の髪 of 賢者様を指す。

「コイツ呼ばわりは勘弁して下さい」

青い光がダンタリオンの手の平から、自分とクダイとオルマを包む。

「これって……」

「クダイ（あなた）の見たがっていた魔法です。エスケープボディ
と言って、人が耐えられない環境から身を守る魔法です」

詳しく語られる必要はない。既に炎の熱を感じない。

「ケファノス（あなた）はどうします？」

「いらん。そのくらいの魔力ならある」

「そうですか。では……」

ダンタリオンは剣を抜いた。

「行こうか」

オルマも。

「ぬかるな。この魔気の強さからして、かなりの屍人^{かはねびと}を手^てにしている。油断すれば全滅は免れない」

ケファノスは警笛を鳴らし、エスケープボディを自身にかけた。

この緊張感が堪らない。人は元来、残酷な生き物。それを理性で抑制するからこそ快楽を覚えてしまう。

ヨウヘイは屍人の力に酔っていた。

「じゃ、とつとと殺っちまうか」

なんでも出来る。どんな願いも思いのままだ。

「待て」

「邪魔すんなって」

サン・ジェルマンが気がついたのはクダイ達の気配。

「友達が来たようだぞ」

「クダイが？」

城壁の向こうからやはり気配を感じる。

「ヘッ。ちょうどいいや、ちょっと遊んでやるか」

「少しだけならいいだろう。だがまだ完全ではない。調子に乗るな」

「わかつてるって」

サン・ジェルマンはその場から消え、

「とりあえずお前から片付けてやる」

ダバイン国王と騎士達はその姿を消された。

黒い霧に身体を燃やされ。

「早く来いよクダイ」

手に入れた力の大きさは、天さえ握れそうな気がしていた。

第十四章 悪友

城内に入る間際、クダイ達の前にサン・ジェルマンが現れた。

「伯爵……やはりあなただったか」

地獄絵図。描くには苦労しなかっただろうことは察しはつく。

「その顔を見ると、まんまと罠にかかってくれたようだな。賢者ダ
ンタリオン」

サン・ジェルマンの視線はオルマへと移る。

「お前は確か……………」

町を焼いた時、唯一立ち向かって来た女戦士。

「今度は逃がさないよ!」

サン・ジェルマンの企みよりも、今は町を焼き、住人達を殺した仇
を討ちたい。

「ヨウヘイはどこだ!」

同じく、クダイにも自分の目的がある。

「彼なら城の最上階にいる。行ってみるといい」

意外にもすんなり通らせる言動を吐いたものだから、肩透かしを喰

らったような感じになってしまう。

「行って下さい。伯爵は私とオルマで相手しますから」

ダンタリオンとオルマが合わせたように剣を抜く。それは偶然ではなく、洗礼された絆が成せること。

「クダイ、ここはダンタリオンに任せて最上階を目指せ」

「うん」

ケファノスに言われ、炎上する城の中へ突入して行く。

クダイのことは心配だが、オルマを一人残すわけにもいかず、ケファノスに任せた。

「では賢者どのの實力、拝見させて頂こう」

「ようこそ、我が城へ」

玉座に踏ん反り返り、王冠を頭に乘せて頬杖をつく。

「何が我が城だよ。お前、自分が何したかわかってんのか！」

友人が殺しを働いたなんて信じたくないが、やはり事実なのだろう。顔つきが違う。

「ハハハ！一回言ってみたかったんだよ。悪役つてのが好きでさ」

「だからって！」

「どうせ知らない世界の人間だろ？知ったこっちゃないよ」

こんな最低な奴だったとは思わなかった。

「伝説の剣ジャスティスソード。いいじゃないか、かかって来いよクダイ」

玉座から腰を上げ、悪びれもなく迫って来る。

サン・ジェルマンに何を吹き込まれたのかは知らないが、何事も無くとはいかない。

「相当、魔気に染まっている。本気でやらないとお前が殺られるぞ」

脅しではない。ヨウヘイの力はケファノスの想像を超えている。

「行くぜ！クダイ！」

左右の手に黒い炎を纏い、交互に放って来る。

「うわっ！」

ジャスティスソードを盾にして防ぐが、多分ヨウヘイはわざとジャ

ステイスソードにそうしている。

「ほつら！どうしたクダイ！お前の力はそんなもんか！」

衝撃で手が痺れる。ただでさえ重いジャステイスソード。このまま
でいいわけがない。

「ケファノス！」

「前を見る。目を逸らさずしかと見るのだ」

見ろと言われても、優れた動体視力でもなければ無理な注文。

「いいかクダイ、奴は今、屍人の力に酔いしれているだけだ。言わ
ば隙だらけの状態。刹那の時を見極め、一撃で決めろ」

「んなこと言うけど、どうしたらいいのかわかんないよ！」

剣すらまともに振るえないのだ。刹那の時がわかったとしても、ヨ
ウヘイに一撃を与えられるかは約束出来ない。

「ジャステイスソードはお前にしか使えない。剣と心を通い合わせ
るのだ」

「剣と……ジャステイスソードと心を……」

無意識に目を閉じた。”見ろ”と言われた指示に反して。

（ほつ……無眼の構えを無意識に……）

無意識にした行動だからこそ価値がある。ケファノスはクダイに才能を垣間見た。

「ほらほらほらあつ！楽しませてくれよ！」

攻撃がきつくなつて来た。これ以上は腕がもたない。

（僕にしか使えないジャステイスソード……………”見る”んだ、一撃の軌跡を！）

- キイイイイン -

また音が鳴った。この音が鳴った時は、ジャステイスソードが目覚める時のような気がする。

「これでも耐えられるかあつ！？」

ヨウヘイの声がしたのと同時に、目を閉じたクダイの闇にいくつか光が見える。

闇の中でもより暗い光。それはヨウヘイの魔気だろう。

小さい無数の光。これは攻撃。

そして……………

「見えた！」

自分からヨウヘイに向かって伸びる光。刹那の時だ。

ジャステイスソードがぐつと軽くなる。

連続で来る攻撃も、切れ目がある。

クダイはその切れ目に反応して、光が示した軌跡を駆ける。

（なんだ……身体まで軽く感じる）

左にカーブする軌跡の上を走り、ジャスティスソードが導くままに

……

「振るえっ！クダイー！」

「うわあああっ！！」

見開いた先にヨウヘイがいる。

「しまっ……………！」

ジャスティスソードの切っ先がヨウヘイの脇腹をかすめた。

ヨウヘイを目にした為に、クダイが力を抜いてしまったからだ。

「うくっ……………」

強烈な痛みにもヨウヘイは膝をつく。

「ぼ……………僕は……………」

クダイは初めて感じた不思議な感覚と、自分の意志で使ったジャスティスソードの力に驚いていた。

（詰めは甘かったが……………クダイめ、ジャスティスソードに何を見たのだ）

あの動きは尋常じゃない。

剣を振るう筋力さえままならないクダイには無理な動き。

無眼の構えもまた素人がやるものではない。

（こいつはとんでもない逸材かもしれん）

クダイとジャスティスソードの奇跡。ケファノスは間違いなくその目で見た。

第十五章 開花する才能

「魔法がまるで通じないとは……」

そこそこ強力な魔法で攻撃をしているものの、サン・ジェルマンには全く通用しない。

魔法が通用しなくてはダンタリオンの持ち味も失われる。

「だったら力で揜伏せる！」

ダンタリオンの脇を駆け抜け、オルマが剣を振るう。

とてもしなやかで女性らしい立ち振る舞い。それでありながら、一閃一閃が力強い。

剣が空を斬る音がその表れ。

地面を蹴り、高くジャンプする。

「くたばれ！！」

振り下ろすと言うよりも、振り落とすと言った方が妥当なくらい勢いがある。

「腕は認めるが、それでは私は倒せんよ」

切っ先の落下地点はサン・ジェルマンのすぐ横。

外したわけではなく、外されたのだ。

「力だけではせつかくの才能も生かされん。よく覚えておきなさい……お嬢さん」

すると、オルマの腹に手を当て衝撃波で吹き飛ばした。

「オルマ!!」

地面に叩きつけられる寸前、ダンタリオンがオルマをキャッチした。

「なんて奴だ………」

オルマの威勢も底をつく。

その時、全身の毛が逆立つくらい感覚を感じた。

その感覚の正体が、ヨウヘイではないとサン・ジェルマンも気付き、

「どうやらここまでのようすな」

トップハットを直して、ダンタリオンとオルマに別れを告げた。

「伯爵!!」

「ダンタリオン、追うぞ!」

ダンタリオンの腕から離れ、城の最上階を目指し走る。

勇ましいオルマの姿を見失わぬよう、ダンタリオンも追った。

浴びせた一撃は稚拙なものだったが、初めて体験した感覚はクダイに自信を与えた。

「お前にケガはさせたくない。ヨウヘイ、もう諦める！」

同じことをやれと言われても、すぐには無理だろう。それでも自信が削ぎ落とされることはない。

自信とはそういうものだからだ。

「諦めるだって？しくじったくせによく言う」

驚きはしたが、最初からこの展開を望んでいたのだ、むしろ嬉しいほどだ。

「けど、戦いつてのはハラハラしなくちゃ面白くない。お前が強くなるのは歓迎するよ」

戦いを好むというのは、あんまりいい趣味とは言えない。

再び構え、次のラウンドに意気込むヨウヘイだったが、

「そこまでしておけ」

サン・ジェルマンが現れて儂く戦いを預けられる。

「止めんなよ」

もちろん不満はある。

今までなかった力で、今まで出来なかったことが可能になった。

そういう時は危ないもの。サン・ジェルマンはよく知っている。

「私達にはまだ果たさねばならぬ目的がある。長居は無用だ」

「チツ。しょうがねえか」

名残惜しさをちらつかせながらもサン・ジェルマンに従う。

「クダイ少年、そして魔王どの、またお会いしましょう」

「またな、クダイ」

夕暮れ時の別れのように、軽く手を振った。

「待てよ!」

ジャスティスソードを振り上げようとしたが、今は重く感じて上げられず、そうこうしてる間に二人はいなくなった。

「クダイ!」

一歩贈れてオルマが来て、そのすぐ後にダンタリオンが来た。

「ごめん、逃げられた」

クダイは悔しそうな顔で言った。

「仕方ありません。正直、私達も伯爵には齒が立ちませんでしたので」

軽く言うが、その言葉の裏は深く、賢者たるダンタリオンが言うからには、どのみち勝負は着けられなかったということところだろう。

「あの野郎」

オルマもそれはわかっている。

「どうでもいいが、早くここを出た方がいい。魔法の効力も失せて来たところだ、焼け死んでしまうぞ」

注意を促すケファノスの言う通り、熱が肌を刺激し始める。

「そうですね。そうしましょう」

念のためにもう一度魔法をかけ、一気に出口を目指した。

炎上するダバイン城から出ると、城が崩壊を始める。

主を失った城が崩壊する様は、見るに耐えれない虚の死映。

「危なかったですね。危機一髪でした」

あのまま城内にいたら……運がよかった。

内心、ダンタリオンもホッとした。

「こんなに簡単に……………城が崩れるなんて……………」

果てる命を見るように、クダイの胸が痛んだ。

「たった数日でここまで力を得たのか。馬鹿には出来んな。屍人の力」

「屍人って下位の魔物だろ？なんだってそんなのに、こんな力があるんだ？」

ケファノスなら知ってると思い、オルマは何気に聞いてみた。

「それがわからぬのだ」

「わからないって……………あんた魔物共の総大将じゃないか！」

「屍人は物の数にも入らん存在。いちいち余が知るわけがない」

オルマは肩をすくめ、ケファノスを冷やかした。

鎮火にはまだ時間がかかりそうな壮大な篝火^{かがりひ}は、舞台を出たはずのクダイ達を追っ手に差し出すことになる。

「オルマ……………お前までいたのか……………」

数名の騎士を連れ、

「シャクス！」

オルマの前に現れた。

シャクスはダンタリオンを睨み、

「ダンタリオン、これは何の真似だ？なぜダバイン城が燃えている！」

途中、町が全焼していたのも見た。そしてもうひとつ見えた火の手に急いで来てみれば、そこにクダイ達がいた。

わずかに信じていたダンタリオンへの気持ち。それは怒りを超え絶望になっていた。

「ちょっと待ちな！もしかしてあたし達がやったなんて思っていないだろうね？」

「じゃあ他に誰がやったと言った？」

「冗談はやめておくれよ！」

そう言ってオルマは馬上のシャクスに詰め寄り、

「久々の再会だったのに罪人扱いする気かい？」

「罪人と一緒にいるのだから罪人じゃないのか？」

北極圏を越えるくらいの冷たい眼差しをオルマに向ける。

「昔から石頭だったけど、本当に最低な男に成り下がっちゃったみたいだね。だから宮廷なんかで働きたくなかったんだよ」

「個人の主観を語るつもりはない」

シャクスが手を挙げると、部下達が一齐にクダイ達を取り囲む。

「もはや逃げられんど。全員、死刑は免れん」

「ま、待って下さい！少しは僕達の話も……………」

「無用だな。魔族と手を組む輩と話気はない」

部下達が馬から降り、ロープでクダイ達を縛ろうとする。

「久しぶりに会った友人へ暴言ですか」

ようやく口を開いたダンタリオンの目。シャクスに対する怒りに満ちていた。

「暴言？俺がいつ暴言を吐いた？」

「シャクス、これをやったのは伯爵…………サン・ジェルマン伯爵です。私達がこんなことをして何の得があると思います？」

「知ったことか！」

シャクスの態度には、さすがにクダイも我慢が出来ずに突っ掛かって行く。

「知らないのに犯罪者扱いするのか！？ふざけんなよ！」

「調子に乗るなよ小僧。ジャスティスソードを持ってるくらいでは……………」

クダイがジャスティスソードを構えた。

「クダイ……………」

ダントリオンが目を疑ったのは、ただ構えただけでなく目を閉じたからだ。

「小僧……………」

馬鹿にされた気がし、シャクスが苦虫を噛んだような顔をした。

「僕達は何もしてない！ケファノスのことだって何も知らないくせに、勝手なことばっか言うなよ！」

「まさか俺とやり合う気か？」

「やるしかないならな！」

無眼の構え。聖騎士でもやってのける者はいない。目を閉じて戦うなど、所詮は常識はずれ。

だが牙を剥かれた以上はシャクスも黙ってはいられない。静かに剣を抜いた。

「いいだろう。相手になってやる」

馬から降りることはしない。

「クダイ！やめ……………」

止めようとしたダンタリオンに、

「黙って見ている」

ケファノスが言った。

張り詰めた緊張感で、シャクスの部下達も成り行きを見守っている。

「どうした！ハツタリか？」

動かないクダイを挑発してみる。

・キイイイイン・

音が鳴った。それはおそらくジャステイスソードからの合図。

見える。光の軌跡。馬上のシャクスへの一撃の軌跡だ。

「来ないならこちらから行くぞ！」

馬の前足が高々と上がった刹那、

「てりゃあっ！！」

ジャステイスソードを大きく振り上げた。

その一撃は風を起こして、シャクスの騎乗する馬を混乱させ、シャクスを振り落とした。

「ぐあっ！」

無様に転げ、尻餅をついた。

「なんと……………」

ダンタリオンも、

「無眼の構えを……………？」

オルマも驚愕した。

「シャクス様！！」

クダイ達を捕まえることをそっちのけで、部下達がシャクスに駆け寄る。

「ええいつ！下がれっ！」

すんなりと立ち上がれなかったのは、ダメージではなくダンタリオ
ンやオルマと同じ気持ちだからだ。

「信じられん……………どんな剣才を持っても極めることは不可能
と言われた無眼の構えを……………こんなひ弱な奴が……………」

馬を驚かせただけではないことくらい、シャクスにはわかっている。
外れはしたが、間違いなくシャクスを狙った一撃だった。だから怯
む。クダイが剣を使い慣れていたらと。

「行きましょう」

戦意喪失のシャクスを余所に、ダンタリオンはクダイ達と魔法でそ
の場から逃れた。

残されたシャクス達は、未だ盛る炎の前で立ち尽くすしかなかった。

第十六章 進行

「どう思います?」

質素な宿屋の一室。部屋にはダンタリオンとケファノス、クダイとオルマは町へと出ている。

前触れもなく発したのが悪かったのか、しばらくケファノスから返事が返って来なかった。

ただ、ダンタリオンも何をどう尋ねればいいのか頭を捻る。

「どう………とは?」

やっと返って来た返事は、意味を理解出来ないという返事だった。

いや、ケファノスはダンタリオンの言いたいことがわかってい
る。とぼけているのだ。

魔王ほどの者が、どんな顔でとぼけてるのか見てみたい気がする。

「クダイのことです。言わなければわかりませんか?」

「無眼の構えのことか?それともジャスティスソードのことか?」

二人の会話の成立に波紋を立てるほど、クダイのした事は大きい。

「両方です」

宿泊施設とは言え、クダイの世界のものとは違って二階建て。がや
がやと町の賑わいが騒がしい。

一行は、あれからまだダバイン国にいる。行き先、やるべき事

が見えずにいた。

「無眼の構えが偶然なのか、それともクダイ本来の天賦の才なのか、どちらだとお考えでしょう？ ケファノス（あなた）の意見を聞きたい」

町の活気がうつとうしく、ダンタリオンは窓を閉めた。

「ひとつ忘れてる」

「はて？」

「ジャステイスソードがクダイを導いた可能性もある」

「ジャステイスソードが？」

「ヨウヘイと戦った時も、あの甲高い耳障りな音が鳴った。貴様も聞いたはずだ」

どちらかと言えば、脳に直接響く感じの音。言葉では説明出来ない感覚のみの不協和音。

「あの音が鳴った時、必ずジャステイスソードが力を解放している。クダイがジャステイスソードを自分の意志でそうしてるようには思えん。だとすると、ジャステイスソードがクダイに力を与えている可能性が高いだろう」

「ジャステイスソードに意志がある………そう言いたいのですか？」

「あくまで推論だ」

クダイが戦力になるのは心強いが、ジャステイスソードに謎がある限りいつも都合よく転がってくれるとは言えない。

ただでさえ課題は多いのだ。

「で、これからどうする気だ」

「ふうむ……いろいろな問題がありますからねえ。伯爵達を追つても、戦いにならないことを痛感してしまいましたから」

「魔法が効かなかったのか」

「そういうことです。魔法は私のもっとも自信のある”武器”です。それが通用しない以上、私も戦力外でしょう。ダバイン城のことも私達のせいになってるでしょうし、何か知恵はないでしょうか？」

お手上げだ。持っている資金も多くない。ケファノスは別としてもクダイとオルマと三人の旅にかかる費用を考えれば回り道はしたくない。

「無いことも無い」

「本当ですか？」

「ここから北に行ったところに、人間が亡者の森と呼ぶ場所がある」

「ええ、知ってます。死んだ人間の魂が集まると噂される森ですね」

「そこに行け」

「そこに何があるんです？」

「余の肉体を取り戻す方法、サン・ジェルマンに魔法が効かない理由、屍人のこと、そしてジャスティスソードの謎。全てを知ってるかもしれん者がいる」

ならもつと早く言ってほしい。自分は宛てにならないとか言ってるわりに、それなりの情報を持っているではないか。

「今更そんな情報を出すというのは……」

訳あり。そういうことだろう。

「行っても会ってくれる保証はない。会っても全てに答えをくれるとは限らない」

魔王が頼るくらいなのだから、”それなり”に信頼出来る相手なはず。

「明朝、ここを発ちましょう。ダバイン全土に城の崩壊が伝わる前に」

ダバイン国王殺害の罪を着せられる確率が高い。面倒なことになるその前に、ダバインを出る必要があった。

「おっ、これなんかいいんじゃないかい？」

オルマが鉄で出来た胸当てをクダイに着けてみる。

「お、重いよ」

「情けないこと言ってんじゃないの！防具は必需品だよ」

そうかもしれないが、ダンタリオンから預かった金は、保存の効く食べ物を買う金だ。こんなものを買って怒られないだろうか。

「心配いらなくて。アイツは私には逆らわないから」

そう言って高笑いをする。

なんて女だ。と思いつながらも、クダイ自身も逆らえない。

「よし！これもらうよ」

「まいど」

武器・防具を売るには似つかわしくない男の店員に金を渡す。

「確かに」

店先まで着いて来て、丁寧にお辞儀までしてくれた。

流行ってなさそうな店だったし、貴重なお客さんだったのかもしれない。

「さてと、帰ろうか。大賢者様の夕飯が待ってるよ」

買い物を済ませた後の女の顔は満足感でいっぱいだ。

遙か彼方の目的地までも歩いて行けるんじゃないかと思ってしまふ。

「ねえ、オルマ」

「ん？なんだい？」

「こんなこと聞いていいのかわかんないけど、ダンタリオンやシャクスさんは賢者やら聖騎士になったのに、君は騎士とかにならなかったの？」

「なにさ、そんなことが気になるわけ？」

「気になるっていうか、剣の腕も凄いのになんかどうしてかなって」

答えずやり過ぎすの”手”なのだろうが、気分もいいし答えてやらないでもない。

「堅苦しいのが嫌いだって言っただろ。宮廷の厳しい規則に縛られて生きるなら、肩書も何にもいらなから自由でいたかった。それだけだよ」

「ふうん」

「納得してないのかい？」

「そうじゃないけど」

ダンタリオン、そしてシャクス。二人のオルマを見る眼差しは、どこも無く優しく、だけど淋しさも宿していた。

「あんまり女の子の秘密を暴くもんじゃないよ」

「どこに女の”子”がいるの？」

意識しないで言った皮肉に、オルマの反応のよさは見事だった。クダイの頭を抱え、拳でこめかみをぐりぐりと痛めつける。

「い、い、痛いって！」

「さりげなく皮肉を言うなんて、なかなか根性あるじゃないか」

「やめてよー！」

「いゝやゝだ！」

どこから見ても恋人には見えないし、せいぜい姉と弟。

胸当ての重量のことなど、すぐにどこかに行ってしまった。

それもそのはず、自分の世界に帰ることさえ忘れてるのだから。

幸せなのだろうかと思いに更けることもなく、不幸なのだろうかと思いに更けることもない。

気がつけば、いつの間にか前に進むことだけを望んでいた。

第十七章 亡者の森

もうそろそろ聞いてもいい頃合いかとも思う。

かばねびと

屍人の力の使い方をダバインでレクチャーされたということは、サン・ジェルマンが目的に向けて動き出したということ。

- 時間軸の融合 -

それを行えば、ありとあらゆる世界の時間が終わるといふ。

無限に存在する並行世界の時間を終わらせてしまい、サン・ジェルマンはどうしようというのか。

そのことと屍人の力を強くすることに、どんな関連性があるのか。

わからないままでいられるほど好奇心はおとなくない。

「なあ、時間軸の融合ってどうやるんだ？」

静かな草原に横たわってた身体を起こして聞いた。

「急にどうした？」

「気になってよ。俺の住む世界の他にもいろんな世界があつて、それらは混じり合うことはなく存在している……だっけ？」

「時間軸は一本の大木だ。そこから枝が生えて世界が存在する。その大木も世界も数限りなくある。それが真実だ」

「概念はわかるんだけど、あんまりピンとこねーなあ。大体、時間を終わらせたらどうなるんだ？みんな死んじゃまうのか？」

「時間が存在するから人は過ちを犯す。過去に犯した過ちを、また繰り返す。様々な世界を旅して来たが、どの世界も同じだった」

それは数多あまたの時空を超えても人間がいて、他の種族もいて、だから歴史も同じだと言っている。どの程度のキャパシティを読んでるか
は別として、”平均”としてそうなのだろう。

過ちと言うのも、根源は争いのことを指し示してるんじゃない
だろうか。

「答えになってねーよ。ちゃんと答えろって」

遠くを見つめるサン・ジェルマンは、回想している風にも見える。

「時間に終わりが来れば……………生命の輪廻が無くなり、虚無の世界
が誕生する」

「それで？そんな世界であんたは何をしようってんだ」

「……………何をするでもない。私がそこに存在していればそれでい
い」

「なんだよそれ。俺はどうなる？」

「虚無の世界では陸地も海も空も無い。輪廻が無いということは、
廻り廻るもの全てが存在しないということ」

「……………」

「心配せんでも、私とお前だけは存在出来る」

「都合いい話だな。俺達だけが存在するなんて」

「いずれ時が来ればわかる」

「やり方は？」

「まあ焦るな。なにかも聞いてしまうより、知らないものを知って行く楽しみもあった方がいい」

話してくれたことが本音だという確証はどこにも無い。

槍玉に上げられるくらいなら………という気持ちもあるが、まだ胸の中にしまっておいてもいい。

サン・ジェルマンの真意よりも、今この時を求めている。いずれわかなと言っのなら………。

亡者の森と言うだけあって、暗く不気味極まりない。

じめじめしていて、霧^{もや}が靈魂のように漂っている。ひよっとしたら本物かもしれない。こんな場所にどんな奴が住んでいるのだろうか、ケファノスに聞いてはみたが、

「会えばわかる。会ってくればの話だが」

だそうだ。

「なあ、少し休もうよ」

近いとか言われて歩いた時間は、

「五日も歩いてるんだぞ！休ませろ！休ませろ！」

保存食なんか買うから怪しいとは思った。

ブウブウとうるさいクダイに、いつもなら負けてしまう大人達だが、

「その元気があるのなら大丈夫ですよ」

森には入っているのだ、このまま進んだ方がいい。

「ダンタリオン、あんたのしつけが悪いんじゃないの？」

オルマでさえこの言いよう。

「文句が多いのは幼い証拠。まだ成長の余地があるということだ」

ケファノスにまで。

「なんだよみんなして！僕はもう大人だ！子供扱いするな！」

どんなに抵抗してもあしらわれてしまうのが運命。^{さだめ}

「無視するな！こら！待て！」

クダイを置いて先を急ぐ。

「大体、僕は被害者だぞ！巻き込むだけ巻き込んでおいてなんて扱
いだ！ちゃんと相手してくれないなら……………」

ブウたれ小僧は何かにぶつかった。

「イテ……………」

それはダンタリオンの背中。

白いマントがゆらりと揺れていた。

「急に止まるなっ！」

止まったのはケファノスが止まったから。文句ならケファノスに言
うべきだろう。

「ここだ」

ケファノスが呟いた。

そこには茨で出来たトンネルがある。幅は人が一人通れる程度。
高さは二メートル弱。

「なんか辛気臭いわねえ」

すたすたと歩いてオルマは茨に触れようとした時、

「離れろ！」

ケファノスに怒鳴られ即座に飛びのいたが、茨が伸びて腕に絡み付いた。

「オルマ!!」

ダンタリオンは剣を抜いて茨を斬りつける。

が、別の茨がダンタリオンの剣にも絡み付く。

「くそっ……………！」

右に左に振ってはみるが、強い力で離れてはくれない。

『ここは人間の来る場所ではない。早々に立ち去れ』

どこからか女性の声が轟くと、ダンタリオンとオルマを茨が放る。

「誰かいるの…………？」

クダイがキヨロキヨロ辺りを見るが、誰もいない。

『立ち去らぬなら、命の保証は出来ない』

土の中からも無数に茨が突出してクダイ達を囲む。

「まあ待てドミニオンよ」

『その声は…………ケファノス？魔王ケファノスか？』

「お前に話がある。ここを通ることを許可してほしい」

『私に？』

「急を用するのだ」

『……………その人間達は？』

「訳あって一緒に旅をしている」

『仲間ということか』

「……………」

答えない意味まではわからないが、ケファノスはケファノスでドミニオンに敬意を表しているようだ。

『残念だが帰ってくれ。私は人間が嫌いだ。例えば魔王の仲間と言えどだ』

よっぽどの人間嫌いらしい。ケファノスの声を聞いた時は喜びすら感じたのに、それでも人間が一緒なら会う気はないと言う。

「サン・ジェルマンを知ってるな」

『サン・ジェルマン……………かつて私達の前に立ちはだかった時空の騎士。それがどうした』

「奴がおかしな行動をとっている。なんでも時間軸を融合して時間に終わりをもたらすつもりらしい」

ケファノスも必死になるところを見ると、他に道は無いとみえる。

思ってるよりも深刻なのだろうか。クダイはトンネルの前に立ち、

「ケファノス、ジャステイスソードを貸してくれ」

「何をする気だ」

「いいから」

決意したような表情。考えがあるようだ。

言われるままジャステイスソードを出し、クダイが手に取る。

「ドミニオン、話を聞いてもらえないならこっちにも考えがある」

『人間の浅知恵で何を考える』

クダイは目を閉じた。

「何をする気なんだい……クダイは？」

「まさかとは思いますが……」

ダンタリオンの予感当たった。

無眼の構えを取り、光の軌跡を探す。

- キイイイイ -

音が鳴り、ジャステイスソードがまばゆく光る。

「トンネルの奥まで飛んでけっ!!」

飛ばしたのは光。ジャスティスソードから放たれブレることなく一直線に。

侵入を防ごうとする茨をいとも簡単に消し去って、狙い通りトンネルの奥まで飛んで行った。

そして間もなく、

ドゴオオオン！！！！

奥から轟音が響いた。

「クダイ……………」

さすがにケファノスも、クダイが力技に出ると思わなかった。

「話を聞く気になったか！ドミニオン！」

成功に気をよくしたクダイだったが、

ゴッソッ！

「痛っ！！！」

「バカかいあんたは！」

オルマにげんこつを喰らった。

「これから話し合いをする相手に、力押しはないでしょ！」

「だって……………」

「だってもしかかしも無い！どんな思考回路してんのよ！」

怒られるとは思わなかった。むしろ褒めてもらえると。

気になるのはドミニオンの反応。敵視されていたのに、あまりいい印象は与えなかった。

「やれやれですね。ジャスティスソードを使えるようになるのは心強いのですが」

「……………精神的鍛練も必要だな。手のかかる」

ダンタリオンとケファノスも諦めかけた時だった。

『ジャスティスソード……………伝説の剣ジャスティスソードを持っているのか？』

「そうだ。このクダイという男、なぜかジャスティスソードの災いを受けない。代償を払わなければならないジャスティスソードの力を使い、そして無眼の構えまでもやってのける」

『なんと……………』

ケファノスの説明に迷っているらしかった。

間があって、

『通るがいい』

意外な言葉に驚く一同は、道を開いた茨のトンネルへと足を踏み入れる。

『世界が誕生した時から既に存在していたジャスティスソード。過去に願いを託し戦った者達は、勝利・敗北に関わらずその代償を払って来た。ある者は失明し、ある者は四肢を。そしてまたある者は命を。それが常だと思っていたが……………』

ケファノスが先頭に、暗い道を奥へ奥へと進む。

『例外が存在したとは……………』

どこからかクダイを見てるのが、視線を感じる。

『この世にはどんな生命も抗うことの出来ない掟がある』

闇の向こう側から光が洩れる。

『ジャスティスソードの代償効果もそのひとつ。それすらものともしない少年よ……………』

いる。光の向こう側にドミニオンが。大きな存在を感じる。

『来るがいい。私は亡者のさ迷う森の主ドミニオン。全ての問いに答える者』

クダイ達は茨のトンネルを抜けた。

第十八章 ドミニオン

茨のトンネルを抜けると、そこはまた森の中だった。ただ、不気味さはなく、普通と言いか森らしい森だ。

ちよつと違つのは、白い綿毛が下から上へとふわふわ揺れながら昇る。別の世界にでも来たのかと思つてしまう。

「久しいな。ドミニオン」

ケファノスが改めて挨拶を交わした相手。それは巨大な花だった。

「随分と容姿が変わつたな。ケファノス」

ケファノスの小さ過ぎる身体に驚くこともなく言つた。

「そのことも含め話がある」

「その前に、ジャステイスソードの災いを受けぬ少年よ、前へ」

ドミニオンに呼ばれ、心臓が縮む錯覚に陥る。

ダンタリオンに背中を押され、ジャステイスソードを握つたまま恐る恐るドミニオンの前に出た。

「名は？」

「ク、クダイ、桐山クダイ」

「クダイ………」

いい名前だ……なんてことは言わないことくらいわかっている。ただ、世間並みの話をしてくれないと緊張が解れない。

見た目を差し引いても威圧される。ドミニオンが”単なる”花だったとしても。

「そやつはこの世界の人間ではない」

プロフィールがなければクダイのことなどわかるわけもなく、ケファノスが見兼ねて口を出す。

「ジャステイスソードは心の中の悪を見逃さない。己の力を使う者の選定はしないが、心の悪を見定める。結果、心に悪を持たない者などいないのだから代償は払わなければなくなる。だがこのクダイには……」

クダイの心の中を探るケファノス。出会ってから気付かないうちに何度もそうされてるのかもしれない。

「悪を持たない生き物など存在しない。私も。ケファノス、お前も人間なら尚のこと。なぜなら、悪は生の排泄物だからだ。言い方を変えれば、宇宙が誕生し時間が生まれた。生命体ではない者の生が生み出したのが人間だ」

「ちょっと待ちな。じゃあなにかい？あかし達は宇宙の排泄物だとしても言いたいのかい？」

語るドミニオン。人間としての尊厳を否定されたくないオルマ。クダイに説教したばかりだが、こればかりは話が別。

ほっといたら、あのでかい花びらを引っこ抜きかねない。ダンタリオンが割って入る。

「申し訳ありません。突然の話で何が何やら……………」

「謝る必要なんてないよ！人を排泄物呼ばわりしたんだ！」

「ですがオルマ、それが真実です」

「あんた今の話、真に受ける気かい？」

「私達はここに進むべき道を聞きに来たのです。真実を知らなければ先には進めない。そういう相手と戦って行くんです。大人になりましょう」

言いくるめられたとは思ってない。ダンタリオンは頭がいいからわずかな言葉でその真意を察してしまう。そうなると言い合ったところで勝てないのがわかってる。

「失礼をお許し下さい」

ダンタリオンはドミニオンの前にひざまずく。

礼を尽くす。ケファノスがドミニオンのことを言わないで旅をしようとしたのは、人間が世の真実を知るには幼いと判断したからだろう。

傷つけたくなかったのだ。多分。

絶望すらするかもしれない真実がここにはある。

理由は他にもあるだろう。でもそれが一番の理由であることくらいダンタリオンにはわかる。

ケファノスの気持ちに感謝を示したのだ。

「ひざまずく必要はない人間よ。私は真実を語るだけ。場合によつ

てはお前達の生きる意味すら奪ってしまいかもしれないのだから」

ダンタリオンは立ち上がり、

「受け止めましょう。どんな真実も」

そしてケファノスに後を任せる。

「ドミニオンよ、いくつか聞きたい。まず、余の身体はジャスティスソードによつて、このような小さい人形に魂を封じられてしまった。肉体を取り戻す方法が知りたい」

肉体さえあればなんとかなる。サン・ジェルマンと”同等”に戦えるはずだ。

「……………ジャスティスソードにどんな能力があるのかわからない。それだけに確実な方法を教えてやることは出来ない。だが、肉体が朽ちたのでないのなら、おそらくは時空にでも飛ばされたのだろう。だとすれば呼び戻すアイテムはある」

「それは？」

魔王が知らないアイテムが実在する。クダイ達には意外だった。

「不死鳥の羽根。不死鳥は時空を渡り歩くと言う。それゆえ、不死鳥の羽根には時空の歪みから魂さえ呼び戻す力があると言われている。それなら可能かもしれない」

「……………」

なぜかケファノスが喜んでないような気がした。そのわけは、

「ドミニオン、不死鳥は伝説の鳥。同じ伝説でもジャスティスソードとは違い、その姿を見た者は誰もいない」

「かつて不死鳥がいたという塔があるではないか」

「輪廻の塔」

「そう。そこに行けば手掛かりくらいはあるかもしれない」

ケファノスは黙っていたが、行く価値はある。会話の内容から、輪廻の塔とやらにケファノスは行ったことがないらしい。伝説を知りながら。同じ理由でダンタリオンもだ。

オルマは……まあ行動範囲が広い生活をしていたとは思えない。知識はあっても行ったことはないだろう。

「なら次だ。サン・ジェルマンに魔法が効かないのはなぜだ」

最初の質問の答えには納得したらしい。

「サン・ジェルマンは時の秘法で時間を身に纏っているのだろう」

クダイは頭が痛くなって来た。

時間って身に纏えるものなのか？と。抽象的な話は苦手だ。もっとも、得意な話が無いのだから気を使うまでも無い。

「時間を身に纏う……とは？」

便利なことに、ちゃんと興味を示し理解しようとしてくれる者がパ

ーティーにいたのだ。

新たな知識を得るのも賢者の仕事なのかも。

「時間というのは生き物が感覚でしか感じられない物質。実体も無く、それを証明しているのはあくまでも概念とその説明。そういうものであると認識するしかない。だがサン・ジェルマンは時間や他の世界を行き来する術を持つ。それは時間がなんであるかを知っているから。知っているからこそ、様々な使い方をやって見せる。魔法が効かないのは、彼の周りの時間が凍結しているからだ。だから魔法のように”時間を必要とする事象”を無にってしまう」

クダイは、チラツとダンタリオンを見たが、ダンタリオンも全てを理解はしていないようだ。

「そんなことを言ったら、時間を必要とする事象など、この世の全てがそうではありませんか」

「そうだ。しかし、そうでないものも存在する」

「有り得ない。時間の中で生きる以上、時間を必要と”しない”事象があるなんて……………」

「心だ」

「心……………?」

「心は時間に左右されるものではない。例えば一年前の怒りを、今も抱くことが出来る。遙か未来への希望を、今抱くことも出来る。個人が死んでも、時を超えて心は受け継がれて行く。時間がその存在を無にされてしまうのが心だ」

「しかし心だけでは戦えない」

食い下がるように言った。ちゃんとした物理的な手段が欲しい。

「戦いは常に心だ。心が折れては戦えまい。それがなんであるかは人間、お前が見つけ出せ」

どんなに強力な炎の魔法を使っても、永遠に燃え盛ることはない。
どんなに強力な氷の魔法を使っても、永遠に溶けずにいることはない。

時間が存在するとはそういうことなのだ。

そして、その常識を覆すようにサン・ジェルマンの周りは時間が凍っていると言う。それはこの世で起こる些細な現象さえ許さないということ。そんな中でもサン・ジェルマンが存在しているられるのは、心を持っているからだ。

時の秘法でも手に入れない限り、ダンタリオンには完全に理解することは出来そうにもなかった。

「まだ聞きたいことはあるか？」

「ある。実は、サン・ジェルマンは、クダイの友人に屍人を使って魔術のような力を与えている。屍人は単なる魔物だとばかり思っていた。それに、そのクダイの友人を”器”と呼んでいた。奴は時間軸を融合するのに利用するようだが」

「残念だが、屍人がなんであるか私にはわからない。サン・ジェルマン自体が得体の知れない男だ。時間を操る術をどこから得たのかもわからない。奴はこの世界の者でないことは確かだが、奴に関わるものについては答えようがない」

ここまで十分に答えてくれた。

サン・ジェルマンに魔法が効かない理由、ケファノスの肉体を取り戻す方法、難易度はスペシャルクラスのようなだが、道が見えただけでもありがたい。

「そうか。世話をかけた」

ケファノスが言うと、

「この礼はいつか何らかの形で」

ダンタリオンも最後に頭を下げた。

なんだかよくわからないが、自分もそうしなければならない気がして、クダイも一応、深々と。

「礼はいらない。私はただ静かに暮らしたいだけ。そっとしておいてくれればそれでいい」

話が終わったのなら、早々に立ち去るが礼儀なのだろう、ケファノスが一人元来た道を戻る。

「サン・ジェルマンは時を操る者。そのカラクリを暴かぬ限り、誰も勝利することはない」

ドミニオンは世界の終わりを覚悟した。

第十九章 廻り出した齒車

行き先はわかった。だからクダイは敢えて言ったのだ。

「今回は何日かかるんだ？その輪廻の塔ってどこまで」

車も無い世界。期待した移動魔法も無いのなら、やっぱり歩くしかないのだろう。

旅にも慣れて来た。いい加減こっちから聞いてやってもいい。

ダンタリオンもオルマもセリフを奪われた顔している。

満足。

少しは頼りにしてもらいたいものだ。

「さあ、どうなんだ？」

クダイの満々の笑顔。それを見て、

「輪廻の塔まで約三十日はかかる」

「いつ！？」

ケファノスに悪気はない。簡単に辿り着けると勘違いしたクダイに丁寧を教えてやっただけ。

「輪廻の塔へは海を越えて行かねばなりません。少し長旅にはなりますが、気楽に行きましょう」

なんだこの爽やかな笑顔は。

緑色の髪を靡かせ、ダンタリオンは“余裕”を見せる。

「とりあえずは港に行かないとね」

オルマも。

だから大人は嫌いなんだ。と言わんばかりに、クダイはふて腐れた。

「では行きましょうか。魔王の肉体を取り戻す旅に」

ダンタリオンはそう言うが、不死鳥の存在が確認されていないのに、不死鳥の羽根などあるかなんて定かじゃない。

それでも行くしかないのだろう。ヨウヘイとサン・ジェルマンの企みを止める為に。

屍人の力は次第に強くなっている。そして、制御もある程度は思いのままに。

「ひ、ひい……た、助けてくれ……！」

いちいち数など数えてないが、ダバインの時から比べればあまりに殺し過ぎた。

弱くて話にならないのだ。

こうして怯える人間の顔が、今は快樂へとなっている。

「悪いとは思ってたんだ。でもな、しょうがないんだよ」

ヨウヘイはダークエナジーを集める。闇の中でもわかる闇。漲るままに放出させて消し去る。

「うわああああ!!」

どこの誰かなんて知らない。力の制御を完全なものにするには、ただひたすら殺戮あるのみ。

「ほんと、悪いと思ってたんだ」

ダバインの時は町一つと城。

だが今度は国一つを業火の海へ沈めていた。

「そうは見えんがな」

「サン・ジェルマン……」

自分に力を与え導いた男は、過剰なまで強くなるヨウヘイに満足しているように見える。

「殺戮を褒めるなんて、あんたしかしないだろうぜ」

「殺戮と呼べば聞こえは悪い。我々がやってることは儀式のようなもの」

「儀式ねえ……」

「純粋な力が欲しいのだよ。光であれ闇であれ。何の意図も無い純粋過ぎる力が」

「屍人の力は不純だったのか？」

「屍人をフィルタリングするとダークエナジーが生まれる。だが、まだ完璧なフィルタリングがされてない。だから力を使い慣れてもらうのだ。制御しようなどと考えなくともよい」

「もし俺が暴走したらどうすんだ」

「私がいる限り、そんなことは気にせんでいい」

あくまでも、ヨウヘイはサン・ジェルマンの手の平にいて、そう言いたいのだ。

「そっか。なら俺は安心して使わせてもらっ」

「そうするといい」

「それより、いつまでこんなこと続けるんだ？行くとこ行くとこで同じことばっかじゃ飽きちまうぜ」

「くくく。それもそうだな。人間、刺激は必要だ」

サン・ジェルマンは杖で遠くを示すと、

「輪廻の塔へ行く」

「なんだそりゃ？」

「不死鳥の舞い降りる塔。そこで全ての輪廻を断ち切る」

「不死鳥を殺すのか？」

「時間軸を融合させるには、輪廻の波動を止めなくてはならん」

「なあ、頼むからわかりやすく言ってくれよ。毎回知恵熱が出るぜ」

殺すのかと聞いているのだから、せめてYES、NOで答えてほしい。

「不死鳥は伝説の鳥。数多の時間と世界を旅したが、出会ったことは一度もない」

「じゃあどうすんだ」

「輪廻の塔にはその名の通り“輪廻”が存在する。そこから数多の時間と世界に波動が注がれ繰り返されるのだ……運命が」

「……………なんでそんなに繰り返されるのが嫌なんだ？……………運命が。あんたは時を操る。その気になればなんでも出来るじゃないか。世界征服とか」

「人間は愚かだ。愚か故に夢を見る。そんな種の世界を征服しても結局何も変わらん。裸の王様にはなりたくないのだよ」

サン・ジェルマンの考えることを探るだけ無駄なようだ。

「まあ着いて来い。知りたいことは直にわかる」

正しい道とか悪の道だなんてこだわるつもりはヨウヘイにはない。

ましてや、人間が愚かだろうと関係ない。

歩く道は一人。吊橋のような不安定な道であっても一人でいい
目指す場所に立つ時、望みの景色だけあればいい。

第二十章 執念のシャクス

一行は、一度は出たダバインへ戻り、港のある町へ向かった。包囲網が敷かれているのを覚悟で行く行為。逃亡する犯罪者の心理がよくわかる。

なぜなら、大人の余裕を見せてた三人が緊張しているからだ。

「どうやらまだ大丈夫なようですね」

町へ入り、すぐにダンタリオンが言った。

「油断はしない方がいいよ。シャクスが何もしてないはずがないからね」

一応、オルマが念を押した。

シャクスを知ってるからこそ、包囲網が無いのが不気味に感じられる。

「早いところ大陸を渡る手続きをした方がいい。大陸さえ渡ってしまえば時間を稼げる」

なんのかんの言って、リーダーはケファノスなのだろうか。いつも何かしら指示する。

時間を稼げると言うのは、騎士や賢者、その他国に属する者は安易に大陸を渡れないらしい。もっとも、身分を偽ってしまえば問題は無いそうなのだが、バレたらその場で殺されても文句は言えないらしい。

秘密活動を防ぐ為なのだから、罰が重くてもしかたないのだろうが。

「では手続きをして来ます。みなさんはここで待っていて下さい」

雑務がいつの間にかダンタリオンの役割になっている。本人からの苦情が来ない以上、代わることは多分無い。

そんな気もさらさら無いダンタリオンは、さっさと建物に入り手続きを踏む。

「少し働かないといけませんかねえ」

所持してる金では大陸を渡っても旅をして行くのは難しい。

頼れる国もあるにはあるが、力を貸してくれるかはわからない。最悪な事態も頭に入れて置かなければ。

「はい、『三人』分」

発券機などもちろん無いので、発券してくれたのは無愛想なおばさん。

大柄で横柄なこの女性も、昔は麗しい少女だったのかもしれない。そう思うとむかつくこともなく、笑顔を振る舞えた。

「ありがとうございます」

券を受け取り、腰に提げた巾着に二つに折って忍ばせた。

出航はすぐだ。何事もなく大陸を渡れる。安心したその時、外が騒がしくなった。

バタバタと逃げる人が見え、ダンタリオンは慌てて外に出た。

「シャクスー!!」

いたのはシャクス。部下を何人も従えクダイ達を囲んでいた。

「宮廷に使える者が身分を偽って大陸を渡れば死刑だ。知らんとは言わせんぞ」

シャクスはダンタリオンを睨み付けた。

「反逆罪を負わされている以上、どのみち死刑にされてしまうのなら、たいした問題ではないですよ」

「ダバイン城まで滅ぼしたんだ。覚悟は出来てるんだろうな」

シャクスは剣を抜いた。

逃がす気はない。大陸を渡られたら面倒になる。どうしてもケリをつけなければならない。

「わからない人ですねえ。あれは伯爵がしたこと。私達は一切関係ありません」

「言い訳は聞かん」

シャクスが言うと部下達も剣を手取る。

「オルマ、クダイを連れて船に急いで下さい」

そう言つて巾着を渡す。

「な、あんたはどうすんのさー」

「ギリギリまで食い止めます。出航まで時間が無いんです」

ダンタリオンも剣を抜く。

「魔法でやつつけらんないの？」

素朴な疑問をクダイが投げると、

「こんな場所で魔法を使えば一般人を巻き込んでしまいます。あなたとケファノスはオルマに着いて行って下さい」

ダンタリオンはシャクスの前に立ち、

「行きなさい！！」

叫んでクダイ達を船に走らせる。

「させるか！！」

部下達がクダイを追おうとすると、素早い動きでダンタリオンが阻止する。

華麗な脚技を披露してあっという間に倒してしまう。

「あなたが来なさい……シャクス」

出ようとする部下を抑え、

「お前らはケファノス達を追え。ダンタリオンは俺が相手する」

剣ではシャクスには敵わない。果たしてどこまで食い止められるか。賭けだ。

「魔法を使わないと宣言してくれて助かる。魔法を使われたらさすがに俺も危ないからな」

「皮肉は結構ですよ。それを狙って待ち伏せしてたんでしょうからね」

「知った仲つてのは、面倒なもんだ」

剣を握り直し、ダンタリオンへ向かって行っ

た。「鎧なんて着てるくせになんであんなに足が速いんだ!？」

「余計なことを考える前にもっと速く走れ」

クダイの愚痴や素朴な疑問にも慣れた。

ケファノスはクダイに合わせて飛んでいるのだ。文句を言われる筋合いはない。

「あの船だよ!」

オルマが出航準備してる一隻を見つけた。

「船に乗ったって追い掛けてくるんじゃないのか!」

クダイがそう言うと、オルマは立ち止まり後ろを向く。

「オルマ?」

「先に行つてて」

何をしようとしてるかは明らか。追ってくるシャクスの部下を相手しようとしてるのだ。

剣を構えたのが証拠だ。

「僕も手伝うよ!」

「行けって言つてんだろ!」

思わずビクツとしてしまうくらいの迫力でクダイを押し返した。

「一度は聖騎士を目指した身。こんな奴ら敵じゃないよ」

仕方なくクダイは券を三枚船員に渡し、

「後から緑色の髪の男と美人が来るから!」

そう言つて乗り込んだ。

「大丈夫かな……」

甲板まで上がると、二人が戦う姿が見える。

やっぱり自分も行くべきなのではと思う。

「ケファノス、ジャステイスソードを」

「ダメだ」

「何でだよ！」

「また無眼の構えを使うのだろう？」

「当たり前じゃないか！まともにやり合ったら勝てないし！」

「たわけが」

「何いつ！？」

「ダンタリオンが魔法を使わない理由を聞いたはずだ。無眼の構えを使えば同様の威力を発揮する。力の制御も出来ないお前が出る幕ではない」

だからオルマは戦わせなかったのだ。そう言われてしまえば何も言えない。

「この際だ、はっきり言っておく。お前には訓練が必要だ。無眼の構えを使わなくても戦える腕と、無眼の構えを使っても必要なだけの力で戦える技量。いやがおうでも身につける。仲間を死なせたくないならな」

「……………っ」

悔しかった。周りが驚くような才能を開花させながら、肝心な時に役に立てないこと。

齒を食いしばって二人を待つしかないのだ。
やがて船員が出航の合図を出す。

「待つてよ！まだ乗って無い人が……」

「悪いね、坊や。時間なんだ」

碇が上がり始める。

「オルマ……ッ!!」

クダイに言われるまでもなく、既に走っている。

オルマは視界にある片付けられようとしていた梯子を身軽に駆け上がり、なんとか甲板に乗れた。

「なんとか間に合ったね」

息を吐いて安堵もつかの間、すぐにダンタリオンを気にかける。
船が動き出すが、この距離なら魔法で瞬間移動出来るはず。

「ダンタリオンッ!!」

クダイの声に反応は見せたが………

「かはっ……」

聖騎士は剣の腕だけではなく、闘気も使う。魔法みたいなものだが、規模は非常に狭い。

闘気を腹に喰らったダンタリオンは、膝を落としそうになりながらも抵抗している。

「仲間が呼んでるぞ」

「シャクス……どうしてもわかってもらえませんか？」

「何をわかれと言っんだ」

「こうしてる間にも伯爵達は野望を叶える道を一步步ずつ進んでるんです」

「……………」

イタチごっこを続ける時間はない。ダンタリオンは船へと瞬間移動する為の魔法を使う。

「逃がすかつ！」

シャクスは港を離れ行く船を追い掛け、棧橋の端からジャンプして船体に剣を刺すと、それを足場に利用して甲板まで飛び上がる。

「あなたもしつこいですねえ」

ダンタリオンはふらつく身体をオルマに支えられる。

「任務なんだよ。聖騎士としてのな」

シャクスは腰からナイフを取る。

「いい加減にしたらどうなんだい！私達は何もしてないって言うてるじゃないか！」

「黙れオルマ。それは俺が決めることじゃない」

「手の施しようがないね」

「余計なお世話だ！」

手にしたナイフを投げる。

狙ったのはダンタリオン。子供のクダイと女のオルマは力で撥伏せられる。体力の落ちたダンタリオンは今しか倒せない。

そして甲板に血が飛び散る。

「オ……オルマ……」

ダンタリオンを庇い、ナイフはオルマの左肩に刺さっていた。

「くっ……」

刺さったナイフを抜くと、余計に出血する。

「シャクス……あなたと言う人は……」

温厚なダンタリオンの怒りにも火が点いた。

それはシャクスにだけでなく、オルマを守れなかった自分に対しても。

「聖騎士の称号に縛られて自分を見失うのなら、そんなものに何の価値があると言うのだ」

見兼ねたケファノスがシャクスに問う。

「俺に説教を垂れる気か？」

「あまりに哀れでな」

「なんだとっ！」

「任務に忠実なのは結構だが、真実を見極める力が無いといずれ後悔するぞ」

「脅しか？フン、片腹痛いわ」

剣が無くとも戦える。それなりに訓練はして来たのだ。

そんなシャクスの自信に、

「まだやるって言うなら、僕が相手だ」

クダイが噛み付いた。

「小僧………死にたいのか？」

「ダンタリオンもオルマも僕の大切な仲間だ。傷つけられるのを黙って見てるわけにはいかない！」

その背中。ダンタリオンとオルマにはたくましい男を見た。

クダイがオルマの血で濡れたナイフを拾う。

ジャステイスソードのことなど忘れるくらい本気なのだ。

倒そうと思えば倒せたはずだ。そして船を引き返させることも。そのくらいの権限はある。

でもそうしなかったのは、シャクスの中で迷いがあつたからではないだろうか。

クダイの瞳に強い意志を感じた。剣も満足に扱えない少年に負けたのだ。

「……………いいだろう。付き合ってやる」

「へ？」

「貴様らに付き合ってやると言ったのだ」

「それって……………」

「伯爵が世界を脅かすのが事実かどうか見定める。もし貴様らの言っていることが嘘だったら、その時は容赦なく斬り捨てる」

面食らったクダイを無視して、

「いいな？」

ダンタリオンに言った。

「フツ……いいですよ。あなたの目で確かめて下さい」

拒む理由はなかった。

聖騎士シヤクス。しばらくは味方でいてくれそうだ。

第二十一章 暗雲の大陸へ

自分のしてることが本当に正しいかなんて、所詮は事が済んでしまわないとわからない。

いつもそう思うから自分の判断を疑わないようにして来た。しかし今、その自分の判断に疑いを抱いてしまっている。

「頭冷えた？」

水平線を一人眺めるシャクスにオルマは声をかけた。

「俺はいつも冷静だ」

無意識にオルマの肩に視線がいつてしまう。

ダンタリオンを狙ったとは言え、シャクスのナイフはダンタリオンを庇ったオルマの肩に刺さったのだ。後ろめたくはある。

「ダンタリオンはどうした？」

「あら？あんなに目の敵にしてくせに気になるのかい？」

視界の隅に映るオルマの笑顔が悪戯過ぎて、

「フン、誰が」

生意気に言ってやった。

「でもダンタリオンはアンタを気にかけてたよ。自分は病魔に蝕まれているのに」

「病魔だと？一体何の病気……」

まんまとオルマに乘せられたと気付く。シャクスの頬が思わず引き攣ったのは、隣の勝ち気でガサツな女が笑ったからだ。

「アハハハ。なんだかんだ言ってやっぱり親友なんだねえ。冗談だよ、今は疲れて寝てるけど」

「オルマ！」

「そう怒らない。あたしの肩、傷つけたんだからおあいこだろ？」

穏やかな海が陽射しを反射させ、キラキラと眩しくオルマを照らした。

「チッ」

舌打ちをして目を逸らした。

昔を思い出してしまふ。ダンタリオンとケンカをすると、この勝ち気でガサツな女は、きめ細やかな神経の使い方を見せる。

こうやって間に入って仲を取り持とうとするのだ。

「こうして大陸を渡るなんて何年ぶりだろうね。アンタ達が宮廷に仕えてからは町から出ることにすらなかったからね」

過去、思い出とは言えないような過去がある。それはシャクスにもダンタリオンにもわからない、オルマだけの心。

「あれからずっと一人なのか？」

もう七年近くになる。シャクスは聖騎士の道を歩み、オルマは宮廷に仕えることを拒んで普通の女へと変わった。

その気なら、同じ聖騎士の道を歩めたかもしれない。
そんな彼女だからこそ気になる。

「まあね。ほら、あたしって男に尽くすタイプじゃないからさ、だ
れも寄って来なくて」

きっと、オルマは男を作って身を守るほど器用ではない。

「そういうアンタはどうなの？シャクス」

「同じだ」

「ダンタリオンもでしょ？ダメねえ。聖騎士と賢者なんて地位にい
る男二人が情けないわよ？」

答えることもなく、聞き流した。

そういう話は得意じゃない。まあ、話をふったのはシャクスな
のだが。

ついさっきまで追い、追われた者の雰囲気はなく、それを喜ぶ
かのように海鳥の群れが合唱している。

こんなことですら戦う者達には十分な休息になる。

「時間を終わらせる……そんなこと本当に出来るのかな」

不意にオルマから現実呼び戻された。

幸せを感じることにたまに恐怖感を覚える。

理由はある。二十七年生きて来て、一番輝いていた季節は三人

でいた時。思い出に縋るような生き方は好きではないが、女一人で生きてるのだから無理もない。

時間を終わらされ、思い出まで奪われるのは御免だ。

「伯爵は噂では別の世界から来た者だと言われている。俺達の常識なんかでは計り知れない何かを知ってたとしても不思議じゃない」

「……………」

「なんだ？」

オルマにじっと見つめられ落ち着かない。

「そういう言葉が出て来るってことは、やっぱりサン・ジェルマンに不信を抱いてるってことね？」

「少なくともそう思ってるのは“俺達”だけだ。国はそう思っていない」

自分がいなくなれば、エルガムから追っ手が来るのは時間の問題だ。それまでに真偽を確かめなければ彼女達を守ってやることは出来ない。

「でも真実はひとつ。誰にもそれは変えられないわ」

船が大陸へ着けば、そこでも戦いは待ってるのかもしれない。

「そういえば、大陸を渡ってどこに行くつもりなんだ？」

「輪廻の塔よ。ケファノスの肉体を取り戻す為に」

「魔王の為とは……………」

「そうでもなければサン・ジェルマンと戦えないの。魔法は効かないし奇妙な技は使うし。クダイの友人も侮れないしね。戦える者が欲しいのよ」

町の敵討ちを成すには、ケファノスの力は不可欠。それに、魔王と恐れられていたにしては、随分話のわかる男だと印象している。

「少し疲れたわ。大陸に着くまで時間もあるし、休ませてもらうわ。アンタもゆっくり身体を休めなさい。シャクス」

ふわあと無防備に欠伸を見せて、客室へと足を進めた。

「相変わらずだな」

オルマの無邪気な一面。嫌いじゃなかった。

視線を海に向け思いに浸っていると、

「あの……………」

若い船員が、明らかに何かを言いたげに立っていた。

「なんだ」

言い掛かりをつけられる筋合いはない。

「乗船券を拝見したいのですが……………」

鎧を見ればシャクスの身分は一目瞭然。安易に話し掛けたくないのが本音だ。とは言え、無銭乗船を見逃していい理由にはならない。

「乗船券……………」

さすがにシャクスもまずいと思ったのか、慌てて金を数えるがおそらくは足りない。

船員の顔を見た後、

「急な任務で持ち合わせが無いんだ。だから一筆書いてサインをする。それを持ってエルガムの王室に請求するといい」

これなら建前はつく。偉ぶるのには気が引けたが、そこは我慢してもらおう。

船員は面倒臭そうな顔をしたが、

「聖騎士様がそうおっしゃるのなら。では後ほど用紙をお持ちします」

一応は納得したようだ。

「頼む」

頭を下げるべきはシャクスなのだろうが、船員が深々とそうした。

「恥をかかずに済んだか」

威厳があるからこそその聖騎士。

安心したシャクスはまた海を眺める。

遠くの空がやけに赤黒く染まっていることに気付く。

そこは自分達が向かう場所だった。

第二十二章 予感

大陸を渡るまで二日かかった。
ようやく港に降り目にしたものは、

「なんかあったのかな？ いっぱい騎士がいるけど」

赤黒い空と大勢の鎧を纏った騎士やら魔導師やら。

少なくとも祭りでないことくらいは、クダイにもわかる。

「クダイ、彼らは騎士ではありません」

「え？ 違うの？」

「彼らは傭兵です。つまりお金をもらって戦う者達です」

ダンタリオンの言う通り、確かに騎士にしてはガラが悪すぎる。

「何かあったのは決定的だね」

「サン・ジェルマンか」

オルマもケファノスも予想はついた。

「とりあえず宿を取りましょう。でないと……………」

言いかけ、ダンタリオンのオルマに倒れ込む。

「ちょ……………ダンタリオン！」

「すみません……まだ体調が……」

咄嗟にオルマがダンタリオンの額に手を当てる。

「すごい熱……」

顔色が悪い。船にいた時より悪化している。

「疲労だな。ここまで来るのにいろいろと気を使っただろうからな」

「あなたに言われると光栄ですよ」

ケファノスの言葉は、幾分か救いにはなった。役に立っていたのだと。

「掴まれ」

それを見て、シャクスがダンタリオンの肩を貸した。

「シャクス……ありがとうございます」

「……………」

何も答えなかったが、それが余計に彼らしく嬉しかった。

「じゃあ僕が先に行って宿を探すよ!」

率先してクダイが宿を探しに行く。

「少しは成長したみたいだな」

頼りなかった背中が、ちよつとただだが男の背中に見えた。

ケファノスは心から感心していた。

「ああ見えて男の子なんだねえ。シャクスとダンタリオンだって、昔は頼りなかったもんさ。スライムの群れに出会ったくらいであたふたしてたっけ」

「古い話ですよ」

「フン」

ダンタリオンは苦笑いを、シャクスは鼻を鳴らすに留まった。

「おゝい！宿屋“らしき”ものがあつたぞー！！」

大声で手招きをするクダイに、

「……ま、まだただけどね」

オルマが毒づき一同は宿を目指した。

その夜、クダイとケファノス、そしてシャクスはダンタリオンと看病するオルマを宿に残し町へ出ていた。

「どこに行くんだよ。眠いんだけど」

クダイはシャクスが嫌いだ。と言うか、まだ仲間と脳が認識していない。一緒に行動することに違和感があるのだ。

オルマいわく、

「ああ見えて面倒見はいいんだ。慕ってやればそのうち心を開くよらしいがそういう問題ではない気がする。」

「聞いてんのかよ。行き先くらい言えよ」

シャクスが歩みを止め、クダイを見た。

「な、なんだよ!」

まさか喧嘩を売られるのではと後ずさってしまっただが、よくよく考えればそこはシャクスも大人、そんなわけではない。

「見る」

一言そう言い、顎でくいつと方向を指し示した。

「ケファノス、あれって………」

昼間の傭兵達が一様に集まりグループに別れている。

「傭兵がパーティーを組む理由は一つ。モンスターの討伐だろう」

だがそれにしては空気が重苦しい。

傭兵というのは金で動く人種だ。割に合わない仕事は請け負わないだろうし、請け負えば金の為に全力を尽くすのが流儀だ。重苦しい雰囲気など醸し出すわけがないのだ。

「よう、アンタらも行くのかい？」

すると、一人貧相な感じの傭兵が話し掛けて来た。

不精髭を伸ばし、レザー製の色褪せた鎧に刃こぼれのした剣。とても腕が立つようには見えない。

「そうだ」

「シャ、シャクス！」

何をするのか知りたいくらいなのだが、クダイに発言権はないらしく抑えられてしまう。

「ふうん……子供連れで大丈夫なのかい？敵は相当強いらしいけど」

完全にナメられている。子供と言われガツンと言い返してやりたいが、シャクスが情報を聞き出そうとしていると察して、喉に引っ掛かった“暴言”を飲み込んだ。

「コイツはコイツで役に立つんだ。それより、お前は敵を見たことがあるのか？」

「いんや。魔族らしいけど、なんだか真っ赤な化け物だつて噂だ。この大陸の半分を焼き尽くしたつてんだから、人間じゃないだろうな。だから賞金も破格なんだ。アンタだつて賞金目当てなんだろ？」

「まあそんなとこだ。だがあまり詳細を知らんのだ」

「なんだ、素人か？しょうがねえな、なら教えてやるよ。そいつは三日前から姿を消してるみたいだけど、逃げ帰ったとは誰も思っていない。だからこつちから狩りをしようつて話になったわけだ。賞金は隣のザングル国から出る。四、五人くらいで協力しても、分け前はたつぷりと貰えるからみんなパーティーを組んでるんだ。おつと、俺はパーティーは組まない主義だから勧誘はするなよ」

「……………ああ」

シャクスの素っ気ない態度を気にするわけでもなく去つて行つた。

「なんだあのムカつく野郎！人を子供扱いしやがつて！」

「気にするな。無知な奴の戯言だ」

怒るクダイをケファノスが宥める。

「無知つてなんだよ」

「あの男、シャクスを見ても何も気がつかなかった。ただの口だけ男ということだ」

「シャクス？」

クダイはシャクスを眺め、

「あつ、なるほど!」

「シャクスの鎧は聖騎士と一目でわかるものだ。それに気付かないようではたかが知れている。そんな輩の言葉にいちいち反応する必要はない」

ケファノスが言った。

「真つ赤な魔族……ケファノス、心辺りはあるのか?」

魔族の王たるケファノスならと、シャクスが聞いた。

「大陸の半分を焼き尽くす力のある者……おそらくアスペルギルスだろう」

「主を失い暴走でもしてるようだな」

「……………」

アスペルギルスがどんな奴かはイメージ不可だが、ケファノスの様子を見る限りは暴走するような奴でもないらしい。

「ここまで来たなら確かめてみるか」

「行くつてのか?」

「俺はまだお前達を信用したわけではない。これから起こる全ての

ことは、この目で確認する」

嫌みな奴だとクダイは思った。

「別に着いて来なくてもいい」

シャクスは一人で行く気だったようだが、

「余も行こう」

ケファノスは着いて行く気だ。となれば、

「僕も行く」

こうなるわけだ。

「足手まといにはなるなよ」

捨て台詞を吐いてシャクスはさっさと歩いて行ってしまっ

「いちいちカンに障る奴だ」

文句を言いながらもクダイも着いて行く。

「嫌な予感がする」

部下であるアスペルギルスの反乱。確定ではないが、間違いないと確信している。

この時ばかりは予感が外れてくれることを祈った。

第二十三章 魔族の反乱

港町を出ると、慣れない臭いがした。

焦げた臭い。夜の臭いはそのには無かった。

クダイ達は適当に辺りを散策した。傭兵達がわざわざ夜に行動を起こしたということは、大陸を焼いた魔族は近くにいるのだろう。そのくらいのことは聞くのではなく感じとって判断しろ。とシヤクスに言われた。

要するに、なんとなく推察は出来るだろうと言いたいらしい。

「なあ、ぶらぶらしてばっかだけど本当にアスペルギルスとかいう奴いるのか？」

適当にとは言ったが、宛も無くさ迷ってるわけではない。

ただ、クダイにはそうは思えないのか、つつい愚痴ってしま
う。

「辺りが焼かれているのに、あの港町は無傷だった。多分、傭兵や魔導師らが死守したのだろう。だとすると、あそこだけを残して他に行くとは考えられん」

「なんでだよ」

ケファノスにケチを付けた。

「あれだけの規模を焼き尽くしたんだ、抵抗されたからと言ってそこだけは見逃すなんてこと、お前だったらやるか？」

助け舟ってわけでもないのだろうが、シャクスがケファノスに代わ

って説明してやった。

「そりゃまあ……………」

「まだ近くにいてもおかしくない。傭兵^{ヤン}は鼻の利く連中だ、確実とは言わないがそれなりに信頼は出来る」

「でも輪廻の塔に行くのが僕達の目的だろ？ほっとけばいいじゃないか」

「もし伯爵が企みを持って行動しているのなら、この件にも関与していてもおかしくない。そうだな、ケファノス？」

なんだかんだと言っているが、仲間になる理由でも欲しいのだろう。多少強引なのがなによりの証拠だ。

「……………余に聞くよりも直接本人に聞いた方が早いだろう」

ケファノスの視線は二人を通り越してずっと先を見ている。

その先には赤い魔導師ローブに赤い先の尖った帽子。そして赤い杖。

「こいつは都合がいい。向こうから現れてくれるとは」

シャクスがニヤリと笑った。

「聖騎士まで我を倒しに来たのか」

化け物とは程遠い風貌と低い声。

「アスペルギルス……………だな？」

「我を知っているのか？」

ビンゴだ。シャクスはアスペルギルスを見つめたまま、

「お前が話した方が話が早いかもしれんぞ」

ケファノスに言った。

姿は変わり果てようとも、魔王に変わりはない。真相を聞くにはケファノスしかないだろう。

クダイの肩からスーツと前に進み、

「久しぶりだな、アスペルギルス」

無難な言葉しか出て来なかった。

「その声は……………ケファノス様！？」

それでもちゃんと伝わったようで、アスペルギルスが前屈みになっていた顔を上げた。

「その……………お姿は……………？」

あまりの変わりように目を疑うが、声だけでなく気配もケファノスのもの。

「ジャスティスソードの力のせいだな。それよりも、随分派手に暴れてるようだが、誰の指示だ？」

「それを聞いてどうなさるおつもりで？」

「よもやお前達が独断で人間を攻めるとは思えん。余がいなくなつた後、誰と接触した？ 答えろ、アスペルギルス」

「……………なるほど。予想はついてるわけですか。ならば隠す必要はありませんな」

「……………サン・ジェルマンか」

他にはいまい。首謀者は一人なのだから。

「そういうことです。人間どもが魔族を滅ぼそうとしているとかで、世界のバランスを保つ為に我々魔族に手を貸すと」

「そんな話を鵜呑みにしたのか？ よいか、奴はそんなことは考えておらん。今すぐに手を退け」

「これはケファノス様のお言葉とは思えませぬな。もつとも、貴方らしい言葉を発したとしても、我々はもう貴方には従いませぬ」

アスペルギルスの意図などどうでもいい。ただ、彼の吐いたセリフが、事態が想像以上にややこしくなっていることを告げていた。

この際、暴言は許す。だが、アスペルギルスがサン・ジェルマンと手を組むことは容認出来ない。

「控えろ。余とサン・ジェルマンを天秤にかけることなど許さん。余は魔族の王。これは命令だ。従えぬのなら、殺すまでだ」

「クツクツクツ。どんなに凄んでみたところで、今の貴方に我を倒

す魔力など無いことなどお見通し。殺ると言うのなら、相手になるだけ」

炎がアスペルギルスを包む。主に牙を剥いたのだ。

「威敵の欠片も無くなつたな」

シャクスは皮肉を言い終える前に剣を抜いた。

いきさつは知る由もないが、少なくともアスペルギルスはケフアノスに謀反を起こしたのだ。強いては全ての魔族が。

「ケフアノス！」

名を呼ばれジャステイスソードをクダイに渡す。

「ジャステイスソード………災いを受けぬ者がいるとサン・ジェルマンが言つてたが、こんな華奢な少年とは」

両手を広げ、アスペルギルスは纏つた炎で剣を形取る。

ジャステイスソードを握り構えたクダイに、

「小僧は引つ込んでろ」

「あんたに指示される筋合いはない！」

どうもシャクスとクダイは水と油らしい。そもそも互いに第一印象が悪すぎる。

「かかって来ないのならこちらから行くぞ」

自信があるのか、アスペルギルスは二人を相手に炎の剣を振るう。

「小僧！！邪魔だ！！」

「小僧小僧うるさいっ！！僕にはクダイって名前がある！！」

「そんなことはどうでもいい！」

「よくないっ！！」

戦いそっちのけで額を押し付け合っていると、

「クダイ！シャクス！来るぞ！！」

アスペルギルスが巨大な火炎球を放って来た。

「うわわっ！！」

シャクスはたじろぐクダイの前に立ち、

「ウオオオオツ！！」

火炎球を一刀両断した。

ケファノスが叫ばなければ、かなり危うかっただろう。

「バカが。だから邪魔だと言ったんだ」

「くっ……」

言い返そうにも、言い返せなかった。

経験の差だけではどうにも埋められない。

「さあて、仕切直した。今度はこっちから行くぞ！」

クダイを置き去りにして、シャクスはアスペルギルスに挑む。

「クツクツクツ。さすが聖騎士。太刀筋のキレが違う」

「アスペルギルス、ケファノスを裏切って何を企む？」

「人間を滅ぼす。まずはそれだけだ」

「所詮、魔族と人間は共存出来ない…か」

「共存？おかしなことを。協定を反古にしたのはお前達人間だろう？」

二刀流のアスペルギルスから距離を置く。

「ふざけるな。言い掛かりもいいところだ」

「まあどちらでもよい。魔族はもはやサン・ジェルマンと共にある。新たな思想を抱いて進むだけよ」

「ならば俺達も魔族を滅ぼすだけだ」

シャクスの剣に闘気が灯ると、アスペルギルスも再び巨大な火炎球を作る。

「我が炎で燃えて灰になるといい」

「ほざけっ！灰になるのは貴様だ！アスペルギルス！」

闘気は火炎球を破り、アスペルギルスを貫いた。

「やった！」

「……………」

思わずクダイは声を上げたが、ケファノスは無言だった。その理由は、

「我が身体を貫くとは……聖騎士の称号は伊達ではないか」

身体のと真ん中に風穴を開けられながら、うろたえるそぶりもない。

「名を聞こう」

アスペルギルスがそう言うと、

「エルガム騎士隊隊長、聖騎士シャクスだ」

「シャクス……………覚えておこう」

アスペルギルスは頭上高く浮かぶと、

「今日のところはこれまでだ。いずれまた会おう」

幽霊のように消えていった。

「フン、逃げたか」

シャクスは剣を仕舞い、

「さあて……話がこじれて来たようだな、ケファノス」

サン・ジェルマンとヨウヘイだけを追えば済む話ではなくなっている。

アスペルギルスら魔族が、ケファノスを裏切ってサン・ジェルマンについてしまったのだから。

「魔族にはアスペルギルスのような奴がまだいるのか？」

「アスペルギルスは四天王の一人。そして四天王を束ねる者もいる」

「雑魚はほつといたとしても、そいつらは倒さねばならないようだな。まさか反対はしないだろう？」

ケファノスの心を探る。

「……………かまわん」

そう答えると、町へと一人戻って行った。

「あんな言い方ないんじゃないか？」

クダイはシャクスの態度に疑問があった。

ケファノスは部下の裏切りに傷ついているはず。いたわれとまではないが、他に言い回しはあったはずだ。

「俺に説教を垂れるのか」

「あんなら簡単に殺せるのかよ。裏切ったからって自分の部下をさ。聖騎士って聞くとどんなに魅力のある人間かと思わせるけど、さっきのあの無知な人間となんにも変わんないじゃないか」

「……………なんだと？」

「騎士って称号は強さじゃなくて、心に授けられるもんなんだろう？だから聖騎士って称号は誇り高く、弱きを助け、誰からも愛される人間だけに授けられるものだと思ってたけど、どうやら違ってたいだね。傭兵も聖騎士も、僕には同じにしか見えないよ」

見下すようなシャクスの口調に噛み付き、そしてクダイも町へ戻る。

「……………。」

年下のクダイの言葉に、なぜか心が揺らいでいた。

第二十四章 神か悪魔か

「そうですか……魔族が伯爵と協力を……」

体調も戻り、ダンタリオンは夕べの話をクダイから聞いていた。

「アスペルギルスってのがこの大陸の半分を焼いたらしいよ」

「しかし妙ですね」

「何が？」

「この町にいる傭兵達は、皆アスペルギルスを倒す為に集まった。でもそれはアスペルギルスが大陸を焼き尽くしたことに賞金がかけられているからでしょう？アスペルギルスがこの町に現れた時、傭兵によって死守されたというのはおかしくありませんか？」

この男は……アスペルギルスの言葉を直に聞いた自分達がなんの疑問も抱かなかったのに、間接的に聞いた話で矛盾を指摘してくるとは……と、顔が引き攣った。

「そ、そうかなあ……」

面倒な話はやめていただきたい。

その話に矛盾があるうとなかろうと、向かうべき場所へ向かうえばいい。

「ダメですよ、クダイ。目の前の面倒から目を背けては」

ちやつかり見透かす辺り、段々ケファノスに似て来た気がする。一緒に旅すると、誰かしらの影響を受けるのは避けられないか。

「だってさあ、ケファノスの肉体を取り戻すのが先だろ？矛盾だろうとなんだろうと関係ないじゃん」

「そういう問題ではありません。よく聞きなさいクダイ、アスペルギルスが嘘を言ってるとは思えません。あなた達に話かけて来た男。その者こそ何か思惑があつて嘘を言ったのでは？」

「考え過ぎじゃないの？貧乏臭い男だったよ」

「偏見はおやめなさい。本気でそう思うのであれば、ご自分の目を疑うのですね」

「僕が目が節穴だってこと？」

「見た目だけの判断は、時として命を危険に晒します。今からでも遅くありません、見る目を養いなさい」

「フン」

結局、子供扱いになる。面白くなかった。

それが愛情だと知るようになれば、一人前の称号を与えてやつてもいいのだが。

「まあいいでしょう。あなたの言うことも一理あります。伯爵が魔族と手を組むのは、本格的に動き始めた証拠。ヨウヘイが屍人^{かばねひと}の力を支配してからでは尚更面倒。ケファノスの肉体は必須となりますし、少しでも早く出発した方がいいでしょう」

「じゃあ……………」

「輪廻の塔へ行くのが最優先事項です。シャクス達なら町へ出ていきますので、探して来てくれませんか」

「うん。わかった」

元氣よく返事をする、勢いよく出て行った。

「……………事態は深刻ですね」

賢者たる自分と聖騎士であるシャクスがいても、魔族を相手には戦力が足りない。

オルマは頭数に入れてもいいが、クダイと今のケファノスはそうはいかない。

大きなアクションを起こされる前になんとしてもケファノスの肉体を取り戻す必要があった。

「毎度……」

そんな声がすると、店からシャクスが出て来た。

看板を見ると武器屋だ。

「シャクス」

「オルマ……！」

驚いているようだったが、それはオルマも同じだった。

「アンタ……その恰好……」

重厚な聖騎士の鎧姿ではなく、胸宛てをしただけの軽装だったからだ。

その意味するところは、詮索することなく理解出来た。

「まさか………売ったのかい？」

売れば金にはなる。しかし、決して売っていいものではない。それは罪になる。

「バ、バカじゃないの！？早く金返して来なよ！」

「落ちて着けオルマ」

「落ち着けるわけないだろ！聖騎士の鎧は……アンタの夢じゃないか！その若さで聖騎士に慣れたのに………なんで売っちまうんだい！？」

えらい剣幕で怒るオルマの腕を掴んで、

「話を聞け！」

「話ってなんだい！言い訳なんて聞きたくない！もし聖騎士でいられなくなったらどうするつもりなんだよ！？」

共に目指した聖騎士。努力に努力を重ね、それでも確実じゃなかった道。だから許せないのだ。金なんかの為に売ってしまうことが。

「鎧があることが聖騎士の証だと言うなら、聖騎士でい続ける意味はない」

「シャクス……………」

「小僧に言われたよ。騎士の称号ってのは強さじゃなくて心に授けられるもんだと。フツ…………知らぬ間に忘れてたんだろうな。誰より強くあることが、絶対的な強さを誇ることが聖騎士の努めだと思い込んでいた。そうするうちに人としての優しさなど無くしていたのかもしれない」

「だからって…………売ることはないじゃないか」

「決意だよ」

「決意？」

「伯爵の企みを止める為に、お前らの仲間になる決意だ」

それまで見せなかった笑顔を見せた。

オルマにとっては何年かぶりに見るシャクスの笑顔。

「そんな顔をするな。称号があることで縛られてしまうなら、そん

なものは無い方がいい」

どんな顔をしてたんだろう。少なくとも笑ってはいなかっただろう。

「後悔するんじゃないよ」

「世界が終わってしまうほどの後悔にはならない」

そんなやり取りをしていると、

「おい！」

噂の小僧がやって来た。

「はあ、はあ」

「どうしたんだい？そんなに急いで」

「ダ、ダンタリオンが早く出発しようって……」

「それだけかい？」

「はあ、はあ、そ、それだけ」

オルマは思わず吹き出してしまった。

「な、なんだよ？」

「いや……クダイらしいよ」

なんで笑われたのかわからないが、シャクスまでが笑いを堪えているのには驚いた。

「あれ？シャクス……鎧は？」

「あつ、これはさ……」

代わって説明しようとしたオルマの肩をポンと叩いて、

「何かする度に聖騎士だのなんだのと理由づけられるのは御免だからな、身軽になったのさ」

ちんぷんかんぷんにクエスチョンマークが浮かび飛び回る。

「そうだ、お前にプレゼントをやるう」

そう言うときシャクスは、レザー製の鞘を投げた。

「……………鞘？」

「ジャステイスソードを使うのにケファノスがないと使えないのでは不便だろう」

「シャクス……………あんた……………」

「フン、勘違いするな。戦いになった時にいつもケファノスがいてくれるとは限らん。そういう時に足手まといになられては困るからな」

「なにぃ！？僕は足手まといになんてならないぞ！」

もしかして本当はいい奴なのではと、ちよつとも思つた自分が馬鹿だった。

「どうだかな。アスペルギルスのように機敏な動きをする者が相手では、無眼の構えも役には立つまい」

言われた通りだ。目を閉じて集中して、光の軌跡を見るまでに時間がかかる。

「なら無眼の構えに頼らなくても戦えるくらい強くなるさ！」

「ほう。そこまでの心意気があるのなら、毎朝俺が特訓してやろうか？もつとも、口だけならこつちが願ひ下げだが」

「口だけなんかじゃない！いいよ、やってやろうじゃないか！特訓でもなんでも受けて立つ！」

カッカするクダイを見て、シャクスは口角を上げた。

「感情豊かだこと」

そしてオルマは呆れながらも、してやったシャクスを胸の中で讃えた。

「輪廻の塔に行かないのか？」

ヨウヘイが言った。

「焦燥だ。今は戦いに備え準備をするに専念すればよい」

サン・ジェルマンは静かに口を開いた。

「ここは魔王城。ケファノスの城だ。根城を作り、行動範囲の中心にするつもりだ。」

「クダイ達なら今叩けば勝てるだろ」

「甘く見てはならん。アスペルギルスの話では、聖騎士シャクスが味方についたらしい。シャクスとダンタリオン、舐めてかかると火傷では済まなくなる」

「そうは思わねーけどなあ」

「お前は屍人かばねびとの力の制御と、ダークエナジーの制御を完璧にするこ
とだけを考えてればいい」

それなりに制御は出来ている。そう自負してるのだが、サン・ジェルマンは満足してないようだ。

「わかったよ」

うるさいことを言われないうちに逃げるのが得策。ヨウヘイはけだ

るそうに外へ出て行った。

「やれやれ」

ぼやきたくもなる。

「心中察すよ」

それに同情する声があった。

「歳のせいか、若者は苦手だな」

「俺の知ってる若いのもあんな感じだ」

男は暗がりから姿を見せない。

「にしても、不死鳥は本当に輪廻の塔に現れるのか？」

サン・ジェルマンはソファアに柔らかに腰を下ろした。

「正確には不死鳥の魂を継ぐ者だ」

「ふむ。いずれにせよ、時間軸の融合には邪魔な存在。数多の世界に命を吹き込んで回るのだからな。そやつを倒し、輪廻の波動を止めて初めて目的への道が開ける。年甲斐もなく身体が震えよる」

「フツ。せいぜい準備は万端にしておくことだ。想像を超える強さを身につけている。短気なところが欠点だったのだが、最近落ち着きを見せるようになった。長い時間の中で戦っているうちに、大人になったのだろうがな」

「お前さんの話を聞いていると、まるでその成長を喜んでいるように聞こえるが……………気のせいかな」

「それはお互い様だろう。“器”の大成を願うお前と、“輪廻”の軌跡を絶ちたい俺。手強くなればなるほど燃えてくる」

男は闇と同化するように消えた。

「面白い男だ。見た目の若さとは裏腹に、深い思慮と強い信念を持つておる」

消えた男の気配がまだ残っている。

自分と同じように時間を旅する者。そう名乗っていた。だがそれだけではないだろう。隠している真実がある。

「月の無い闇夜にだけ現れる存在……………その正体、果たして神か悪魔か……………」

第二十五章 掴み取る明日

必要なものは一通り揃え、クダイ達は再び輪廻の塔を目指す…
…はずだった。

「よう！」

気を引き締め決意新たにした一行を呼び止めたのは、昨夜アスペルギルスと戦う前に話し掛けて来たあの貧相な傭兵。付け加えれば、まだ若い。

「待ってたんだ」

「何の用だ」

つつけんどんにシャクスは返した。

その態度を見て、ダンタリオンもクダイから聞いた男だと察したのか、

「昨夜はうちの者が大変お世話になったそうで」

「い、いや、俺はただ情報を提供しただけさ。魔族を追い返したのはその聖騎士様のおかげだよ」

礼を尽くされた対応に慣れていないのか、いささか不敏さえ感じる。

「ほう。俺が聖騎士だと知ってたのか」

そう言われ、男は口をつぐんだ。

「この町を守ったのは、ひょっとしたらあなたなのではありませんか？」

「!!」

「そんなに驚かないで下さい。簡単な推理です。アスペルギルスが町を襲った時、ここに傭兵が集まっていたというのは不自然な話。傭兵が集まったのはその後でしょう。シャクス達は何も知らないと見抜いての嘘だった……違いますか？」

にっこりする。それは話を聞いてやろうという表れ。

「……………まいったな。あんたも聖騎士か何かなのかい？」

「エルガム司法騎士隊隊長ダンタリオン。要するに賢者です」

「賢者……………」

その身分はやはり高いのであろう。男は目を丸くした。

そう考えると、どれだけ凄い人物と旅をしているのか改めて思
い知る。加えて、オルマはかつて聖騎士を目指したほどの剣の腕の
持ち主。そして…………

「我々を待っていたと言ったな。用件を聞こう」

魔王までいる。

「うおっ!?! な、なんだコイツ!?!」

夕べは暗くて気がつかなかったのだろう、小さな人形を食い入るように見る。

ケファノスの紹介をどうしようか四人は躊躇したが、

「余は魔王ケファノス。訳あってこのような姿になっている」

言いやがった。

「ま…………魔…………王？」

説明するのが面倒なのは諦めるが、自分の存在というものを知っているのかと問いただしてやってもいいくらいだ。

「心配なくていいよ。“害”は無いから」

「そういうこと」

オルマが言ってクダイが同調した。

男はケファノスをまじまじと見つめていたが、

「何となくだけど……………やっぱりあんたら“タダモン”じゃなかったか」

ケファノスの存在が、話し掛けた相手に間違いがなかったことの安心に繋がったようだ。

「私達のことはさておき、まずはあなたの話を伺いましょう」

その方が手っ取り早い。ダンタリオンに異議を申し立てる者はいなかった。

「あ……そ、そうだな」

男は一応の咳ばらいを済ませ、

「俺の名前はカイル。ハーフエルフだ」

名前は置いとくとして、意外なワードが飛び出した。

「ハーフエルフ………あなたが？」

どう見ても人間。ハーフとは言えエルフの要素がなく、ダンタリオ
ンが信じられないのも無理はない。

「俺も訳ありでね、こんな恰好をしてる」

似たような境遇が親近感をもたらし、警戒心を解いていく。

「さっきの話ですが、町を守ったのは………」

「俺だ。幻影燈というアイテムでアスペルギルスの視界を幻覚に墮
としたんだ」

用意周到とも思える準備の良さは、アスペルギルスを追って来たの
だとわかる。

ダンタリオンは、

「幻影燈は確かにエルフが持つ魔法具。ハーフエルフのあなたなら
持っていて不思議ではありませんか」

「信じてくれるのか？」

「ええ。ですからあなたも正直に話して下さい。目的をね」

あれこれ聞かないのは、それこそ互いの信頼感を確固たるものにする為。

そうまでして話を聞こうとするのは、ダンタリオン自身にも思惑があるからで、クダイ達もそれを理解しているから口を挟まない。

「わかった」

カームはケファノスが気になって仕方ないようだったが、

「単刀直入に言おう、今エルフの国は魔族に狙われている。どうか凌いではいるが、劣勢であることに変わりはない。滅んでしまうのも時間の問題。そこで、国を救う為に助けを求めて人間の世界に來たのだが……」

「アスペルギルスに出会った」

「そうだ」

ケファノスの言葉に頷いた。

「では傭兵達が集まって來たのもあなたが仕組んだのですね」

「ああ。幻影燈で可能な限りの範囲の傭兵達を呼び寄せた。もちろん、力のある者を選ぶ為」

「そしてシャクス達を見つけた」

要所要所の相槌、ダンタリオンがいるとスムーズに話が進む。本人の意志はともかく、頭のいい奴が一人いると何事もテンポがいい。

「聖騎士であるなら文句はなかった。後はアスペルギルス相手にどこまでやれるか。結果は知ってるだろ」

「俺を試したのか」

「悪く思わないでほしい。こっちも必死なんだ。実力のない者を連れて行ってそいつらの人生を終わらせるのもなんだしな」

シャクスが追隨しないのは、カイムの本気さが伝わって来るからだ。国を救う為……責任の重さは誰よりも知っている。

「割愛しよう」

カイムは突然片膝を着いて、

「祖国を救う為、あなた方の力を貸してはもらえまいか？」

その姿に貧相な雰囲気は微塵も無く、立派な騎士がいるだけだった。

「どうか頭を上げて下さい、カイム。あなたのお気持ちは十分伝わりましたから」

「では………！」

「ですが、お気持ちに応えることは出来ません」

ダンタリオンとて力にはなつてやりたい。きっとクダイ達も同じ想いだろう。

「そんな……………あなた方の他に頼れる者はいないのです！お礼なら相応の物を……………」

「勘違いするな。代価の問題ではない。俺達には行くべきところがあるんだ。急を要するだけに、時間を惜しむ。わかってくれ」

シャクスもまた片膝を着き目線を下げて応える。

「どうにかならないの？」

助けてやりたい。故にクダイはオルマに聞いた。

「輪廻の塔はまだ先なの？どうにもならないわ」

魔族とは戦わねばならないのだろうが、そこに時間を費やす時ではない。誰もがそう思い、カймも諦めた時だった。

「力になるう」

ケファノスが言った。

「ケファノス……………」

カймも予想しなかった相手に手を差し延べられた形になる。

「魔族は今、余の手中には無い。だが、世界を混乱に落とすのは、余の本意ではない。それに、人間を滅ぼすのが目的だとアスペルギ

ルスは言っていた。にも関わらずエルフを狙うのは、エルフ族に伝わる秘宝を奪う為だろう。それを奪われればサン・ジェルマンの思う壺だ」

「秘宝？」

クダイが言っと、

「この世のバランスを破壊する魔法具……………バランスブレイカー」

シャクスが答えた。

「時間軸の融合など簡単に出来るわけがない。屍人かばねびとを使ったダークエナジীর収集、その受け皿となるヨウヘイ、そしてバランスブレイカー……………他にも必要なものがあるのなら、それらのうち一つでもこちらが握れば歯止めがかかる」

「……………有効な手段かもしれませんね」

人間ではないケファノスだからこそ知り得た事実。

それぞれが各々、ちゃんと役を熟こなしているのだと、カイムはパーティーとしてのクオリティの高さを見た。

逃すわけにはいかなかった。これほどのパーティーは他にはいないだろう。女とは言え、オルマの存在感は本物だ。

ひっかかるとすればクダイだけなのだが……………

「彼はジャスティスソードの使い手です」

ダンタリオンには丸わかり。

「ジャステイスソードの？まさか……ジャステイスソードは使う者に災いを招く剣、一度剣を振るえば死の災いが降り懸かるはず、使い手ということはその災いを……………」

「受けないんだな、これが」

なぜかオルマが自信ありげに言った。

「僕のセリフ盗らないでよ！」

「アハハ。ごめんごめん」

明日というのは何もしなくてもやって来るもの。カイムはそう思っていた。

しかし、その明日さえ見えない祖国。

「明日は掴み取るものだ。それを証明してやるっ」

見透かしたのはケファノスだった。

かつては脅威であった魔王からの言葉。まさか勇気づけられるとは夢にも思わなかった。

きっとその胸の内は、誰にも語れない想いがある。

「ありがとう」

悲痛なままの旅をして来たのだろう、カイムは少しだけ瞳を潤ませた。

第二十六章 エルフの女王

土の香りが心地よかった。

季節は初夏。クダイの世界とリンクしてる感覚。土を陽が刺激して一層の雰囲気を盛り立てる。戦いへ赴く旅とは思えず、この時ばかりは至福だろう。

焼けた大地から離れ、空模様は赤黒くなく鬱陶しいほどの青空。長閑な田舎へ来たような風景が一樣に広がり、時折聞こえる小川のせせらぐ音が暑さを和らげていた。

「近いな」

ケファノスが言った。

そんな気配は感じないのだが、魔王が言うのだから間違いはない。最近そう思ってしまう。

「あそこだ。あそこがエルフ国だ」

茂みから覗くと、鉛筆が列んだような城が真っ先に視界に入る。

カイルが指し示す。

印象的なのは城だけで、町並みというものはなく、家屋がまばらに点在するだけ。

「戦争中には見えないけど？」

「幻影燈で隠してるだけさ。まだ余力があると見せ掛けたいんだよ。そうじゃなきゃ総攻撃を喰らっちゃう」

カイルはクダイに教えた。クダイは便利なアイテムもあるものだと

感心するに留まる。

「でもさ、あたし達が行って大丈夫なわけ？」

オルマが気になっているのは、助っ人とは言えエルフが人間を受け入れるのかどうか。まして魔王までいるのだ。説明の機会すら与えてもらえないのではと懸念している。

「エルフの人間嫌いは筋金入りだからな」

シャクスも手痛い過去があるらしい。

「ここまで連れて来ておいてなんなんだが……………」

「言わんでいい。ハーフエルフのお前の地位などもとより承知の上だ。余が話をつける」

魔族が反乱を起こしたのは、少なからず王たる自分の責任。今回ばかりはダンタリオンにスポークスマンを演じさせるわけにはいかない。そう思っているのだ。

ケファノスは一人先を急ぐ。

「あの人形……………ホントに魔王ケファノスなのか？」

カイルが口にするのと、

「私達の御意見番ですよ」

仲間である。以上でも以下でもないことをダンタリオンが言った。

結界の厚さなど考えたこともないが、範囲は広く一步中へ踏み込むとそこはまさに戦場だった。

道中が華麗なる夏景色だったのは、カイクが誘導したからで、まだ戦場になってない道だけを歩いていたのだ。
彼なりのささやかな礼なのかもしれない。

「カイク様！」

一行が城に向かい歩いていると、耳の尖んがった少女が駆けて来た。

「ご無事だったんですね」

「ああ。心配かけて済まなかったな、シメリー」

浅い青緑の巻き毛の少女はそう呼ばれた。

「おやおや、これはまたかわいらしい」

賢者様の悪い癖が出る。

「人間………」

プログラム通りの反応をしたシメリーに、

「彼らはこの国を救いに来てくれたんだ。そんな反応は失礼だぞ」

「だつて……………」

カイルなりにクダイ達に礼を尽くしたい。エルフの反応で気分を害することすら避けたいのだ。

「気にするなカイル。人間は昔、エルフから嫌われるだけのことをしたんだ。当たり前前の反応さ」

珍しく話のわかることをシャクスが言った。

「人間の寿命は高々百年足らず。エルフはその十倍は生きる。あたし達には直接関係の無い歴史でも、エルフ達にはまだ引きずる歴史なんだ」

オルマはクダイに教えた。それを理解していないと、エルフと交渉は出来ない。

「なんだか気を使わせて申し訳ないな」

シャクス、オルマ、ケファノスとダンタリオンの気持ち嬉しく思え、自分の目に狂いはなかったと自信が持てた。

「意外と律儀なんだね」

クダイのカイルに対する見る目も変わっていた。

貧相な傭兵なんかじゃなかった。祖国を想い礼儀を重んじる姿

は、古き日本人の心を思い起こさせる。

「さ、シメリー、奴らがまた攻めて来る前に女王陛下に会わなければならぬ。君との会話は後だ」

その言い草に不満な顔を見せたが、

「行こう」

カームは女王へ会う緊張からフォローはしなかった。

鉛筆が並んだような城へ案内され、クダイ達は謁見の間にいた。

「誰を連れて来たかと思えば……………人間だと？我々エルフが人間嫌いだと知っているのではないか、カームよ？それとも、ハーフェルフのお前には関係の無い話だと？」

女王は見下ろしながら、ひざまずくカームに暴言を吐いた。

「いえ。そんなことはありません。確かに彼らは人間ではありませんが、そこいらの人間とは違い……………」

「黙れ！」

「はっ……………」

「ハーフェルフのお前に任せたのが間違いだった。所詮は人間の血を引く者よな、人間なんかを安易に信じよる」

「……………」

一方的な女王の言葉。一行が恐れた通りになってしまっている。

（なんかムカつくな、あの女）

（しょうがないさ。あれがエルフの本音なんだから）

（だからって……………）

クダイとオルマがひそひそと話をしていると、ケファノスが前に出た。

「なんだお前は？」

「相も変わらずヒステリーなのだな……………アイニよ」

「……………その声……………まさかケファノス！！」

女王がその名を叫ぶと、周りがどよめいた。

「カイムの愛国心は本物だ。少しは言葉を選んだらどうだ」

「なぜ魔王がここにいるっ！カイルー！」

矛先は当然連れて来たカイルに行く。

「それは……………」

説明に困るカイルを救う気があったかはわからないが、

「アイニよ、少しは落ち着いて話せんのか？」

「ええい黙れ黙れッ！！戦争相手の王を連れて来るとは……………なん
ということだ」

聞く耳持たぬアイニに、

「いい加減にしろアイニ！」

ケファノスが怒鳴った。

どよめきが消え、クダイ達は初めて感情をあらわにしたケファ
ノスに驚いていた。

「ケファノス……家臣の前でわらわに恥をかかせる気か！」

「たわけ。我々はお前達に加勢に来たのだ」

「信じられるか。お前の部下と戦っているのだぞ！信じられるわけ
がない！」

「今の余は魔族の王ではない」

「な……………どういうことだ!？」

「今、魔族はサン・ジェルマンに支配されている」

「時空の騎士サン・ジェルマン……………なんの因果があつて奴が魔族を支配しているというのだ？」

予想外な人物の名前でアイニの耳が傾いたのを期に、ケファノスは事の成り行きを話し始めた。

「少しは信じたか？」

ケファノスはアイニに聞いた。

「……………到底信じ難い話ではあるが……………」

ちらつとケファノスを見て、

「まあどのみち今のままでは我々に勝ち目はない。いいだろう、お前達を信じよう」

腹を決めた。百パーセントとはいかないまでも、藁にも縋る思いで

あることに変わりはない。

「よかった……」

ホッとしたのか、カイルから緊張の表情が消えた。

「ただし、バランスブレイカーの件に関しては保留にしておく」

「女王陛下、それでは彼らとの約束が……」

「下がれカイル。バランスブレイカーはエルフ族の秘宝。そう簡単に渡すわけにはいかん」

それでは約束が違う。正確には約束はしてないのだが、利用するだけ利用するという行為は納得出来ない。

そんなカイルの服を摘んで、ダンタリオンは首を横に振った。

先にケファノスが言った通り、ハーフェルフであるカイルの地位は低い。過ぎた言動は決して彼の為にならない。

「よかるう。戦いが終わるまで考えておけ」

ケファノスが言うとアイニは鼻を鳴らし、

「戦いが終わるまでケファノス達は客人だ。部屋を用意しろ」

命令した。

メイドらしき女性が三人ほど来ると、一行は立ち上がる。

「こちらです」

メイドの一人が言って案内しようとした時、

「ちょっと待ってくれ」

クダイが足を止めた。

「どうしました？」

ダンタリオンが言うと、クダイはアイニの方を向いて、

「カイクに謝ってくれ」

場が一気に凍り付いた。

「ク、クダイ!!」

カイクが慌てたが、

「確かクダイとか言ったな？そちは冗談がつまらんの」

アイニの顔に怒りが見えてしまう。

「冗談なんか言ってる。さっきから聞いてたらハーフエルフだからなんだってんだよ！どうして差別するんだ！一生懸命に国の為に働いたんだ、労いの言葉があったっていいじゃないか！」

「貴様っ…………ジャステイスソードが使える程度で何を生意気なっ
!!」

「ジャステイスソードは関係無いだろ！僕は…………むぐむぐ」

シャクスに口を塞がれた。

「お詫び申し上げます。幾分、まだ若いもので」

代わってダンタリオンが詫びた。

「フン。さっさと下がれ！」

アイニの怒りが飛び火しないうちに謁見の間を後にした。

第二十七章 風のシュードモナス

「なんで止めたんだ！」

小さな火山が火を噴いた。

「やれやれ」

シャクスは用意された部屋の椅子に勢いよく座り、疲れを露骨に表した。

「僕は何も間違ったことは言っていないぞっ！」

クダイの怒りは収まりそうもない。

「あなたの気持ちはわかります。しかし、カイムにはカイムの立場というものがあります。私達が口を挟むことはありません」

「そうやってもっともらしいこと言ってごまかすんだな！」

ダントリオンにさえ噛み付く。

「そうではありません。お願いですクダイ、私達はなんとしてもバランスブレーカーを手に入れなければならないのです。ただでさえアイニは気難しい女王です。話がこじれてしまうような言動は慎んで下さい」

ここでバランスブレーカーを手に入れられるかどうかで、サン・ジェルマンとの今後が有利になるかが決まってしまう。つまらない正

義感はいらないのだ。

「だけどあれじゃカイルが可哀相じゃないか！」

必死に訴えるも、同意は得られない。

「エルフ達の事情に首を突っ込むな」

「シャクス………」

「やらなければならないことがあるんだ。余計なことを考える暇があるなら剣の腕でも磨け」

シャクスとてクダイの言いたいことはわかる。だからといって、ダントリオンのように窘める言い方は性格上出来ない。

「オルマ！」

二人がダメならとオルマに同意を求めたが、

「疲れて気が立ってるのよ、一眠りしたら？」

言ったのがまずかった。

「眠くないっ！！」

バタンツ！！

壊れるんじゃないかと思うほどの勢いでドアを閉め出て行った。

「熱い男だ」

「うらやましいですねえ……………若さでしょうか」

シャクスとダンタリオンが冷やかしたが、

「でも最高の仲間じゃない。他人の為にあんなにムキになってくれるんだから。あたしは嫌いじゃないよ、ああいう奴」

オルマは頼もしく感じていた。

若かりし頃の情熱などもう忘れてしまっている。ただ決別した過去の自分達。鏡面に映した出されるほどに鮮やかに見えていた。

「なんだなんだ！みんなして冷たい態度とりやがって！」

どうにも収まらない気持ちのまま、クダイは中庭へとやって来た。

「だいたい、僕のことを子供だと思ってるのが許せない！」

大きな噴水に向かって目一杯叫んだ。

「くすくす」

ふと、笑い声が聞こえて辺りを見回すと、

「君は確か……………」

カイルに話かけてたエルフの少女がいた。

クダイが近寄ろうとすると、少女はささっと避ける。

「な、何もしないよ」

怯えさせてはと笑顔を作るが、よっぽど可笑しかったのかまた笑われた。

「くすくす」

非常に上品に笑う。

「あは……………ははは……………」

笑ってごまかすしかないようだ。なにせ同年代の女性と一対一で話すことに免疫が無いのだから方法がない。

「さつきはありがとう」

「え?」

「カイル様のこと庇ってくれて」

「あ、ああ……………そんなお礼を言われるようなことは……………ただ頭に来ちゃってさ」

「でもアイ二様のこと悪く思わないで」

「別に悪くは思っていないけど、言い方がキツすぎだろ」

「それはカйм様を思つてのことなの」

「あの暴言が？」

少女は小さく頷いて、

「カйм様の母君は、アイ二様の妹君。だからハーフエルフであつてもエルフの国にいられるの。アイ二様は自分がカйм様に辛く当たることで、周囲の者達から少しでも同情を得られるようにしてるの」

「なんでまたそんな面倒なことしてるんだ？自分が優しくしてやればいいのに」

「嫉妬を防ぐ為よ。純粋なエルフでない者は、エルフの国に住まうことを許されない。汚れた者として忌み嫌われてしまうから。けれど、幼い頃に両親を亡くしたカйм様は、ここにいるしかなかったの。いる資格の無い者がいれば、虐められてしまうのは目に見えているでしょ？カйм様を守るには、有り余る同情を買つように仕向けるしかなかったんだって」

「詳しいね。ひよつとして君は……」

「アイ二様は私のお母様よ」

やっぱり。それにしても、自分の母親にすら“様”をつけないなんて。

「そっか。だったら謝らなきゃね」

「どうして？」

「だって僕、女王様に生意気なこと言っちゃったから」

「くすくす。アイ二様にあそこまで言った人は、人間はもちろんエルフの中でも誰もいなかったから面白かった」

「そ、そう？あはは……」

皮肉ではないのだろうか、なんだか素直には喜べない。

「あれ？」

「どうしたの？」

突然、少女が空を仰ぎ怯え出す。

「……………来たんだね？」

エルフ族と戦っている魔族を感じているのだ。

「だ、大丈夫だよ！僕がいるから！」

クダイはぎこちなく鞘からジャスティスソードを抜く。

もっと簡単に抜けると思ったのだが、身長ほどもあるジャステ

イスソードを抜くのは剣の上級者であっても難しい。
それでも、

「どっち？」

やって来るだろう方角を聞き、少女が指差す方を確認すると、

「城の中に行つて！」

クダイは走り出した。

「全くサン・ジェルマンの野郎はいけ好かないわねえ」

白い不気味な仮面の下からは、1オクターブ高い男の声がした。

「こつちだつて一生懸命やってんのよ！時間を操るくらいでエラソ
ーに人に命令するなんて！」

かなりの数の手下を連れているのに、独り言で留まってしまう。

「おや？なあに？あの少年」

黄金の剣を携えて駆けて来る少年。

「はぁ……はぁ……ま、魔族だな？」

弱そうな“成り”をして立ちはだかる。

「誰よあんた？」

エルフでないことだけは確かだ。耳を見ればすぐにわかる。

「僕はクダイ！ジャスティスソードの使い手だ！」

「ジャスティスソード……お前が？ハン！笑わせないでちょうだい。子供にかまけてる暇はないのよ、どきなさい！」

「また子供扱いか。いい加減本気で怒るぞ！」

「知らないわよ！いいからどいて！」

仮面の男は衝撃波でクダイを弾く。

「くっ……やられてたま……るかっ！！」

倒れそうになる身体を支えながら、ジャスティスソードをでたらめに振るう。

「ちょ……危ないじゃないのよ！」

「うるさいっ！こっから先は僕を倒してから行くんだ！」

根拠のない自信で立ち向かう。

「生意気なボウヤね。いいわ。殺っちゃってあげる」

そして、クダイの周りに鎌鼬現象が起きた。

「うわあっ！！！」

「いい悲鳴だわあ……………ゾクゾクしちゃう」

「くそっ……………魔族の分際で生意気だぞ！」

「お黙りっ！あたいは魔族は魔族でもそこいらの魔族とは格が違うのよ！」

ゆっく息を吸い、

「あたいは四天王の一人」

仮面の奥からしかとクダイを睨みつけ、

「風のシュードモナス」

そう名乗った。

第二十八章 聖騎士と賢者

「この気配………来たな」

結界の外から押し寄せる魔族の気配。待つてましたと言わんばかりにシャクスは剣を取った。

「休む間もないんだねえ………あたし達」

「早い方がいい。バランスブレイカーをこちらが手にすれば、サン・ジェルマンの狙いは我々だけになる」

オルマにケファノスは言い、

「あなたが世界のことを考えてくれるとは。頼もしく思いますよ」

「余は早く自分の肉体を取り戻したいだけだ」

照れ隠しか本音かは別として、ダンタリオンの謝意を濁した。

でもそれがいい緊張をもたらす。

バタバタと城内の騒ぎが壁から浸透して来る。それを合図に一堂は頷き確かめ合ったその時、

「た、大変だ!!」

カイクが飛び込んで来た。

「案ずるな。わかっている」

今度はカィムを宥めようとしたが、

「そうじゃないんだ！クダイが……クダイが！」

「クダイがどうかしましたか？」

ただ事ではない。こういう時、ダンタリオンは至って冷静だ。事象がでかければでかいほど。そのはずだった……カィムからその言葉を聞くまでは。

「四天王と……風のシュードモナスと……！！！」

現実には甘くなかった。シャクスが言った通り特訓の必要は重々だ。しかし今それに気付いても糧にはならない。

「あつははは！口ほどにもない！これがジャスティスソードの使い手だなんて！」

「なんでジャスティスソードが重いんだ……？いつもなら戦いが始まれば軽くなるのに」

力が自在にならないことに苛立つ。

「警戒するまでもなかったねえ。お前ら！さつさとエルフ族からバ
ランスブレイカーを奪っておいで！！」

シュードモナスに従い、魔族達はクダイを過ぎて城へ攻める。

「あつ…………ま、待て！」

進行を止めようとするが、ジャステイスソードを握る右腕をシュー
ドモナスによって風のロープで防がれる。

「ダ〜メ〜よ〜。あんたはあたいに喧嘩を売ったんだから、きつち
り遊んでちょうだい」

「シュードモナス…………！！」

「あらまあ、そんな怖い顔しちゃ〜よ」

「この…………オカマ野郎ツ…………！！」

ロープを腕力で引きちぎる。

「感心ねえ、華奢なわりに強腕なこと」

「こつちにはケファノスがいるんだぞ！お前達の王様だろ！いいの
か逆らって！」

「あつははは。今更。聞けばケファノス様は肉体を失い、魔力も大
分を失ったとか。ならば恐れるに足りないわ！」

アスペルギルス同様、ケファノスの威厳は通用しない。

（なんで………なんで応えてくれないんだ………ジャスティスソー
ド！）

力の解放がなければただの豪華なオブジェ。

「！-！」

ぼうつとしていると、風が纏わり付きクダイの身体を刻んでいく。

「あうつ………！」

「ほらほらほらうつ！！！！苦悶苦悶苦悶苦悶苦悶ツツ！！踊りな
さいよ！！我が風の操系で！！！」

「うつあつ………！！！」

まるでシュードモナスの操り人形。鎌鼬がクダイを傷つけ、惰性で
滑稽に踊る。

もうダメかと諦めかけていると、クダイの周りを白濁のシール
ドが覆い身を守る。

「何者！？？」

立っていたのはオルマ。

「大丈夫？まだ一人での戦闘は無理よ。まして相手は魔族の四天王
なんだから」

「放っておけオルマ。自らが招いた結果だ」

そしてシャクス。ケファノスとダンタリオンがいないのは、シュードモナスの手下を相手にしてるのだろう。

「ふふん、お仲間の登場ってわけね」

「風のシュードモナス………相手に不足はない」

アスペルギルスには逃げられたが、シュードモナスは逃がすわけにはいかないし、彼自身逃げるつもりもないだろう。互いが欲するものはバランスブレーカーただひとつ。

「オルマ、クダイと一緒に下がってる」

「ま………待って………そいつは僕の………」

裂かれそうな痛みが身体が恨めしい。

クダイはオルマに連れられシャクスとシュードモナスから離れた。

「よく見ると色男じゃない」

「俺の名は聖騎士シャクス。直々に手にかけてやるんだ、光栄に思え」

「フン、生意気な。だいたいなんで人間がエルフ族の肩を持つのよ！！」

「カマ野郎を根絶するのが俺のライフワークでな。そのガラガラ声

を聞いてるだけで鳥肌が立つぜ」

「キーーーーッ！！！！なんて言い草！！許せないわっ！！」

「フフ、そいつはどう………もッ！！」

先手必勝。大剣を一振りしてシュードモナスを吹き飛ばす。

「おゝのれッ！聖騎士シャクス！！この風のシュードモナス様に風で攻撃してくるとは！！片腹痛いわよ！！」

「いいからかかって来い。お喋りは苦手なんだ」

人差し指をくいつくいつと曲げ挑発する。

「クダイ、よく見ておきな。世界屈指の騎士の剣の使い方を」

オルマが見せたいのはシャクスの聖騎士としての実力。

「さすがにこの数は苦戦しますね」

それでもダンタリオンは余裕だった。

エルフ族の主要武器は弓と槍。その腕は他の追隨を許さない。同時にそれが欠点でもある。

近距離の戦闘が苦手なのだ。その為、強力な結界を張ったり特殊なアイテムを造ったりと欠点を補うのだが、一度かい潜られてしまえば脆いもの。内側の防御が甘いのだ。

唯一、ハーフエルフのカイムとダンタリオンが剣を使える為、城内への侵入が防がれているが、そうでなければとくに陥落していただろう。

「ダンタリオン、もったいぶらずに魔法で片付けてしまえ。この程度の数、ものの数ではあるまい」

ケファノスは数百はいる魔族の群れを見、

「そうか！賢者であるあなたなら！」

カイムは賛同した。

「ですが、ここは結界も張られていませんので、城への影響を考えるとあまりお勧めは出来ません」

「……………」。

「……………フッ。なるほど、そうですか」

沈黙するケファノスの心は……………

「まあなんとか被害を最小限に抑えてみましょう。そのくらい出来なくて賢者と名乗るのはおこがましいですからね」

助走をつけ高く宙返りして群れの中に飛び込む。

「なんて跳躍だ…… エルフならまだしも、人間なのに……」

カームはダンタリオンの身体能力に見惚れてしまった。

一介の人間が成せる技ではない。まして魔力に頼った技でも……だ。

「賢者の名を欲しいままにする男。その力、見ておくのだな。瞬きする間もなく終わるぞ」

魔王さえ認めるダンタリオンの賢者としての力……

「久しぶりの魔法。四元素魔法では面白みに欠けます。いつそ光の魔法でも披露しましょうか」

城壁の上にいるエルフにチラリと視線を送り、

「本来、光の魔法は三下相手に使うものではないんです。光栄に思うことです」

剣を地面に突き立てると、ダンタリオンを中心として光の波紋が流れ、魔法陣を描く。

ダンタリオンはニヤリと笑み、

「世界を司る尊厳の光よ！最果てへと誘え！ファージストピラーッ
！！」

魔法陣がより輝きを増して魔族の群れを消し去った。

一瞬で。

溢れ出た光はダンタリオンの周りをゆらゆらと蝋燭の炎に揺らいでいる。

「くっ……眩しい……」

直視出来ない光。間近で見るカイムの視界を奪う。

「ファージストピラー………光の魔法としては最上級のもの。魔力を抑えてこの威力………恐ろしい男だ」

だが、それが賢者ダンタリオンの実力。

第二十九章 世界を壊す魔法具

ダンタリオンの放った魔法は、結構な範囲を眩しく照らした。
一瞬ではあるが、光の柱が立ち爆風まで巻き起こす。

「あの光は……………」

「貴様の手下の十字架だろ！！」

隙を突いてシュードモナスの鎧に傷をつけた。

シャクスの使う剣は聖騎士のみが使える貴重なもの。故に、ありふれた金属であるなら、野菜でも切るかのように傷をつけることなどたやすい。

「クッ……………聖騎士め！」

「四天王つてのは、この程度の実力なのか？まあアスペルギルスもたいしたことなかったからな、期待した俺がバカだったか」

「言いたい放題言ってくれるじゃない」

この状況はシュードモナスにとっては想定外。じわりじわりと時間をかけ、追い詰めたエルフの思わぬ援軍。

「こうなったら……………」

シャクスを倒しても、ファージストピラーを使う者がいる。シュードモナスに残された道は一つ。

「一度退散よ！」

翻って一目散に逃げる。その背中に、

「逃がさんと言ったはずだ！」

重量感抜群の剣を振り下ろすと、周りの木々を薙ぎ倒すほどの勢いで真空波が起こり、

「ひ……………ひいいあああ……！！！！」

シュードモナスを切り裂いた。

「何が四天王だ。これなら俺の部下でも十分に勝てる」

物足りなさに不満を感じながらも、呆気なくシュードモナスを倒せたことは任務と考えると喜ばしいことなのだろう。

シャクスが本気でなかったことはクダイにもわかった。不甲斐無さを呪いながらも、強さへの道はまだほど遠いことを知った。

「クダイ……！」

ダンタリオンが先頭を切り、後をケファノスとカイクが駆けて来た。ま、ケファノスの場合は浮遊してるだけなのだが。

「大丈夫ですか？今、治癒魔法を……………」

痛々しい姿のクダイに触れようとしたダンタリオンに、

「必要ない」

シャクスが言い、険しい表情をしてクダイの前に立つ。

「……………」

無言で見下ろし、クダイの胸倉を掴んで無理矢理に立たせおもいきり殴り付けた。

「シャクス!!」

突然の暴拳にオルマが止めに入る。

「な、なにすんだよ!!」

「黙れっ!!このバカがつ!!」

さっきまでのクダイの怒りよりはるかに大規模な怒りを爆発させた。

「敵が来たと気付いたなら、なぜ俺達に言わなかった!!」

「………… ジャステイスソードがあれば勝てると思ったんだよ」

「ふざけるなっ!! 実力も無い奴が生意気な口を利くな!!」

「そんな言い方することないだろ! 僕だって役に立ちたかったんだ!!」

「笑わせるな! 剣の力に頼らなければ戦えない奴が、一体なんの役に立つんだ!!」

ヒートアップして来たシャクスを見兼ね、

「もういいでしょう、彼も反省してるようですし」

「……………フン！」

シャクスが言い過ぎだと思い止めたわけではない。無力を痛感してるクダイを、これ以上は責めてもしかたがない。

「明日から剣の特訓開始だ。嫌とは言わせないからな」

ダンタリオンを押しつけ城へ戻り様、

「お前の部下もたいしたことないな」

ケファノスに一言言っていた。

「立てますか？今魔法を……………」

「いいよ」

身体は痛むが、なぜか治療を望む気にはなれなかった。

立ち上がるのにダンタリオンの差し出した手を取ることもなく。

「きつと心配したんですよ。ああ見えて情の深い男ですから」

それは知ってる。似たようなことをオルマも言っていた。

「もちろん、私達もです。そうですね、ケファノス」

ダンタリオンはそう付け加えた。

「……………」

何も言わなかったが、ダンタリオンを急かした理由はそれしかないだろう。戦士としても男としても、そして人間としても未熟なクダイ。そんな小さな存在であっても、いつの間にか絆が生まれていた。それはケファノスにとっても意外な感情なのかもしれない。だから何も言わないのだ。

ジャステイスソードの力を宛にしたとは言え、単身シュードモナスに挑んだ行為は、褒められこそされないが、成長の一端と受け止めることも出来る。

少なからず、絆はクダイの中にもあり、剣を振るう意味を彼に与えるだろう。

「あれだけ苦戦した相手をたった二人の騎士で倒すとは……………」

アイニは謝意を述べるのも忘れ、ダンタリオンとシャクスの凄さにただただ感服していた。

「この二人は人間の中でも特別だ。努力もさながら、才能に恵まれている」

快拳を成し得た二人に代わってケファノスが発言したが、その内容も二人を讃えるものだった。

正直、歯がゆい気もしないでもない。魔王から称賛されるのだから。

「ふむ。何はともあれ我がエルフ族を救ってくれた事実、これには誠意を持って応えねばなるまい」

アイニの腹は決まったらしい。

「バランスブレーカーを持ってまいれ！」

エルフ族の秘宝。こんなに簡単に手に入るとは思いもよらなかった。

素直に喜ぶのも悪くないだろうと、オルマは安堵の息を漏らしたが、ダンタリオンとシャクスの表情は厳しく、クダイは浮かない顔をしている。ケファノスは……同じような表情をしている……

……多分。

（もう少し喜んだら？）

両隣にいるダンタリオンとシャクスに囁いたが、

「場を弁えて下さい」

とダンタリオンに言われ、

「………同感だ」

とシャクスに言われた。

この前までは“喧嘩”してたくせに……と、オルマは顔を引き攣らせた。

女心が男にわからないように、男心も女にはわからない。本気で殺し合いをしたのはなんだったのか……などと考えてると、カィムを先頭に長細いいかにも宝箱という小さな箱が登場して来た。その箱を二人の少女が支えている。それを見て一堂は目を丸くした。

「あ……あの娘って確か……」

オルマが言うと、

「シメリー………でしたよ……ね」

ダンタリオンは記憶を探った。

間違っではないはずだ。ただ……

困惑していた一同の前に置かれた小さな宝箱より、二人のシメリー………いや、結論から言えば……

「双子………？」

クダイは口にしていた。

一番真つ当な答えの説明は、

「さっきはありがとう………クダイ」

向かって“左側”のシメリーが言った。いや、右がシメリーなのか………そもそも自分と話していたのが“シメリー”なのかさえ不明だ。

「私達双子なの。こっちはシメリー」

向かって右の少女を“説明”し、

「私は姉のシトリー」

自分の正体を明かした。

そんなやり取りをアイニは煩わしいと思ったのか、

「二人共下がってよい」

と言った。そして、

「約束のバランスブレイカーだ。箱を開けて確かめて見よ」

真ん前に置かれ、必然的に開ける作業を余儀なくされたクダイは、遠慮がちに箱を開けた。

「これが…… エルフの秘宝バランスブレイカー……」

クダイの目に映るのは、派手な装飾を施された短剣だった。

しかし、疑いたくはないがこれが本物かどうかはクダイにはわからない。

「この世界は、太古より伝わる魔法具によって構築されてると言い伝えられている。そのひとつがそのバランスブレイカー。それは世界が腐敗した時、新たに世界を構築する際、一度世界を壊す為に存在すると言う。お前達の言うように、サン・ジェルマンがバランスブレイカーを狙っているのなら、それは極めて危険。だが……」

アイニは一変、浮かない表情になり、

「多くの犠牲を出した我が国では、万が一の有事が起きた時にバランスブレーカーを守ることが不可能だろう。いずれ、手元に置いていればまた魔族が攻めて来ないとも限らん。お前達が責任を負うという前提でそれを渡そう」

ちよつとだけ、クダイにはアイニに同情した。自分と同じに、不甲斐無いと思っている。ダンタリオンとシャクスの実力を認めたからこそその決断なのだ。

「余が真実を言っていないとしたら……そうは思わんのか？」

ケファノスは敢えて余計なことを言った。

「わらわを欺いてバランスブレーカーを奪うつもりなら、たかが一人のハーフエルフの為にムキになって齒向かうことはしないだろう」

そう言つてクダイを見た。

結果とは言つても、クダイの愚行があつての根拠になつたのだ、ダンタリオン達は苦笑いした。

「遠慮はいらぬ。ジャステイスソードの使い手よ、バランスブレーカーを受け取るがいい」

手にした短剣は世界を壊す目的で存在する。どんな使い方をするのかわからない破壊の魔法具は、紛れも無くクダイ達に重い重圧をもたらした。

「借りるだけだ。サン・ジェルマンを倒せば、またエルフ族に返す」

そう言ってケファノスは時空の歪みにバランスブレイカーを仕舞った。

そしてアイニは、

「さて、来て早々大変だった。同時に、こんなにも早く問題が片付いた。感謝の気持ちを表して宴をしたい。次の旅までゆっくり疲れを癒して欲しい」

喜ぶ一同を尻目に、クダイだけは複雑な思いでいた。

第三十章 陰と陽 前編

宴は、戦いで死んで逝った者達の弔いも兼ね、長い黙祷の後に行われた。

好意的にエルフが振る舞うのは、一重にダンタリオンとシャクスのおかげだ。

「シャクス様あゝ〜！」

どの種族も恋心を抱くのは強い男。特にシャクスのように不器用な男はだ。

「うつ……………」

女嫌いではないが、人間の中では身分の高いシャクスに言い寄る女性はいない。それだけに、囲まれている現実には彼を情けないまでの気弱にになってしまう。

「バツカじゃないの！」

それを眺めながら酒を渴喰らって文句を言うのはオルマ。

無骨を気取るあのシャクスさえ、慣れない多さの女性には弱いらしい。それが美しいエルフなら尚更。デレデレしてるわけではないが、やはり気の緩みは隠せない。オルマが気に入らないのも頷ける。

それとは対称的にむしろ慣れたようにしてるのはダンタリオン。

「私はあなた方の笑顔を守りたかっただけです。褒められることは何もしてません」

などと偽りの謙遜を囁ますと、黄色い声援があちこちに零れ落ちる。

こちらはこちらでデレデレしてないのがムカつく。

エルフ特製の果実酒も、その味を堪能されることなくオルマの体内に取り込まれてしまう。

それでも収まらない気持ちは、クダイに向くわけなのだが……

「こおらクダイ！あんらも付き合いなさあ~~~~い！」

「飲み過ぎだよオルマ」

「ぬわぁにいつれんのよぉ〜！あらしらってらまにはのみらいわよ
お~~~~」

半分は大袈裟に絡んでみる。

淋しい女のなんとやらで。

「あのう……………」

その絡みも中途半端なところに、シトリーが声をかけて来た。

「シ、シトリー！」

首を締めるオルマの腕を振り払い、何事もなかったように笑顔になる。

「取り込み中ならまた後で……………」

「ぜ、ぜ〜んぜん！むしろ暇してたんだよ！」

「でも……」

シトリーはクダイを介してオルマを見る。

どう見ても釣り合わないカップルなのだが、彼女にとってはそうは見えないらしい。

「あ、オルマは酔っ払ってんだ！だから大丈夫だよ！」

「それならいいんですけどお」

「ととところで僕に何か用？」

「はい。昼間のこともあったので、いろいろお話したいなあって」

この世に生を受け早、十七年。女の子からの誘いは初めてだ。

シトリーの愛らしい笑顔に、どうして断ることが出来るだろうか。

「い、行こう！」

「あ、は、はい」

シトリーの腕を掴んで“さりげなく”オルマから逃れた。

当然、あからさまな逃れ方は、人生の先輩であるオルマに要らぬモノを気付かせてしまった。

「ふうん……そういうことか」

真っ赤な顔のクダイと、少し朱の射したシトリー。淡い恋心が丸見えだった。

「恋……か……」

大分してない……そう思った視線は二人の親友を捉える。

女性に不慣れな男と女性の扱いを熟知してるかのような男。

「ハア………情けない」

刹那、溜め息漂う先を小さい人形が通り過ぎる。

「ちょっと」

「……………」。

小さい人形の魔王。今のオルマにはいいオモチャにしか見えない。

「あんたさあ、恋とかしたことあんの？」

……………

……………

……………

……………

……………

何の話か理解しようと思死だったのかもしれない。百歩譲って、オルマの話を聞こうと思ったでしょう。それで返って来た言葉は、

「くだらん」

だった。

「何よ、恋くらいしたことあるでしょーよ。教えなさいって」

「聞いてどうする？」

「別にどうって……………」

「オルマ」

「な、何よ」

真剣な表情かどうかは定かでないのだが、声色は真剣だ。そんなに深く聞いたわけじゃないのだから、軽く返してもらえばよかった。

あわよくば根掘り葉掘りとは企んだが。

「組織の頂点に立ったことはあるか？」

「……………何それ？」

「余は魔王。魔族の頂点に立つ。恋をする時間など許されなかった。だが……………」

「……………。」

ゴクリと生唾が喉を通る。

「女を抱いたことくらいはある」

そう言って人込みに紛れて行った。

「……………今のつて……………」

恐れ多くも魔王。

「まさか……………見栄？」

見栄を張るのも仕事だろう。

何を話せばいいかわからなかった。ダンタリオンなら何を話すだろうか？

クダイはちらちらシトリーを見る。

人気の無い川の^{ほとり}辺。雰囲気は申し分ないのだが。

「あ、は、話つて……………何？」

「う、うん……………」

初対面で愛の告白は期待出来ない。

それでもこのシチュエーションには満足だ。

ぎこちないのを見れば、ひよっとしたらシトリーも同じなのかもしれない。

「カイル様から聞いたんだけど、クダイは他の世界から来たってホントなの？」

「う、うん、ホントだよ。ケファノスとダンタリオンに無理矢理にね」

「クダイの世界ってどんなところ？魔法とかあるの？私達みたいなエルフとかいる？」

瞳がキラキラしてる。

強い好奇心を抑えられないのもわかる気がする。

「魔法は無いしエルフも存在はしないけど、なんて言うんだろ……
…文明とかは発達してるかな」

「ブンメイ？」

小首を傾げるその仕草と表情が愛らしい。

「遠く離れた場所にいる人と話が出来たり、手紙を送ったり……」

よくよく考えてみると、若干十七歳の少年が口頭で説明するには世界が複雑過ぎる。

シトリーがうんうんと頷いてはいるが、やり切る自信が失せていく。

「まあ……一言では説明しきれないかな……」

戦いでも不甲斐無く、会話にも花が咲かせられないことにつくづく自分が嫌になる。

「そんなにすごい世界なの？いいなあ……………」

「え？」

「私…………ずっとエルフの国にいるから…………この世界こともよく知らないの。だから……………」

「シトリ……………」

「だからクダイが羨ましいかも」

何かを言いかけた雰囲気だった。言わなかったのは、口にすればクダイが困ってしまうのではないかと感じたからだろつ。

「シールドモナスも倒したし、アイニ様からバランスブレイカーも受け取っちゃったね。たった一日なのに……………なんか長い期間一緒にいたみたい。なんか不思議」

そうだ。目的はあつという間に達成された。同時にそれは、すぐにも旅に出なければならぬということ。

ケファノスの言うことが正しければ、サン・ジェルマンのやろうとしていることには魔法具がいる。バランスブレイカーの様なとびつきの性能を持つ。

シールドモナスが倒されたことはすぐに気付くはず。そうすれば次に狙われるのはバランスブレイカーを持つ自分達。いつまでもここにはられない。

「ねえ、いつ旅立つの？」

「それは……僕にはわからないよ。ケファノス達が決めるんだろ
うし……出来るならもう少しエルフの国にいたいけど……」

こんな風に毎日シトリーと話していたい。

楽しい会話はクダイには微笑んではくれなかった。

「ご、ごめんなさい。こんな話なんかつまらないよね。ダメだなあ、
私」

クダイの困った顔を見て、罪悪感を感じてしまう。

「クダイには世界を救う使命があるんだものね」

「世界を……？」

「だってそうでしょ？ジャステイスソードを使える初めての人間な
んだから。サン・ジェルマン伯爵を倒しに行くってことでしょ？」

「……うん、サン・ジェルマンもだけど、僕の友達もなんだ」

「お友達も……倒すの？」

「サン・ジェルマンの手下になって悪さしてる。だから僕が……」

やなぎやいけないことがいっぱいある。やらなぎやいけないことの
為にやなぎやいけないこともある。

「シトリー……僕、君に会えてよかった」

「ク、クダイ……？」

「友達を止める為。それしか考えて来なかった。だけど、この世界を守りたいって、君に会って思ったよ。君が言ってくれなかったら、戦う意味なんて考えなかったと思う」

ダンタリオン達に言ったら笑われるだろうか？一日しか滞在してない国で出会った少女に恋をして、その娘の為に戦いたいと言ったならば。

「ありがとう、シトリー」

「そ、そんな！私何も……」

夜空を見上げるクダイの横顔に胸がキュンとした。

それはシトリーにとっても初めての恋。

「戻ろう。明日から剣の稽古なんだ」

そう言っと、クダイは自然に手を差し出し、

「うん」

シトリーも手を取った。

破裂しそうな心臓を互いに隠して。

第三十章 陰と陽 中編

「青春ですねえ」

「きゃっ！」

自分の世界に入っていたオルマは、声の主がダンタリオンだとは思わなかった。

「な、ダンタリ……………」

「しーっ！まだ二人共近くにいますから」

「むぐむぐ……………」

宛がわれた手を振りほども、

「い、いつからいたわけ！？」

「人の恋路を邪魔する趣味があつたとはな」

「シ、シャクス！あ、ああアంతまで！？」

オルマがしていたこと。それは他ならぬ覗きという小さくも欲望に引つ提げられた罪。

つまり、クダイとシトリの秘め事を傍観していたのだ。

最悪なことに、何があっても見つかつてはいけない者に見つかってしまった。

「感心しませんよ？一市民に戻ったとは言え、かつては聖騎士を目指した者。ノゾキだなんて……………」

「ち、違うつ！あたしはただ、クダイがあのエルフの娘に騙されな
いか気になっただけだ！」

「ほほう。なぜあなたがクダイを心配なさるのです？恋愛は自由だ
と思いますが？」

このバカ男……………そう怒鳴ってやりたいくらいニヤついている。

「よもやクダイに恋心を抱いてるわけではあるまい」

「変なこと言わないでよ！だいたいシャクス！アンタまでダンタリ
オンの悪巧みに加担するとは思わなかったわ」

「お、俺はクダイがダラけているんじゃないかと心配してだな……
！」

「言い訳はよろしくないわねえ。聖騎士シャクスもノゾキをしたこ
とに変わりはないもの」

「オ、オルマ！」

ダンタリオンに口では敵わない。なら矛先は口下手なシャクスしか
ない。

「ま、なんにせよクダイにとって戦う糧になればそれに越したこと
はありません」

異世界に連れて来た責任がある。平和な世界に生きる時間を奪ってしまったのだ。恋をすることで少しでも前向きになつてくれるのなら、応援してやりたい……………ダンタリオンのささやかな気持ちだった。

「だがエルフはまずい。人間の寿命の先まで生きる種族だ。歳の取り方も……………クダイが老人になつても、あの少女は今とあまり変わらぬ姿のまま。望ましい恋ではないだろう」

シャクスはシャクスなりにクダイを想っている。

「心配ないさ。戦いが終わればクダイは自分の世界に帰ってくんだろうし。それまで誰かを想うことで生きる力になるなら……………」

いつかクダイは居なくなる。そう考えると、オルマの胸は穴が開いたようだった。

恋ではない。それは言い切れる。聖騎士を諦めてから一人で生きて来た彼女にとって、クダイは仲間であり、また弟なのだ。世話が焼けるから尚更に。

「先は長いんです。いつかの話はやめましょう。彼は今は大切な仲間。それでいいではありませんか」

最後に上手くまとめくれるのは、やはりダンタリオン。

彼の言葉に、オルマもシャクスも納得した。そう想うことで、自分達も明日へ行けそうな気がしていたから。ただ……………丸い月だけはそれを否定するように怪しく輝いていた。

朝。起こされたのはシャクスの方だった。

剣の稽古をやると言ったのは自分だが、あまりの早起きとクダイのやる気には抵抗を感じずにはいられなかった。

とは言っても、隙を見せるようなことはしない。徹底的に鍛え上げる為、クダイの気持ちを凌駕する勢いでいる。

「甘いっ！」

訓練用の木刀を借り、二人は打ち合う。

シャクスの木刀は何回も打ち込まれたクダイの腹に入る。

「ぐはっ…………ぐ…………」

「何度言ったらわかる！相手の肩の動きで剣の軌道を読め！何かアクションする時は、既にどうアクションするか頭で考えてあるものだ、それさえわかってしまえば無駄に体力を使う必要もなくなる！」

「も…………もう一回だ！」

今日は何度やっても結果は見えている。一時間やそこらの稽古で見違える成果は望めない。

それでもシャクスに挑むのは、シトリーへの単なる恋心なんかではない。

『世界を救う』

戦う意味、剣を振るう意味を見つけたクダイの中に、誇りと言おうか
勇氣にも似た芽が生まれていた。

「行くぞシャクス！」

「度胸だけは認めてやる」

果敢に聖騎士に挑む少年を見守る者もいる。

「ふわぁ……おはよ」

「おはようございます。あなたにしては早起きですね」

オルマとダンタリオン。

「あれだけ大きな声でやられたら寝てらんないわよ」

「まあそうなんですけど……でも、あのシャクスに怯むことなく向かって行くんですから、タベのことは彼に大きな力を与えたみたいですね」

地位も手に入れ、クダイほどの若さもない。自分達はこれ以上の成長は望めない。

それだけに、クダイの真剣眼差しが心地よかった。

「いゝんじゃない？ま、初恋が実ることはないだろうけど」

本人が言ったわけではないのだから、言い切ってしまうのは名誉に

傷がつくというもの。だがわかってしまつたのだからしょうがない。

「そついやケファノスは？」

昨夜、絡んでから見てない。

「さて？私に聞かれてもわかりません」

ダンタリオンも見えない。

「まったく………出発の準備しといて、あたし探して来るから」

予定してた時間を極端に削減し、一日で事が済んだのだ。ならば一日でも早く輪廻の塔に向かいたい。

忙しくはあれど長閑な朝。それが汚されようとは誰も思わなかった。

「カймを？」

アイニの部屋に招かれケファノスは頼まれていた。

「ハーフェルフのカймは、この国では肩身の狭い思いを強いられ

る。そんな不憫な思いをさせてしまふなら、いつそお前達に着いて役に立たせてほしい」

なんとも雑な言い方ではあるが、カイクを想つての言葉だ。

連れて行くのは構わないが、本人の意見も聞かねばならないだろう。

生き死にの付き纏う旅をするのだ、肩身の狭い思いをしてる方がいいことだつてある。

「連れて行つてくれ。剣も弓も使える。約束する、足手まといいはならない」

ケファノスが口を開く前にカイクが答えた。

「この先、昨日のようになんでも簡単に事が済むわけではない。昨日はシュードモナスの油断もあつただろう。もちろん、シャクスの実力もあつた。シュードモナスはああ見えてもレベルの高い魔族だ。それはお前達エルフが身を持って知つたはず。カイク、貴様がいかに優れた戦士であろうと、魔族を相手に戦うには力不足だ」

呆気なくシュードモナスをシャクスは倒したが、エルフ族はそうではない。

カイクが救いを求め人間を頼つたのだ。そして城を残し周囲は戦火の痕。

「シャクスとダンタリオンが特別なのはわかっている。それでも一緒に行きたいんだ。エルフを救つてくれた君達の力になりたいんだ」

「……………」

じっくり来ない頼み事だ。アイニもカイクも本気なのだろうが、いまひとつ言葉に力が無い。

「何を悩む必要がある？サン・ジェルマンと戦うのなら人数がいた方がいいではないか」

「アイニよ、余はまだしもクダイ達は世界を救う為に戦っているのだ。貴様らの事情で着いて来られても迷惑だ」

きっぱり言ってやった。

カイクを外に出したい理由。それは、

「シメリーだったか……彼女は貴様の娘だそうだな？カイクと相思愛がそんなに気に入らぬのか？」

「ケファノス……やめてくれ。俺はハーフエルフ。種の血を重んじるエルフと一緒にいるべきではないんだ。頼む、死に場所が欲しいんだ……」

バタンッ！！！

「誰だ！？」

ドアが開き、アイニが叫んだ。

「黙って聞いてれば……」

つかつかとカイクに詰め寄る。

「オルマ……！」

「死に場所って何よ！」

「い、いや……………違うんだ、そんなつもりで言ったわけじゃ……………」

「何が違うつてわけ！？言っておくけど、私達は死に場所を探してるわけじゃないのよ！生きる為に戦ってるの！バカにしないで！」

失言では許されない。

「待てオルマ」

過熱したオルマの心。わかる。ケファノスは抱いたことのない感情に戸惑いながらも、それに従ってみたい。人間なら当たり前前に所有している不可侵の想い。

「カイク、なぜ自分の運命を変えようとせんのだ」

クダイにエルフの事情に口を出すなど言っておきながら、こんなことを言った自分が信じられなかった。

「そんなに死に場所が欲しいなら、勝手に探しな！あたし達を巻き込むないようにね！」

同情はいらないだろう。

「行くよ！ケファノス！」

誰の為に世界を救うのか。

「エルフも堕ちたものだ」

ケファノスが感じた堕情。今のエルフは、主を失い暴走する魔族となんら変わることはない。

第三十章 陰と陽 〱後編〱

「お母様！カイル様が旅に出るって本当なんですか！？」

どこから聞き付けたのやら。シメリーにはカイルが旅立ってから話すつもりでいたのだが。

「落ち着きなさいシメリー！」

「どうして！？どうしてカイル様が……………」

母親として娘を思えばこそ。王族でさえなかったなら、カイルとの恋を取り上げることなどなかったのかもしれない。しかし、シメリーは王族。ハーフェルフのカイルとの恋は、民の反感を買い支持率の低下を招き兼ねない。

ただでさえ、シュードモナスに手を焼き、揚句の果ては人間に救ってもらってしまった。

威信を保つ為にも、“ケジメ”が必要なのだ。

母親である前に女王。アイニの気持ちはシメリーには理解出来なかった。

「これはカイルが決めたことなのです」

「嘘よ！どうせお母様がここぞとばかりに追い出そうとしてるのよ！」

「口を慎みなさい！」

「私、カイル様に着いて行きます」

「シメリー！」

「エルフであることの誇りはあります。わかります。でも、エルフでない種への偏見やハーフエルフというだけでの差別にはもう耐えられません！」

若さ故に障害が高ければ高いほど情熱が燃える。母親であるアイニにでさえかつては通りすがった道。

情熱の名の下に疑いも無く自分を信じられた。目に見えないものへの憧れがそうさせてしまうのだ。

ただ………どんな力を持ってしても砕くことは不可能。時間と共に灯が消えるのを待つか、信じたものに裏切られるか………だが同じ女としては、いつまでも燃えていてほしいとも思わないでもない。

「あなたは王族。もっと自覚を持ちな………」

「後を継ぐのはシトリでいいじゃない！私は妹だもの！関係無いわ！」

無意識だった。シメリーが言った瞬間、その頬をぶってしまった。

「シメリー………わかってちょうだい」

当然の行動だとみんな擁護してくれただろう。それでもシメリーには納得のいく行為とは受け止められなかった。

「わからない………ハーフエルフの何がいけないの………？私………城を出るから！」

「シメリーー!!」

去ろうとする娘を止める母親の力はもうどこにも見えない。
そして、もう一人。

「アイニ様……………」

「シトリー……………今の話……………」

シトリーはシメリーの顔を見て決心する。

「私も……………私もクダイ達と行きたい!」

「な……………何を……………!!」

「クダイ達と一緒に世界を救いたいのに!」

「お前まで馬鹿なことを言うのかい!?!」

「この世界に住むのは人間だけじゃない!私達エルフも住んでるんだもの、力を貸すのは当然だと思っの!」

「ゆ、赦しません!そんなことをあなた達がしなくてもいいのよ!」

「よくないわ!私達は誇り高きエルフの女王アイニ様の娘。外の世界を知らずしてどうして王族と言えましよう?」

自由と恋を手に入れるには取って付けた理由ではあるものの、その説得力は太刀打ち出来ないくらいのものであった。

二人の娘が同時に反乱を起こしたオトシマエは、どんな形を取れば自分自身を納得させられるのか、模索するだけ無駄だろう。

シトリーとシメリーの悪無き探求心……いや、恋心がクリクリとした瞳に表れているからだ。

快晴。危険な旅に行かせるには、せめて天気が笑顔の時の方がいい。

寿命縮まる深い溜め息は、誰に従うでもなく宙を舞った。

稽古をいきなりやめさせ、荷造り………と言ってもたいした荷物ではないが……を急かし、そして珍しく憤慨するオルマは、今のクダイ達には強敵外ならない。

とにかく言う通りにするしかない。

「何もさもさしてんのよ！」

「い、いや……ちょっとトイレ………」

生理現象にまでケチをつけられ、クダイは助けを賢者様と聖騎士様に求めてはみたが、あっさりと無視されてしまった。

天気は青々として文句はない。こんな日に何を怒っているかなど、聞く勇気のある奴はいない。

「トイレなんか我慢しなさい！」

「だ、だって……………」

目的はトイレだけではない。公衆を気にかけるような世界でもないし、外に出れば自然が両手を広げて待ってるような世界。我慢して後でやることも可能だ。

ただシトリーに別れの挨拶くらいはしたかった。

初恋への挨拶まで止める権利はオルマにだってない……………はず。

「だって何よ？」

「……………シトリーに最後に会っておきたくて……………次、いつ会えるかわかんないじゃないか」

どうかわかって下さい。そんな念を送ってはみるが、

「ダメよ」

「オ、オルマあゝ」

「あたしの言うことが聞けないのかい！？」

「……………うう」

気の毒だとは思つが、こうなると誰も手をつけられない。

「わかったよお……………」

「わかったならいいのよ」

一目でいい。会いたかった。

「ところで……………」

話を変える魔法。男共三人はびくつとしたが、

「ケファノスは？」

ほっと胸を撫で下ろした。

「余にまだ何か用か？」

呼び出したのは再びアイニ。

カイルのことなら連れて行く行かないはクダイ達次第。特段、その件で話すことはない。

「もう行くそうだな」

「さっきの一件があるからな、オルマが聞かないのだ」

「……………」

「さっきの話なら余は何も言えん。エルフの事情もわかる。だが、カイルの自虐的な言葉には応えられん。余の目的は肉体を取り戻すこと。それだけだ。頼み事をするならクダイ達にすることだ」

旅の中心は自身には無い。

「それでも聞いてほしい」

疲れた様子で、アイニは語り出した。

「シトリーとシメリーがお前達に着いて行くそうだ」

結構な話だが、それは前座に過ぎないのはわかってる。聞き手なんて柄ではないとは思っただが、聞いてやらんでもない。

「言ったはずだ、余に頼み事しても成立はせん。着いて来ないよ
うに仕向ける気も無い」

「承知している。わらわも本人達の意志を尊重しようと思う……
そうするしかないのだ」

親の立場とは複雑なものようで、何があつたかは知らないがその
苦勞と疲勞だけは伝わって来た。

「シトリーとシメリーは、わらわの実の子ではない」

「……………」

「二人はわらわの姉の子。わらわの本当の子は……………」

「……………カイルか」

「人間との過ちを犯したのはわらわ。一夜の過ちが、長い年月を過ぎてもわらわを苦しめる」

「なぜ二人を自分の子だと偽るのだ」

「女王の子がハーフェルフであるなど、決して赦されることではない。それゆえに隠して来たのだ」

そんなことだろうとは思った。カイルへの理不尽な厳しさはやはり理不尽であつたのだ。

「カイルは知らぬのか」

「言わぬがカイルの為。過酷な運命を背負わせてはしまったが、全て親心。無論、シトリーとシメリーも我が子同然。愛しておる」

「それで、余に真実を打ち明かした真意はなんだ？」

「どうか……………」

言葉を詰まらせ声が小刻みに震えてる。

外を向いて窓に手を当て、

「どうかシトリーとシメリーを……………そしてカイルのことを……………」

振り向いたアイニは泣いていた。ヒステリックだとばかり思っていたアイニが。

「よろしく頼みます」

言葉を女王から母親に変え頭を下げた。

「余が責任を持つと思うのか？」

「他に頼める者がいないのです。カイクに死に場所ではなく、生きる場所を与えてあげてほしいのです」

断ることも出来た。そうすべきなのかもしれない。

「それと、シトリーとシメリーは治癒魔法と多少の四元素魔法は使えるでしょう……」

「……………この身体だ、サポート出来る範囲でなら」

自分がわからなかった。面倒を押し付けられ、それが嫌ではないことに。

城門のところではケファノスを待っていると、マントを羽織り杖を持ったシトリーとシメリーが駆けて来た。

「待つてえゝ！」

元気な声を上げるのはシメリー。

少しテンポを遅らせ、

「クダゝイ！！」

「シトリー！！」

恋に時間はいらぬ象徴のような二人。深夜の浅いやり取りを知っているだけに、オルマ達は苦笑いするしかなかった。

なんだか長い別れを強いられてたように懐かしむ二人。青臭いとはこのこと。

「その格好は？」

どう見ても出掛ける服装。旅支度。

「私達もクダイ達と行く」

「いつ！？」

「お願い、連れて行って！」

「で、でも……………」

クダイは三人の反応を見る。

ダンタリオンもシャクスも困った顔をしていると、

「あたし達は遊びに行くんじゃないんだよ。子供は帰りな」

オルマが冷たく言った。

「わかってます。だからなんです。魔法も使えますし、きっとお役に立てるか……」

「甘ったれないで。なんかあっても守ってやれるとは限んないのよ。迷惑だわ」

「そんな……」

シトリーもこんな言われ方をするとは思わなかっただろう、今にも泣き出しそうな顔をしている。

クダイも何も言えなかった。一緒には行きたい。でも守ってやれる自信もない。かと言って、オルマのように来るなど冷たくする優しさもない。

「彼女達なら俺が守る」

「カイク……」

オルマの顔が曇った。不機嫌の原因がカイクなのだとわかったはいが、あの不機嫌さは勘弁してもらいたい。

「さっきの言葉は君達に対する侮辱も同然。詫びて済まそうとは思わないが、どうか仲間に入れてほしい」

「しつこいわね」

「ああ。どうしても手に入れたいものがあってね」

シメリーも初耳のようだ。いつもカイムの傍にしながら、欲しいものがあつたなど知らなかった。

「明日を掴む力。自分の明日を掴みたいんだ。君達と行けば見つけられる気がする」

「ア……アンタねえ、あたし達はサン・ジェルマンを倒す為に……」

「だからだよ、オルマ。生きる意味なんて考えもしなかった俺だ、世界の為なんて偉そうなことは言わない。でも、明日を生きてみたいんだ。当たり前に来る明日に意味が欲しいんだよ」

「甘いわ。甘すぎよ、アンタらエルフは」

なんとわれようと食い下がる。きつと。

オルマとて世界の為なんて思っていない。町を焼いたサン・ジェルマン達に復讐したいだけ。

その結果が世界を救うだけの話。

だから大義名分なんて要らない。感情が思うがまま。その行き先がどこであれだ。

「自分の身は自分で守ること。それが最低条件よ」

ツンとした態度だったが、カイムの言葉にむしろオルマが何か感じたのかもしれない。

「カイク、シトリ、シメリー、貴様らは感謝するのだな」

「ケファノス！」

いつも通りスーッと“歩み”来て、高性能なブレーキみたいにピタリとカイクの前で止まる。

「余は愛などというものは知らないが、少なくとも貴様らが深い懷の中で護られていたのだということくらいはわかる。エルフの国を離れる以上深き懷の守護はない。責任の全ては己にあることを肝に命じておけ」

ケファノスまで賛成するのでは、クダイ達に拒否する権利は無くなってしまった。

仲間が増えることは心強い。問題はそれに伴う様々な………考えても始まりそうにもない。

「話がまとまったのなら………」

ダンタリオンが三人を見つめ、

「ようこそ、エルガム司法騎士隊へ」

「ちょ、ちょっと待て！いつから司法騎士隊になったんだ！」

噛み付くのはクダイだけだとおもったが、譲れない“モノ”があったのだろう、噛み付いたのはシャクスだった。

「おや？何かご不満ですか？」

「当たり前だ！！お前の部下になんてなれるか！！」

「口の悪い家来ですねえ」

「だ〜から〜……」

「クダイ、あなたの剣の師匠でしょう？なんとか黙らせて下さい」

爽やかに爽やかを重ねたくらい爽やかな笑顔だ。

「な、なんで僕が！！だいたい、僕だってダンタリオンの部下は御免だね！」

「困りましたねえ、恋をしたせいか生意気になってしまつて」

ニコリとしてシトリーを見る。

鈍感なのか圧倒されてるのか、キョトンとしてるだけだが。

「あわわわわ！へ、変なこと、い、いい言っなよ！！」

「では行きましょうか、目的地までは長いですよ」

ピシッと指を差し、目指すは遙か輪廻の名のつく塔。

「待て！ダンタリオン！俺はお前の部下になんてなった覚えはないからな！」

「ぼぼぼ僕は、ここに恋なんかしてないぞ！かかか勘違いしてもらっちゃこままま困る！！」

子供。以上でも以下でもない。

「なんなのよ……………一体」

オルマは頭を痛めたが、カイク達は笑っていた。

いつ命が危険に晒されるかわからない旅。

新しい仲間が増えた時くらい、こんな日があってもいい。

第三十一章 人に従わぬもの

「シールドモナスの奴め……醜態を曝しおって！おかげでバランスブレーカーが奴らの手に……」

アスペルギルスは怒りに身を任せ部下達を殺していた。

「バランスブレーカーを奪われたところで、世界構築の魔法具はまだ四つある」

「サン・ジェルマン……」

「正確には時間構築魔法具、通称ツールか」

「たいした余裕だな。魔法具を持って来いとほざいたのは貴様ではなかったか」

「最終的に五つが私の元に集まればそれでよい。経路までは問わん」
時間を旅して来た男。アスペルギルスが本気で信用してるわけはなく、多分サン・ジェルマンも同じ。

主あったケファノスがいなくなつてから、人間との戦争は膠着が続いていたが、サン・ジェルマンが現れ事態は有利にことが運んでいる。腹の探り合いでも、利用価値があるうちは大いに利用させてもらつて。

「時にあの小僧はどうしてる？」

「ヨウヘイか？奴ならダークエナジーを制御する訓練中だ」

若いせいか、最近こちらの要求通りの成長を見せている。むしろ期待以上だ。

「気になるのかね」

「いや…………たかだか人間の小僧一人……………」

そうは言ったが、実際サン・ジェルマンが実権を握ってるのが現状。それに加え、得体の知れない生意気な異世界の人間が幅を利かせる始末。

アスペルギルスは極めて不愉快だった。

「シユードモナスがやられたんだって？」

噂をすればなんとやら。生意気な異世界の人間が黒衣を纏ってやって来た。

「魔族の四天王って聞いたからどんなもんかと思ったけど、お前ら案外たいしたことないんだな」

「黙れッ！！」

やって来た早々の暴言に、アスペルギルスはマントの袖先から刃を出してヨウヘイの喉元へ宛てた。

「なんだよ…………殺るのかよ」

「シユードモナスの失態は認めよう。だが、貴様に愚弄される言われはない！」

「愚弄されたくないなら、さっさと与えられた任務を熟して来いよな」

「ふざけたことを！いつから貴様は偉くなっただ？！我々はサン・ジェルマンと協力してるのだ、貴様は生かされてるだけだということを忘れるな！」

「……………フン！負け犬の遠吠えにしか聞こえない」

「小僧……………！！」

我を忘れ本気になるところだった。サン・ジェルマンの殺気を感じなければ。

「そやつは計画に必要な存在。余計な真似はせんことだ」

「……………チッ」

尋常じゃない殺気だった。今はもう失せはしたが、まだ残留している。やはり信用してないのはお互い様のようだ。

「ヨウヘイ」

「な、なんだよ」

「アスペルギルス達は我々の協力者だ。揉め事は感心せん。よく考えることだ」

さすがにサン・ジェルマンに凄まれては返す言葉もない。

「わかったよ。別に揉める気もねえし」

窓の外は赤と黒の地下世界。

地上にまでそびえる塔が見える。

人間の住む地上と魔族の住む地下を繋ぐ門のような役割を果たす。

このまま行けば、いつかクダイとも戦うのだろう。その時、クダイにとっては最初の試練……ヨウヘイに会う為の。

「なあ、サン・ジェルマン。世界だか時間を構築する魔法具って、他にどんなのがあんだよ？」

「時間構築魔法具……ツールだ。それがどうした……」

「クダイ達が手に入れた時間構築魔法具バランスブレイカー……世界のバランスを崩すアイテム。他の四つはどんな力があるんだ？」

力。力。欲しい。手に余る力が。ダークエナジーをどんなに手にしてもまだ満足出来ない。

少年の心は純粹だった。

そう……純粹な悪。

「ク、クダイ……」

「な、ななな何？」

「こ、これ美味しいね」

「う、うん」

わかりやすいクダイとシトリーの二人の態度。本人達はひそかな想いを隠し通してるつもりなのだろうが。雲一つ無い空のように見透かすに苦労はしない。

「干し肉がそんなに美味しいか？」

そう言ったカイムは、察するに恋愛には疎いクチだろう。

「き、きつとみんなで食べるから……」

恋した相手が悪い。シメリーは鈍感なカイムに自分の気持ちに気付いてほしいのだが、まだ道のりは遠い。

「ピクニックじゃあるまいし、大丈夫なのかあんな調子で」

シャクスの不安も尽きない。

「恋は人を大きくします。年齢に関係なく。何かを守ろうとする者は守ることの意味を知らなければなりません。クダイがシトリーを想うのであれば、この恋は必然。剣はあなたが教えることは出来るでしょう。しかし心までは思うようには育たない。それを助けてく

れるのは彼女しかないのですよ」

棘のある言い方だったかもしれない。

「残酷なことさらつと言っただね……………アンタ」

真意はオルマの理解を超えていた。だが、ダンタリオンが言うことは正しい。

「大丈夫です。私達がいるんですから」

してやれることに手は尽くす。

仲間である限り。

「時にケファノス。サン・ジェルマンが探してるだろう魔法具ですが、バランスブレイカーの他にも？」

ダンタリオンもバランスブレイカーの噂は知っていたが、アイニの言葉は魔法具が一つではないことを示唆していた。

他の魔法具が気になる。

「世界を構築する魔法具……………正しくは時間構築魔法具。古きは“ツール”と呼んでいた……………」

ケファノスが言うには時間構築魔法具、通称“ツール”は全部で五つ。

世界のバランスを崩し世界を崩壊させる短剣……………バランスブレイカー

時間の流れを操作するコンパス……シュートプレート

光と闇を生む鏡……ディサグリン

連鎖の循環をする杯……時の聖杯

生命を宿す炎……ライフインライフ

この五つで時間が構築され、結果的に世界が存在するという。

「……他の四つも誰かが守ってるのか？」

カームが干し肉を飲み込むと、間を置いて言った。

「ツールの中で一番危険なバランスブレイカーだけは、昔からエルフが所有して来た。他のものについては……」

歯切れ悪く言うケファノスも珍しい。

「ダントリオン、まさか集めるなんて言わないだろうな？」

ダントリオンの部下であることを否定してたわりに、肝心なところはシャクスも彼を頼る。

「そうは言いませんが、出来るなら伯爵には一つたりとも渡したくはないのが私の本音でしょうか。まあ、在りかがわからないのであれば優先すべきは輪廻の塔へ行くことになりますが」

「ならそれでいいじゃない」

面倒なのか、投げやり気味にオルマは言った。

ツールだかなんだか知らないが、サン・ジェルマンに勝つことが大事なのだ。時間軸の融合にツールが必要なら向こうだって奪いに来る。その時に誰もサン・ジェルマンに勝てないのでは話にならない。

自分の周りの時間を凍結しているサン・ジェルマンに魔法は効かない。シャクスがいかに強くとも確実とは言えない。クダイも宛にはならない。どう考えてもケファノスに戦力になってもらわないと困る。

ケファノスの実力が定かではないにしてもだ。

「とりあえず、少し歩けばザンボル国だ。あそこは世界一大きい国。ツールの情報もあるかもしれん」

シャクスに皆が頷いた。

「でも大丈夫なんだろうね？」

「何がだ？」

「エルガムの騎士隊が先回り……………なんてことになってなきやいいけど」

オルマの言い分ももつともだ。

言われてみればクダイ達はまだ追われる身。

シャクスも少し考える。

この世界では、国に仕える者が大陸から大陸へ渡るには渡航許可証がいる。それを持たずして大陸を渡れば重罪。死刑にされても文句を言えない。

自分はクダイ達を追って成り行きで大陸を渡った。エルフの国

はさておき、エルガムの使いの者がザンボル国に協力を求めるとしてもおかしくはない。

その際、一緒に旅してることを知られれば……。

「ザンボル城より離れた町とか村でいいんじゃないのか？」

カイルとて事情は聞いている。

「そうしたいのは山々ですが、この近くの町や村は全てザンボルの騎士隊が常駐しています。城から離れている分、警備も厳しいでしょう。むしろ、城下の方が安心感が強く隙も多いはずですよ」

「灯台下暗し。自分の足元は見えないもんだ」

ダンタリオンを後押ししたのは、

「クダイ頭いいー！」

「へへ」

そのクダイを讃えたのはシトリー。

否定したとしても、“クダイ側”だったろう。

「……………つたく」

「成長じゃなく墮落しなきゃいいけど」

シャクスとオルマも愚痴らずにはいられない。

「うらやましいねえ……………ん？」

「カイク様のバカあゝ!!」

カイクに悪気はない。そうわかってるはずなのに、シメリーは我慢が出来ず叫んでしまった。

空は相変わらず晴天。恋は盲目。

出会いはいつも特別。その出会いの全てが人を成長させるのだろう。

でも、気付かず生きていけるのならそうしたい。

恋。

愛。

情。

成長の糧がそれだけではないことを。

この世は光と影の造物。心も例外ではない。

美しさに惑わされ、人は物事の本質を見失う。だから気付かず生きていけるのならその方がいい。

時間だけがいつも人の思惑に従わぬ。

第三十二章 裏切りの極意

「時間はいつも裏切る。どれだけの時間を重ね、どれだけこの身を擦り減らそうとも、時間はいつも裏切る」

男は月の無い夜空を眺め呟いた。

黒い仮面を付け、口元はあらわ。

黒いマントがより闇に同化して。

「どこまで旅をすれば果てを知るのか……………」

纏う黒い鎧は闇より深い。

想いは遠い自分の生まれた世界。遠すぎて場所さえも不確か。

「よくよく月を嫌うのだな」

「……………サン・ジェルマン」

人間でありながら人間の寿命を遥かに超えて生きている紳士。

歳の離れた二人は、よほど気が合うのか互いを邪魔にはしない。

「なぜ月を嫌う？」

「さあて、なぜだろうな……………俺にもわからん。ただ、心の隅。そう、心の片隅に追いやった悲しみを見透かされてるような気がするのかもしれない」

嫌い？もしかしたら月から逃げてるだけ……………そんな気がしなくもない。

「悲しみさえ糧にする。昔、誰かに言っただがな」

黒仮面は無意識に剣の柄に手を置いた。

「数多の世界はお前にまだ何も教えはしないのか……」

「教わることなど何も無い。全ては俺の支配にあるのだから」

運命は立ち向かうものではなく、壊すものだと言った男の瞳。
仮面の下の瞳は何を見ているのか。

「それにしても」

話を区切るようにサン・ジェルマンは、

「輪廻は本当にやって来るのだろうか？」

「そんなに心配か？」

「信用してないわけではないが、都合よく現れてくれるとは思えないだよ」

わかってる。自分と同じく時間を旅する者がいると知り、年甲斐もなく胸が踊っていると。

「来るべき時が来れば奴は現れる。無論、いつも会えるというわけではないが、この世界に来た時から予感がするんだ」

「予感……？」

「ああ。奴の生命の炎を肌で感じる。じりじりと俺を焼き尽くさんとばかりの熱いオーラ。同じ世界で出会った時は決まってこの感覚を覚える」

「まるで友でも待つような言い方だな。まあよい、時間構築魔法具の収集もある。楽しみは後に取っておこう」

黒仮面を残し、サン・ジェルマンはいなくなった。

「……………友……………か」

言われる通り、そう呼べなくもないくらいお互いを知っている。

「フツ、早く来い……………今度こそは決着をつけてやる」

魔王城から遙か先に微かに浮かび上がる塔。偶然か必然か、その名は輪廻の塔。

黒仮面の男のところから戻ったサン・ジェルマンを待っていたのはヨウヘイだった。

「あの男のところに行ってたのか？」

まるで恋人を責めるような声色で言った。

「月の無い夜にしか会えんからな。なるべく多く会話をもっとただけだ」

「何を話すんだ？別に話すことなんかないだろ」

「真理というやつだ」

ヨウヘイが黒仮面を快く思っていないのは知っている。

なんだかんだと理由付けはするが、心を読まれてしまうのが一番の理由だろう。黒仮面が月を嫌うのと一緒にだ。

もっとも、ヨウヘイより黒仮面の方が深みがあるが。

「どうもあの男は好きになれねえ」

「それはお前が子供だからだ」

「俺のどこが子供なんだ？」

「お前は闇の怖さを知らずに闇を好む。奴は闇そのものに身を置く。深層意識の中までを闇に染め、闇であろうとする」

何が違うのかヨウヘイにはわからない。というかどっちでもいい。頑張ったところで好きにはなれないだろうし。

「なんでもいいよ。俺には関係ないから。そんなことより、クダイ達がザンボルって国に入ったらしいぜ」

「だからどうした？」

「おいおい、あいつらは俺達を倒そうとしてるんだぜ？野放しにしとくのかよ？」

退屈なのだろう。顔に書いてある。有り余る力と若さを爆発させてやりたいと………魂胆が丸見えだ。

「時間構築魔法具を探すのが先だ」

「それはわかってるって。だけどシールドモナスを簡単に倒した聖騎士の実力は確かめておかないと」

「ヨウヘイ、私はお前の退屈を削ぐ為にこの世界へ連れて来たわけではない」

あの男が現れてから………黒仮面が現れてからサン・ジェルマンの態度は厳しくなるばかり。

サン・ジェルマン自身はもつと前からの知り合いらしいが、ヨウヘイにしてみれば沸いて出た憎たらしい存在でしかない。

アスペルギルス達でさえ黒仮面には近寄らない。滅多に姿を見せないで会いたくとも会えないのかもしれないが、やはり何か警笛のようなものが働くらしい。

己の勘が鈍さも疑ってはみたが、どう解釈しても“嫌い”という域を出ることはなく、黒仮面に関しては共感を求めるのは難しい。

「お前には大切な役目が待っている。今は我慢しろ」

このやり取りにもいい加減飽きて、

「…………チッ」

舌打ちをするのにも力がある。

身体に蓄積していくダークエネルギー。制御も申し分ない。

（欲しいものがあるなら力ずくで奪えばいい）

漲る力が彼の意識までも侵してゆく。

（盾突く奴は力で掀伏せばいい……それだけのことだろ）

力は制御出来る。どんな力でも。

しかし、人には制御出来ないものがある。

…………心。自分のものであるはずの心は、気付けば自分の手元には無い。

裏切るのは人ではない。

人はいつも自分自身に裏切られる。

第三十三章 遮断

「参りましたねえ」

ダントリオンは頭を悩ませていた。

ザンボル国に入り、いつも通り宿を探していたのだがどこも満室状態。知恵のある賢者様も、さすがにお手上げ。

「これだけ宿がありながらどこも満室とはな」

建ち並ぶ宿を眺め、シャクスは世界一の国を改めて感心した。

「お祭りならしかたないさ」

運がいいのか悪いのか、カイムの心境は……どちらかと言えば祭りに軍配が上がったようだ。

「でもザンボル（ここ）って魔族との戦争の拠点じゃなかったかい？戦争はまだ真つ最中どころか、これからもつと厳しくなるだろうに……なんでまた祭りなんか……」

オルマも祭りごとは嫌いではないが、戦争中に祭りとは……国の考えることはよくよく理解し難い。

「とにかく寢床は確保しないと……」

と、ダントリオンは言いかけて顔色を変えた。

「どうしたの？」

クダイが異変とも取れる態度を聞くと、

「エルガム司法騎士隊隊長ダントリオン、同じくエルガム聖騎士隊隊長シャクスだな？」

あつという間にトンガリフードを被った者達に囲まれた。

「誰だっけ？警備に隙があるだなんて言っただ奴」

「うゝん……返す言葉ありません」

オルマの皮肉も、今回ばかりは正当なるポジションを得られたようだ。

着ているローブの紋章がエルガムのものではない。シャクスが以前纏っていた鎧のもの、エルガムで見た国旗のものとは違うことは、クダイの記憶にもしかとある。

彼らはザンボルの“公務員”。予想した通り、エルガムの使いが先回りでもしてるのだらう。

「お前達に手配書が出ている。とりあえず着いて来てもらおうか」

当然逃げる。そう思ってクダイがジャスティスソードに手をかけると、

「クダイ、シトリー、シメリー、目を閉じろ」

ケファノスが言った。

三人はその意味もわからないまま、言われるがままにする。その瞬間、ざわめきが起き瞼を介して光が射し込む。

「今だ！逃げるぞ！」

ケファノスの号令にクダイと双子のエルフは反応して走り出す。

周りの者は目頭を抑え屈み込んでいる。ケファノスは何をしたかは明らかだった。だが、

「待つてよケファノス！ダンタリオン達が……………」

ダンタリオン達までもが目をやられていた。

「奴らなら上手くやるだろう。今はお前達だけでも逃げるんだ」

「そんなこと言ったって……………」

まさかダンタリオン達を捨て駒にするとは思わなかった。

「二人がエルフだと知られれば事態はもつと最悪になるぞ」

なんだかよくわからないが、言われた通りにするのが一番なのだろう。

シトリーとシメリーも同じ気持ちらしいが、何せ箱入り娘。エルフである不都合は知らないらしい。

「くそっ！」

クダイはシトリーとシメリーの腕を取ると、半ば強引にケファノスの後に続いた。

（必ず助けに戻るからな！）

どうか無事でいてくれと、今はそれだけが精一杯だった。

かつては罪人を牢にぶち込む役目を担っていた自分が、こんな形で牢にぶち込まれるとは思ひもなかった……のはシャクスだ。通気性のいい牢だからまだマシだが、じめじめしていたら発狂していたかもしれない。

「ケファノスめ！ やってくれたな！」

どうにも気が収まらず壁を叩いた。

魔法を警戒されてか、魔法が使えないように細工された牢の壁は氷のように冷たい。

「でも最善の策だったんじゃないか？ シトリーやシメリーがエルフだとバレてしまうのは厄介だろ」

カームがケファノスを庇うのは、どこか惹かれるものがあるからなのか。

「これからどうするんだい？ アンタの力を警戒されて魔法が使えないようにされてるし、武器は取り上げられてるし」

オルマの頼る先もダンタリオンになってしまふ。

この状況では何も出て来ないだろうが。

「待つしかないでしょうね。ケファノスもそのつもりでクダイ達だけを逃がしたんでしょうから」

「助けに来るつてのか？」

逃れたメンバーを考えると、シャクスはあまり期待は望めないと思つた。

「あの場はああするしかなかった。あなたならわかるはずです……シャクス。それに、クダイはあなたの愛弟子。信じて待ちましよう」

「フン、何が愛弟子か」

照れ臭いのか、それ以上シャクスは口を開かなかった。

「はあ……あたし達どうなるんだろ」

信じてはいるが、不安の方が勝つてしまふ。

せめて女の自分は別の牢に入れてほしい。オルマはそんな気持ちも溜め息に乗せて寝転んだ。

「まだ追って来やがる」

路地裏に隠れ、やり過ごすこと五回目。行く場所もないクダイ達は、ひたすら逃げるしかなかった。

「ケファノス、どうするんですか？」

シトリーが恐る恐る聞いてみた。

魔王の肩書きは健在らしい。少女にはの話だが。

「ケファノス？」

そしてシメリーも急かした。一晩中逃げるのは不可能だろう。かと言って一度町から離れれば、また戻って来るのは難しいだろう。

「ケファノス！」

クダイからも判断を迫られ、

「……………しかたない。あまり行きたくはないのだが、あそこしかあるまい」

そう言うと、一人移動を始める。

となれば、着いて行くしかない。

「シトリー、シメリー、行こう」

ダンタリオン達がいなくては、基本どうしたらいいのかわからない。
ただ、面倒なことになっていることだけは確かだった。

第三十四章 Her name is Sister

どれだけ眠っただろう。重い瞼をこじ開け、少しの間ぼーっとしていると傍らですやすやと眠るシトリーとシメリーが目に入った。

「起きたか」

そこへケファノスがやって来て、クダイの起床を待ち侘びてたような声のトーンを見せた。

「そうだ………僕達教会に………」

教会に逃げて来たのは、教会という領域は特別らしくここまでは追って来ないらしい。

おまけに教会とは言ったが、廃れた感が拭えないほど建物が古い。

こんなところに誰がいるんだろうか。そんな疑問はすぐに消えた。

「あらあゝ、まだ寝でればいいのにいゝ」

若いシスターが、バイブルを小脇に抱えて立っていた。

「い、いえ………」

ベッドの上ならまだしも、教会の長椅子の上ではそうそう安眠は出来ない。

「今、食事の用意すつからちつとばかり待っててける」

「……………」

見事ななまりっぷりに返す言葉もない。

「んん……………」

「ふわあ〜い」

なまりが目覚ましになり、シトリーとシメリーも目を覚ました。

「おはようさん。よく眠れたかし？」

全く愛想よいシスターは、教会の奥へと消えて行った。おそらく、奥が母家となってるのだろう。

「……………」誰だっけ？」

教会に来たのは覚えている。しかし、シスターを見た記憶がクダイにはなかった。

「わかんない。シメリーは？」

シトリーがシメリーへバトンタッチする。

「二人が知らないのに私がわかるわけないよお」

三人の記憶媒介は決して不良品なんかではなく、一週間前の朝飯を言えるくらい高性能だ。だから疲れていたとしても、全員が忘れるなんてことは天文学的にありえない。

起きたばかりのシトリーとシメリーも、やはり廃れた教会を見回す。

これだけの城下町でありながら、この廃れた建物が教会としての機能を担っているとは思えない。

「タベ我々は、ここが廃墟であろうと判断して飛び込んだのだ。直後、貴様達は眠り込んで今に至る」

なんともわかりやすい説明をケファノスがしてくれると、頭の回転も冴えて来たのか、「ああ」と納得出来た。

「どうやらここは彼女一人で暮らしてるらしい」

「話したのぉ？」

シメリーがもう一回欠伸をして見せた。

「まさか無視するわけにもいくまい」

そうは言うが、シスターがケファノスを見た時の反応が気になった。

「みなさん、朝食ができません。こつらへどうぞです。あつ、小さい“テンス”さんもどうぞ」

テンス………天使と言いたいのだろうか、聞き慣れない“なまり”に違和感があるが、空腹には勝てない。

「ご馳走になろうか」

クダイが言うと、双子のエルフは頷いた。

「ほうでなすったかあ。それは大変なことて」

無実の罪で追われ、仲間が囚われたことを説明してのシスターの反応だった。

「シスターはお一人でこの教会を？」

残ったメンツでこんな上品な言葉を発せるのはシトリーだけ。

ダンタリオンの代わりを務めてもらえるのはケファノスもありがたかった。

「はい。わだすは神に仕えてまだ日が浅いですが、日々精進します」

「神父や他のシスターはどうしたんですかあ？」

「ここは元々廃屋だったんです。だから、始めっからわだす一人なんですよ」

シメリーにスープをよそってやった。

具はあまり入ってないが、味はなかなかのもの。悪くはなかつ

た。

「元々廃屋って……両親とかは？」

クダイが流れるには当たり前前のことを聞くと、シスターは顔色を変えた。

「両親は……一年前に死にました」

そしてシスター以上にクダイ達が顔色を変える。

「ご、ごめん！変なこと聞いちゃったね……」

不用意な言葉にクダイは謝った。

「ううん。ええんです。わだすはこの町より離れた村さいだんです。んだども、一年前に村の近くで魔族との戦いがあつて、そんなときさ魔族が攻めて来て……村さ壊滅しちゃって……」

一人生き残ったシスターはザンボルの城下町へと着き、流れ流れて廃教会へ……そう語った。

「食べ物もなく、ただただ死ぬことだけを待っていた……そだわだすの前にある日、“テンス”様が現れて……『生きることを諦める前に、明日を掴む努力をするんだ』……そうおっしゃった……わだすはその時決心すたんです！神の使いになろうと！」

悲しげな表情が一変、強い意志を見せる。

“テンス”はこれで二人いることになる。シスターに生きる力を与えた者と、目の前にいる小さい“テンス”。

ケファノスの名前は出さない方がいい。その名を聞けば魔王であるとかかってしまう。もしわかってしまったらシスターは……

「だども、魔王ケファノスだけは許すわけにはいがね！ わだすの村を襲わせたアイツだけは！ んだから神の庇護を受け、いづが仇は討たねばならねだ！」

クダイ達は顔を見合わすと、その話には触れないでおこうと暗黙の約束をした。

それと、クダイには気になることがある。

「そういえばシスター、シスターはシトリーとシメリーを見て驚かないの？」

「なして？」

「だって、二人は……」

二人の耳を見ればエルフであることは明白。

エルフであることがバレれば…… ケファノスの言葉を思い出す。エルフであることの不都合があるのだ。

「わだすはエルフだがらと言って差別はすない」

それはそうなのだろうが、クダイ達にはそれでは説明にはならないのだ。

だからケファノスが口を開いた。

「シトリー、シメリー、エルフの国を出たお前達はよく聞いておかねばならん話だ。相当昔……人間がまだ原始の頃の」

そんな昔に戻るのかと、クダイはツツコミたい気持ちを抑えた。

「世界には人間、エルフ、魔族の三種族がいて、本能がままの人間は秩序が無く、度々鬼畜紛いの行為に及んでいた。魔族としては特に気にはならなかったが、秩序を重んじるエルフはそうはいかなかった。そこでエルフは、人間に知恵を与えた。火の起こし方からリーダーを作り統率させる知恵。次に知識。持てる全ての知識までも与えた甲斐あってか、人間は種族として誇り高いものになったのだが……………」

四人がじつとケファノスを見つめる。

「人間は欲が深い生き物。幾千の時が過ぎ、知恵と知識から独自の文化を生んで地上を我が物にする為、エルフと魔族に戦いを挑んで来た。その際、人間はエルフを大量に虐殺したのだ。人間は忘れた歴史だろうが、エルフはまだそれを引きずっている。そして、今から三十年前、人間同士の戦争で地上が再び血と炎で染められたことにエルフは怒り、魔族と手を組んで一度だけ人間を滅ぼしかけたことがある。それ以来、エルフは厄災の種族として人間……………特に王族と呼ばれる者達から嫌われてるのだ」

話を聞き終え、シトリーとシメリーはアイニがなぜあんなに国を出ることを反対したのか、ようやく理解した。

「見つかったら……………どうなっちゃうの？」

シトリーは怖かった。あの時ケファノスが逃がしてくれなかったら

……………

「不法侵入とか理由づけられ、エルフに対して無理な取引を持ち掛けるだろう。幻影燈のような魔法具を造る技術などは魅力的だ、機会さえあれば強引にでも奪いに出るに違いない」

実際にはそれだけでは済まないだろう。市中引き回しの果て、公開処刑もありうる。そこまで言わないのは、一応ケファノスなりに気遣ったのだ。

「で、これからどうする？ダンタリオン達を助けに行くんだろ？」

クダイはケファノスに言うと、

「行くには行くが、侵入出来るような回りくどいやり方はお前には無理だろう」

「ならどうやって……………」

「正面突破……………それ以外に方法は無い。深夜に決行する。覚悟が必要だぞ」

「そりゃまた命懸けだなあ」

クダイはジャステイスソードを鞘から抜いた。

シュードモナスとの戦いでは反応してくれなかった。シャクスとの稽古もまだ数回。どんなことがあっても、今夜だけはジャステイスソードに頼らなければならない。

「まさか……………実力行使け？」

シスターがクダイに言った。

「仲間の命が賭かってるんだ」

「そつたらごどなんね！無実ならばちゃんつと話せばわがってくれるだ！」

「だけど……………」

バンツ！とシスターはテーブルを両手で叩くと、

「わだすが談判してくるだ！」

「え？」

「罪を犯してね人間を裁くなんて、神がお許しになんねだよ！だがらわだすが話してくる！」

なんの正義かは知らないが、止められそうにもなかった。

「こうしてはいらんね！神が与えてくれた試練にちげね！」

シスターは思い立ったように外へ出て行った。

……………。

一同は無言を共有するしかないようで、

「ほんと、どうすんの……………？」

お手上げ宣言のクダイに、

「……………余に聞くな」

御遣いである“シスター”を言い聞かせる言葉など、魔王の引き出しには無かった。

第三十五章

Her name is Sister 2

「んだから何度も言ってんべ！無実な人間が囚われてんだって！そつたらことしたらなんねだよ！」

シスター。“見た目”は。

「なんだお前は！離れろ！」

衛兵にあしらわれることは予定内。

「あんたらじゃ話になんね！責任者会わせてけろ！直接会って……
…どわっ！」

「いい加減にしないと牢屋にぶち込むぞ！」

突き飛ばされ転げる。それでも、

（泣いたらなんねだ。優秀なシスターさなるにはこの試練は乗り越えなんね！）

泣く気配すらない。

「何やってるんだ？ジャスティスソードの使い手を探すのが先だろ。ほっとけよそんな女」

「わかってるって」

去ろうとする衛兵達の足に隙を見て、シスターはがしっとしがみつ

き、

「行かせねだ！」

思い込みが激しい性格は、神の与えたもう試練への情熱に燃えている。

「この……田舎娘がつ!!」

衛兵が持っていた槍の柄で腹を突いた。

鈍痛に一瞬目が眩み、声も出せず倒れる身体。神の試練など思考から離れる。

(ああ……わだすこげなところで……)

だが、次第に近づく地面が止まった。

「女に随分酷いことするんだな」

腕を掴まれる感触と男の声。

「なんだ貴様は！」

気が立っている衛兵は、男に食ってかかった。

シスターが男を見ると、黒いローブにフードで顔を隠していた。逆光で目元まではよく見えないが、なせだろう……助けてもらったのにあまりいい印象を受けなかった。

「我々に逆らうと貴様もただでは……ぐっ！」

男は衛兵の喉を掴み締め付け、

「逆らったらなんだって？」

口角を上げた。

「貴様っ！その手を離せ！」

もう一人の衛兵が槍を突き付けるも、

「どこの世界も役人つてのはエラソーなんだな。笑っちまうぜ」

フードの奥がギリリと光ったかと思えば、衛兵を派手に吹っ飛ばした。

祭りのさなかの賑わいが、ざわめきへと変貌、ただでは済まされなくなっていた。

「あ、あんのう……わだすは大丈夫ですから」

責任を感じてしまい、男を宥めようとしたのだが、

「それでは俺の気が済まないんだよ」

騒ぎを聞いた他の衛兵達が集まり男を取り囲む。

「雑魚が揃いも揃ってご苦労なこった」

危険。シスターの第六感が働いた。この男は悪意を持ってこの町にやって来たのだ。

神妙な気配を見せない男に衛兵の牙が剥く。

「そこなくつちな」

男が手を突き出すと、衛兵達は黒い炎に包まれ、人々は悲鳴を上げ逃げ出す。

「あ……………ああ……………」

悪夢であつてほしい。独学ながらも神に全てを捧げた身。衛兵達の燃え盛る様は、シスターを絶望に堕とした。

「久しぶりだな、聖騎士シャクス、賢者ダンタリオン」

ザンボル国王が厳しい面持ちで二人名を口にした。

その冷静さから、話はやはりエルガムから伝わっているようだ。

「お久しぶりでございます」

この場はダンタリオンに任せるしかない。

全員が腕を後ろで縛られ、足には鉄球の枷を付けられている。身分からして特別罪人の扱いである以上、刑を科せられ執行までの時間はそう長くはない。即日の可能性も考えてはみたが、祭り

中であることを考えるとその後になるだろう。

雰囲気から数日は祭りなのだろうが、いつから始まっているのかもわからない。クダイ達の助けを待つ為にも、ここは凌がなければならなかった。

「エルガムの使者から受け取った罪状によれば、お前達は魔王ケファノスらと結託し、世界を我が物にしようとしてるとか。それとシヤクス、そちにエルガムからの罪状は無いが、無断で大陸を渡っただけでなくダンタリオン達と行動を共にしているということは、十分な罪となる」

謁見の間で裁判を受ける羽目になるとは。

正式な裁判をしないのは、処分を急ぐつもりか。

「お言葉ですが国王陛下、私達の言い分も聞いてはいただけないでしょうか？」

クダイを信用していないわけではないが、自分達でもなんとかしなければ“穏便”に……というわけにはいかなくなる。

ダンタリオンに確固たる勝算は無いものの、何とかやり過ごしてくれると暗黙を残したケファノスの期待には応えねばならない。

「話？サン・ジェルマン伯爵が世界をどうたらとか言う話か？それならもう聞いている」

「伯爵は時間構築魔法具を集めようとしています。現在も、魔族を従え人間に対して戦々恐々の……」

「悪いがダンタリオン、ケファノスと行動を共にしている以上、お前達を信用するわけにはいかん」

「重ね重ねお言葉を返しますが、魔族との戦争は伯爵が仕組んだこと。ケファノスは人間と争う気はありません。それに、魔族というだけで刃を向けた人間にも責任はあるかと」

意外だった。自分が。釈明の為とは言えケファノスを庇ったことに。もつと言い方を丸くしてもよかったのだが、勝手な“人間側”の言い分を聞くのはもううんざりだった。適当にこの場を逃れたところで、また同じことになるのなら、無理無理な窮地もまた悪くないかもしれない。

要は倫理の問題なのである。

「世界に名高きダンタリオンともあろう者が魔王の味方をするとは…… シャクス、そちもダンタリオンに同意見か？」

ダンタリオンの言ったことに否定する意志は無い。ただ、迷いはある。どうあがいても状況は芳しくなく、わざわざ馬鹿正直にケファノスの味方をするのもないと思っている。そう、わかっているのだ。

なのに……

「ダンタリオンは過つたことを言うような男ではありません。それに、私自身ケファノスと旅をして来て真実を知ったつもりです」

「シャクス……」

口合わせをしたわけでもなかっただけに、ダンタリオンにはなによりの言葉だった。

「……………わかった。聖騎士シャクスまでもが魔王を庇うと言うの

なら、これ以上の議論は不要」

ザンボル国王は玉座から立ち上がり、

「明朝、魔族に荷担するお前達を処刑する」

命のタイムリミットを宣言した。

衛兵達が惨殺され、騒然となる町。男はフードの奥でニヤリと
している。

「あ……………な、なんてことを……………」

シスターは腰が抜け立つこともままならない。

「つまらない奴らだ」

それでも楽しそうな男は、シスターに手を差し延べ、

「大丈夫か？」

だがそれは“いい人”の顔ではなく、偽善の顔。

怖がり手を取らないシスターに、

「フツ。いいね、その表情」

自分を悪魔でも見るかのように怯える。それが見たいが為の惨殺。

「シスターー!!」

そこへ、クダイ達がやって来た。

男の異常とも言える黒い気配。それが誰のもののかもわかる。

「来たか、クダイ」

男はフードを取り素顔を晒す。

「ヨウヘイ……やっぱりお前だったのか」

唇を噛み、睨む。

シトリーとシメリーもおどおどしながらヨウヘイから目を反らさない。

サン・ジェルマンの身近な一人。そう聞かされれば当然だった。辺りを見回し出したクダイに、

「心配しなくても俺だけだよ。お忍びだからな」

一人で来たことを告げた。

「こんな時に……」

ダンタリオン達が気掛かりだと言うのに迷惑な奴だ。友人とは言え、悪意が籠る。

「大丈夫？」

シトリーがシスターを起こしてやる。

「シトリー、お前達は離れている」

ケファノスがそう指示すると、シメリーも手伝いシスターを連れてその場を離れる。

クダイは三人が安全だと確認すると、ジャステイスソードを鞘から抜いた。

シャクスから教わった甲斐もあってか、慣れた手つきで刃が鞘

から出てくれた。シャクスいわくここが重要らしい。鞘から抜く瞬間が剣がもつとも威力を発揮するとか。要するに居合抜きのようなもののだろう。

ただ、今のクダイにそれを駆使する腕は無いが。

「随分サマになったんじゃないか？黄金剣が似合ってるぜ？」

「冷やかしながら帰れ。今日は忙しいんだ。大体、何しに来やがった！」

叶わぬ願いだ。帰れと言われて帰るようならこんな現れ方はしないのだろうし。

「遊びに来たんだよ。そーいや他の仲間はどうしたよ？お前の保護者だろ？」

「余計なお世話だ！帰らないなら……」

ぐぐつとグリップに力を入れる。

「そうそう、そうこなくっちゃな」

ヨウヘイはスツと手を広げ、

「闇の力、見せてやろう」

屍人^{かばねびと}がヨウヘイの周りに集まって来る。

「クダイ、思った以上に苦戦するかもしれんぞ」

今のクダイが太刀打ち出来るか疑問になる。

「老婆心ならいらぬ。逃げるわけには……………」

クダイが両足を踏ん張り目を閉じると、

「キィィィン」

ジャスティスソードが鳴った。

「ジャスティスソードが……………！」

そして再び開いた視界は、ジャスティスソードの光で溢れていた。

「相手はお前の友人。出来るのか？」

「……………何回も聞くなよ」

クダイの中で変わったものがある。それが正義と疑えない。

行使する力と想い。正しいことをするのなら迷う必要など皆無。

「行くぜクダイ!!」

「ケガしてから泣くなよ!!」

クダイはジャスティスソードが示す道を歩み始めた。

「ヨウヘイ……困った奴だ」

幼子でもあるまいし、監視するなんてことは考えてなかったのがサン・ジェルマンの本音だ。

いなくなったことを伝えたアスペルギルスも呆れ返るしかなかった。

「所詮子供の浅知恵。放っておけ。それよりも時間構築魔法具の一つの在りかがわかったんだ、そっちを優先してもらわねば困る」

それは承知しているが、今無駄にヨウヘイの力を晒すことはしたくない。

「俺が行って来よう」

そう言ったのは黒仮面だった。

「お前らは時間構築魔法具を取りに行けばいい。あの少年は俺が連れ戻してやる」

「どういう風の吹き回しだ？」

「どついつ？深い意味はない。忙しそうなお前らに代わってやるだけさ。暇だしな」

アスペルギルスにはそれが理由には思えなかった。

素性の知れぬ男だ、サン・ジェルマンに賛同し力を貸すだけとは言っていたが、信用などしていない。

一言一句として黒仮面のセリフは記憶する。そこからコンピュータのように分析するのだ。必ず思惑があるだろうから。

「ならばお願いするでしょう」

サン・ジェルマンは黒仮面に言うと、

「少し“しつけ”をやってくれ」

そう付け加えてアスペルギルスと共に時間構築魔法具を取りに行った。

「退屈凌ぎにはなるか」

黒仮面はヨウヘイのことよりも、ジャスティスソードを使うクダイの方に興味があった。

第三十七章 黒仮面

シャクスの教えを忠実に再現……いや、既に自分のものとしている。

ヨウヘイの放つダークエナジーをジャスティスソードで払いながら、着実に懐へと歩み寄って行く。

「そんな地味な戦い方じゃつまんねえよ！なんか大技でも繰り出してみろよ！」

クダイが挑発に乗らないのは、町を破壊したくないから。ヨウヘイの攻撃は威力だけが先行して知的ではない。単純過ぎる。

だがそれが幸いして町への影響を軽減出来ている。

「前ん時もだつたけど……ワンパターン過ぎるんだよ！」

頃合いを計っていたクダイがジャスティスソードを振り上げ突進する。

「な………！」

予見していたはずが、ヨウヘイの予想を超えた速さでクダイが近づいて来る。

「もらつたあつー！」

軽く傷つけるだけ。そのつもりでジャスティスソードを振り下ろした。

しかし………

「友達を殺すというのはいかなものかな？」

ジャステイスソードが塞がれていた。黒い……闇よりも黒い刃の剣で。

その主は黒い仮面を付けていた。

「黒仮面!!」

ヨウヘイが言うと、

「ぐほお……っ!？」

ヨウヘイの腹に蹴りを見舞った。

「がはっ……な、何しやがる……!」

「“しつけ”をしてくれと頼まれてな」

「……サン・ジェルマンか」

「勝手な真似は迷惑しか生まん」

いつの間にいたのか……気配すら感じなかった。

そして、クダイ自身知らぬ間に後ずさっていた。

「君が伝説の黄金剣ジャステイスソードの使い手か」

最初に黒仮面から感じたのは違和感だった。

彼の纏う空気というか、存在感みたいなもの……ダントリオ

ンやシャクスとは違う。つまり、この世界の人間の臭いがしなかった。

「誰だ……あんだ……？」

「黒仮面。サン・ジェルマン達からはそう呼ばれている」

違和感に伴い恐怖感まで漂う。

クダイにもわかる。この男は強い。多分、シャクスやダンタリオンなんか相手にならないくらい。

「手を出すな。クダイは俺が倒すんだからな！」

「今はその時ではない。サン・ジェルマンが言ったことを俺にまで言わせるな」

ヨウヘイの声が怯えていた。

黒仮面は指先から淡い紫の光を放つと、それでヨウヘイの身動きを封じた。

邪魔されたくない意図があるのだろう。

「くそっ、ふざけんなよ！」

「黙ってる」

ヨウヘイを一喝し、堂々と歩み寄って来た。

「クダイ……でよかったかな？」

「……………」

「そう怖がらないでくれ。今ここでどうにかなるつもりはない」

「だけど僕達の敵だ」

「フツ。どうやら俺は若い男には好かれんらしいな」

風がふわっと通り過ぎると、黒仮面から甘い香りがした。それは紛れも無い香水の香り。人工的に作られた。

「用が無いのなら早々に立ち去れ。我々としてもこの場での争いは望まぬ」

ケファノスが町を気にかけてるとは思えないが、少なくともダンタリオン達のことから離れないことは見てとれた。

「心配しなくてもすぐ消える。この少年と話をしたらな」

「あんた……………他の世界の人間だな？」

「ほう。なぜそう思う？」

「そんだけ香水の匂いがしたら嫌でもわかるさ。こういう世界でその匂いは不自然過ぎる」

「フフ……………そうか」

求めていた解答を得たのか、口元だけは緩んでいた。

「貴様、一体何者だ？」

ただならぬ黒仮面の気配は、ケファノスの直感を刺激する。

「俺は無限の世界を旅する者。それ以上でも以下でもない」

「じゃあなんでサン・ジェルマンに味方してるんだ？あいつは時間軸を融合して全ての世界の時間に終わりをもたらそうしてるんだぞ！」

「その何が悪いんだ？」

必死なクダイを嘲笑う。それは正義を説いてみると言わんばかりに。

「一人の勝手な理屈で世界の形を変えられてたまるか！時間軸が融合したら、全ての世界の全ての人達が存在しなくなる………そんなことは絶対にさせない！」

「サン・ジェルマンは無限に存在する世界を救おうとしてるんだ。哀れな生命体達の行く末を案じてな」

「時間に終わりをもたらすことが世界の為だったのか？」

「世界をそのままの形で残すことが、本当に世界を救うことになるのか………誰が判断するんだ？この世界も、君の世界も戦争が絶えない。自我を持つ生命体がいると、必ず同じような世界になる。だからサン・ジェルマンは存在する形を変えようとしているのだ。それに、君は勝手な理屈だとサン・ジェルマンを否定するが、君達に正義があるようにサン・ジェルマンにも正義がある。それは誰にも否定出来ない」

生命体にとって文明の差など問題にならない。原始の世界であろうと科学の象徴のような世界であろうと、生命体の心が進化しなければ結末は同じ。そう言いたいのだろうか。

「それでも……僕達は負けるわけにはいかない！」

黒仮面には、どこか懐かしい言葉に聞こえた。クダイの顔に別の少年を見る。

「いい面構えだ」

またも一人満足したように口元が笑い、

「俺達は輪廻の塔へ行く。そこでなら相手をしてやろう」

黒仮面はヨウヘイを縛っていた淡い紫の光を解くと、ぐいっと腕を掴んだ。

「い、イテェな！」

黒仮面とヨウヘイが去って行くまで、クダイはただ立っていた。

あの存在感と雰囲気。半端なく重いプレッシャーを残していた。ケファノスまでが口を開かないくらい。

のんびりと旅をする時間など無いことを悟る。

澄み切った空の向こう。輪廻の塔の聳える辺り。クダイは呼ばれている気がしていた。

第三十八章 欲深き正義

「シトリーとシメリーはシスターと一緒にここにいてくれ」

深夜。作戦など無いが、行くしかなかった。

ダンタリオン達の処刑が迫っていると掲示板が町中に置かれ、猶予が無いことを知る。

「クダイ、気をつけてね」

心配するシトリーに伝えてやれる心の余裕は満たされていない。

昼間のショックからか、シスターの口数も少なく重苦しい空気だった。

「カイル様を助けて」

シメリーはさつきまで着いて行くと騒いでいたのだが、ケファノスとシトリーに説得されなんとか応じてはくれた。

涼しい風が一時だけ緊張を解す。上手くいかなければジエンド。

「準備はいいな……………クダイ」

気遣いは無用。いつもなにかと世話になってる。こういう時くらい仲間らしいことが出来なければ、ヨウヘイヤサン・ジェルマン、そして……………

「黒仮面……………」

と戦うことも不可能。

「あんのう……………」

「何？」

恐る恐るシスターがクダイに話し掛けるのは、クダイの雰囲気はどこか暗いから。

命懸けで仲間を救いに行くのだから当然なのだが、それとは違った暗さがあつた。

「出来ることなら人を殺めるのだけは……………」

「無理だね」

「クダイさ……………」

「残念だけど相手の命まで気遣う腕は僕には無い。シスターの期待には応えられないよ」

「んでも！」

「しつこいって」

暗さに加えて冷ややかだった。

「シスター、これは賭けだ。しくじればクダイの命さえ危うい。ナ―バスなのもしかたのないこと」

「……………なして……………なして人は争わねばなんねだ……………クダイ達さ無実なら、ちゃんとさ話し合って……………人はここまで繁栄した生き物

だべさ！そうだべ！まずは神様さ祈ればいいだよ！きっとなんとかしてくれんべ！」

「違うな」

「え？」

「人が繁栄したのは祈らなかったからだ。神を信じなかったからだ。自分達の力と知恵で明日を掴んで来たのだ。祈ることで物事が解決するのなら、きっと魔族もそうする」

「テンス様……………」

「人に祈りは必要だ。だが、都合の悪いことだけを祈りに託すのは間違っている。神に仕えるということは、人として永遠に終着しない心を支えてやることだ。そしてそれは、人の闇を隠すことではなく、人がいかに弱い生き物であるかわからせるものでなくてはならん」

シスターが間違った思想を振りかざしていたなんてクダイ達は思っ
てなかった。それでも、ケファノスの言葉が間違いだとは思えな
かった。

「シスターよ、人に神の教えを説きたいのなら、人の醜さ、人の理
不尽さ、人の強欲さを知ることだ。人は欲深いが故に明日を望む。
上辺だけの言葉ではなく、人の本質で物を語るのだ」

神だった。人のなんたるかなんて人にはわかる代物でないのだと、
すんなりそう思えた言葉だった。

「行くぞ、クダイ」

「うん」

ケファノスの言葉に、少年達は何を思うのか……。

処刑まで残り数時間。ジタバタしないわけにはいかなかった。

「な、なんであたしが！」

「声を抑えて下さい、オルマ」

ダンタリオンの発言は即刻却下すべきだ。そんな眼差しでシャクスとカймを見るが、

「みんなの為だ」

とシャクスは言った。

カймはまだ馴染めてないのか、何も言わないことで肯定の態度を見せた。

「し、信じられない！二人共あたしがどうなってもいいの！？」

そこまでは思っていないが、そうなるとも思っていない。

「あなたにしか頼めないんです。お願いします、オルマ」

白々しいとはこのことで、ダンタリオンの目ん玉でも引っこ抜いてやりたい気分だ。

「チツ……やるよ！やればいいんだろ！」

そう言つと、咳ばらいをして鉄格子に近寄り、

「あ……ち、ちよつと」

看守を読んでみる。

すると、二人の看守は、

「なんだ？」

椅子から腰すら上げずに答えた。

カチンと頭には来たが、ぐつと堪えて演技の続きをする。

「あ……ああん………看守さあゝん」

「だからなんだ？」

わざとらしい演技にダンタリオンは苦笑いを浮かべ、

（オルマ、もつと自然に！）

と小声で囁くも、ギロツと睨まれ口をつぐんだ。

色気は十分なのだが、なにぶん男らし過ぎる。誘惑しようなんて作戦が間違いだったのかもしれない。

そんな憂鬱も知らず、オルマは嫌々ながらまた演技に戻る。

「なあんか……トイレに行きたいなあ」

「どうせ処刑されるんだ、そこでやれよ」

「で、でもお、恥ずかしいじゃない。ねえ、看守さん」

気分が乗るということもある。鉄格子から足を出して、モゾモゾとさせる。なんと綺麗な曲線が看守を射止めたのか、ようやく重い腰を上げた。

「そんなに我慢出来ねーのか？」

「あつは、くん、オルマあ……も・れ・そ・う」

どつから覚えて来たんだと、やらせておきながら感服させられる。演技の下手は抜きで。

「しょ、しょうがねえなあ。今連れてつてやるよ」

ところが、看守はまんざらでも無い様子でデレデレとスケベ面満開でオルマの曲線を眺め、牢屋からオルマだけ出すとすかさず鍵を閉めた。

「優しいのねえ、看守さんて」

「いいから手を後ろに回せ」

剣を扱うには細いくらい女の腕をしている。

手首には縄が巻かれ、看守に促されて歩く。

「早く戻って来いよ」

座ったままの看守が言つと、

「わかってるって」

いやらしい声色で言つた。

「ほら、早くやれ」

やれと言われてもトイレが目的ではないのでやりようがない。

さてどうしたものかと考え、

「ねえ、看守さん」

「あん？」

「あたしと『いいこと』しなあい？」

「…………騙そうったってそうはいかねえぞ」

「いやん。騙そうなんて思ってない。なんかさあ、暑苦しくてムラムラしてるの」

よほど足に自信があるのか、壁に足をかけフトモモをあらわにする。微妙に滲む汗が色欲的で、要らぬ妄想を掻き立てる。

「死ぬ前に…………忘れられないくらい激しいのが欲しいのよお」

甘い声は看守の鼓膜を通り、本能へ一直線に響いた。

据え膳食わぬはなんとやら。下手な演技も本能に直接訴えかければなんとかなるようだ。

「へへ…………ま、まあお前がそう言うなら……………」

「ああン…………縄を解いてえ。壁に手がつけなあゝい」

「好きもんだな…………待ってるよ……………」

「……………」

縄を解いたが最後。急所を蹴り上げ、気を失うまでひたすら殴る。

「ハア…………ハア…………このスケベがつ！」

とどめの一撃を見舞い、

「ダンタリオンの奴めゝえ!!」

鬼の形相で戻って行ったのは言うまでもない。

「結構な見張りだね。昼間あれだけ騒ぎになったから無理もないか」

「わかっていたことだ」

そうわかっていたことだ。

「こんなところで死ぬわけにはいかないよ」

黒仮面。彼の存在が気になる。

まるで闇そのもののような気配の持ち主。

- 輪廻の塔へ来い -

何かが起きる。だから何がなんでも行かなくてはならないのだ。

「いつもの作戦で行く。準備をしろ」

ケファノスが出て行き、光で敵の目を眩ます。

定着した作戦だ。

「僕はいつでもオーケーだ」

ジャステイスソードを握ると、

- キイイイイン -

鳴った。

ケファノスが飛び出し光を放つ。瞼から伝わる光が落ち着く頃、クダイは目を開き“正義”を振りかざし立ち向かって行く。

『欲深いが故に明日を望む』

ケファノスはそう言ってた。ならば、世界を救いたいという気持ちも欲深いが故なのか。

終着しない心……………それだけに答えが欲しかった。

第三十九章 心に燈る

ケファノスに着いて行くと、向こう側から騒々しく走って来る影があった。

「ダンタリオン！」

「クダイ！」

心配したのがっかりだったくらい笑顔でいた。

がしつと抱き着かれ、意外に厚い胸板を顔に押し付けられる。

「き、気持ち悪いよ……」

でも悪い気はしなかった。

後に来たシャクス、オルマ、カймにもどこか安心した笑顔が見えた。

「無事でなによりだ」

思いがけないことに、ケファノスは言った。

「さ、早く逃げよう」

「待てクダイ。俺達の剣を取り戻さないことにはどうにもならん」

シャクスとしては手に馴染んだ剣を置き去ることなど出来ない。

武士の魂と言ったところか。

「シャクス、剣を探す時間はない。サン・ジェルマン達が輪廻の塔を目指している」

「なんだと……！」

そしてケファノスは全員を見て、

「余の隠してある武器がある。どれもジャスティスソードに劣らぬ名具ばかりだ。それを貴様達にやる。それでいいな？」

魔王が隠すほどの武器。何を今更と言いたいところではあるが、

「いいんじゃないか？貰えるもんはもらつときゃ」

カイムの軽さが頷いてしまった。

「そうと決まれば早く！」

オルマはじっくり考えるタイプではない。方向性が決まったなら直ぐさま行動に移さないと気が済まないのだ。敵陣でのんびりするのモどつかとは思つが。

来た道をまた引き返せば衛兵達がいるだろう。もっと安全な道が無いか考えてはみたが、

「何やってる！急げ！」

いつの間にか全員が先に行っていた。シャクスが声をかけなければおいてきぼりだったろう。

「待つてよー！」

魔王の隠し武器に目が眩んだんじゃないかと疑わずにはいられないくらい素早かった。

行く手にはツヤの無い銀の甲冑達が密集して遮る。

「私に！」

数は問題にはならない。ダンタリオンの両手が電気を運び、帯電を始める。

「気絶程度に留めますので安心して喰らって下さい」

電気は使い手の意志により放電する。ターゲット達はあらかじめマーカーでも付けられていたかの如く餌食になっていく。

「さっすが」

カームは自分も出来るんじゃないかと手を握ったり開いたりしてみるのが……結論は苦笑いで儚く終わる。

「そんな簡単にはできねーよな」

妙に期待した自分の胸に言い聞かせた。

魔法を使えるのが凄いのではなく、大勢を前に威力を均等にコントロール出来ること。暇があれば是非教えてもらいたい。

「行きましょう」

ダンタリオンが先陣を切り外へ飛び出す。

オルマ、シャクス、カーム、ケファノス、クダイの順で続き、

すっかり松明で囲まれた第2ステージへと進んだ。

「そこまでだ」

ザンボル国王自らが待ち構え、罪人達を歓迎した。

「陛下……………そこをお退き下さい。私達は行かねばなりません！」

「控えるダンタリオン！お前達に行くべき道は無い！」

最初から一般兵では話にならないと見通している。でなければ国王自ら“罪人”を相手にはしないだろう。

「なんとおっしゃられようと、私達は輪廻の塔へ行く！」

「賢者の称号を得ながら、どこまでも往生際が悪い」

熱意とも決意とも取れず、ただ呆れるばかり。

「ならばいつそ、称号など棄てましょう」

それでも行かねばとシャクスが援護に出る。

戦前ではダンタリオンが援護側だが、こういう状況で確かな援護はシャクスしかいなかった。

「聖騎士シャクス……………自分が何を口走ってるかわかっているのだろくな？」

「称号とは心に授かるもの。我々の心が認められぬのであれば、所詮無用の長物。棄てた方が清々する」

話して無駄なら媚びへつらうことはない。意志を貫き通すだけ。

「国王の地位にしながらダンタリオンとシャクスの心が見えぬのか？」

ふと現れたアフロヘアの小さい天使の人形に、ザンボル国王は目を丸くし、

「な……………なんだ貴様はツ！？」

「魔王ケファノスだよ」

一番後ろにいたクダイが、ダンタリオンとシャクスの間を通り前に出て来た。

ザンボル国王はクダイの右手にある黄金の刃の剣を見て、

「ジャステイスソードの……………こんな華奢な少年が…………？」

到底戦士には見えない。シャクスが持っていた方がまだ形になっただろう。

「敢えて道を作ろうとは思わん。すんなり通してくれるのならな」

「フ…………フフ…………人間が恐れた魔王がこんな小さな人形とは」

「笑いたければ笑うがいい。何も解決はせんがな」

「ならば遠慮なく笑わせてもらおう！魔王の滑稽な姿を！」

高々な国王の声に衛兵達も笑う。恐怖にもならないケファノスの姿を。

しかし、それを許せる“仲間”じゃない。

「黙れよ！」

クダイがジャスティスソードを一振りして喉を潰す勢いで言った。

声は嘲笑を消し、夜本来の静けさに戻る。

「ケファノスを笑うなら僕はジャスティスソードを振るうぞ！」

「少年、無礼極まりない言動は慎め。お前が剣を振るえば命の保証は出来んぞ」

「どうせ処刑するつもりなんだろう？ だったら関係無いね！ それに、仲間をバカにされて黙ってられるほど大人じゃないよ………僕は！」

それは勇姿。ダンタリオン、シャクス、オルマ、カイムは視線を交わし頷く。

「彼に同じです。私達は命を共有しています。仲間の侮辱を許せるほど、私達は大人じゃありません」

追われる身であることが運命さだめなら、甘んじて受けてもいい。何が大切か知っているから。

「ダンタリオン………」

ザンボル国王の怒りが燈りかける。

「こういつ時のあたし達は簡単には折れませんよ……………陛下」

油を注ぐような言い方でオルマが嘲笑仕返した。

「種族の壁に阻まれし愚かな人間よ、己の胸に問え！自分達の行いは正義かと！」

たまにはカイクも。

「恩を着せる言い方は好きではありませんが、我々は世界の為に戦っている。それはケファノスも同じ。種族の違いと見た目だけで嘲笑うのであれば、国王であつても許されることではない！」

剣が無くても戦える。シャクスは左右の拳をぶつけ合った。

「道を開けよ」

五人に背中を押されたような気分だった。初めて芽生えた衝動は、気迫だけで閉ざされた道を開くに値した。

「戦うべき相手はサン・ジェルマンだ」

通り過ぎるケファノスは、何が正義なのか自分を嘲笑った者に見定める機会を与えた。

その行為は人には不実過ぎる。

『赦す』。人間には永遠に巡って来ない進化なのだろうか。

第四十章 世界の半分

「あのテンス様………… ホントの名前は何て言うだべ？」

「あれはケファ……………んぐぐ」

シスターのさりげない質問に、これまたさりげなく答えようとしたシメリーの口をシトリーが塞いだ。

（ダメよ！名前言っちゃ！）

危なかった。シスターはケファノスを恨んでる。今の姿のケファノスを天使と疑ってないのだから、名前を晒して夢を壊すこともない。

「なんかしたるか？」

「う、うん。そういえば名前何だったっけかなあ……………聞いたことあったっけ？まだ知り合って間もないから……………ね、ねえ、シメリー？」

ぎゅっと背中をつねって誘導させてやる。

「う、うん。聞いたようない……………聞いてないようない……………」

「そうなのけ？」

追求すべき箇所なのに、そうしそもないシスターの単純さに乾杯したいくらいだ。

「そ、それよりクダイ達大丈夫かな？」

なんとか話題を変えたいシトリーは舵取をシメリーにも要求した。

「だ、ただ大丈夫じゃない？ケファノスもいるし……………」

無惨と言うか……………話の振り方が間違っていたのなら謝りたい。でも口にしたのはシメリー。ぽかんと口を開けたままのシメリーに、溜め息意外の皮肉は思い付かなかった。

「今……………なんて……………」

しっかり聞いた。シスターの頭の中は真っ白だろう。

「ち、違うの！今のは間違いで！ケファノスはいいい奴で……………」

うつかりシトリーまでが零した事実。シスターが確信を得るのには十分だった。

「バカシトリー！」

「な……………先に言ったのはシメリーじゃない！」

額をガチンツとぶつけていがみ合う。

「そんな……………テンス様が……………魔王……………ケファノス……………」

で、シヨックの隠しきれないシスター。タイミングとはよく出来たもので、

「救出して来たぜ！」

クダイ達が揚々と帰還した。

「ご心配おかけしました。皆様のダンタリオン、只今戻りました」

「調子のいい男だよ、アンタ」

ダンタリオンのシトリーとシメリーへの心くばりも、オルマにはか
つたるだけだった。

シャクスが姿を見せ、カイクが姿を見せたが、シメリーは飛び
付いて喜ぶ気にはなれなかった。

「ん？どうした？」

何となく空気が悪いことにクダイは気付き、

「あ、あのね……………」

シトリーが横目でシスターを見る。

「休む暇はない。すぐに町を出る」

間を縫ってケファノスが現れ、

「シトリー、シメリー、眠いだろっけど出発するよ。準備しな」

オルマが姐御肌でリードする。

クダイ達もそれぞれ手荷物……………と言っても大概の物は没収さ
れてるので特には無い。やるべきことと言ったら、クダイ達を面倒

見てくれたシスターへの挨拶。話は軽く聞いているし、要点だけを感謝して出発……のはずだった。

「シスター、クダイから話は聞きました。私達の無実を訴えてまでくれたこと、深く感謝致します」

ダンタリオンがシスターの手を取り、手の甲に軽くキスをする。

「わけあって先を急ぐ身の上。何の恩返しもせずに行くことお許し下さい」

シャクスも同じようにシスターの手の甲にキスをした。

騎士としての挨拶か何かなのだろう。

オルマとカイルは右手を胸に宛て会釈をした。

シトリーとシメリーはどうしたらいいか判断がつかないまま、全員が教会を出ようとすると、

「待ってける！」

呼び止め迷いなくケファノスを睨んだ。

つかつかと大股で詰め寄って来ると、

「おめー………魔王ケファノスなのけ!？」

刹那、クダイはもとより、事情を聞いていたダンタリオン達も心臓に負担がかかった。

「シトリー!シメリー!」

「「ごめんなさい!」!」

思わず上げたクダイの声で、二人同時に頭を下げた。

各々顔を見合わせやり過ごす方法を模索していると、

「……………わかってしまったのだな」

誰が悪いわけでもない。クダイ達は匿ってくれたのだ。なら、バレてしまったのなら逃げるわけにはいかない。

「ホントに……………そうなのけ？ テンス様だと思ってたのに……………」

神に仕える云々まで教えてくれた。それなのに正体は故郷の村を滅ぼした魔族の王様。につくき魔王。

「う……………嘘だべ……………嘘だべ……………」

「嘘ではない。余は魔王ケファノス。シスター、お前が憎む者だ」

かつてこの廃教会で、自分に生きると言ってくれた人物同様に天使に思えた。その心が崩れそうになる。

「殺す……………絶対に殺してやるだ！！」

シスターは燭台を手にしてケファノスへの裁きを向ける。

止めに入ろうとしたクダイ達をケファノスは、

「下がってろ」

ケファノスは責任取るつもりだ。

魔族がシスターの村を滅ぼした要因であることの責任。

「シスター、余を赦せとは言わん。ただ、願わくばしばしの猶予が欲しい」

「ふ、ふざけるでねえ！！なして猶予なんか！！」

「世界をサン・ジェルマンの手から救わねばならん。せめてサン・ジェルマンを倒すまで……………」

命乞いとは違う。今はどうしても時間が必要だ。それさえ済めば、いくらかでも命など。

「そつたらこと言つて逃げる気なんだべ！おつとつやおつかあの仇……………討たねばなんねだ！！」

シスターは燭台を持つて突進した。

何があろうと赦せない。

ケファノスの顔面の寸で、シスターの手をオルマは掴み、

「な、何するだ！離せ！！」

じたばた暴れるシスターに平手打ちをした。

「結局……………おめさんらもケファノスの味方……………」

「そんなチンケな理由じゃないわ」

「んならなして邪魔さするだ！！」

「ケファノスを殺せば、アンタ自身、一生後悔するよ」

「かまわねだ！！ケファノスさえ…………魔王さえ殺せば！！」

「アンタ、仇討ちしたくてシスターの道を選んだわけ？だったらこんなもの捨てちまいな！！」

オルマの手はシスターの十字架の首飾りを引きちぎった。

「何するだ！！」

「あたしは神がどうかかわかないけど、血に濡れたシスターの言うことなんて誰が聞くんだい？救いを求める者達を救う者が血を纏うなんて…………」

同じ境遇。オルマも自分の町を滅ぼしたサン・ジェルマンを倒したいと願っている。だからシスターを止める権利など無いのかもしれない。

けれど、まだ若いシスターを血に濡らしたくはなかった。気持ちができるからこそ、敢えて止めたのだ。せめて今だけは。

「うつ……………くう……………」

涙を流し顔を覆うシスターに、

「余の命、時が来れば潔く差し出そう」

ケファノスは言って町を出た。

太陽が一日で一番高いところまで昇ると、いい加減目覚めると強い陽射しをクダイ達に宛がった。

「う……………ま、眩しい……………」

野宿にも慣れ、クダイは“何事も無かったかのように”起きた。

「暑……………」

たまにはまともに、思いきり寝てみたいものだと、オルマは額の汗を拭って思っていた。

見渡せばザンボル城下町からは大分離れ、既に町は視界の中には映らなかった。

いつもの朝なら、クダイとシャクスのうるさい声が飛び交うも、今回ばかりはシャクスもだるそうに木に寄り掛かっていた。

ダンタリオンと言えば、シトリーとシメリーを従え朝食の準備。まあ、かろうじて残った保存食のスープなのだろうが、疲れを惜しんでくれているので良しとする。

カィムは寝ぼけ眼でただ一点、そこに何かあるかは定かではないが、見つめている。

「みんなあゝ、朝食出来たよゝ！」

シメリーの性能の悪そうな目覚ましが鳴り、全員が空腹を満たす液

体の前と、それはゾンビのように集まる。

「おはようございます。干し肉と……………」

「説明はいい。早く食わせろ」

ダンタリオンの説明を遮り、空腹からイラついているシャクスが言った。

仕方なしと、小さな器に出来るだけの量を込め、シトリーとシメリーに配膳を促した。

「ケファノスは？」

クダイが聞くと、

「見てませんが？」

ダンタリオンの眉を上げた。

「ほつといてやれ。あいつだって一人になりたい時くらいあるだろ」

シャクスは心情を読んでいたようだった。

「そうだな。その方がいい」

カイルは一言だけ言うと、干し肉となにやら草の入ったスープにがつついた。

「いただきます」

「まあゝす!」

シトリーとシメリーもカイルにつられてがつつきはしないが、やや行儀悪くスープを口にした。

「皆さん、食べながらでかまいません、ちょっと聞いて欲しいのですが……………」

言葉を濁しながらダンタリオンは、

「これで食べ物は全て無くなりました」

全員のスプーンが止まる。

「私達はまだサン・ジェルマンや魔族と本当の戦いをしていません。本来ならこのまま輪廻の塔へ行きたいところなのですが、また寄り道をしなければならなくなりました」

「しょうがないじゃん」

何のことやらクダイが言うと、

「……………この先に町なんか無いよな?」

カイルが嫌な事実を言った。

「戻るにしても、まさかエルフの国まで戻るのかい?」

ザンボル配下の町や村には行けない。しかし、エルフの国までも距離がある。時間だけでなく相当な体力の消耗を覚悟しなければなら

ない。オルマはダンタリオンが何かいい案を出してくれることを望んだのだが、

「お金も僅かしか残っていませんし、忍んでザンボル領土内の町や村へ行っても、食料調達は出来ません」

それが答えだった。

ここまで来てまた戻るのか……誰もがそう思った矢先、

「その必要は無さそうですね」

ダンタリオンが見つめる先には、

「わ……わだすも一緒さ行く！！連れてってける！！」

背中にはとんでもなく大きなリュックを背負い、肩からも水筒を五つは提げたシスターが、頭を出し髪をおさげにしていた。

「ケファノスに逃げられては困るからな！聞してるのけ！ケファノス！」

駆けて来たのだろう。重量感たつぷりのリュックを背負って。汗と肩で息をするのが表していた。

「あ、あれ？ケファノスさどこさ行っただ？」

キヨロキヨロと辺りを見回していると、

「食料くらい持って来たんだろうな？」

後ろからスツとケファノスがやって来た。

「のわっ！い、いつの間に！！」

「これからの旅……甘くはないぞ」

それだけ言つとケファノスはクダイ達の方へ行つた。

「え、偉そうさ言つなで！！わだすはちゃんと監視さすつからな！！」

しかめつつらで怒鳴るシスターは、

「けれど！わだすの名前はカカベル！シスターカカベルだべ！！」

丁寧に本名を明かしてくれた。

「そんなところで立ってないで、さあ、一緒に朝食でもどうです？」

ダンタリオンはいつもの三倍くらいの笑顔で、おさげ髪の田舎娘を呼んだ。

ずんずんとカカベルは歩いて来て、

「お、おめさん達が食えつて言つなら食ってやる！」

見栄をきつたのはよかったが、腹が空腹センサーを鳴らしてしまい笑われてしまった。

「食べなよ」

まだ口をつけてなかった自分のスープを、クダイは差し出した。

「……………」

カカベルはスープを受け取り、

「あ……ありがとう」

顔を赤らめた。

「世界の半分は血の歴史で、もう半分は希望で出来ている」

唐突にケファノスはそう言い、

「これからそれは変わらないのかもしれない。そうであっても、明日に希望を望めば、いつか世界が希望で埋まる日が来ることを望める。お前達ならそれが出来る」

全員を見た。と思う。

世界が希望で埋まる日。遠い理想でしかないのかもしれない。でも、見る価値はある。そういう日がいつか来るのだと。人には夢を叶える力があるのだから。

第四十一章 クリスチャニア

「クゝダイ」

小鳥のさえずりすら聞こえない荒野へと入り、一行の気分もどこと無くどんよりしている中、シトリのクダイを呼ぶ声だけは明るかった。

「はい、お水」

「ありがとう、シトリ」

カカベルが持つて来た水筒を、自分が用意したかのようにクダイに渡した。

「クダイ、全部は飲まないでよ。こんな場所じゃ水は貴重なんだから」

そんな二人に水を注したのは、必然的に“お局様”に昇格を余儀なくされたオルマだった。

特にクダイ個人に好意があるわけでもないのに、イラッとするのは嫉妬なのだろうか……若い子への。

「そんなことくらいわかってるよね？クダイ」

ああ……このパーティーの中で一番恐いのは多分オルマ。どうか怒りを煽る言動は天然であつてもやめて欲しい。

「うん、わかってる」

「ウフッ」

国の束縛から自由を得たシトリーは、とにかくクダイを構っていたい。

「あ……あのねえ……あたしはクダイに言ったの！」

「クダイのお世話は私がします。オルマは口を出さないで」

「く……う、うの……うの……」

『クソガキ』とでも言ってやりたいのだが、『大人』のプライドが邪魔をする。

「なんとかならんか」

少し離れて見ていたシャクスがぼやいた。

「シトリーってあんなだったか？」

カイルがシメリーに聞く。

カイルの中のシトリーはおしとやかで知的なイメージ。だから不思議なのだ。

「あんなじゃなかったかなあ……私にも……」

チラッとカイルの横顔を見る。

シトリーなんかよりもっと自分を見てほしい。

そんな愛らしい気持ちをほったらかすカイルに、シメリーは何

も言えなかった。

向こうではシトリーとオルマが、何やら言い合いを始め賑やかを増す。

「緊張感というものを知らんのか……あいつらは」

根がまじめなシャクスには理解出来ないモチベーションだ。

「まあまあ。いいではありませんか」

そんなシャクスをダンタリオンは笑顔で応えた。

「そつたらことより、どこさ向かってるだ？わだすはまだ何も聞いてねえべ」

カカベルとしてはケファノスの監視が目的なので、一行が向かう先を知らない。

ケファノスの隠し武器を取りに行くことは確かだが、なにぶん「北に行け」としか指示されていないので、具体的にどこへ行くのかはダンタリオン達にもわからなかった。

「まだかりますか？ケファノス」

食料の不安はカカベルのおかげで無くなったも、水だけは水筒五分。尽きる前には到達したい。

「ここからもう少し北へ行くとガムダン溪谷に出る。その深くに遺跡があるはずだ」

「そこに行けばお前の隠し武器があるんだな？」

間髪入れずシャクスが言った。

剣が無いと落ち着かないらしい。一種の職業病だろう。

「誰かに盗まれてたなんて、話にならないぜ？」

カイクが言うと、

「余の結界が張ってある。仮に破って手に入れたところで、普通の人間には扱えん」

答えには自信があるようだった。

「ジャステイスソードに劣らない武器……人数分はあるんでしょうか？」

抜目なくダンタリオンが言った。

武器を必要としているのはダンタリオン、シャクス、オルマ、カイクの四人。最低三つあれば、ダンタリオンは魔法のスペシャリストだからなんとかなる。

ケファノスは四人を見て、

「案ずるな」

「そうですか。ならば問題はありませんね」

ダンタリオンもすっかりケファノスを信頼し、一言返事で会話が成り立つ。

武器を手にしたら次は輪廻の塔。

そこへはケファノスの肉体を取り戻す為に、伝説の不死鳥を求

めた塔。存在すら危うい不死鳥を。

目指していたはずなのに、その時が近づくにつれ怖くなる。野生の勘が、うざったいほど働いていた。

「時間構築魔法具は手に入ったのか？」

黒仮面は窓際の椅子に座り酒を嗜みながら、いつになく機嫌よくサン・ジェルマンに聞いた。

「光と闇を生む鏡『ディサグリン』、連鎖の循環をする『時の聖杯』……二つも手に入ったのは幸運だった」

「大層な肩書だな。さぞかし効果も絶大なんだろう」

ククツと笑って、サン・ジェルマンに訪れた幸運を皮肉った。

「ディサグリンは映した者の光と闇を変える。時の聖杯は連鎖の関係にないものに連続性を与え、本質そのものを変異させてしまう」

「フツ、たいした効果だ」

「時間構築魔法具は本来、単体で使うものではない。あくまで五つ

揃って意味を成すもの。単体で使うことはまずない」

「時間を構築するアイテムで時間を壊し、時間という概念そのものに終わりを与え、尚且つ時間が再構築出来ないように時間軸を一つにしてしまふ。つくづく恐ろしいよ、サン・ジェルマンという男が」

「その理論に必要な情報はお前がいなければ得られなかった」

サン・ジェルマンは黒仮面の正面に座り外に目をやった。

「クダイはどうだった？会って来たのだろう？」

どんな見解を示すのか興味があつた。

「戦闘経験はゼロに等しいのだろうな。殺気が無かつた」

金の杯に入つた酒に映る自分を見て、

「ただ、香水の香りがすると言っていた」

「香水？」

「ああ。俺の身体からな。それも、明らかにこの世界のものじゃないとまで断言されたよ」

「香水をつけて行つたのか？」

「フン………まさかだろ。生まれてこの方、香水を身体につけたことなど一度もない」

「ならクダイは勘違いをしたと？」

そう言いながらも、それは無いだろうと確信していた。

黒仮面は詳しくは言わない。ただ言わんとしてる状況は想像出来る。

クダイが感じ取った『香水』。クダイの世界にあるだろう造られた香りのこと。

だが黒仮面は香水はつけていないと言う。嘘を言ってると思えない。

「俺には部下がいた。十三人の。フツ、まあ部下というよりは仲間と呼んだ方がしっくりくるが。その十三人は全て女だ。俺から香水の香りがするとすればそいつらの『香り』だ。しかし、それも随分昔の話。するわけがない……香水の香りなど」

「面白い話だ。するはずのない香りを感じ取る。さて、これの意味するところはなんだろうな」

「嗅覚が優れているというレベルではないことは確かだ」

「見当はついている………か」

「……………まあな」

「それは是非拝聴願いたい」

「慌てずとも、いずれわかることだ」

黒仮面はぐつと酒を飲み干し、

「そう……いずれな」

意味ありげに微笑んだ。

第四十二章 魔王の試練

ガムダン溪谷。クダイ達はその奥にある遺跡の前で固唾を呑んでいた。

「遺跡………ねえ」

オルマは“これ”を遺跡と呼ぶのかどうか、世論に聞いてみたい気分だった。

「これって………」

シメリーがちょんちょんと指で“これ”をつつついた。

「どう見たって骨だよな？」

城なんかよりずっと巨大な頭骨。角が額から一本伸び、おそらくは俯せで倒れている。何かに襲われたように。

カймも直接触れて造物ではないことを確認した。

「すつかすでつけえ頭だべ。魔族け？」

カカベルが魔族の王様ケファノスではなく、ダンタリオンに聞いた。

「いえ………私も初めて見ます」

知識豊富なはずのダンタリオンでさえ、答えを出せなかった。

微かに感じるケファノスの魔力。本人が張った結界だろう。

「ケファノス、これって何の骨？」

クダイだけは単刀直入に聞いた。

「時間構築魔法具ツールを造ったとされる巨人族の王………ベオの亡きがらだ」

ケファノスの解答は実に簡潔で、要約されたものだった。

「それってこの世界を造った神様ってこと？」

「そうではない。ベオは世界の仕組みを解き明かし、いくつかに別れている世界を成り立たせている力を時間構築魔法具ツールで制御しようとしたのだ」

シトリーの疑問にケファノスは答え、

「だが、あまりに強大な力を前に、己の生気を犠牲にせざるを得なかった」

ベオの歴史を語った。

「じゃあ何か？時間構築魔法具ツールが世界を造ってるわけじゃないってことか」

沈黙は事実の整理だったのか、シャクスが口を開いた。

「いいや。時間構築魔法具ツールを造ったことで、世界を成り立たせていた力が不和となり、結果、時間構築魔法具ツールに頼らなければ世界は姿を保てなくなってしまった。サン・ジェルマンはそれに気付き、時

間軸の融合に利用しようと企んだのだろう」

なんとも迷惑な話だ。巨人だかなんだか知らないが、個人の因果が時を跨いで存在しているのだから。

「事実ならム力つく話だ。余計なことをしてくれたもんだぜ」

シャクスはベオの亡きがらを見上げた。

「そのベオって巨人族の王は、どうやって世界の仕組みを解き明かしたんだい？解こうとして解けるもんじゃないだろう？」

オルマ的には、根本となる解決を見ないことには納得出来ないらしい。

「伝説によれば、ベオは存在しうる全ての世界と時間の創造主と出会ったと言われている。その創造主がベオに教えたのか、あるいはベオが偶像解き明かして創造主に出会ったのか、推測するしか方法はない。真実は闇の中にある」

「……巨人族の伝説なんて初めて聞きましたよ。まさかそんな伝説があったなんて……それにしてもケファノス、どうしてこの中に武器を隠したんです？コレクションにするならご自分の城に飾るべきだと思いますが？」

本題はここからだ。ダンタリオンは、これから得るだろうジャステイスソードにも劣らない武器に隠された事情を問いただした。

魔界から隔離してまで保管したわけを。

「お前らがこれから手に入れる武器には強い力が込められている。

常に主を求めるほどの武器は、封印でもしておかねば災いの火種と成り兼ねん。飾るなど愚かな行為よ」

そんな危険度MAXの武器を使えと言うのか……ダンタリオン、シャクス、オルマ、カイムの四人は緊張と不安を覚えていた。

そしてそれを、

「ジャステイスソードと変わんないじゃないか」

クダイが代弁した。

「余が言った災いとは、ジャステイスソードのように主を消してしまつようなものではなく、主の心……自我を破壊してしまつようなものことだ。強い力に吞まれぬ自信と覚悟があるのなら……」

一呼吸置いてからケファノスは、

「行け。手に入れることが叶った時、それはお前達にとって揺るぎ無い力となる」

ベオに張られていた結界を解いた。

第四十三章 太陽の弓

ベオの頭骨へ侵入すると、そこは石碑が四つあった。
カームは誘われるように石碑の一つの前に立ち、

『戸惑うは心

確固たる決意は炎の如く

我弾く力は太陽の力』

碑文を読み上げた。

「なんだこりゃ？」

意味を考えてみるが、解るようで解らない。

こう言った類の文章だ、意味があっても理解し難いのが道理なのだろう。

何か仕掛けでも無いか石碑に触れる。

感触はやはり石で、ごつごつしながら冷たい脈を打っているだけ。

「まいったな……………どうすりゃいいんだ？」

一人ではお手上げたと感じ、

「なあダンタリオン、この石碑なんだ……………けど？」

振り返ると、そこにはダンタリオンはおろかシャクスとオルマの姿も無かった。

「お…………おい！どこに行ったんだ！？ダンタリオン！！シャクス
！！オルマ！！」

「いねーよ」

暗がりから誰が来る。

「誰だ？」

「俺だよ」

それは男で、耳がつんと尖った人物。

「……………お前は……………」

「どうしたよ？何をそんなに驚いてるんだ？」

黒い髪、浅黒い肌。ダークグリーンの瞳。初めて会う人物なのに知
っている。

「お……………俺？」

その人物はカイクに似ていた。

「そつだよ、俺はお前だ」

「バカな…………俺は肌なんか黒くないし耳だつて尖っていない！けど
お前はどう見たってエルフじゃないか！」

「そんなことないさ。正確に言えば俺は、お前が純粋なエルフとし

て“生まれていれば”という“もしも”の存在。ダークエルフだよ」

「俺が……純粋なエルフだったら……だと？」

「今まで何度も思っただろう？ “もしハーフェルフ”じゃなかったら……って。そう思うお前の心だよ俺は」

「き……消えろっ！！お前に用はないっ！俺はここに武器を手に入る為に来たんだっ！！」

「毛嫌いするなよ。認めたくはないのはわかるが、醜い心も自分なんだからさ。それに、武器が欲しいなら俺を受け入れちゃえよ」

「受け入れる？お前を？」

「恨んで来たじゃないか、エルフを。人間の血が混ざっているという理由だけで迫害もされた。女王のアイニ様も、助けてくれたと思えば結局は犬扱い。迫害されてる分には喧嘩も売れたが、さすがに女王には逆らえないもんなあ。そんな生活、一体何年続けて来たよ？憎いと思っていいいんだよ。それだけのことをあいつらはお前にしたんだから」

カイルの記憶に甦るのは、ダークエルフのカイルが言った迫害の記憶。

町も歩けず、雑草を食べて飢えを凌ぎ、孤独に苦しんだ。

アイニに言われて城に仕えたが、与えられる仕事は汚い仕事や危険な仕事ばかり。成功しても褒められることもなく、しくじれば罵られ。生きた心地など感じたことはなかった。

「そつだ………どいつもこいつも俺をバカにして、罵倒を浴びせて、

虐待しやがった。俺は何も悪いことなんてしてないのにつー！」

涙が流れた。それは悔し涙。

迫害を受けながらも、エルフという種族の為に働いて来た。

そう思うと、忘れていた……いや、抑えていたどす黒い感情が芽生える。

「そう、怒れ。恨め。憎め。差別と迫害の塊のような種族を！」

ダークエルフのカイムは勝ち誇り、

「さあ、俺とお前は一心同体。共にあらねばならん存在だ」

再び手を差し出す。カイムの目には救いの手に見える。苦しんだ自分を自分で抑えつけていた。だがそれも終わる。

見返す。蔑み罵ったエルフを。

カイムはダークエルフの自分の手を握った。

「それでいい。俺はお前の武器だ。存分に使え」

「そうする………よー！」

カイムは握った手を力いっぱい引き寄せ、肘を顔面に入れてやった。

「ぐあっ………うが………」

ダークエルフの鼻が折れ、浅黒い肌をヌルツとした血液が重力に逆らえず滴る。

「つつつ………イテテ………」

結構な衝撃だった。カイムの肘がじんじんと痛む。でも爽快だった。普段ダンタリオンが見せる爽やかな笑顔など比べものにならないくらい。

「な……………なぜ……………なぜこんな真似を……………」

鼻を抑えてカイムを睨む。

恨みや憎しみで染まったカイムの心が見えない。感じない。

「なぜ？決まってるじゃねーか、テメーがム力つくからだよ」

「お前の心は黒く染まったはずなのに……………なぜだ……………」

一度黒く染まった心は、二度と元の形に戻ることはない。

それが心の摂理。

「俺はハーフエルフであることを誇りに思ってる。“なぜ”なら、エルフと人間の絆を取り持つことが出来るのは、両者の血を持つ俺しかないからだ」

「だが恨んでいたはずだ！」

「恨んでなんかねーって。そりゃあ、なんで俺だけって考えたことがあるにはある。でもそのくらい誰でも考えるだろ。純粋な人間でもな」

カイムは堂々とダークエルフに近づいて、

「初めて城に行った日、俺はアイニ様の部屋に呼ばれた。二人だけ

のあの部屋で、アイ二様は傷だらけの俺を見てただ泣きながら抱きしめてくれた。母親の温もりを知らない俺には、かけがえのない宝だ」

「だからどうしたって言う！！お前を犬同然に……！！」

「あの日から、俺はエルフの為に生きると誓った。死に場所はエルフの歴史の中に刻むと」

「なら……お望み通りにしてやる！！」

殴り掛かるダークエルフだったが、あっさり腕を取られ関節をキメられてしまう。

「うがつ……！！」

「エルフだったら……そんな風には思わない。ハーフエルフの俺にしか出来ないことがある。そう信じてるからな」

「ハーフエルフであることを、死ぬまで蔑まされることがお前の幸せなのか！」

「俺の幸せは……」

ぐっと力を入れる。皮膚の外に骨の軋む音がした。

「や……やめろ……！！」

「俺が決める！！」

一気にダークエルフの腕に体重を乗せた瞬間、綿毛のような光が弾け、カイムの前に弓が現れた。

「これは……………」

紅い弓。金で飾りが施され、青い弦が鮮烈な印象を与えた。そして弓身には、

『サルンガ』

そう刻まれている。

「サルンガ……………太陽の弓……………それがお前の名前なんだな」

カイムは試しに弦を引くと、そこに矢が現れる。

「……………そういう仕組みか」

矢には光の翼が生え、先端は炎が纏う。強い魔力が指を抜け全身に駆け巡った。

遠くどこまでも飛ばせる気がした。

カイムはより弦を引き、一気に矢を放つ。

矢は音速の速さで飛んで行くと、カイムを包んでいた闇を消し去った。

第四十四章 贖罪の刀剣

「“ウチ”の男共はどくどくしてこう甲斐性が無いわけ！」

カイルと同じような状況に陥り、オルマは自分だけ置いてかれたと勘違いしてるのだ。

「いくらなんでも女一人残して消えるつてのが納得出来ないわ!!」
男勝りな性格なのは自覚している。だからと言って、扱いが雑にされてる気がしてならない。

「大体、武器なんてどこにもないじゃないの!」

吐き捨てた文句が足元の石碑に気付かせる。

「あれ?こんなのがあったかしら?」

屈み、碑文に目をやる。

『非情の愛は人の力にあらず
切り裂くは幼き迷える魂
我振るう力は妖魔の力』

「……………どういう意味よ」

ここにダンタリオンがいたなら、「碑文とはこういうものです」と言っただけに違いない。

「そのままの意味よ」

「!？」

「お久しぶりねえ」

そう言ったのは、

「あ……あたし……？」

「そう……“あたし”よ」

オルマの前にいるのは彼女自身。ただ、若い。

「何者……なの？」

「聞いてなかったの？あたしは“あたし”よ」

「そうね……見た目はね。少しばかり若いけど」

聖騎士になる為の訓練兵だった頃の制服を着ている。推測するに、十年前のオルマ。

「で、何しに出て来たの？誰のイタズラかは知らないけど、過去に興味はないわ」

本物であるはずがない。自分はこの世でただ一人。

「過去に興味はない……か。そんなわけないわ。だってアンタ、引きずってるもの……あの時のこと」

若いオルマは剣を抜き、

「忘れたなんて言わないわよね？ 聖騎士になる夢を諦めた原因だもの」

「言うな！ そんなこと……………」

「逃げるの？」

自分なのに自分が怖かった。若い時の自分はこんなに鋭い目をしていたのだろうか？

「ある日、訓練兵に任務が下りる。住人がまるごと盗賊団って村の壊滅。訓練兵とは言え、聖騎士や賢者になろうって連中が集まった集団、問題はなかったはずだった……………ここまでは大丈夫？」

若いオルマは嫌味に笑う。

しかし、オルマは噛み付くこともせず、黙って彼女の話聞いていた。

「思ったよりも激しい戦いになり、任務遂行すら危ぶまれた中で、アンタは不意に飛び出して来た子供を殺した」

「あれは……………！！ 殺らなければあたしが殺られていたわ！」

「本当にそう？ 子供よ？ 殺さなくても済んだんじゃないの？」

「違う！！！」

「恐いんでしょう？自分の別の一面を認めるのが」

「あたしは正しい判断をしたわ！」

「じゃあなんで聖騎士にならなかったのよ」

思い出したくないことが記憶の奥底から這い出て来る。

盗賊団の村を壊滅、抵抗しなかった女、子供は殺さずにそのまま捕らえた。

オルマが殺した少年を除いて。

帰還してから、特に咎められることはなかったが、仲間からの目はそういうわけにはいかなかった。

女でありながら容赦なく子供を殺したと陰口を叩かれ、あまつさえ、万が一オルマが聖騎士となつて、立場が上になれるのを恐れた者達からの冷酷な仕打ち。そもそも、女性であるオルマが、聖騎士になることを快く思う者などいるわけがなく、男勝りな性格とは言え、いつしか心は折れていった。

「聖騎士になることを諦めただけじゃなく、恋にも破れちゃあ……女もおしまいよね」

若いオルマに心を傷つけられる。

「恋は関係ない！」

「忘れたの？シャクスに言われた言葉」

「……………」

「『女に騎士は務まらない。ダメだと思ふならさっさと諦めろ』だっ

て。冷たい男。“あたし”が好意を持つてゐることは知つて言つただよ？嫌な男だと思つて……………」

「黙れ！あれはシャクスの優しさだ！わざと冷たくして……………そして……………」

「めでたい女。あつ、そつか、まだシャクスのこと想つてゐるんだ」

「うるさい女め！！」

図星をつつつかれ、思わず出た拳だったが、若いオルマにあつさりかわされ、

「あつははは！なつさけない！そんなに好きなら抱かれたらあ？アイツだつて男だよ？その気にするくらいいけないでしょ？」

これが誰かの言葉なら、きつと言ひ返す自信はある。でも自分自身に言われるのは、否定出来る要素がない。

でも……………」

「その気……………」

「そう！わかつてんでしょ？自分の魅力。裸の女、前にして何も出来ない男なんていやしないわよ」

「……………くく……………くく……………」

オルマが俯き、肩がひくひくと上下する。

「あはははははっ！！」

そして耐え切れず吹き出した。

「な、何がおかしいっ!？」

「あは……はひ……あ……あたしがシャクスを……裸で誘う? あははは!」

「何がおかしいのか聞いている!」

「ちゃんちゃらおかしいわよ。なんであたしがシャクスに。シャクスから来るってんならわかるけど。大体ね、シャクスとかダントリオンなんかに媚びるようなこと、あたしのプライドが許さないのよ」

そう言つて、若い自分の剣を握む。刃を。

「な、何を……!」

オルマの手の平から血が溢れ出る。

「アンタ、“あたし”を気取るんなら、女としてのプライドなんかより……」

「ひっ……」

「女戦士オルマのプライドを優先しなっ!」

刃を素手でへし折り、その拳をおもいつき叩き込んだ。若い自分の顔に。

「顔洗って出直して来なっ！」

若い自分が光になって闇より消去された。

同時に、オルマの握っていた刃も光に包まれ、別の形へと変わる。

「これ……………」

細く長い剣。でもレイピアの類ではない。なぜなら見たことがない形だからだ。

金細工、鍰つばは般若の顔で、そこから静かに反るような刃。特徴的だったのは、両刃ではなく片刃なところ。

オルマは飴色の鞘から抜いた片刃に見惚れていた。

「なんて綺麗な……………」

その刃には、

『童子切り』

そう彫られていた。もちろんこの世界の文字で。

「フン……嫌な名前」

一閃すると、闇が消えて行く。

「でもまあ……………あたしにはお似合いか」

そう言ったオルマから涙が流れた。

強がる自分の心か……………それともあの日の少年への贖罪か。

それとも……

「涙なんて……バカみたい、あたし」

涙は、塵界^{じんがい}に住む者に許された、唯一つの償い。

第四十五章 空の剣

『広き空は平等なる懷ふところ』

天に翳かざすは尊大な志し

我裂く力は空の力』

やれやれだった。シャクスも優秀な知能の持ち主だが、こつこつのはどうも苦手だ。

「ったく……どうしろってんだ」

ガツンと石碑を蹴る。

「相変わらず短気なんだな」

柔らかい声がして、後ろを振り向く。

「あ………あんたは………」

「久しぶりだな、シャクス」

聖騎士の鎧を纏い、長いブロンドの髪を後ろで束ねた品のある男。

「に………兄さん………？」

「男らしい顔になったな。騎士の顔だ」

そこにいたのはシャクスの兄。

十歳も歳の離れた兄弟だが、よく遊んでくれた良き兄だ。

ただ……

「誰だ貴様……」

「おいおい、どうしたそんな恐い顔して」

一歩踏み出した兄から、一歩遠退く。

「兄さんは戦争で命を落とした。生きてるわけがない」

「シャクス……」

「正体を表せ！」

「落ち着け、シャクス。誰も“生きてる”とは言っていないだろ」

「なんだと……？」

「あの世から会いに来たのさ」

この世とあの世。口にするほど簡単には行き来出来ないだろう。会
いに来たいからと言って来れるなら、先祖なんてありがたいもない。

「聖騎士の鎧はどうした？」

「……わけあって売ったよ」

「魔王と旅してるのが関係してるのか？」

全てを知って話してるわけではないらしかった。

「まあ……そんなとこだ」

いい加減いい歳だ。兄に頭の上がらないわけでもない。なのに萎縮してしまつのは、兄に憧れて聖騎士になつたからだろうか。

誰からも信頼され、誰からも愛され、誰からも必要とされた男。聖騎士の白い鎧がよく似合う。自分はこんなに似合っていただろうか？

純白の鎧は選ばれた者しか纏えない。その資格はあつただろうか？

自分に問い掛けてみた。

「責めないでくれよ。こつちにも事情がある」

シャクスは赦しを請うように言った。

「責めないさ。お前が正しいと思つてしたことなら、それもまた聖騎士の判断だ」

「そんな大層な理由じゃないけどな」

「でも嬉しいぞ。俺を目指してくれたことは」

調子の狂う。もう子供じゃないのだが、そんな感じの声色に苦笑いすら浮かばない。

「だがな、シャクス。今の仲間で勝てると思つていいのか……サ
ン・ジェルマンに」

「……………」

「ダントリオンとオルマ、それとあのハーフェルフはいい。しかし、他のメンバーがいては足手まといじゃないか？」

確かに、シトリーやシメリー、カカベルは話にならない。クダイも正直どこまでやれるか不安だ。だからと言って、他に策があるわけでもない。

「エルガムに戻れ。そしてもう一度聖騎士隊を引き連れて挑めばいい」

「ケファノスがいる。奴の肉体さえ戻れば、戦いは有利に……」

「信じてるのか？」

「……………」

「ケファノスは魔王だ。肉体を取り戻せば、お前達を裏切り再び人間の敵になるやもしれん。所詮は魔族、そのくらい平気でやるぞ」

兄の目から聖騎士の目へと変わる。

厳しく、妥協のない目。

「それは……………」

「シャクス、お前は何の為に聖騎士になった？冷静に考えればわかることだろう？」

兄の目を見た。それは猛獣ですら平伏しそうな眼差し。

「出来ません」

シャクスはそう答えた。

「何？」

「ケファノスを信じるかどうかは俺が決めます。少なくとも、今は大切な仲間であることに変わりはない。それに、みんな頼りない仲間なんかではありません。一人一人が頼れる仲間です」

「シャクス……聖騎士として恥ずかしくないのか！」

「恥ずかしい？……ふざけるな」

「……シャクス？」

「一人、勝手に死に急いだ人間に、とやかく言われる筋合いはない！」

「……本気で言っているのか？」

兄は剣に手を掛けた。問い掛けにYESと答えたら、確実に抜くだろう。

だから言っただ。

「俺は兄さんとは違う。聖騎士で居続けることに自分を見出だせなかった。あんたの影を追っただけに過ぎないと気付いても、自分ではどうすべきかわからなかった。だけど、あいつらは……大切なものはなんなのか、それを考えさせてくれた」

「愚かしい。情けないぞシャクス。そんな弱い男だったとは」

剣を抜き、構えた。

「強い人間なんて、きつとどこにもいない。助け合い、時には馴れ合うかもしれないが、それが正しい人のカタチだ。道を誤る時、人は自分の力では正せない。仲間がいつだって教えてくれるんだ。仲間が道を誤れば、俺が教える。甘いと言われても……俺はそう信じる！」

腰を低い位置に下ろし、拳に力を込めた。

兄の亡霊を振り払う為。

「よかるう。それがお前の道だと言うのなら、止めはせん。だが……私を超えて行け！」

構えた剣にシャクスが映る。

「行くぞ！シャクス！！」

「望むところ！！」

好きだった。優しい兄が。聖騎士の真っ白な鎧がよく似合う兄が。

憧れはいつしか目標に変わり、同じ道を歩んでいた。

後悔はしていない。ただ自分は兄とは違うと気付いてしまっただけ。

「うおおおおッ！！！」

唸り、拳を兄の胸に振り込んだ。

鎧がひび割れ、破片を生んでシャクスの勝利を伝えた。

「ぐ……………なんて力だ……………」

兄は剣を落とし、胸を抑え膝を着いた。

「ありがとう、兄さん。兄さんがいたから、兄さんの背中があったから、俺は聖騎士になれた」

「シャクス……………」

最後に弟の名を呼んだ兄は、満足げに微笑み、そして光の泡となり消えていった。

残された剣だけが、誇り高く輝いて。

シャクスは剣を拾い上げ、刃の真ん中に刻まれた文字を読んだ。

『スカイカリバー』

それが剣の名称。

「兄さん……………」

瞳を閉じ、“フツ”と笑み、

「俺は兄さんのような聖騎士にはなれなかった。誰からも慕われ、愛されるような。でもそれでいい。もう兄さんの影は追わない」

シャクスがスカイカリバーを翳すと、闇が光に変わっていく。
その光の向こうに、待っている仲間達がいる。

「それとき、兄さん……………」

当たり前のように帰るべき場所へ帰るシャクスは、

「俺にも“弟”が出来たんだ」

自分の進む道を確かに歩いていた。

第四十六章 無眼の構え

「なあ、ケファノス」

クダイは岩に背を預けたまま、ケファノスと呼んだ。

「なんで危険を承知で武器を取らせに行かせたんだ。もし何かあったら……」

戦力の要となる四人だ。失うわけにはいかない。

「お前は信じてないのか、クダイ？」

ケファノスは静かに言った。

「余は信じている。あやつらなら、必ず武器を手にして戻って来ると」

「ケファノス……」

「絆とは……そういうものだろう？」

それを教えてくれたのは、お前達だと言わんばかりに聞こえた。

「し、信じてるよ！信じてるに決まってるじゃないか！」

起き上がって、なんだかよくわからない正当性をアピールした。

「人間とは不思議な生き物よ……志しが同じというだけで、命を

賭けることに抵抗が無くなる。未熟な種族だが、こうして見ると繁栄した意味がよくわかる」

「でも人間は、人間同士で傷つけ合うよ」

「言っただろう、人間は未熟だと。だが皮肉にも、その未熟さが絆をより強固なものへとする」

「ふうん」

難しいことはよくわからないが、ケファノスが言っのならそれはそういうことなのだろう。

そういうことにしておかないと、夜眠れなくなる。

「た、大変だべ！クダイさ！ケファノスさ！」

観念的な話をしていると、田舎娘カカベルがなにやら走ってこちらに来た。

「どうしたの、カカベル？」

「あ、あつちさ……………」

クダイは黙って水筒を差し出すと、カカベルは引いたくるように手に取り一気に飲み干した。

「ぶはー……………」

残さなければオルマに怒られる……………言う間もなかった。

「飲んじやった……………」

クダイは空になった水筒を覗き込んだ。
もちろん何も無い。

「全く、僕がオルマに怒られるのに……………」

口を尖んがらせて文句をつけてやったが、

「ク、クダイさー!!」

聞いておらず、クダイに詰め寄り、

「な、なんだよ!!」

「ま、ま、魔族が攻めて来たべ!!」

「なんだって!?!」

「大群で……………と、とにかくシトリーとシメリーが……………危ねだ!!」

最後の情報が耳に入ると、クダイはカカベルを押しつけて二人の元へ急いだ。

「クダイさー!!」

見る見る小さくなる背中に、

「行っちゃったべ……………」

呆然していると、

「シスター、間違いないのか？」

ケファノスに念を圧された。

「わ、わだすは嘘は言わね！ってか疑ってるのけ！？だとしたら心外だべ！」

「……………そうか」

魔族が大群で攻めて来ている。ケファノスが思うのは、なぜそれに気付けなかったのか。

「シスター、お前はここに残りダンタリオン達を待て」

「え……………？お、おめさんはどうするだ？」

「クダイを一人には出来ん」

言い残してクダイを追う。

「ちょ……………ケファノスー！」

「エルフが二人……なぜこんな場所に？」

アスペルギルスが怯えるシトリーとシメリーに触れようとすると、周りにいた魔族達が衝撃波で吹き飛ばされた。

「何事だ!!」

気を取られた刹那、

「シトリーとシメリーに手を出すなっ!!」

崖の上からクダイが飛び降りて来た。

「貴様ツ……！なんでここに!？」

「久しぶりだな、アスペルギルス!!」

生意気にも敵に挨拶する余裕を見せた。

ジャステイスソードを見たアスペルギルスは、警戒してか二、三步下がる。

「どうしたアスペルギルス」

アスペルギルスの後ろにひしめく魔族の群れが二つに割れ、髪をツンツンと立たせ、赤いバンダナをした男が現れた。

「エンテロ」

そう呼ばれた男は、大きな鉾をドスンと下ろし、

「ほう………ひょっとしてコイツがジャスティスソードの災いを受けない少年か？」

エンテロは興味深げにクダイを見る。

「俺は四天王の一人、土のエンテロだ」

「四天王………」

アスペルギルスのような殺気は感じないが、どこか薄気味悪い。

「なあ、俺にやらせてくれよ。いいだろ、アスペルギルス？」

「………いいだろう」

「ありがとうございます」

アスペルギルスはエンテロにこの場を任せ、

「では我は先に行く」

大群の部下達を引き連れ、ベオの亡きがらの方向へと移動をして行く。

「まさか………！」

「なぐんだ、お前もケファノス様の遺品を探しに来たのか」

「ケファノスはまだ死んでないっ！」

「冗談だよ」

全く性質は違うのだろうが、どこかダンタリオンと被る調子の良さだ。

「二人共下がってて」

クダイに言われ、シトリーとシメリーは岩陰に隠れる。

「クダイ……………」

「心配なくていいよ、シトリー。すぐに終わるから」

ジャステイスソードを構える。

「キイイイイン」

甲高い音が鳴り、それが戦いの合図となる。

「いいねえ。自信満々ってのはいいことだ」

やけにデカイ鉾を、エンテロは軽々と片手で振り回し、

「名前だけ聞いておこう」

「クダイ。僕の名前は、桐山クダイだ！」

先手必勝。先に仕掛ける。

「クダイか。勝利への貪欲さ………気に入った！存分に楽しませてもらうぜ！！」

エンテロは、遠心力を惜しみなく利用して鉾を振り回す。その度に暴風が吹き荒れ、クダイの行く手を遮る。

「くそっ………負けてたまるか！」

正面がダメなら右へ、右がダメなら左へ回り込む。

「ほらっ！ほらあっ！！近づかなきゃ俺は倒せないぜえ！！」

暴風はやがて絡み合い、竜巻へと変化し、

「受け止めて見る！クラッシュ・トルネード！！」

クダイへまっしぐらに向かって来る。

「こんなもの！！」

臆することなくジャスティスソードで切り裂いた。が、飛び散る砂埃が視界を奪った。

「ぐあ………目が………」

「フハハハ！中途半端に剣で払うからそうなるんだ………よ！」

鉾を叩き下ろすと、衝撃波が真つ二つに地面を裂いてクダイを傷つける。

胸のプレートがあっさりと破壊され、血が飛ぶ。
深手ではないが、慣れない激痛に怯む。

「なんだよ、こんなんじゃイグノアの方が強かったじゃないか」

伝説の剣を持つてるといっただけで、勝手に実力まで計られてはたまらない。

近づこうとしたエンテロは、ダメージにうろたえるクダイを包む光を見た。

光は見る見る傷を塞いで、痛みさえも取り去った。

「治癒魔法……………」

エンテロは隠れてるシトリーとシメリーを見て、

「なぐるほど。ちゃんと役割はあるわけか」

抜群のタイミングで魔法を放った二人に感心した。

「いい子ちゃん達だな。だけど、治癒魔法じゃ砂の入った視界までは回復出来ない。残念でした」

視界の見えないクダイは、方向までも失っている。唯一わかるのは地面だけ。そう思い込むエンテロは、視界を失ってからがクダイの真骨頂であることを知らない。

無眼の構え。

クダイからは、はっきりと認識出来ている。

クラッシュ・トルネードを受け、身体の方は逆になった。

つまり、今エンテロは後ろにいる。ゆっくりと歩いてくる“光

”。

クダイは更に集中して、自分の取るべき行動を見ようとする。
光の軌跡は、油断しきっているエンテロへの一撃を描き出す。

「クダイー!!」

シトリーは危険を知らせ、炎の魔法をエンテロに放つが、片手で消されてしまう。

「治癒魔法は見事だったが、四元素魔法はからつきしだな」

エンテロは鉾を構え、後ろ向きにしゃがむクダイの背中に狙いを定めた時、腹部から胸にかけてひんやりとした感触があった。

「……………な？」

それがなんであるか知った時、エンテロにとっては初めての恐怖だった。

血が流れている。ジャステイスソードがつけた傷。
前を向いた時、そこには目を閉じたままのクダイがいた。

「視界を奪ったところで僕にはなんの不都合もない」

“その”クダイは、ダンタリオン達を救出に向かうあの日、カカベルに冷たくしていたクダイだった。

「バカな……………」

振り向き様に振り抜かれたジャステイスソード。エンテロにはそれがわからなかった。

ゆっくりと近づくのは、今度はクダイの方だった。

「僕にはお前が見える。そして、いつどこをどう攻撃すればいいのかもわかる」

「く…………くそつたれーッ！！！」

破れかぶれにエンテロは鉾を振るったが、まるで蜃気楼のように“そこ”にはいない。

気付いた時には、クダイに背後を取られ、背中までも傷つけられる。

「ぐあ…………っ！い、いつの間に……………」

無様にも片膝をついたエンテロに、クダイは静かに言った。

「今なら、負ける気がしない」

第四十七章 勇者の称号

「負ける気がしない……だと？」

致命傷は避けられたが、そんなことはどうでもよかった。

それよりも、今のクダイの状態だ。視界を奪われながら、理解不能の動き。

久しい恐怖に、エンテロは我を忘れそうになるのを堪えていた。

「そうだ。聞いたことくらいあるんだろ？無眼の構えって」

「無眼の構え………夢物語のふざけた技だとばかり思っていたが………まさか使える奴がいたとはな」

「ジャスティスソードと無眼の構えがある限り、僕は誰にも負けない」

満ちた自信に気圧され、エンテロの恐怖感はさらなる高台へ昇る。

「たしいた自信だぜ。ならこっちも本気でいかせてもらっ」

鉾を地面に刺し、柄を握り、

「宿れ！竜の力よ！大地の竜アースドラゴン！！」

エンテロから広がる魔法陣が大地を震わせる。彼の身体に回路のよくなものが緑で鮮明に描かれると、すぐに肉体に変化が現れ、その姿を竜人へと変化させた。

視認は出来ないが、有り余る力をクダイは感じた。

「無眼の構えがいかなるものかは知らねーけど、勝利の絶対値を求めるものではないはずだ。だが竜の力は違う。鋼の鱗と鋼の牙。魔力の大半を使う為、大掛かりな魔法は使えなくなるが、その攻撃と防御は人であるお前には超えられん！」

「やってみればわかる！」

土色の竜人が何を言おうと、漲る自信でその言葉が耳に留まることはない。

「その生意気な鼻っ柱、へし折ってやる！」

エンテロは全身の筋肉に力を入れると、クダイに向かって突進した。

「余の宝を盗もうとは、見上げた根性だ」

アスペルギルスを前に、ケファノスは言った。

小さなケファノスの身体は、うっかりしてれば見落とすくらいで、存在感のアピールがなければ知らずに通り過ぎてたかもしれない。

「かつて我々の前に貴方に仕えていた四天王の形見。ならばそれは我々が使うべきもの。違いますかな？」

今ならケファノスを仕留めるに労を要しない。後ろにはざっと見て五百の大群。

アスペルギルスは勝ちを確信していた。

「だそうだ。どうする？」

誰かにケファノスは叫んだ。その直後、火球が降り注ぎ魔族の群れに襲い掛かる。

「な、何奴！？」

見上げたアスペルギルスの視界の先に、

「どうするもこうするも、これは俺達のモンだからなあ」

赤く輝く弓を構え、カイクがいた。

「欲しけりゃ、力づくで奪うってのがセオリーじゃない？」

オルマが現れ、手には童子切りが映えている。

「また数に頼るのか。シールドモナスと変わらん」

呆れたようにシャクスが言い、スカイカリバーを肩に担ぐ。

「剣の切れ味を見るには最適なのは？」

その隣にダンタリオンが……特に何かを持ってはいない。

それに気付いたシャクスが、

「お前、どうしたんだ？」

「何がです？」

「今更気がついたが、手ぶらってことはないだろ」

「ああ……」

言わんとしてることを把握すると、

「私のはこれです」

ダンタリオンが右手を翳すと、はるか上空に暗雲が渦を巻き、中心から、有に十メートルはある巨大な青い光が現れる。

その形から推察するに、それは槍であることは間違いなかった。

「魔槍グランドクロス」

いつもの微笑みが、気持ち自慢げに見えた。

「お前に似合って、目立ちたがりのようだな」

皮肉ったつもりだが、ダンタリオンにしてみれば褒め言葉でしかない。というより、何となく、本当に何となくなのだが、どこか不公平感が否めない自分がいる。スカイカリバーも結構な実力はあるのだと思うが。

「ケファノス、クダイはどうした？」

あまり考えてると、ダンタリオンに殺意すら抱きそうなシャクスは、“弟”が気になるのか、少し強い口調で言った。

「一人でシトリーとシメリーを助けに行った。おそらくはアスペルギルス以外の四天王も……………」

いつにない歯切れの悪さだったが、それを聞けば取る行動は一つ。

「なら俺はクダイのところへ行く。ダンタリオン、オルマ、ここは頼んだぞ」

そして高台のカイムに、

「カイム！道を作ってくれ！」

叫ぶ。

「お安い御用だ！」

カイムは弦を引く。翼のある炎の矢が現れ、つがえた。

「走れ！シャクス！！」

同時に放った矢は、当然シャクスの速さより速く、魔族の大群を二つに割った。

「行かせるかっ！」

咄嗟に、アスペルギルスが魔法でシャクスの背後を狙おうとするも、

「アンタの相手はあたしだよ！」

オルマに邪魔される。

「なら私は“これ”を降ろさせてもらいましょう」

カイムの援護をする為に、魔槍グランドクロスを魔族の群れに降ろす。

駆け抜けるシャクスを阻もうとしていた者達が一転、頭上から降り注ぐ炎の矢と、巨大な光の槍に混乱する。

「ええいつ！うろたえるなっ！」

そう言ったアスペルギルスの言葉に従えるわけがない。なぜなら、矢はまだしも、グランドクロスだけは防ぎようがない。つまり死神に憑かれたも同然なのだから。

「使えない奴らめ！」

「使えない部下を持つと大変なこと。ねえ、ケファノス？」

オルマの言葉に、いちいちケファノスが答えることはなく、やがて激しい光と大振動、爆音と共に魔族の群れは、半分以上が肉片残らずこの世から消え失せた。

「ではオルマ、アスペルギルスは任せました。私は残党退治をします」

「早く行きな」

ダンタリオンはグランドクロスを発動することなく、得意の魔法で残党退治に勤しむことに決めた。

そして、

「さあてと、始めましょうか」

ニヤリとオルマは笑った。

「女あつ……………！」

アスペルギルスはマントを外し、

「後悔するぞ」

魔力を増幅させていく。

全身が炎に包まれ、それはアスペルギルスを本来あるべき姿へと変えてゆく。

「気をつける。オルマ。アスペルギルスはお前の首を本気で奪いに来る」

ケファノスが警告する。わかるのだ。一人では勝ち目のないアスペルギルスが、死ぬつもりはないまでも、せめて一人くらいは倒したいと思っていることを。

アスペルギルスを包んでいた炎は失せ、そこには紛れも無い魔族がいた。

「我にこの姿を使わせたのは、貴様が初めてだ」

太い尾が、蛇のような動きをしている。

赤い肉体に緑色の不気味な瞳。それがアスペルギルスの姿。

「あたしさあ、いつつも思うんだけど、変身することで強くなるんなら、始めから変身してればいいのに」

それを世論に問えば、きっと支持はされるだろう。

ただ、某の理由は存在するのだろうか、所詮は他人事。

「うるさい女め！そのうるさい口から閉じてやるから覚悟しろっ！」

体格的には断然劣るオルマだが、

「やれるもんならね！」

怯むことなく真っ向から向かって行く。

武器は戦人にとって、大切なパートナー。力だ。

新たな武器を手にした四人は、間違いなく自信に満ち溢れ、成長している。

比類無き勇気を持って。

今、彼らは勇者だった。

第四十八章 愛の魔族、セルビシエ

「黒仮面様」

白い肌に水色の髪。それに似合わない黒いドレス。女は少しでも気に入ってもらおうと、黒仮面のパーソナルカラーでもある“黒”を纏うのだ。

黒仮面いわく、纏っているのは“闇”なのだそうだが。

「水のセルビシエが」

魔王城の地上階層から、遠くを眺めていた視線を、セルビシエへと向けた。

「はい」

「アスペルギルスやエンテロと、ケファノスの宝とやらを探しに行つたんじゃないかったのか？」

「わたくしは今回は遠慮させていただきました」

近寄りたくとも近寄れない距離に、魔族の乙女は切なかった。

「そうか。で、俺に何か用か？」

「……………」。

「どうした？」

この想いが届かないのがもどかしい。

だが、傍に置いてもらえるのならそれでよかった。
まだ成就是してないが。

「サン・ジェルマンはどこに？」

「サン・ジェルマンなら時間構築魔法具^{ツール}を見つけたとかで、魔族を率いてお出かけ中だ」

茶目つ気を出した言い方で、口をニヤツとする。

セルビシエが惹かれる要因の一つだ。

素顔を知らないのにだ。

「一緒に行けなかったのですね」

一歩だけ歩み出る。小さな一歩。それでも、黒仮面に近づけるのなら満足なのだ。

「俺はサン・ジェルマンの“客”でしかない。奴のやることを見守るだけだ」

「では何もしない？」

「フツ。まあ、たまに気まぐれになるかもしれん。その時にならんとなくとも……………」

「もし、何かある時は、わたくしを遠慮なくお使い下さい。黒仮面様の為なら、このセルビシエ、命を賭すことを嫌いません」

素直に想いを伝えられない。故に、例えば奴隷のような扱いでも、使

って欲しいと思ってしまう。

「俺はお前の主ではない。そんなこと出来るわけもなからう」

「いいえ！今の魔族に主はいません！ですから、どうかそのようなことは……………」

「……………わかった。気持ちはありがたく貰っておく。だが、命を捨てようなどとは考えるな。自分を大切に出来ない者は……………俺の部下にはいらん」

魔族であるセルビシエにとって、その言葉は嬉しいものだった。

しかし、遠く……………遙か時空の彼方を見る眼差し、そこに自分はいない。

だからこそ、胸中は命を賭けると決意する。そんな不器用な生き方しか出来ない女なのだ。

「ありがたき幸せ」

主でなくとも忠誠を尽くしたくなる。そんな雰囲気黒仮面にはある。

「……………一つ……………聞いてもよろしいでしょうか」

「二つ目……………だろ？」

どこまでも遊ばれてしまう。迂闊にも、それが心地よかったりもする。

「二つ目……………かまいませんか？」

「言ってみろ」

「では」

セルビシエは一呼吸置いてから、

「黒仮面様は一体、何の目的でこの世界にいらしたのです？」

「サン・ジェルマンの行く末を見守る為だ。そう言っただろ」

「それは嘘でございますわ。貴方様ほどのお方が、静観だけを目的としてとは思えません。お聞かせ頂けませんでしょうか？」

セルビシエの目論みは明らかで、黒仮面に目的があるのなら、影でそれを支えたい。

「フッ……………フフ……………」

「な、何がおかしいのですか!？」

「いや……………幸せ者だよ、俺は」

「か、からかわないで下さい!わたくしは真剣に……………!」

そっと伸ばした手が、セルビシエを引き寄せる。

「く……………黒仮面様……………」

「そう焦るな。そこまでして俺に尽くしたいのなら、活躍の場を設

けてやる。だから今は待つんだ」

きっと、黒仮面は“誰か”を思い出したのだろう。そう感じた。
でもそれでいい。尊くありたい。
今この時は永遠なのだから。

第四十九章 アイラブマイブラザー

「クダイー!!」

シトリーが叫びきるよりも先に、クダイの身体は宙に舞い、重力に従って地面に落下した。

「ぐはっ」

呻かずにはいられないくらい鈍い痛みが全身を襲う。

閉じていた目を開くと、そこには化け物のようなエンテロがいる。

「無眼の構えで何を見ようが、お前が攻撃する前にこちらが攻撃すればいいだけのこと。それだけなんだよ」

竜人となったエンテロは、全ての能力においてクダイの上をいく。

そもその基礎がクダイにはない。無眼の構えは無敵の力には違いないが、かと言って、クダイ自身の経験の少なさまでは埋められないのが実情。

早くにケリをつけられなかったのがその証拠だ。

優位に立った時、そこは足場も無いような崖っぷちも同然。

クダイは甘かった。

「そんな……… 光は見えてたのに………」

トカゲのような顔付きのエンテロが近寄って来る。その様が不気味この上ない。

「ジャステイスソードの災いを受けない。無眼の構えを使う。尊敬するぜ。誰もが不可能だと思った力を身につけてるんだからな。だが、剣の型がパターン過ぎる。それも騎士が使う型だ。誰に教わったかは知らないが、たいした師匠じゃあないな」

「シャ……………シャクスをバカにするな！僕が未熟なだけだ！」

「くく。どうだか。ま、未熟ってのは否定しないが」

「このやろっ！」

型も何も無い大振りでジャステイスソードを振るっが、エンテロはのけ反りかわす。そしてクダイに鉾を向けた。

「今度はさっきのようにはいかんぞ」

「バケモンめ……………」

「たいして変わらねーよ……………お前もな」

エンテロが笑った時、後頭部にコツンと何かが当たった。

首だけを動かし、後ろを見る。そこにはシトリーとシメリーが、いつの間にか傍まで来ていた。

「何の真似だ？」

「ク、クダイは私達を守る！」

シトリーが勇気を振り絞った。

「シトリー！シメリー！逃げるんだ！」

「やだ！私達だって………！」

シトリーが杖を構えると、

「シトリーばつかにいいカッコさせないからね！」

それはシメリーなりの合図。二人ならやれると。

「こいつは驚いた。よく見りゃエルフじゃないか。人間と一緒にいるとは珍しい」

「うるさいっ！行くよ！シメリー！！」

「わかったよ！シトリー！！」

二人は両手を合わせ、目を閉じて詠唱する。

「Das saubere Gebet eines Trau
menden jungen Madchens」

二人の間から光が立ち上り、エンテロへ攻撃する。

「くくっ。無駄だ」

だが、あっさりと掻き消され、

「ほづらよー！」

風で軽く吹き飛ばした。

「シトリー！！シメリー！！………テメエ！！！」

ジャスティスソードで殴り付けるようにかかって行ったが、やはり軽くかわされ、鉾を突き付けられる。

「まあ、なんだな。一瞬でも俺をビビらせたんだ、胸を張ってあの世へ……行けっ！！」

クダイを一突き………のはずだった。

鉾は悪意のあるものに阻まれ、動きを止めている。
長く大きな刃の剣。複雑な装飾がちりばめられた。

「シャ………シャクス………」

クダイの前に大きな背中があった。

「何だお前……？邪魔するなよ」

そう言いながらも、エンテロは邪魔されたのだと気付いている。

「俺の弟子を可愛がってくれたみたいだな。礼をしなければならん」

「ははっ。いらねーよ。でもなんだな、どうしてもってなら考えないでもねーけどよ」

エンテロはシャクスから距離をとった。

悪い風を感じたからだ。

「大丈夫か、クダイ」

「な……なんともないよ。それよりシトリーとシメリーが……」

「ここで休んでろ」

シャクスはクダイを座らせ、エンテロの脇を抜けて二人のところまで歩く。

「二人共、ケガはないか？」

「え……あ、うん」

シメリーがちよつと意外に思えたのは、シャクスが優しかったこと。いつもしかめっ面で、人を威嚇するような目つきでさえ優しかった。

「少し離れるんだ」

シャクスに言われ、二人はトコトコとまた岩陰まで離れた。

「よう、邪魔した詫びはあるんだろうな」

的がクダイからシャクスに移っただけのこと。骨のある戦士なら申し分ない。

エンテロは舌をペロリとした。

「詫び？フン、詫びのは貴様だろ」

「……………ほう。俺が？」

「俺の仲間をいたぶったんだ。頭を下げるくらいでは済まさんぞ」

「気にいらねー。仲間がどうしたとか言う奴は嫌いなんだよ」

「そうか。そいつは助かる。化け物の趣味はないんでね」

「野郎……………」

一生懸けても友人関係は築けないと思った。どうにもこうにもシャクスの存在がカンに障る。

「来い！スカイカリバーの錆にしてやろっ」

シャクスはスカイカリバーを構えた。

第五十章 遠く離れた世界から

「せいやあああああつ!!」

果敢にアスペルギルスに挑む。

オルマはアスペルギルスの魔法をかわし、受け、裂き、戦の女神のように華麗だった。

「おのれ女め！調子に乗りおつて!!」

予想外の強さを見せるオルマに、アスペルギルスは主導権を握られてしまう。

「もう泣き言かい？てんで話にならないねえ。魔王様に笑われるわよ？」

「黙れっ！ケファノス様は既に魔族の王ではない！」

「だってさ、ケファノス」

傍らで聞いていたケファノスは、

「いいから早く片付けろ」

そう言うだけだった。

「じゃあ、遠慮なく！」

カッと目を見開き、童子切りで斬りかかる。

だが、アスペルギルスとて魔族を代表する四天王。そうそうやられっぱなしとはいかない。

調子に乗るオルマの隙を伺う。

「喰らえっ！アスペルギルス！！」

その時は早々訪れ、勝てると睨んだオルマが踏み込んで来る。

「愚か者！」

振り下ろされた童子切りをやり過ごし、そのまま腹を狙う。

体力に余裕がある一撃だ、決まれば生身の人間であるオルマはひとたまりもない。

着実に見定め、誤差修正のいらないヒッティング。

「……………はっ……………」

白目を剥く寸前で前のめりに倒れる。

「見くびったとはいえ、中々の戦士であることに違いはないか」

アスペルギルスは立ち上がれないオルマの背中に足を乗せ、

「だが我は魔族四天王の一人、火のアスペルギルス。人間風情に倒せるところか！」

そうは言ったが、シュードモナスのあまりない無様な醜態。人間が調子に乗るのもわからないでもない、勝手な解釈をした。

「さて、ケファノス様。貴方様のお仲間、消しても文句はありません

んでしょうな」

ケファノスがどう出るか。試している。

「……………殺ればいい」

「くつくつ。これは冷たい。戦いを出来ない貴方様に代わって戦う者を、そう冷たくするものではありませんぞ」

「アスペルギルス、これだけは言っておく。オルマも、その他の者も、余に代わって戦ってるわけではない。各々が自分の為に、そして世界の為に戦っているのだ」

「くつくつくつ。笑わせる。魔王様の言葉とは思えませぬな。まるで世界の平和を望んでるように聞こえますぞ」

「もとより余は人間と戦争をするつもりなどない」

「バカな。我々は全て貴方様の意志で動いて来た！ではあれは一体なんだったと言うのだ！」

「主の真意を読めなかった貴様らの過ちだろう」

「ふざけたことを！」

「時にアスペルギルス。オルマを殺るのなら早くした方がいい」

「何っ？」

怒りに我を忘れていたが、ふと後ろを見ると、

「その足をどける」

「あなたに勝ち目はありませんよ」

カイルは矢をつがえ、ダンタリオンは魔法を両手に準備している。
率いた大群の魔族は既に亡きがらとなっていた。

「役立たずどもめ！」

「その言葉、そのままそっくり貴様に返してやる」

ケファノスがアスペルギルスに近づいて来た。

「ぐっ……………」

アフロヘアの天使のマスコットは、とても愛らしい笑顔でいる。それなのに、のけ反りそうな重圧を放っている。

それは魔王ケファノスが健在、存在であることを語っているようだ。

「うっ……………」

気を失っていたオルマが目を覚まし、

「だ……………誰に足乗せてんだよ！」

ぐっと腕に力を入れ、アスペルギルスの足を振りほどく。

とてもじゃないが、足蹴にされたままは死ねたもんじゃない。

「クソッ……」

アスペルギルスは姿を元に戻すと空へ上がり、

「覚えている！次は必ず決着をつける！！」

退散して行った。

「何言っただあいつ？勝手に逃げてったくせに」

カイムの言うことはすこぶる正しく、ダンタリオンもいつものスマイルを苦笑いに変えていた。

シャクスとエンテロの戦いは互角だった。

竜人となったエンテロの動きを確実に読むシャクスは、一見攻撃が出来ないように見えるが、実はスカイカリバーが竜人の肉体に効くかを、小さな傷をつけて試していた。

「やるな！名を聞こう！」

カンに障ると思ったが、強い奴は嫌いじゃない。エンテロは鉾を構えたまま言った。

「俺はシャクス。聖騎士シャクスだ」

「聖騎士か……どうりで……」

強いわけだ。そして、クダイが騎士の剣術を使っわけも納得がいく。

「俺は……」

自身も名前を言いかけた時、

「エンテロ！退却だ！」

アスペルギルスが現れた。

もちろん、それは良くないことの証であり、

「チッ……」

舌打ちで了解するしかなかった。

「聖騎士シャクス、俺はエンテロ。四天王の一人、土のエンテロだ。覚えておいてくれ」

そしてクダイを見て、

「お前もだ、クダイ。お前らは俺の獲物！今度会う時まで、せいぜい腕を上げておけ！」

退却して行った。

「竜人が……厄介な生き物を飼ってたもんだな、ケファノスも」

スカイカリバーを鞘に収め、

「今度会う時は貴様の最後だ」

ジャステイスソードでさえ傷を負わせられなかった竜人の肉体。スカイカリバーの刃には血が付着していた。

戦士が鞘に赤い刃の剣をしまうと、

「行っちゃうの？」

少年にそう問われた。

「ああ。やらなきゃいけないことがあるんだ」

戦士の鎧は赤く。その“中”で炎が揺らめいている。

高貴でとても鮮烈な鎧。

鞘が右腰にあることから、左利きであると伺える。

「そっかあ。つまんないなあ」

口を尖らせ別れを惜しむ少年に、

「そう言っなよ。どんなに離れてても、相手を想いやればどこに居たって一緒だよ」

頭を撫でてやる。

「せめて、みんなにお別れくらい言っておけばいいのに」

「……………」

もう二度とは会えない。それをわかっているからひっそりと旅立つのだ。

少年にさえ見つからなければ、それが出来たのだが。

「みんなにはお前からよろしく言っといてくれ」

朝焼けの空が眩しい。

「僕も勇者様みたいに強くなれる？」

「なれるさ。誰かを守りたいという強い想いと、正義の使い方さえ間違わなければ」

「うん。僕頑張る！」

少年の言葉を聞き届けると、戦士は六枚の炎翼を広げる。

「じゃあな」

素っ気ない言い方をしたが、別れが惜しいから。

戦士は朝焼けの空へと飛び立つ。

「ばいばい！勇者様あー！」

空間に歪みが生じ、戦士が消えると、後には波紋が広がった。

追うべき者を追って、戦士は次の世界へと旅立った。

第五十一章 魔王が見る光

「みんな無事でよかったよ」

クダイはダンタリオン、シャクス、オルマ、カイムを労った。

「カイム様、お帰りなさい」

何年も離れ離れになっていたような口調でシメリーは言った。

「ただいま、シメリー」

ダンタリオンを見習ったように、カイムはにんまりとした。

「しかしあなたも人が悪い。武器を手に入れるにしては、少々心臓に悪かったですねえ」

そのダンタリオンが、ケファノスにクレームをつけると、

「全くだ。頭がおかしくなったかと思っただぜ」

カイムもうつんと頷いて支持した。

他の三人に何が起きていたかは知らないが、おそらく同じことが起きていたに違いない。そんな気がしていた。

「ま、その甲斐あってこんな凄いもの手に入っただから、結果オライじゃない？」

オルマは飴色の鞘から童子切りを抜いて、刃を陽に当てる。

言うまでもなく残酷なまでに美しく輝く。

武器職人の中で、剣を造る者だけが時に魅せられ、狂気する。その理由がわかるような感覚が、オルマの中にはあった。

「魔力を秘めた武器というのは、力が強い分扱える者が限られる。魔力に負けないだけの心がなければ、魔力に呑み込まれ、自我を崩壊させてしまう」

「だが、手に入ればとてつもない力を得たのと同じこと。それに、心が研ぎ澄まされたようだ」

ケファノスが言い、シャクスが言った。

「でも、ダンタリオンだけ反則だろ」

カームは、ダンタリオンが一度だけ使った魔槍グランドクロスを思い出した。

あれを果たして武器と呼んでもいいものか。

「本来、賢者は前線で戦うものではありません。騎士達を援護するのが役目。それを考えれば、私にはお似合いの武器だと思いますよ？」

と、ダンタリオンは自分を援護した。

「羨ましいな」

すると、クダイがポツリと呟いた。

「何が羨ましいの？」

俯き、表情を曇らせたクダイを、シトリーが案じる。

些細なことでも、自分の知らないクダイは認めたくないのだ。

「だって……みんなは武器の力に見合った実力がある。だけど僕には、ジャステイスソードや無眼の構えがあっても、いつも中途半端に終わる。情けないよ」

「そつたらことねーべ。クダイさは立派だべ。それが証拠に、二人の危機を伝えた時、一目散に飛んでつたべ」

カカベルは気を遣ったわけではなく、本当にそう思っていた。

「クダイは十分に強いよ！ エンテロだって認めてたじゃない！」

シトリーが慰めるが、それは今のクダイには酷過ぎる。

「そういうことじゃ……ないんだよ」

だから、つい素直にありがとうと言えない。

「元気出して、クダイ！」

「元気だよ。僕は」

「だって顔暗いよ」

「どうせ僕は暗い顔してるよ」

「なんでそんな言い方するの！」

「別に。普通だけど」

「普通じゃない！」

「うるさいな！ほつといてくれよ！」

「……………もういい！クダイなんて大嫌いっ！！」

シトリーは走ってその場からいなくなった。

カカベルは、なんで喧嘩になったのかいまいちわかってないようだった。

誰かこうなる前に止めるべきじゃなかったのか……………と、“大入組”は声には出さなかったが、責任を感じていた。

「クダイ、お前は剣を持って日が浅い。それでも、あそこまでやれたんだ、才能はある。無眼の構えやジャステイスソードを使える才能ではなく、努力する才能だ。現に、四天王のエンテロはお前のことも覚えておくと言っていた」

シャクスは騎士だからこそわかる。クダイは剣の才能もある。

ただ、それを言わず別の褒め方をしたのは、クダイのこれからを考えてのこと。

もちろん、努力する才能もある。

どんな才能も、最後に優劣をつけるのは努力の数だ。それをクダイには忘れないで欲しかった。

「氣い使わなくていいよ」

クダイは腰を下ろしていた岩から立ち上がると、シトリーとは逆の

方へ歩いて行った。

「反抗期……… ってことはないよな？」

「ほつときな。子供なだけだよ」

カイクにオルマは言い聞かせた。

「だが、わからないでもない。俺だって、兄のように強くなりたくてもがいたこともある。それがあつたからこそ、今の俺があるんだ。あいつも、自分の未熟さにもがいて、はい上がるしかないんだ」

シャクスは、スカイカリバーを手に入れる時現れた兄を思い出す。

よかつたのだと思う。ずっともがきっぱなしだったから。ようやく自分を取り戻せた気がしていた。

「何かありました？」

と、ダンタリオンが唐突に聞いて来る。

「どういう意味だ？」

「いえ、随分機嫌が良さそうなので」

につこりするダンタリオン。シャクスは、自分がまさか同じような顔をしてはいまいかと、“敢えて”眉間にシワを寄せてそっぽ向いた。

「ダンタリオン達も無事戻って来たことだし、いよいよ行くだな？
その……… ネンネの塔に」

「輪廻の塔」

カカベルの間違いを、シメリーが溜め息混じりに訂正する。

「アスペルギルス達がここに来たということは、まだサン・ジェルマン達は輪廻の塔へは行っていないということだろう。だが、今回の件で間違いなく奴らは輪廻の塔へ向かうはず。時間が無い」

ケファノスは緊張感を漂わせる言い方をした。

「いよいよだな」

カイムは指を鳴らした。

「輪廻の塔に不死鳥が現れるかどうか……楽しみだ」

オルマは童子切りを鞘に収め、空を見上げた。

「サン・ジェルマン……奴さえ倒せば全て終わる」

シャクスが目的を確認するように呟き、

「それにはケファノスの力が必要です。不死鳥には何があっても現れてもらわねば」

ダンタリオンもそう呟いた。

「なんかドキドキして来ちゃった」

シメリーは深呼吸をし、

「わ、わだすもだ」

カカベルも高鳴る心臓の音を必死に抑えていた。

「輪廻の塔……………か」

そこへ行けば全てカタがつく。そうはケファノスには思えなかった。
ここまでの道のり。甘くはなかったが、決して厳しくもなかった。

シャクスやオルマ達に加え、カйм達が味方となり、彼らの実力は四天王に劣らない。

そう考えると、今までが都合良すぎたような気がした。

世界や人生がそうであるように、運にもバランスがある。良すぎた反動が不安になる。

（余がこんなにも臆病だったとは……………）

初めて知る自分の一面。だが、もう後戻りは出来ない。

魔王がその目に見るものは、希望と呼ぶに相応しい光達。

第五十二章 S P I C E B O Y

「どこへ行ってた、セルビシエ」

開口一番突いて出たアスペルギルスの言葉に、セルビシエは不満だった。

「どこだってよろしくなくて？いちいちあなた方に言う必要はありませんわ」

「どーせ、またあの男のところだろ」

エンテロは察しがついてるんだと言わんばかりに言う。

「黒仮面か」

アスペルギルスが聞くと、

「あんな空かした男のどこがいいんだか」

エンテロが冷やかした。

「セルビシエ、あの男だけはやめておけ」

「あら？どうしてかしら？黒仮面様は素敵なお方よ」

アスペルギルスの言い方が気に入らなかったのか、食ってかかった。四天王と呼ばれはしてるが、仲がいいわけではない。それぞれ実力が特化してるだけで、互いに興味はない。

干渉されたくもない。

「あの男は何やら嫌な空気を持ち合わせている。まるで存在そのものが闇。我ら魔族にとって、決して福音をもたらす者ではない」

「バカバカしい。わたくしの幸せはわたくしが決めますの。とやかく言われる筋合いはありませんでしてよ」

険悪なムードが流れ、話し合いも何も無くなりそうなので、

「止せよ、二人共。今、魔族は俺達四天王が仕切ってるんだ。俺達が喧嘩したら、サン・ジェルマンや黒仮面の好きにされちまう」

エンテロが仲裁に入った。

彼的には、アスペルギルスに賛成なのだが、セルビシエは芯が強い女だ。言ったところで始まらない。

「フン」

セルビシエは鼻を鳴らして椅子に座った。

「まあよい。貴様がそんな態度を取れるのも今のうちよ」

「……………どという意味かしら？」

「ケファノス様を魔王として認めぬ以上、魔族を統率する者が必要だ」

「まさか……………！」

セルビシエは、座ったばかりの椅子から腰を上げる。

それは、アスペルギルスが何を言ってるのかわかるからだ。

「将軍が眠りからお目覚めになられる」

「将軍が……………？」

「そうすればセルビシエ、貴様の勝手など認められなくなるだろう」

ケファノス直属の部下。そして四天王の上に立つ者。

「ま、しょうがねーよな。俺達にカリスマ性はねーし、下手すりゃサン・ジェルマンに魔族を乗っ取られちまう。将軍に魔族の王になつてもらうのが一番だろ」

「そういうことだ。だが、急ぎ足、我らにはやらねばならぬことがある」

アスペルギルスは少し言い淀み、

「サン・ジェルマンが輪廻の塔へ向かうことを決めた。我々もそれに同行する」

そう言った。

「でもなんでサン・ジェルマンの目的に付き合っただ？俺達は俺達でやればいいじゃないか」

エンテロにはアスペルギルスの考えが理解出来ない。

「話は最後まで聞け。何もサン・ジェルマンの手助けをしようと云うわけではない」

「じゃあ、なんだってんだ」

「時間構築魔法具が揃った時、それを奪う。それまでは協力するフリをするのだ」

「ケツ。面倒くせー。そんなら今すぐ殺っちまえばいいじゃねーか」

「それでは駄目だ。サン・ジェルマン達は、まだ我々に隠してるこがある。それを知るまでは生かしておかねばならぬ」

「ならお前に任せるよ。俺はそういうのは苦手だからな」

割り切りがいいのは、不得意な分野に踏み込んでもいいことなど何も無いと知っているからだ。

「わかったな、セルビシエ」

「……………好きになされば」

アスペルギルスの高圧的な態度に機嫌を損ね、またどこかへ行ってしまう。

「エンテロ、兵を整えてくれ」

「魔族全軍で行くかあ？」

「それもいいが、今度はきっちり陣を組む。人間達を確実に殺す」

傷つけられたプライドがじんじんする。

「……………あいよ」

エンテロは間を置いて返事を返した。

「最後に勝つのは我々魔族だ」

アスペルギルスは野望を燃やしていた。

「セルビシエとデキてんのか？」

品の欠片も無いストレートな言い方をしたのはヨウヘイだった。

「見てたんだぜ？お前らが抱き合ってたのをよ」

動揺させる意図があったかは定かではないが、あまりにずさんな暴言に、黒仮面は苦笑いするしかなかった。

「覗きが趣味なのか？あまり褒められんな」

「ごまかすなよ。どうなんだ？デキてんのか？」

それを聞いてどうする気かは知らないが、答えねば気が済みそうにもないので、

「特別な感情はない。向こうは俺に惚れてるようだが」

はつきりと言ってやった。

「何を企んでるんだ？」

「企む？誰がだ？」

「お前だよ、黒仮面。セルビシエを手なづけて」

「なるほど。自分の立場が危なくなってきたと見て、俺をダシにサン・ジェルマンの信頼を得ようというわけか。フツ、中々したたかじゃないか」

「そ、そんなんじゃない！俺はただ、俺達を欺く行為をしたお前が……」

「俺がいつお前らを欺いた？その解釈には無理があるんじゃないか？」

「なら、客人の立場のお前が、セルビシエと密会を重ねてるのはどう説明つけるんだ！」

「俺とセルビシエが何をしようと、お前には関係ない。それに、俺はサン・ジェルマンの客人であって、他の誰の客人でもない。だから

らお前にとにかく言われる筋合いはないんだよ」

ヨウヘイの胸倉を掴み、静かに言った。

「こ……この野郎……」

「血気盛んな男は嫌いじゃないが、礼儀知らずは別だ。あまり俺を怒らせるな」

黒仮面の雰囲気完全に吞まれたヨウヘイは、無意識に震えていた。本能で悟る恐怖に、その場にへたれ込む。

「サン・ジェルマンに感謝することだ。サン・ジェルマンがお前を必要としてなければ、とつくに殺してる」

去って行く黒仮面の足音が、ヨウヘイの心臓までも震わせた。足音は遠退いても、まだそこにいるような気配を感じて。

「ち……ちくしょうっ！」

いつも優位な立場にいたと思っていたのは、勘違い意外の何物でもなく、気付けば孤独に犯されつつある。

だから自分の居場所を作るのに必死なのだ。

人間離れた力を持っていても、特に強いわけでもない。クダイが悩むことを、ヨウヘイもまた悩んでいた。

第五十三章 輪廻の塔 前編

「いい加減仲直りしたらどうだ？」

これから死地へと赴く中、まだシトリーと喧嘩しているクダイにカ
イムは忠告した。

日は暮れ、妙な涼しさは夜を誘っているのだろうか、あまり気持
ちのいい風ではなかった。

「やだよ」

そして返って来た言葉がこれである。

そこまで頑なになることもないと思うのだが、意外にもクダイ
はプライドが高いらしい。

クダイとシトリーは、目が合う度にブイツと顔を背ける。逆に
言えば、なんだかんだと言いながらも、互いに気になってしょうが
ないのだ。高確率で視線を合わせている。

「素直になりやいいのに」

独り言を言っただけだが、クダイにはきっかり聞こえたらしく、

「素直じゃなくて悪かったね」

「い、いや……あはは……」

急に強気になるもんだから、さすがにカイムもたじたじになった。

一方、シトリーはというと……。

「シトリー、クダイさはシトリーに謝って欲しいでねーべか？」

カカベルが子守をしていた。

「なんで私が謝らなきゃいけないの！私はクダイに気を遣ってあげただけなのに！」

ご不満はごもつとも。どちらに否があるかと言えば、ギリギリ、クダイにあると言える。

まあ、クダイの気持ちもわからないでもないのだが。男とはそういう生き物だと理解出来るまで、シトリーにはまだ時間はかかるだろう。

「クダイさだつてわかってるだよ。ただ、素直になれないだけだべ。要は子供なんだべさ」

「知らない！知らない知らない知らない知らない！クダイなんて知らないんだからっ！」

突然、声を上げたものだから、全員が驚いてしまう。

シトリーは何を思ったか、つかつかとクダイの方へ歩いて行く。誰もが息を呑み見守る中、

「ぜえ~~~~ったい！謝らないからねっ！！」

舌を出して威風堂々、宣言した。

「な……………なんだよ！いきなり！」

「クダイが謝るまで、許してあげないんだからっ！」

「じょ……………上等だ！僕だって絶対謝らないぞ！絶対絶対だっ！」

「ふ……………んだっ！バカッ！」

「バカとはなんだ！バカとは！バカって言う奴がバカなんだからなっ！」

「私がバカなら、クダイはバカのバカでバカバカよっ！！！」

「あつたまに來た！もう口聞いてやんないぞ！」

「勝手にすればあゝ」

「この分からず屋！」

「クダイこそ！」

額を擦り合わせ、唸り声を上げている。

「頼むから誰かなんとかしてくれ。緊張感が台なしだ」

シャクスは頭を抱えながらぼやいた。

「無理だね。ありや病氣の一種だよ」

オルマは誰の手にも負えないことを知っている。

「なんだか羨ましいなあ」

シメリーとしては、“ああいう”ことを夢見たりするのだった。

「見る」

そんな賑わいとは裏腹な声色でケファノスが言うと、全員がケファノスと同じ方角を見る。

高台から見える先には、

「あれは……………」

ダンタリオンがわざわざ声に出さずとも、見えてるものが何かは一目瞭然だった。

空まで届きそうな塔。輪廻の塔だ。

「輪廻の塔……………」

オルマの鼓動が高鳴る。

「お、おい、あれ見ろよ！」

高台の下にカイルが見たもの。それは、魔族の群れ。それも千や二千の数ではない。五千六千の数でもない。

「一体何人いやがるんだ。洒落になんねーだろ」

カイルのサルンガでも一筋縄ではいかない。軽く十万は超えている。

塔の廻りを埋め尽くすように、されど乱雑に居るのではなく、綺麗に陣形を組んでいる。

「やってくれますね。果たして塔まで行けるかどうか」

弱気な発言をしたダンタリオンに、

「行くんだ。誰でもいい、塔の最上階まで辿り着かなきゃいけない」

シャクスはそう言った。

「幸せだね、ケファノス」

誰もが不死鳥の羽根を手に入れる為、ケファノスの肉体を取り戻す為に最上階を目指す。

シメリーに言われ、ケファノスが照れたかどうか定かではないが、悪い気はしてないだろう。

「ケファノス」

クダイが呼ぶと、

「お前達に言っておかねばならないことがある」

唐突にそう口にする。

「どうしたのよ？急に改まって」

気持ち悪さを感じて、オルマが冷やかす。

間違ってもこれまでの感謝の言葉でないことは確かで、それをわかっているからつい冷やかすのだ。

「余の魔力が尽きかけている」

出て来た言葉。ケファノス自身の死の宣告。

「ただでさえ肉体を失い、魔力をうしなった状態で、バランスブレイカーを時空の歪みに隠すのは無理があったらしい。魔力が尽きれば余は消える。だからバランスブレイカーをお前達に渡しておこう」

死んでしまえば、永遠にバランスブレイカーは時空の歪みの中。最悪を考慮した結論だった。

バランスブレイカーがスツと現れ、それをカカベルが受け取る。

「な、なしてわだすに？」

バランスブレイカーの性能など知らないだろうが、見るからに豪華で、ただの飾りでないことは理解出来た。

「シスターは武器を持っていない。身を守るにはちょうどいいだろう。それに魔力も無い。万が一にもバランスブレイカーが発動するとは考えられんからな」

ケファノスがカカベルを案じての行為だった。

「待つてよケファノス！死んじゃやだよ！」

「案ずるな、クダイ。まだ死ぬと決まったわけではない。ドミニオンの言っていたことが本当ならば、ジャステイスソードによって失った肉体は、不死鳥の羽根で復活出来る。ここから先は……」

何かを躊躇うようだったが、

「お前達に余の命を託す」

ちゃんと口に出して言ってくれた。

全員はかなり驚いたが、やがてそれぞれに顔を見合わすと、微笑んだ。

魔王であろうとも仲間だ。見捨てるはずもない。ケファノスが口に出して言ったことも、みんなを信頼してのこと。

期待に応える準備はある。

「任せてよ！僕達がケファノスを助けるから！」

クダイは胸をポンツと叩いた。

「あなたには世話になってばかりです。必ず恩返ししましょう」

ダンタリオンもクダイを真似た。

「問題はどうかやって塔まで行くかな」

腕組みをして輪廻の塔を睨むシャクス。持てる経験から一番効率のいい方法を探っていると、

「悩む必要はありますか？」

肩を叩き、ダンタリオンが微笑んでいた。

「魔槍グランドクロスで突破口を作ります。そして残る敵は、あなた達が塔に着くまでカイクに抑えてもらいます」

「え？お、俺？」

降って来たような自分の名前にどきまぎしたが、それはここに残りダントリオンと二人だけで、“あの”群れを相手にするということ。改めて覚悟を決め、

「よっしゃあ！俺なんかに任せてもらえるんなら、喜んでやらせてもらうぜ！」

「頼りにしてますよ」

そのカイムは、武者震いをしていて、気付いたシメリーがそっと手を握る。

「カイム様、私も傍にいます」

普段は勇気が漲らず叶わぬ夢だったのだが、今だけは自然に出来た。温かいシメリーの手の平は、カイムの心に届き、彼を奮い立たせた。

「シメリー……………」

身を案じたシトリの言葉を遮るように、シメリーはすぐに返す。

「ここで、カイム様を援護する。だからシトリはクダイ達と行って」

「だけどさ……………」

「もう守られてるばかりは嫌なの。自分のことは自分で決めたい」

クダイがエンテロに挑む姿を見て、そう感じたのだ。踏み出さなければ何も始まらないと。

「シメリーがそう言うなら……………」

「大丈夫です。私とカイルがいますから」

ダンタリオンはどこにいても笑顔だとは思っていたが、こういう時は本当に安心する。

「わ、わだすも行くしかねーだべか？」

「僕達と一緒にいた方が安全だよ」

「そういうことだ」

クダイが言うまではよかったが、ケファノスが言うと、

「ケファノスさは言われたくねーだ！わだすはお前を監視すんなねんだから！」

と、不安なのかどうなのか問いたくなる返しをして来た。でもそれは力カベルにまだ余裕がある証拠。

まあ、ダンタリオン達が捕まった時、単身で釈放を求めに衛兵に盾突くくらいだ、弱虫な女でないことは保証されてる。

「では行くぞ。一気に駆け降りろ！」

高台と言ってもせいぜい六メートル。シャクスは、なだらかな場所

を選んで見本を見せる。

「ま、待ってよ！」

クダイが続き、その後をオルマ、シトリー、カカベルが続く。

ケファノスは……いつも浮いてるので苦労はない。

途中、シトリーやカカベルは冷やツとする場面もあり、シトリーに至っては最後の最後で愛らしく転んでしまった。

「痛い……」

すると、目の前に手が差し出され、

「あ、足手まといになるなよな」

クダイがぎこちない口調で言った。

「レディにはもっと優しくしてよね！」

と、言いながらも、シトリーはしっかりとクダイの手を取った。

そのやり取りを見ていたダンタリオンは、右手を翳しグランドクロスを召喚する。

「カイクム」

「どうした？」

「グランドクロスは大量の魔力を消費する為、連発は出来ません。ですからクダイ達が塔に着くまで、あなたしかいないんです」

「ヘッ、わかってるよ。いいからあの物騒な槍、落としちまえて」

「わかりました」

クダイ達が走り出した。十万を超える群れと接触するまでわすか。

「グランドクロス!!」

青い光の槍は、群れのど真ん中へと落ち、一気に吹っ飛ばす。

計算されたように、クダイ達が通る道が出来、

「次は俺の番だ！行けえ!!」

放った翼のある炎の矢は、一本が百本に増え、直ぐさま次の矢を放つ。同じようにまた百本。それを繰り返して、道を確保する。

音速で飛んで来る矢を前に、魔族はクダイ達に近寄ることも出来なかった。

「どうか……無事でまた会いましょう」

小さくなっていく仲間の背中。

ダンタリオンは、しばしの別れに強く祈った。

暗雲渦巻く空の下、目的を果たすのはクダイ達か魔族か。それともサン・ジェルマンか。

もしかしたら別の誰か。

何を信じるかではなく、何をどう信じるか。

人の行く先は、いつも偶像が支配する。

第五十三章 輪廻の塔 ー中編ー

巨大槍が召喚され、それが魔族の群れに落ちるのを見て、戦いの鐘が鳴ったことを確認した。

「思ったより早かったな」

黒仮面は左手を腰に宛て、これから始まる戦いに陶醉しつつあった。

「それにしても、槍を召喚するとは」

サン・ジェルマンもこればかりは予想外だった。

空に現れた槍。その威力は讃えるに申し分なく、敵ながら見事と言える。

「あれは魔槍グランドクロス。我ら今の四天王の前に、ケファノス様に仕えていた四天王の忘れ形見。召喚魔法には見えるが、あれはあれで立派な武器よ」

不可思議に思える現象を、アスペルギルスが説明した。

ヨウヘイ、エンテロ、セルビシエも、塔の入口で目の当たりにしたクダイ側の力。胸が躍る。

「召喚魔法だろうとなんだだろうと、あんなのどうやって防ぐんだ？」

いつも勇ましいヨウヘイが不安色を覗かせると、

「防ぐ術など無い。魔槍グランドクロスは巨人王ベオの槍。時間構築魔法^{イル}を作った者の槍だ。その力は世界崩壊剣、バランスブレイ

カーに匹敵する。例え何があっても防ぐことは叶わぬ」

アスペルギルスがそう話した。

「それじゃ……………負けるじゃねーか」

「心配無用だ、ヨウヘイ。あれは大量の魔力が必要だ。一度使えば、二度目の発動までは数時間はありえない」

エンテロがそう補足した。

「ところで」

横目でサン・ジェルマンは黒仮面を見ると、

「不死鳥は来るのか？」

肝心なところだ。確証は黒仮面だけが知っている。

「フツ……………来るさ」

「ハツタリだったらどうなるかわかってんだろっな？」

ここぞとばかりにヨウヘイが噛み付いたが、

「貴様ツ！黒仮面様に対してなんと無礼なっ！」

聞き捨てならなかったのはセルビシエ。ムチをパシンツと鳴らした。

いかなる理由があろうと、黒仮面への暴言は許せない。

そんなセルビシエの愛情を察し、

「感じるんだ。熱い生命の波動を」

冷静にものを言う。

「まるで、不死鳥がタイミングを計ってるような言い方をするんだな」

気持ちの上ではヨウヘイに味方したいと、エンテロが追撃する。

「そういう奴なんだよ……あいつは」

黒仮面はそれ以上は何も言うつもりはなかった。

後少しすればわかること。

なぜか黒仮面は不死鳥を信じている。その場の誰もが違和感と不信感を抱かずにはいられなかった。セルビシエを除いては。

「では行こうか。ここは黒仮面を信じるしかあるまい」

サン・ジェルマンが塔の中へと入って行く。

「ま、待てよ！」

ヨウヘイが入り、

「俺“達”も行くぞ。セルビシエ」

思いがけない言葉を黒仮面が口にするのと、

「く……黒仮面様……！」

夢でも見てるように虚ろな瞳になったセルビシエは、

「お、お供致します！」

黒仮面と共にした。

「ケツ。やっぱりいけ好かねー男だぜ。不死鳥のことも嫌味なくらい詳しいし、ありゃ、何か隠してるな。まあいい、いつか絶対ぶっ殺してやる」

「そう熱くなるな。将軍が復活するまでは、行動は控え目にしろ」

「だけだよ、アスペルギルス。セルビシエの奴が将軍のことを、黒仮面に話してるかもしれないねーだろ。そしたら、必然的にサン・ジェルマンの耳にも入るんじゃないのか？」

「知ろうと知るまいと、将軍が目覚めるのを止めることは出来ん。要らぬ心配をするな」

「わーったよ」

策があるのだろうか、これ以上何かを言つつもりはなく、

「なら俺は先に行くからな。不死鳥も見たいし」

「我も行こう」

十万を超えるの部下は捨て駒。それだけいればあっさり倒せると思っただが、甘かった。

しかし勝算はある。恥を承知で、今はサン・ジェルマンと黒仮面に頼るしかない。そうすれば、負けるという未来は見えて来ない。

アスペルギルスは割り切りのいい男だ。目的を達成する為に、手段を選ばないのではなく、最低限のプライドを捨てることで確実な道を選ぶのだ。もっとも、微妙なラインであることは否定出来ないが。

何かを得る為に何かを犠牲にする。それが出来るのと出来ないのでは、いつか差は出る。

アスペルギルスのしたたかな忍耐が勝つか、クダイ達の勇気が勝つか………全ては始まったばかり。

第五十三章 輪廻の塔 〱後編〱

魔族の群れを抜け、輪廻の塔の中へと入る。
息も絶え絶えだが、休んでる暇はない。

「止まるな！一氣に階段を駆け上げられ！」

勢いがあるまま進みたい。シャクスが叫んだ。

塔の中は煌々と明かりがあり、視界に困ることはなかった。その為、シャクスが言った階段がどこにあるか迷わなかった。

広さはの割に“普通”な階段を、シャクスに言われるがままに駆け上がる。

ツンとカビ臭さが漂い、輪廻などと高名な名とは掛け離れた雰囲気がある。

それがまた物々しくて、より高い次元へ来たような錯覚さえ覚える。

階段を上り切ると、案の定と言おうか、

「お待ち申し上げておりました」

美女が迎えてくれた。もちろん、美女がいたことが案の定ではなく、彼女が敵であることは間違いなかったからだ。

それを証拠付けたのは、

「久しぶりだな、クダイ」

黒仮面がいたことだ。

シャクスやオルマは初対面だったが、聞いていた通りの風貌に疑わなかった。

「お前が黒仮面か」

シャクスにもわかる。クダイが言っていた通り、雰囲気だけで圧倒される。

「“ウチ”の若いのが世話になったみたいだね」

それはオルマも同じで、なんとか紛らわせようと、いつもの調子を保った。

「お二方、わたくしを忘れてもらっては困りますわ」

一向に自分の名前を言う機会が訪れないセルビシエが、痺れを切らした。

「水のセルビシエ」

セルビシエの期待に応えたのは、かつての主ケファノスだった。

「これはケファノス様。お懐かしゅうございます。話には聞いておりましたが、随分とチャーミングなお姿ですこと」

物腰の柔らかい女だとは思っていたが、それとは異なる柔和な余裕原因が黒仮面だと気付く。

「水の……って、四天王なのか？」

クダイから見れば、“綺麗”な美女。オルマも美人だとは思うが、そついうのとは違う。もっと芸術的な……絵画から飛び出たよう

なものだ。

だから四天王の一人だとは、それを表す“水”というキーワードが無ければわからなかっただろう。

「他の四天王とは違って、誰よりも残酷な女だ」

美女が残酷なのは定番だが、ケファノスが言うようには見えない。水色の髪に似合わない、纏い手を選ぶような黒いボンテージドレス。なのに殺気を感じない。

「黒仮面様、ここはわたくしにお任せ下さい」

功績を上げたいと思ったのはこれが初めてだった。

気を遣ってくれてるのか、最近をよく傍に居させてくれる。しかし、それはセルビシエにとってのチャンス。少しでも役に立ち、長く傍に居たい。そして、この世界を離れる時、一緒に着いて行きたいと思っている。

本人がそう言ったわけではないが、そんな気がする。いじらしい女心が、彼女を強くしている。

「なら任せよう」

黒仮面は背を翻すと、

「セルビシエ、死んではならん」

そう言い残して、幽霊のように消えた。

セルビシエは、人生の中で今日という日が一番機嫌がよかった。愛した男からの気遣い。皮肉にも、機嫌の良さがより戦いを望むものとなる。

「さあ、一体どなたがたくしの相手をして頂けるのでしょうか？全員でも構いませんが」

ムチを腰から取り出すと、艶やかに舌を出して唇を舐める。

なんなら全員でかかってもいいのだが、時間が無い。
そんなことを考えていると、

「私が相手をする」

シトリーが言い出した。

「シトリー！何言って……………」

「私だって役に立ちたい。そうするれば、きっとクダイの気持ちもわかると思うから」

「そんなこと気にするなよ！もう怒ってないから！」

クダイの心配にシトリーは首を横に振り、

「これは私自身の問題だから。お願い」

決意は固く、揺るぎそうにもない。

クダイはシャクスとオルマに止めて欲しそうに顔を見たが、二人共困惑しているようだった。

シトリーは頭数には入れてなかったし、戦えるだけのスキルがあるとは思えない。まして相手は女と言えど四天王。

誰もが無理だと思っていると、

「わだすも及ばずながら手を貸すべ」

カカベルが言った。

「カカベルまで……………無理だよ！シャクス！オルマ！何とか言つてよ！」

「クダイさ、わだすはあの教会で“テンス”様に会った時、生きるの誓っただ。何があつても、生きて生き抜くと。だからわだすは戦う！クダイさ達は先に行つててける。シトリーさと二人なら何とかなるべ！」

その言葉にシトリーは勇気づけられ、

「うん。シスターと一緒になら！」

もう何を言つても無駄だろう。

だからケファノスも決心したのだ。

「クダイ、余もここに残る。だからお前達は安心して先を急げ。ただし、余の魔力はもつて夜明けまで。頼んだぞ」

今のケファノスは戦力外だ。とても頼りになるとは思えなかったが、

「わかった。二人のことはお前に任せる」

シャクスはそれを認めた。

「クダイ、オルマ。ケファノスを信じて俺達は先に行くぞ」

「で、でも……………」

納得しないクダイに、

「信じましょ。きっと大丈夫だから」

オルマが説得した。

クダイはシトリーを見て、

「死ぬなよ」

「うん」

そう伝えたと、シャクス達と次を目指した。

「わたくしも甘く見られたものですわね。小娘二人と人形なんかを置いてかれるなんて。嘆かわしい」

「小娘と思つて侮ると、痛い目を見るんだからね！」

シトリーは被っていたフードを外すと、尖んがった耳がピヨンと現れた。

「エルフ……………これは驚きましたわ。よもやエルフの小娘が人間と行動を共にしてるだなんて」

「私はエルフ族次期王位継承者シトリー・グランメッド！サン・ジエルマンに荷担し、世界を脅かす者達を成敗します！」

「あらあら。何を気取つてるのかわたくしには存じませんが……………」

いいでしょう。エルフの王女様に、戯れが過ぎるとどういうことになるのか、きつちりとお教えして差し上げますわ」

恐怖？もちろんある。それでもシトリーが戦う道を選んだのは、やはりシメリーと同じ気持ちだから。

誰かに守られ続けるのではなく、自分の道を自分の足と責任で歩きたい。そうでなければエルフの国を出た意味がない。

そして、命を賭けて戦う仲間への想いと、クダイへの熱く淡い想い。自分の中にあるものを、もっと確かなものとする為。その為に少女は戦う。

第五十四章 不器用な女達

実際、そう上手く事が運ぶわけではなく、シトリの戦闘能力ではセルビシエの足元にも及ばない。

カカベルも果敢に立ち向かうが、こちらはもつと話にならなかった。

持っている武器が、世界のバランスを崩すと言われる世界崩壊剣バランスブレイカーであっても、護身用の短剣と変わらない。どうせなら、その秘めたる性能をわずかでも覗かせて欲しいものだ。

セルビシエの得意とするムチは、二人の少女の身体に遠慮なく打ち込まれ、赤く傷をつけていく。

「口は災いの元でしてよ？お嬢様方」

倒れ伏すシトリとカカベルが不憫だった。二人は自分達が役に立っていないと勘違いしているようだが、ケファノスからすれば、それは自分のことだった。

「シスター、大丈夫？」

「だ……大丈夫だべ。これしき……」

生き物のように動くセルビシエのムチは、訓練された騎士でも立ち向かうのは難しい。まして、シトリとカカベルでは。

「このまま体当たりしてもダメね」

何か策を練らねば。シトリは思考をフル回転させ考える。

「でもあのセルビシエとか女はつえーべさ」

「強いのはわかってたことじゃない。そんなんじゃ、“テンス”様に笑われちゃうよ」

内心、そんなに笑顔になれるキャパはない。だけど、王位継承者であることまで口にしたのだ、勝つか、負けて屍となるか。覚悟を決めて挑んでいるのだ、なら最後まで前向きでいたい。

そんなシトリーの想いに、

「そ、そうだべ。いつか“テンス”様に会えた時、胸を張れるシスターになってなんねだ。だから……………」

シトリーと顔を合わせ、頷いてセルビシエに突進する。

「学習能力の無いおバカさん達ねえ……………頭の悪い奴って大嫌いなものよっ！」

グワンと風を切る音がして、シトリーの身体を打ち付ける。

「キャアッ!!」

「アーッハッハハハ！醜いですわ！実力の無い者の悪あがきは！」

ムチを引き戻し、カカベルを狙おうとした時、ムチが何かに引っ掛かった。

「な……………」

見れば、シトリーがその細い腕に巻き付けていた。

嫌な予感がしてもう一人……カカベルの姿を探す。

ここまでわずか数秒の出来事。しかし、見つけれなかった。

「ど、どこに!？」

焦るセルビシエの背後から、

「ここだべ!!」

「いつの間に……!!」

振り向いてあしらおうとするが、“向いた”方向が悪かった。

右手に持ったムチは、シトリーが防いでいる。振り向くのなら“左側”でなければ都合がつかなかったのだ。セルビシエが向いたのは“右側”。空いてる方の手で魔法を放ちたくとも、向き直る時間は無かった。

「もらったべ!!」

しかと握ったバランスブレイカー。人殺しが神に背く行為かどうかは、後々考えるしかない。

などと考える必要はなかった。戦闘など無縁のカカベルは、能力以上の筋肉を使った為、肝心な今、足が纏れてしまう。

「おわ……わわわっ!!」

派手に転んだ。

「イテテ……」

ハッとして、セルビシエを見る。すると、

「わ…………わたくしに…………このわたくしに傷をつけるなんて…………」

バランスブレーカーは握ったままだ。どうなったのか記憶にはないが、セルビシエの太腿ふとももに深い傷があり、出血していた。

転んだ拍子に偶然ではあったかもしれないが、裂いたのだ。

「許せない…………許せないっ！！このわたくしの肌によくもっ！！」

怒りに狂ったセルビシエは、ムチに絡み付いたシトリーごと振り回す。

「ちょ…………嘘…………！」

確かに体重は軽いが、自分の身体が宙に舞うことは想定していなかった。

起き上がろうとしていたカカベルに覆いかぶさるように落下する。

「シ、シトリーさ、重いべ」

「し、失礼ね！私は軽いわよ！」

全身傷だらけの二人は、そんなことを感じさせないくらい元気よくしている。それが余計にセルビシエの神経を逆なでした。

「どこまでもバカにして……………」

怒りが沸点に達し、セルビシエはいよいよもって魔法を放つ。

「死んで償いなさいっ！！デザイア・スコール！！」

水の四天王から欲望という名の雨が降り注ぐ。

それは強く二人を打ち付けるが、一瞬だけだった。
ケファノスがバリアを張って防いでくれたのだ。

「ケファノス様……………邪魔だてはしないで下さい！」

「これ以上、二人を傷つけることは許さん」

「これはこれは。魔王ケファノス……………彼を見習ってわたくしも残酷になったつもりでしたが……………別人でいらっしゃる？」

「余が残酷だと？」

そんな風に思われていたとは、心外意外の何物でもない。

「何かお気に触りまして？」

「気にいらんな。セルビシエ、貴様は残酷という言葉の意味をよく知らんらしいな」

「残酷は残酷。他に意味がありません？」

「貴様の思う残酷とは、卑劣なまでの仕打ちという意味だろう」

「へえ……………なら貴方の言う残酷とは？」

「運命だ。逆えぬことをいいことに好き勝手やる。残酷とはそういう意味だ」

「……………はっ！何を言うかと思えば……………随分と思想的、観念的なことを」

「聞け。セルビシエよ。サン・ジェルマンは我々魔族を残そうなどとは思っておらん。奴は時間脈に存在する時間軸を融合、時間を終着させて自分だけが存在する空間を作ろうとしているのだ」

「お言葉ですが、わたくし達としましてはサン・ジェルマンに従おうなどとは思ってませんわ。今は彼を利用し、やがて葬る。それだけのこと」

「それはあの仮面の男の差し金か？」

「あのお方は静観するだけ。でも、秘めた何かがあるのは確か。わたくしは黒仮面様の望むがままに生きるだけ」

「たわけ。サン・ジェルマンは貴様らの考えなど見通しているぞ」

「そうならぬよう、將軍の復活も予定しております」

「バチルスの……………？」

「貴方様に代わる、新たな魔族の王として迎えるつもりですわ」

「……………どこまでも浅はかな愚か者共め」

「人間との戦いで魔力を使い果たし眠りについた英雄。その犠牲が

ありながらイグノアと共に消えた貴方。仕えるのならば前者でありませんか？」

セルビシエにそんな気がないことは見え見えだ。

黒仮面にあれだけの猫撫で声を発していたのだ。セルビシエの忠誠は黒仮面にしかない。

「バチルスが眠りについたのは人間との戦いが原因ではない」

「！！！？」

「余が眠らせたのだ」

「そんな……………なぜ！？」

「あやつは人間との戦争を利用して余を討ち、王の座を奪おうとしていた。本来なら息の根を止めるところだったが、イグノアとの戦いが迫っていた為に魔力を温存するしかなかった」

「……………そうでしたか」

重大な事実だったはず。なのにセルビシエはほくそ笑み、

「ですが今となってはどうでもいいこと。ましてわたくしには」

魔力を集め、ケファノスを狙う。

少ない魔力でバリアを張ったケファノスに、次の手段は用意されてない。

「……………これまでか」

クダイ達には申し訳ないが、徒勞に終わらせてしまう。

ケファノスは死を覚悟した。

「魔族がどうなろうと！世界がどうなろうと！わたくしには何の未練もありませんわ！わたくしは黒仮面様の為だけに生きる！デザイア・スコール！！」

欲望の粒手が襲い掛かる。……が、今度はシトリーがバリアを張ってケファノスを守った。

「シトリー……………」

「一応、あなたも仲間だから」

二人の間に入り、カカベルがケファノスを庇うようにバランスブレイカーを横にして構え、

「クダイさ達の努力を無駄にするわけにはいかなからな」

そう言った。

「おのれっ！小娘っ！デザイア・スコール！！」

「scheie frau！！！」

バランスブレイカーによって傷つけられた大腿ふとももに激痛が走り、集中力を欠いたセルビシエが体勢を崩す。

シトリーの放った魔法が、セルビシエを直撃した。

第五十五章 時間の構造と時空理論

塔をかなり登ると、獣の噴水が四隅に置かれた部屋に到達した。輪廻の塔は、古代の遺産。不死鳥伝説はあるが、不死鳥を見たという者もおらず、昔の人が神を崇める為に作ったものだと考えられていた。

だから、噴水が機能してることは、オーバーツ同然の意味がある。

「やれやれ……こんなに早く登って来るとは」

アスペルギルスは待っていたようで、足止めするのが目的だろう。だからと言って、残るのは一人でいい。

「シャクス、クダイ、ここはあたしが引き受ける」

童子切りを抜き、先日の続きをオルマは望んだ。

「頼む」

シャクスはオルマの力を信じてる。だからあれこれ言う必要はない。

「死んじゃダメだからね。みんなでケファノスの姿を拝んでやるんだ」

クダイなりの励ましは、十分な力になる。

「どーせオッサンだよ。」余“なんて自分のこと言うくらいだから”

「じゃあ、賭けようか？僕は化け物だと思うな。だって、初めて会った時、全身を鎧で余すところなく隠してたもん」

「乗った！あたしが勝ったら一日付き人をしてもらう」

「いいよ。なら僕が勝ったら……」

「あたしの下着をやるよ」

「い、い、いらないよ！」

「あははは！シトリーに怒られるか」

「そういう問題じゃなくて！」

「ま、考えておきな」

軽くクダイにウィンクした。

「また後でね！」

クダイはシャクスと先に行く。

「今度は逃がさないよ。アスペルギルス！」

「くく………オルマとか言ったか。それは我のセリフだ」

アスペルギルスが変身する。

尾が生え、三本指の手足。砕けないものなど無いくらい逞しい牙。頭からは二つの角らしきものが、後方へ緩やかな曲線を描いて

伸びる。

「来い。骨まで食い尽くしてやる！」

「アスペルギルス、なんならあたしは、アンタの骨でスーパのダシでもとってやるよ！」

悪態をつくのは、いつもの自分でいたい為。それなりに緊張はしている証拠。

童子切りを握る手も汗ばむ。

この前は、アスペルギルスにとって心理的に不利だった。しかし、今は来るだろう敵を“待つ”という行為でモチベーションを上げている。

生唾が喉を流れ、呼吸と意識がシンクロした瞬間、本能のままに飛び出した。

「不死鳥が来るって確証はなんだよ」

ヨウヘイは相変わらず横柄な態度で、サン・ジェルマンに聞いた。

どうにも蚊帳の外に追いやられてる感じがして気に入らない。

大事なことを何一つとして話さないサン・ジェルマンにも不満が募る。

「確証も何も、黒仮面がそう言うのだからそうなのだろう。どのみち、後、小一時間ばかりか、もしくは数時間か、いずれにしても答えは出るのだ。私達は待てばいいのだよ」

「もし現れなかった？」

「その時はその時。もしもを考えるより、現れた時のことを考えればよい」

現れないことは前提には皆無で、黒仮面の言葉をまるで神のお告げのように信じている。

素性の怪しい男に、ここまで入れ込む気持ちはヨウヘイにはわからない。

「わかんねー。確かにあの男は、いろんな世界のことだとか、時間や空間がどーのって事情には詳しいけど、真実かどうかはわかんねーじゃねーか。なのに、なんでそこまで」

「私自身、時間を旅する。しかし、時間を旅することは出来ても、所詮は一人。私の事を理解してくれる者はいない。だが、黒仮面は私と同じ境遇にいる」

数少ないどころか、たった一人の理解者。時間を旅するなど、夢のように思える力。好き勝手やればいいじゃないかと、やはりヨウヘイはそう考えてしまう。

「時間と他の世界と、旅するならやっぱり時間だろ？なんで歴史を変えて自分の住みやすい世界を作らねーんだ？特にあいつはいろんな世界を旅してるらしいけど、時間移動と何がどう違うんだか」

「時間というのは、どこにいても存在するもの。時間と限定して旅するのも、異次元世界を旅するのも、そう変わりはない」

「なら聞くけどよ。あんたは過去や未来を自在に移動出来る。過去に行って自由に未来を変えれば、わざわざ時間を終着させるなんてことしなくてもいいんじゃないのか？」

「フツ。だから黒仮面に相手にされんのだ」

「なんだよそれ」

「いいだろう、“もしも”の話をしてやる」

ちようど階段を登り切って辿り着いた広いフロア。そこで足を休めるように立ち止まった。

「ヨウヘイに時間移動の能力が備わったとしよう。黒仮面が憎いお前は何とかして彼を倒したいが、正面から挑んでも勝てない。だから過去へ行って黒仮面の親……どちらでもいい、二人が会おう前に殺したとする。結果はどうなるかわかるか？」

「そりゃあ……黒仮面が生まれて来ない……じゃないのか？」

「だがそれは、その世界の未来の話であって、お前が元の世界へ帰っても黒仮面は生きている。つまり、過去が存在しているのにも関わらず、未来を変える為の過去での行為に意味が無くなるのだ」

「そんなら“変わった方の未来”に行けばいいじゃねーか。おっと、“そっちの俺”はもちろん殺すけどな」

「変わった未来に時間を超えて行くことは出来ん。唯一、その過去から出ずにそこで暮らすのであれば話は変わるが」

だがそれでは意味がない。黒仮面はヨウヘイより明らかに年上。黒仮面が生まれる前の世界には、当然自分も生まれてない。

“変えたい現実”は、黒仮面が存在している“いま現在”なのだ。違う世界の人間であれど、少なからずヨウヘイのいるいま現在に影響してなければならぬ。

従って、黒仮面の生まれて来ない未来で生きても、ヨウヘイの望む世界にはならないのだ。

無論、仮定された話は今のヨウヘイの心中。心の問題であつて、黒仮面のいない世界を望むのなら、敢えて悪行を行う必要はない。

しかし、それでは全く知らない世界へ行くのも、自分の住む世界の過去へ行くのも大差は無いということ。

「未来は変えられないってことか？」

「未来は既に決まっている。未来へ行つたとしても、そこでの行為に意味はない。過去に影響はしないのだから。あくまでも、その未来から先の未来には影響するが、それすらも既定事項だ。だから過去へ行こうと未来へ行こうと、現在に留まろうと同じこと。少し難しく言えば、過去へ行くことは“自分”にとつては“未来”の出来事。既に存在した過去の風景ではあるが、“今の自分がいなかった別の世界”ということになる。わかるか？この見事なバランスが」

「……………」

正直、半分もわからない。わかりやすく説明はしてくれてるのだろうが、それでも複雑な時間の仕組みに困惑してしまう。

「もう一つ勉強させてやろう。同じ理由でタイムマシンというものは存在出来ない」

「おいおい、待ってくれよ。作れるかどうかは別として、あんたや黒仮面は実際に時間移動してるんだ。タイムマシンをあんた達と位置づければ、それはタイムマシンだろ」

「それは、お前が実際に自分の世界から、この世界に来たから言えること。私が過去に行つて、“未来から来た”と言っただけで誰が信じる？事実を知る人間が限られてしまうようでは、存在するなどとは言えん。“存在”というものは、“認知されなければ存在出来ない”のだ。そこに事実か虚実かは関係ない。認知の意味も、実験しないことには、そこに理由は生まれない」

「既に未来は決まつてる……か。それは全ての存在を肯定はするけど、時間の存在に干渉するような理不尽な存在は否定するってこと……信じるには、俺には知識が足りない過ぎるな」

都合の悪い事実は存在しないのが時間のルール。時間移動を誰もがするようになるなんてことは、“永遠にありえない”。

だとすれば、誰にとつて都合が悪いのか。

ヨウヘイには到底わかり得ることではなかったが、サン・ジェルマンが自分の能力に孤独を感じてた意味が、少しだけわかった気がする。

「何百年もかけて知つたことだ」

サン・ジェルマンはそう付け加えると、また歩き出した。

その“存在”に、尊敬の念を感じた。

人が考える時間の理屈やその干渉。とてもちっぽけで、浅はかに思える。

未来の存在を消す⇨時間が終着する。

きっとそこは、人類が最終的に目指す場所なのかもしれない。

第五十六章 鳳凰の祭壇

「やっぱり来たな」

土のエンテロは気分がよかった。

自分を楽しませてくれるゲストが現れたのだから。

「貴様に会いに来たわけではないのだがな」

そう言いながらも、シャクスも騎士として強い相手とやり合えることへの嬉戯に躊躇いはないようだ。

「そう言つなよ。どうせ俺を倒さなきゃ先には行けないんだ」

「いや、通させてもらう。クダイだけでもな」

決まり事のように言ったシャクスは、いつもより緊張感に縛られているクダイの肩に手を乗せ、

「ここからは一人で行け」

それはサン・ジェルマン達と戦いになっても助けが入らないことを示唆している。

やり合えば、クダイに軍配は拳がらない。でも、二人でここでエンテロを相手にする時間はない。

「大丈夫だ。お前ならきつと何とかする」

「このジャスティスソードを………信じていいのかな」

兄のような言霊は、無責任なんかではなく、戦いの場において信頼する仲間への言葉。いい加減、クダイにもそのくらいはわかって来た。

「ケファノスの姿、拝むんじゃなかったのか？」

踏ん切れないのだろうと、そう言った。

「そうだよ。うん。ケファノスの姿を拝むんだ」

それはクダイからケファノスへのプレゼント。ジャスティスソードで失った肉体を取り戻す。

ここで命を貼なきや男が廃る。

「行くよ」

「クダイ」

「ん？」

「お前には戦いの経験はない。俺が教えたことなどせいぜい基礎中の基礎。自信には繋がらないだろう。だがな、戦う者は、何を信じるかが問題なんじゃなく、何をどう信じるかが問題なんだ」

ジャスティスソードや無眼の構えに頼るなど、シャクスが言った意味がわかった気がした。

過ぎた力が超えた力か。いずれにせよ、有り余る力に頼り切る末路は見えていた。

何の為の力なのか。それがわからないでいたクダイには、身を

破滅するだけの力だった。

だが、単身エンテロに挑んだクダイは、シュードモナスへ挑んだ時のクダイとは違う。

自惚れた小僧なんかではなく、運命を共に出来る、同じ夢を追える、全てを託せる騎士。

まだまだ面倒は見なければならないが。

「行け！クダイ！」

「うん！」

最悪な第一印象から始まった二人は、気付けば心を繋いでいた。

クダイに道を作る為、エンテロへの最初の一撃は基礎を取った突貫工事のような一撃。

受けたエンテロの腕が痺れる。

隙を突いてクダイは最上階を目指す。

「やるじゃねえか。もっとマニュアル通りの攻撃して来るかと思っただぜ」

力一杯シャクスを払いのけ、竜人へと変身する。

「あまりいい子ちゃんじゃあないもんでな」

シャクスにしては珍しいジョーク。クダイ達が聞いたなら目から鱗ものだったに違いない。

「ヘッ。言うねえ。でもいいのかよ、ジャスティスソードと無眼の構えが使えても、サン・ジェルマンには勝てないと思うぜ？」

「さつさとお前を倒して、俺が行けばいい」

「だったら始めようぜ。聖騎士シャクス」

準備運動なんて必要ないくらいに筋肉が火照る。

強い者が強い者を求めるのは自然の摂理。

流れに身を任せ二人は戦う。

待ち切れない想いを、エンテロは口にした。

「今夜は楽しい夜になりそうだ」

「これは……………」

ヨウヘイの目に映るのは所謂祭壇というものだった。

ピラミッド型で、てっぺんまで続く階段の両脇には不死鳥をモチーフにした石像。

「鳳凰の祭壇。記述にはそう記されている」

説明したサン・ジェルマンは、後ろに手を回し祭壇に近付く。

石像を撫でるように触り、質感を確かめる。

「ふむ。なかなかの出来栄じゃな」

大きさから原寸大なのだろう。非常に細かな彫刻が施され、それはそれで生命の息吹さえ聞こえて来そうだ。

古い造物の雰囲気を堪能するサン・ジェルマンとは対称的に、ヨウヘイは疑問ばかりで頭を潰されそうだった。

「いろんな世界や時間を旅するわりには、不死鳥を見たことがないのかよ」

「無い。どんな世界にも不死鳥伝説はあるが、見たと明言した者は数少ない」

「じゃあ、黒仮面は数少ない貴重な目撃者ってわけか」

「目撃どころか、会っているようだ。あの口ぶりはそのうちのことだろう」

無限に既存する世界を、隅から隅までを渡り歩くのはそう容易ではないのかもしれない。

黒仮面が不死鳥の存在を認めるのは、彼がたまたま行った世界にいたのか、あるいは彼の生きた世界にいたのかもしれない。

「ヨウヘイ、お前の世界にも不死鳥伝説はあるのだろうか？」

ある。どこの国にも不死鳥を連想させる話はあるが、信憑性はまず皆無。ロマンを描く助けにしかないように思っていた。

しかし、幾分かの確率で、不死鳥は姿を見せるのだ。今夜。

「まあな。けど、俺の世界で語られる不死鳥とその石像、全く同じ

姿だ。違う世界の同じ伝説。事実であることの証拠ってことか」

「賢くなつたな」

「ケツ、茶化すなよ。それくらいはわかるさ」

外から風が流れ込んで来る。

見れば、暗闇に包まれていて、祭壇の火が心もとなく辺りを照らす。

無人の塔に火を燈してくれた魔族に感謝しつつも、もう少し明るくてもいいような気もした。

「しかしよお、時間を終わらせるのに時間構築魔法具ツールが必要なのはわかるけど、俺がどう必要になるのかさっぱりだぜ」

この世界を舞台にする必要性もだ。

「城に戻ったら話してやる」

呟いたサン・ジェルマンは、ヨウヘイを見ることはなかった。

第五十七章 一つの真実

嫌な奴に会った。思わず顔をしかめてしまう。

「一人とは随分強気だな。少年」

黒仮面だ。

闇に溶け込むように正面に立っている。

「そこをどいてくれよ」

言葉とは真逆に、クダイはジャスティスソードを構えた。

どけと言っただいてくれるような奴でもなければ間柄でもない。

「勝てると思ってるのか？」

「……………さあてね。でもあんまり僕を甘く見るなよ」

ハッタリの一つでも噛ましてやらないと、黒仮面の気配に吞まれてしまいそうだ。

そんなクダイを見透かしたのか、黒仮面は声は上げなかったが口元で笑った。

「フツ。たいして君に興味は無いのだが、約束だったからな。輪廻の塔でなら相手をしてやると」

闇に溶け込む黒仮面は、闇の中で黒い刃の剣を抜く。

擦れる金属音が物々しく、半歩だけクダイを下がらせた。

「覚悟しろ。今度は命を貰う」

「お前こそ！この前の僕とは違う！何が何でもここを通る！」

急に黙り込むクダイと黒仮面は、相手の出方を伺っている。

明かりが乏しく目は頼りにならない。クダイにとっては都合がいいのかもしいないが、エンテロの戦いで教訓がある。

無眼の構えで光の軌跡を捉えても、予想以上の速さで攻撃されれば太刀打ち出来ない。

そう考えると、むやみに無眼の構えも使えない。使うにしても様子を見てからだ。

目的は黒仮面やサン・ジェルマンを倒すことではなく、不死鳥の羽根を手にかざること。倒すことより突破することを優先させなければならぬ。

「来ないのか？ならばこちらから行く」

フツと残像を残しなくなる。

右から来るのか左から来るのか……神経を研ぎ澄ませて黒仮面の気配を追う。

全身を這う一本一本の神経。脳からの電気信号に過敏になり、噴き出るアドレナリンが熱くたぎる。

「そこだ！」

一瞬ちらつく気配を察知し、右斜め後方へジャスティスソードを振り抜く。

刃と刃がぶつかり火花を散らした。

「いい勘してるな。だが、甘いッ！」

黒仮面が力を抜くと、クダイは前にのめり込む。力のバランスを失ったその身体に、肘を入れられうずくまる。

胃袋ごと吐き出しそうな痛みを堪え、それでも黒仮面に立ち向かう。

「うおおおっ!!」

どんな斬り方でもかわされる。だから一点でいい。針の穴のような小さな可能性を“斬り”開く。

「元気がいいな。男はそうでなくてはならん」

黒仮面に通用する手立てが思い付かないなら、ただひたすらジャステイスソードを振るうだけ。

刃と刃が衝突を繰り返す度、肉体に負荷が掛かる。

「なんかムカつくな。あんた」

「よく言われるよ。若い男にはウケがよくなくてな。女には好かれるんだが」

「それがムカつくって……言っただよ!!」

安っぽいと思うが、それが黒仮面の心理作戦だとも知っている。むしろ、試されている気もするが。

「そうだ。そうやって感情の赴くままに剣を振るえ」

「うる……っさいっ!!」

石のフロアに勢い余ってジャスティスソードが突き刺さる。

直ぐさま抜き、身構える。

刃毀れ一つ無いジャスティスソード。クダイをより高い次元の戦いへ誘う。

「はあ……はあ……あんたが……僕と同じ世界の人間だってはわかってるんだ。あんた一体何者なんだ」

一体何者なんだ……前に聞いた言葉。黒仮面に果敢に戦いを挑んで来た少年の。

それを思い出し、吹き出しそうになってしまふ。

「クク。何者なんだ……か」

「やっぱりあんたからは香水の香りがする。僕の世界にもあるような人工的な……よくわかんないけど、とにかくなんか不自然なんだ」

「言っておくが、俺は香水なんて身に纏ってない」

「そんなはずはない！だって今も……！」

「するのか？クク……なら教えてやろう。なぜ“お前”に存在しない香りを感じることが出来るのか」

“君”から“お前”と呼び変えると同時に、雰囲気も変わった。

今ある闇の全てが黒仮面にひざまずく。

それは少なくともこの空間が彼に味方している証。窒息しそうに圧迫され、天地が逆さまになったような気持ち悪い感覚。

クダイは、自分が蜘蛛の巣に囚われた小さな虫になったような気分だった。

「僕に……何を教えてくれるって？」

「お前が言う、ありもしない香りとは、俺の死んだ部下達の香りだ。死して尚、俺を守ろうとする彼女達の意志。それは……」

黒仮面が話を区切った。何を……何を言うのか。どっと汗が噴き出る。

話そうとしていることは真実で、きっと彼にしかわからないことなのだろう。

説明は出来ないが、そうわかってしまうのだ。
だからクダイは復唱して言葉を待つ。

「それは……？」

重力が無駄に力を増す。

勝ち誇ったように黒仮面は言った。

「お前達が屍人と呼ぶものだ」

「屍人……？ 屍人って確かヨウヘイが使う……」

「これで確信が持てた。この世界の住人には屍人は使えないが、お前やヨウヘイには使える……というより、“感じ方”が異なるのかもしれない」

「屍人と……あんたから香る香水の香りと……何がどう繋がるんだ？！」

屍人は極弱い魔物だとケファノス達は言っていた。だからヨウヘイが屍人をダークエネルギーに変換していることに疑問も抱いていた。黒仮面からの香水の香りとはどう考えても繋がらない。黒仮面の正体を知る以前に、屍人とは一体……。

「どんな世界にも、時間は存在する。時間は一定の速度と方向に向かって絶え間無く流れている。しかし流体とはまるで違う。果てなく流れる時間は、言わば宇宙の記憶と記録、そして地図のようなもの。決まった運命を辿る為に流れる時間は、時に予定外のことがあると、修正軌道を始める。その時の摩擦によって削られ、零れ落ちた時間の断片。それが屍人だ」

「屍人が…… 時間の断片？魔物じゃないのか？だって、死人に取り憑くって……」

「時間の断片にはエネルギーが宿る。それが死人に落ちれば、一時ではあるが生命の役割を果たす。それだけのこと。ヨウヘイが変換するダークエネルギーは、時間の体温のようなもの。奴にはそれを体内に保存出来る能力があるのだ。サン・ジェルマンがヨウヘイを“器”と呼ぶ訳はそこにある」

淡々と語っているが、にわかに受け入れ難い話だ。

時間に記憶や記録があつて、体温まであるという。もちろん、比喩にしか過ぎず、解りやすく説明してくれたただだろう。

実際には、一言二言では説明の出来ない事象であつて、それは間違いなく科学の発達したクダイの世界でも証明されていないこと。いや、時間という存在そのものが議論されてるのだろうか？

そんな不価値にも等しいような真実を知る黒仮面。彼は……。

「単なる人間じゃないな……………黒仮面」

黒仮面の支配下にあった空間が、再び元の姿を取り戻す。

無駄に強かった重力も失せ、圧迫されることは失くなっていた。

「クダイ……………だつたな」

そう言うのと、黒い刃の剣が鞘に収まる。

「お前は一つ真実を知った。もう少し、お前がこれから先、どう進むのか見てみたい」

「……………通してくれるのか？」

「俺の目的はお前を倒すことではない。この世界で俺は傍観者。お前は当事者だ。本来なら交わることはない。どんな運命にも立ち向かう覚悟があるのなら、行くといい。そして物語の結末を見るのだな」

「……………。」

クダイは黒仮面の言葉を鵜呑みにしていいものか悩んだが、不意打ちをしなければならぬほど、拮抗した実力同士ではない。

黙って横を通り、そして最上階へ駆けて行く。

「クダイ」

ふと呼ばれ立ち止まる。

「見逃すのは今回が最初で最後だ。忘れるな」

何も返さずに、クダイはまた駆ける。見逃された訳ではない。勝ったのだ。という理由かは定かではないが、黒仮面から感じ取れる香水の香り。その事実が一度限り屈服させたのだ。だから“見逃す”と言ったのだろう。

「香水……………か。俺には何も感じない」

黒仮面は淋しそうに呟いた。

クダイが黒仮面から感じていた香り。それは黒仮面自身が一番感じていたものだった。

第五十八章 炎の翼を持つ少年 〔前編〕

鳳凰の祭壇の前で、サン・ジェルマンは階段に腰を下ろし、ヨウヘイは腕組みをして石柱に寄り掛かって、一向に現れない不死鳥を待っていた。

「ホントに現れんのかよ。二時間は待ってんだぜ？段々疑わしくな
って来たよ」

若いヨウヘイに、何もせずじつとしてるとは無理な話。暇を潰すにも携帯電話すら無い。せめてネット環境くらい無いものかと、無駄なことばかりが頭を過ぎる。

ヨウヘイの愚痴には付き合わず、サン・ジェルマンは黙っている。

静寂がしつとりと蔓延する。

濡れた布が肌に纏わり付くように、空気に湿りがある。

ヨウヘイの喉が乾燥を避けられているのは、そのおかげだろう。無言がまた続き、鬱蒼とした溜め息が数を重ね、やがて足音が聞こえ始める。

「……………誰か来る」

ヨウヘイは鳳凰の祭壇に踏み込んで来る者を待つ。
入口付近の明かりが影を次第に形作る。

「クダイ！」

「……………ヨウヘイ！！」

ジャスティスソードを手にクダイが駆けて来た。

真っ先に目が入ったヨウヘイの向こうにいる老紳士にも目が止まる。

「サン・ジェルマン」

退屈そうにしてるところを見る限り、不死鳥はまだ現れてはいないようで、クダイは一先ず安心した。

「久しぶりだな、クダイ。待ってたぜ」

待ってたのは不死鳥ではないのか？などとツツコミを入れる気もなく、

「会う度に悪そうな顔になってくな」

悪垂れるだけに留めた。

「不死鳥よりお前が先なあ、これもまた宿命か」

ヨウヘイが手に剣を具現化する。

見た目は普通の剣。ジャスティスソードのきらびやかさには断然劣る。

が、油断は出来ない。ヨウヘイは屍人^{かばねびと}を使う。

正確には屍人をダークエネルギーに変換させる。

黒仮面の言った真実。屍人が時間の断片なら、そこにあるエネルギーは計り知れないだろう。何せ、時間とは誰しも逆らえない不可視の存在。そして、誰しもがその流れに従って生きているのだ。

この世を支配してるのは、神ではなく時間なのかもしれない。

「ヨウヘイ……いい加減目を覚ませ！このままサン・ジェルマンに従うなら、僕はお前を倒さなきゃならない！そんなことはしたくないんだ！」

「青いなあ。まだ、んなこと言ってるのかよ。時間軸の融合、そして時間の終着。未来を無くすことで時間から解放されるんだ。見てみたいと思わないのか？時間を失った世界を」

「見たくないね！そんな世界には何も残らない！きつとお前自身もだ！ヨウヘイ！」

「……だってよ。何とか言ってるよ。俺の友達に」

ヨウヘイに言われ、サン・ジェルマンは腰を上げる。

「クダイ少年の言う通り、時間を失うということは輪廻が無くなってしまうということ。生命の循環も無くなり、未来どころか過去も現在も無くなる。そんな世界に一体何が残るのか……何も残らないかもしれない」

「お、おいサン・ジェルマン！」

「何も残らないかもしれないが、人の悲しみや憎しみ、怒りや嘆きも無くなるということだ。もつとも、誰もやったことのない偉業。どうなるかは箱を開けるまではわからない」

サン・ジェルマンの歩く鼓動だけが鳳凰の祭壇に響く。

「自分すら犠牲にするのか？僕にはわからない。人間って、感情豊かな生き物だ。その何が悪いんだ？泣いたり笑ったり……そんな

なの当たり前のことじゃないか！」

「クダイ少年、当たり前のことが当たり前じゃないと知ったなら、君は受け入れることが出来るかね？」

「運命が決まっているってことを言いたいのか？」

「察しがいい。それとも誰かに教えられたのかな？」

サン・ジェルマンにはわかっているらしい。

それはそうだろう。直感が鋭くとも出て来る解答ではないだろうから。

「運命………未来………既に決まった道を、私達は歩かされている。今こうして君と語るのも、決まっていたことなのだ」

サン・ジェルマンは続ける。

「きつと君はこう思ってる。“未来が決まっているならば、時間が自身を終着させる未来など描くだろうか”と。違うかね？」

その通りだ。でなければ、矛盾だらけの理論。人に語る程度にもならない。

「未来が決まってるなんて、僕は信じない！未来ってのはこの手で掴むもんだろ！」

「ふむ。それも一理ある。人の世においてならな。一見、矛盾に思えるかもしれないが、私は時間の不完全さを知ってしまった。先程ヨウヘイにも話したが、決まっている未来が存在するのに、純粋な過

去へ戻ることは出来ん。時間移動で渡る過去は、全く別の世界。そこが自分の記憶にある過去であつてもだ。もし、十年前の過去へ戻れるとするなら、戻る者の時間……つまり肉体までも十年前に戻らなければ嘘になる。もちろん、記憶もな。この不完全さが時間に付き纏う以上、時間を終着させることは可能。時間に対してだけの逆らいは認められてしまふのだよ」

そんな話を聞かされてピンと来るわけがない。

ただ、真実ではないと証明されない限り、例え妄想だろうとサン・ジェルマンは倒さなければならぬ。

「どっちでもいいよ。時間移動になんて興味はないから。難しい話をされても理解出来ないし」

「その点についてはクダイと意見は同じだ。俺もよくわかんねーかな」

ヨウヘイがサン・ジェルマンの横で剣を構えた。

「ヨウヘイ……どうしてもやるのか？」

「ここまで来て今更だろ」

「手加減出来るほど腕はない。それでも……どうしてもやるんだな？」

「しつこいぜ。生きるか死ぬか。それだけだ」

それを聞いて、クダイもジャスティスソードを構えた時だった。

湿っていた空気に熱がこもり始める。その違和感には三人とも

すぐに気付いた。

サン・ジェルマンはすかさず祭壇を見る。
すると、祭壇の上で空間が渦を巻き、穴を開けた。

「デイメンジョンバルブ……？」

クダイが言うと、

「来る……のか……不死鳥が」

ヨウヘイも祭壇に目を奪われた。

デイメンジョンバルブの中で稲妻が飛び交い、熱風が吹き出す。
心が躍る。好奇心が騒ぐ。

伝説の鳥が、今やって来る。

「ケファノス!!」

シトリーが大きな気配を感じ、ケファノスに促す。

その気配が不死鳥であることは言うまでもなく、優先すべき事柄である。

「本当に来たのか……不死鳥」

ケファノスは何とか魔力が尽きずに済んだことに安堵した。

「どうするだ？あの“水女”を倒してから行くのけ？」

カカベルの持つバランスブレイカーには、セルビシエの血が付いている。

「勝負は着いてるわ。私達は早く不死鳥のところへ！」

クダイ達が不死鳥の羽根を手に入れるとは断言出来ないし、最上階に到達してるかもわからない。

シトリーはケファノスとカカベルをリードして、果たすべき目的を告げる。

それを受け、カカベルも納得して頷いた。

だが、セルビシエは傷付いた左足を引きずりながらもまだ戦う気で、

「ちょっと！簡単に逃げられると……………」

ムチを床に打ち付ける。

「行こう！」

セルビシエを無視してシトリーが言うつと、カカベルも走り出す。

「ふざけないで下さいまし！私はまだ……………」

「セルビシエ、お前の負けだ。命を取らなかったシトリーとシスターに感謝するのだな」

ケファノスに言われ、言葉をつぐんだ。

小さなマスコット人形は少女達に続く。

自分の肉体を……………取り戻す為に。

「こ……………小娘めッ！」

左大腿の深い傷とその痛み。それよりも深く根付いた恨み。

黒仮面への想いが、セルビシエを駆り立てる。

十万の魔族の群れはまだ八割は残っている。

ダンタリオンの放つ光の魔法を持ってすら、簡単に事は運ばない。

落ちた魔力はシメリーが分け与えてくれるが、基本の魔力量はダンタリオンの及ばない。

ダンタリオンの使う魔法も高度なものばかり。いくらか魔力の減少を抑えは出来たが、それも限界だった。

「ハア……………ハア……………ご……………ごめんなさい。私にお手伝い出来るのは……………ここまでです」

魔族の群れの真ん中で、シメリーは座り込む。

「いいえ。むしろお礼を言わせて頂きます。もう十分です。少し休んでいて下さい」

ダンタリオンはシメリーの頭を撫でてやった。

「ダンタリオン！なんかいい魔法ないのかよ！」

カイムの背中がダンタリオンの背中に合わさる。

もう後がなかった。

「残念ながら………」

グランドクロスを使いたくとも、今の魔力では無理。それどころか魔力の回復は望めない。

カイムとて、矢を何千と射れば腕は思うようには動いてくれない。

「終わるかよ」

太陽の弓サルンガが無ければここまでは粘れなかった。悔しいが、これは運命なのかもしれない。

「最後まで戦いましょう。シメリーの努力を無駄には出来ません」
眠りについたシメリーを二人は見る。疲労のある寝顔に、

「死に場所も、生き場所も………いつも自分の中にあるんだな」

カイムはこの状況でようやく悟った。

そう思うと、まだ力が漲って来る。

「やるぞ……ダンタリオン！」

「あなた達とならここで命尽きるのも悪くない。しかし、出来ることなら……生きてクダイ達を迎えましょう」

八万はいるだろう魔族。全て殴ってでも生きてみせる。

意気込んだその時だった。

光の粒がダンタリオンに集まって来る。

「これは……魔力！」

ダンタリオンの魔力が回復を始める。

「ダンタリオン！あれを見ろ！」

カームが崖の上を指差す。そこには……

「エルフ……？」

ダンタリオンに魔力を注ぐのは、エルフの軍勢。

高い崖の上から声がした。

「賢者よ！お前の魔力は我々エルフ族が回復させる！存分に力を振るうがいい！！」

聞き覚えのある声。

「ア……アイニ様！」

カイルが叫ぶと、アイニの姿が見えた。

そしてダンタリオンは、

「これは期待に応えねばなりませんねえ」

訪れた夜の空に右手を翳し、

「居出よ！魔槍グランドクロス！！」

夜空に漂う雲を払いのけ、グランドクロスが現れる。

「何回でも撃てそうです。ですから……………一気に片付けます！」

魔槍グランドクロスが魔族の群れに落ちた。

第五十八章 炎の翼を持つ少年 〔後編〕

「やるな……女」

アスペルギルスは苦戦している。同様に、オルマも。

「聖騎士を目指してたことがあったもんでね。そうそうくたばった
りしないよ！」

まだ勝負は着いていないが、中断せざる得ない事態になる。

二人もまた不死鳥の気配を感じ取ったのだ。

「この熱気……来るのか！不死鳥が！」

ファイティングポーズを解いてアスペルギルスが天井を仰ぐ。

最上階で起こる最高のイベント。見逃すわけにはいかない。

「女。この勝負一先ずお預けだ」

そう告げると、前触れもなく消えた。

「待ちなさいっ！アスペルギルス！！」

いなくなった空間を見つめ、

「クダイ……シャクス……！」

俄然、アスペルギルスの後を追った。

塔の下では魔族の群れが数を減らしていた。黒仮面はそれを眺めていた。

いや、視界には映ってもそんなものに意識はない。ただ、ようやく待ち望んだ不死鳥の気配に、高揚する気持ちが抑えられずに出た。

「……………フツ。ようやく来たか。相変わらず待たせるのが好きな奴だ」

共に様々な世界を渡り歩く。今や楽しみの一つ。

暗い夜空を更に暗く覆う雲の向こう。途切れ途切れの合間に月が見える。

「まあ……………しばらくは楽しもうじゃないか。この世界が果てるまで」

鳳凰の祭壇。クダイとヨウヘイ、そしてサン・ジェルマンはデ
イメンジョンバルブを見つめていた。

肌を焼くような熱気に達した時、炎を纏う鳥が現れた。

「ふ……………不死鳥……………」

ヨウヘイが呟く。

「おお……………まさに火の鳥。輪廻の波動！」

感銘を受けたサン・ジェルマンが祭壇へ近付く。

デイメンジョンバルブが閉じ、不死鳥は纏う炎を払う。そして
そこにいたのは……………

「に……………人間!？」

クダイが言った。

そう、そこには炎の翼を持ち、真っ赤な鎧に身を包む少年がい
た。

鎧の中で炎が揺らめく不思議。少年は翼を畳むと、祭壇の下に
いるクダイ達に気付いた。

「……………なんだオマエら？」

自分と同じ年くらいの少年が二人、剣を握り。トップハットの老紳
士に見つめられている。

「お前こそ……………不死鳥……………なのか？」

ヨウヘイが問うと、

「あん？俺は人間だよ」

少年はそう答えた。

「そんなわけないだろ！だって、今炎を……」

食い下がるヨウヘイに、

「ああ。時間を渡る時は、不死鳥の姿になるからな」

「じゃあやつぱり……！」

「けどちげーよ。俺が不死鳥の姿になるのは、この鎧のせいだ」

少年は少し考え事をしてから、祭壇を降りて来た。

「何見てんだよ」

サン・ジェルマンに視線が気になった。

すると、くんくんと鼻を動かす、

「あいつの匂いがする」

そう言った。

「あんた、あいつの知り合いか？」

いきなり見知らぬ人物に“あいつの知り合いか”と聞かれて、そう

ですと答える奴はいない。

だが、サン・ジェルマンとヨウヘイには、少年が黒仮面のことを言ってるのだとわかった。

「随分と礼儀の知らぬ不死鳥だな」

イメージと大分違う“不死鳥”に、サン・ジェルマンの熱も冷めていた。

「うるせーな。聞いたことに答えるよ」

機嫌が悪いらしい。次第に口調が荒くなる。

クダイとヨウヘイには、少年の威圧的な態度は苦手だった。

同年代だからこそ感じる、脅威にも似た雰囲気。不良と馴染みのない二人には、関わりたくない人種なのだ。

少年が不良かどうかは別としてだ。

「相変わらず口の悪い奴だ……………羽竜^{はりゅう}」

そうしてると、暗がりから黒仮面が現れた。

「……………やっぱりいやがったか。ヴァルゼ・アーク！」

少年は右腰の剣に手を掛ける。

「そういきり立つな。久々の再会だ。それに、ここにいる者達は、皆お前を待っていたんだ。少しくらい愛想よくしてやれ」

「ふざっけんなっ！ いっつも逃げやがって！」

「逃げてるわけじゃない。用が無くなるだけだ。その世界にな」

「おんなじだろ！」

二人の会話に誰も入れないが、知り合い以上の関係だということくらいはわかる。

羽竜と呼ばれた少年が鞘から剣を抜くと、真紅の刃が顔を見せる。

「オマエら、斬られなくなかったらそこをどけ！」

と、クダイ達に吐く。

「さつきからお前こそエラソーにしゃがって！」

突っ掛かるヨウヘイが剣を振り下ろす。が、あっさりかわされ、喉元に刃を突き付けられた。

「くっ……………！」

「どけろつつつてんだろ」

羽竜の視線に後ずさる。

その成り行きを見届けるように、アスペルギルスが姿を現し、

「とんだ不死鳥だな。まるで悪人だ」

悪態をつく。

「不死鳥不死鳥って……………不死鳥が善人だって誰が決めたんだよ」

さすがに頭に來たのか、羽竜が文句を言う。

黒仮面が堪え切れず吹き出した。

「ハハハハッ！羽竜、それでは悪人だと認めたようなものだぞ」

「るせーよ。悪人だったとしても、あんたよりはマシさ」

ヨウヘイをやり過ごし、一歩ずつ黒仮面へ近付く。と、クダイが羽竜の行く手を阻んだ。

「なんだよ。オマエもヴァルゼ・アークの仲間か？」

「違つよ」

「ならどけ。オマエらに用はない」

「そういうわけにはいかない。君に用がある」

言い合っていると、そこへケファノス、シトリー、カカベル、オルマもやって來た。

「みんな！」

クダイが仲間へ気を取られた瞬間を見計らい、羽竜はクダイの腹を蹴った。

「がつ……………」

「クダイー!!」

シトリーが思わず駆け寄り、羽竜を睨んだ。

「何するのよ！」

「俺は今、機嫌が悪い。邪魔する奴は片っ端から斬る！」

それは、その場の全員に告げた言葉。羽竜にとっては全員が敵なのだ。

これ以上は、打開しなければと黒仮面が言う。

「サン・ジェルマン、どうするんだ？ここで羽竜を倒すのか？」

選択はサン・ジェルマン次第。

サン・ジェルマンはじっと羽竜を見つめ、

「いや。退散だ」

そう言った。

がさつに見える羽竜だが、その实力はかなりのものであると推測された。

黒仮面が待つだけの男。おそらく、立ち向かえる者はここには黒仮面を除いてはいない。

不死鳥は現れた。その事実だけで十分な収穫。先のことはこれから考えればいい。

「サ、サン・ジェルマン！」

ヨウヘイの制止は聞かず、彼を連れて消えた。

「しかたあるまい」

日が悪い。アスペルギルスも退散した。

そこへまた来客があつた。

「セルビシエ……………」

黒仮面は体力を消耗しているセルビシエの元に行き、

「掴まれ」

肩を貸す。

「も……………申し訳ありません……………このような……………無様な……………」

どこかいじらしくなる。

黒仮面はフツと笑い、セルビシエを抱き抱えた。

「く、黒仮面様！」

「褒美だ」

仮面の奥の瞳がウインクをした。

「……………はい」

今はその褒美を黙って受け取った。

踵を返す黒仮面に、

「待てよ」

羽竜が呼び止め、

「時間を超えて来たばかりで疲れているだろう？少し身体を休めろ」

そう返すと闇に消えた。

「チツ、また逃げやがった」

ボソツと呟いた羽竜は、視線の多くに気付いた。

「だから何見てんだよ」

自分の立場をよくわかっていないようだった。

待ち望んだ不死鳥は、真紅の剣と鎧を身に纏う炎の翼を持つ少年。

敵ではなさそうだが、味方でもなさそうだ。

今はまだ、ケファノスの肉体が戻るか定かではなかった。

第五十九章 蘇る魔王 前編

「全軍撤退だ！」

生き残った部下に、アスペルギルスが声を上げ指示を出す。

それは、クダイ達が事を成したのだとわかるものだった。

「不死鳥はどうしたんだ」

エンテロがやって来てそう聞くと、アスペルギルスは鼻を鳴らして顔をしかめた。

「まあいいや。後でゆっくり聞こう」

視界に入るエルフの軍勢と、国旗のようなものも見える。多分、人間達も加勢に来たのだろう。

十萬いた兵はその数を半分以下まで減らし、長引けば全滅を免れない。

舌を打ち、撤退する群れに紛れ姿を消した。

「勝った……………」

カイムはその場に座り、あぐらをかいだ。

「正確には助かったと言ったところでしょうか」

座り込みはしないものの、気持ちだけはカイムに同じだった。

撤退して行く魔族の群れは、まだ夜の明けない空へと遠ざかって行った。

「そういえば俺に用があるとか言ってたな？」

クダイが言ってたことを思い出し、羽竜がぶっきらぼうに言った。

「ケファノス」

クダイはケファノスを呼んだ。

夜明けまでまだ時間はあるが、早く肉体を与えてやりたい。
心なしか、弱っているように見えるからだ。

「なんだ？この人形？」

「彼の名はケファノス。僕達の大切な仲間だ」

「ふうん。それで？」

怪訝な顔をされたので、回りくどい言い方はやめる。

「単刀直入に言うよ。君の翼の羽根が欲しい」

「羽根？これの？」

羽竜は左の翼を開いた。

「ケファノスは事情があつて肉体を失つてゐるんだけど、不死鳥の羽根があれば取り戻せるかもしれないんだ」

そんなことが可能かどうか、羽竜自身も未知なこと。

「なんだかよくわかんねーけど、切羽詰まる事情だつてのはわかつた。でもよ、この翼……ほら、炎で出来てんだよ。羽根って言われてもなあ……」

欲しいのならくれてやらないでもない。可能なら。

羽竜の言いたいこともわかる。クダイ達はどうすればいいか模索してると、

「ならばその翼の炎、余が全身に浴びよう」

ドミニオンが嘘の情報を語つたとは思えない。

翼が炎で構成されているのなら、羽根と見立てるものは、やはり炎。

「もう少し考えようよ。万が一焼けちゃったら……」

そうクダイは案じたが、

「お前達はよくやってくれた。感謝している。だからこそ賭けるのだ。大丈夫だ。きつと上手くいく」

不死鳥の炎は普通の炎とは違って崇高なものなのだろう。でなければ

ば伝説になどならない。なるわけがない。

確証は必要なく、信じればいい。このままではどうせ尽きる命。
“仲間”の恩に報いる為、

「俺は人間だけど、この翼の主は不死鳥の神のものだから、特別な力は期待出来るかもな」

羽竜は穏やかな表情をして言った。
そしてケファノスは決心する。

「翼を広げて欲しい」

言われるままに六枚の翼を目一杯広げた。

不安げに見守るクダイ達に、

「フツ。奇跡を信じる人間の気持ちがよくわかる」

言って、ケファノスは羽竜の広げた炎の翼に飛び込んだ。

「不死鳥が少年だと知っていたのか」

サン・ジェルマンは黒仮面に言った。

「腐れ縁でな。だが、あいつが不死鳥の役目を担っているのは事実だ。嘘は言っていない」

「それはいい。問題はあの少年……羽竜少年の強さだ。ヨウヘイと変わらぬ歳であの気配。とてもじゃないが、ヨウヘイはおるか、アスペルギルス達でさえ敵うまい。不死鳥の力の恩恵か」

「いいや。あれは羽竜自身が経験で身につけた強さだ。だから俺も手を焼く」

倒したいのになかなか倒せない。そうしてるうちに、見る見る力を付けて来る。

天与とさえ思わずにいられない。

「それよりどうするんだ？羽竜を倒さねば輪廻の波動は止まらんぞ」

黒仮面は一切の手は貸さないつもりだ。傍観。静観を決める。本人の言うところの気まぐれでも起きない限りは。

「計画を変更する。羽竜少年は後回しにする。まずはクダイ少年達から最後の時間構築魔法具を奪う」

「ヨウヘイは？」

「“器”としてしっかり働いてもらうつもりだ。しかしながら、ヨウヘイは魔力を持たない。必要な量の屍人かばねびとを短期間で集めるには、多くの魔力が必要だ」

「アスペルギルス達でも“使う”か？」

「もっと有効な手段がある」

「……………聞こう」

「クダイ少年というエルフの少女。どちらでもいい、彼女達なら十分な魔力を持っている」

「なるほど」

「手を貸してくれるな？黒仮面。いや……………ヴァルゼ・アーク……………だったかな？」

「……………。」

その名が本当の名であろうことは、羽竜が口にしたことで決定づけられた。

黒仮面は何も言わないが、断れないことへのもどかしさを感じている。

断れないのは、傍観という大義名分が建前であること。やはり自身の目的があるのだ。

「……………いいだろう。エルフの少女を連れて来ればいいんだな？」

本腰を入れ始めたサン・ジェルマン伯爵。

その本性は、神さえも欺く。

第五十九章 蘇る魔王 〵後編〵

「どうなさいました？浮かない顔をされて」

一人、苦虫を噛み潰す思いをしていると、セルビシエが話し掛けて来た。

ボンテージドレスではなく、普段の黒いドレス。左足を引きずるところを見ると、傷口を魔法で治してないのだとわかる。

「セルビシエか。なあに、少しばかり考え事さ」

「まあ。いけませんわ。お疲れなのですから身体を癒さなければ」

「特に何をしたわけでもない。お前こそ、なぜ傷口を塞がない？」

深い傷口であっても、引きずる必要がないくらいまでは治癒可能はず。

「これは……………」

セルビシエはスカートを包帯の巻かれた大腿が見えるまで捲くり上げた。

白くしなやかで艶やかな脚線美が、惜し気もなくあらわにされる。

やや頬を赤らめ、

「わたくし自身への戒めでございます」

そう言った。

「戒め？」

しかし黒仮面には何に對しての戒めかわからず、きつと不自然な表情を見せたに違いなかった。

「はい。黒仮面様の傍らを預かる身でありながら、小娘二人にこの醜態。償いの意味も込めての戒めでございます」

「……………ハハハッ！」

「く、黒仮面様！？」

「いや、悪い。あまりにストイックなことを言うもんだからつい」

「わ、わたくしはいつだって真剣だと……………！」

「ありがとう」

「え……………？」

「お前の気持ち、嬉しく思う。身にあまる光栄だよ」

皮肉ではなく、心からの黒仮面の気持ち。これ以上の至福は、セルビシエには考えつかなかった。

それなのに、黒仮面はひざまずく。

「黒……………仮面様……………？一体何をなさって……………」

気でも振れたかと思うような行動に戸惑う。

心拍数が細胞を刻むようにスピードを上げ、言葉が震える。
黒仮面は傷ついたセルビシエの大腿に、そつと唇を触れた。

「あ……………そ……………そのような……………」

「これは戒めなんかではない。勲章だよ」

「勲……………章？」

「嘆くことはない。胸を張って誇ればいい」

黒仮面は立ち上がって、セルビシエの顎を持ち、

「魔帝ヴァルゼ・アークの為に戦ったのだと」

今度は優しく接吻をした。

「ヴァルゼ・アーク様……………それがお名前なのですね……………」

輪廻の塔で羽竜が言っていたが、聞いていいものか悩んでいた。それだけに、セルビシエの熱い情熱は形を変え始めていた。

「ヴァルゼ・アーク様。お願いがございます」

「どうした？」

「貴方様がこの世界から旅立つ時、一緒に連れて行って頂けませんか？」

胸に秘めていた想いを打ち明けた。

すぐには答えなかったが、黒仮面が真剣に受け止めたことの表れ。自分のことで一瞬でも悩んでくれていることが嬉しくて瞳が潤む。

「俺は女を幸せにする術を持たない男だ。一緒に旅をしても何もしてやれない」

「わたくしが望むのは黒……ヴァルゼ・アーク様の傍ら。このセルビシエ、命尽きるまでお傍に置いて頂けるだけで結構です」

どんなに遠ざけられようと、離れる気はない。困った女だと思われるようと、半端な感情では言っていない。

「物好きな」

「いけませんか？」

「いや。嫌いじゃない。そういう女は」

心救われたのは黒仮面の方だろう。

黒仮面が何で悩んでいるのか、サン・ジェルマンとの会話を耳にしてわかっている。

少女をさらう。卑劣で小賢しい真似をしたくはないのだ。

しかし、“見たい”ものがある。それは時間の終着なのか、それともつと別の何かか。

いずれにせよ、避けて通れぬ試練のようなものなのだろう。

「お許し……頂けますか？」

「……ああ。それほどまでに俺を望むのなら」

「では……………」

セルビシエは黒仮面の胸に寄り添い、

「わたくしにお任せ下さいませ。ヴァルゼ・アーク様に訪れるどんな試練も、わたくしが全て排除してさしあげますわ」

この時が満たされるのなら、他に何もいらなかった。

羽竜の広げた炎の翼に飛び込んだケファノスを、一同はじっと見守っていた。

（ケファノス……………）

クダイは祈っていた。なんだかんだとずっと共に旅をして来たのだ。仲間意識以上の想いと絆がある。

ケファノスのこと、行き詰まった考察の末の無謀な賭けではないだろう。

羽竜の背中の炎翼からは、普通の炎とは違った感覚を覚える。生命エネルギーとも言おうか、神聖な儀式の賜物に触れる感覚。

鳳凰の祭壇に満ち足りる熱気の正体はそれだろう。

全員が成り行きを見守る中、ケファノスを包む炎は大きくなり、やがて人の形を作る。

炎上するケファノス。そして姿は現れる。

「ケ……ファノス？」

クダイの目に映るのは、あの日廃校の体育館での紫の鎧の騎士。違うのは、仮面を被ってないことだけ。

雪のように透明感のある毛髪。サファイアのように青く綺麗な瞳だった。

魔王のイメージから掛け離れたビューティフェイス。低く落ち着きのある声からは想像していなかった。

「あれが……ケファノスの……？」

オルマでさえ見とれてしまった。

シトリーも啞然としている。

それほどまでに見事なルックスなのだ。

「ケファノス……よかったじゃないか。身体が……身体が……」

なぜだろう？クダイは涙が止められなかった。溢れる涙が顔をしゃくしゃくにしてしまうほど泣いている。

拭っても拭えない。そんなクダイを見てケファノスは近寄ると、クダイの頭に手を乗せ、

「何を泣くことがある？」

変わらない声色で言った。

「だって……だって……僕にもよくわかんないけど………」

フツと愛しむように微笑み、

「待たせたな」

それだけで済ませた。

泣きじゃくるクダイは、それがケファノスの感謝の言葉であることを知っている。

「オルマ、シトリー……そしてシスター、ここまで余を導いてくれたこと感謝する」

「な、何言つてんだい。サン・ジェルマンを倒すにはアンタの力が必要なんだ。感謝なんて」

あまり感謝などされたことのないオルマには、ムズ痒い言葉だった。

「わ、私も……何もしてないよ」

そう言いながらも、シトリーは照れて見せた。

ただ、カカベルだけはわなわなと震えている。

「どうしたんだい？カカベル」

オルマの問い掛けにも答えず、カカベルはケファノスだけを見ていた。

「シスター？」

シトリーすらも無視する。というよりも、何かショックを受けてるような印象がある。

見られていることを知ったケファノスは、ゆっくりとカカベルに寄り、

「生きることを諦めなかったのだな」

ケファノスが何のことを言ってるのか、クダイ達にはわからなかった。

「……………あ……………ああ……………」

カカベルは驚き戸惑っている。

「人の生きる道に神の教えなど意味はない。生きる力は人が持つ明日への希望。……………良いシスターになったな」

その意味は……………

「テ……………テンス様……………」

カカベルの一言が教えてくれた。

一度だけカカベルが話してくれた。村を壊滅され、辿り着いたザンボル国の廃教会。死ぬことを覚悟した日。そこに現れてカカベルに生きると言った“天使”。

その天使は、今カカベルの前にいる魔王……………ケファノスだった。

いつか仇討ちをしたいと願った相手と、生きることを教えてくれた人物。それが同一人物だと知ったカカベルは、動揺で心が崩れ

そうになっていた。

第六十章 平和維持軍

「どっから湧いて来たんだ、この援軍は？」

塔の外ではエルフ軍だけでなく、エルガムやザンボル、その他国の軍勢でひしめき合っている。

一息入れるダンタリオンとカイム、シメリーを見つけ、シャクスがやって来た。

「ホントだよ。どういふことなのかなあ？こんなに援軍が来るなんて」

「事情はどうあれ、助かりました。一時はどうなるかと思いましたよ」

シメリーの疑問は次期に解決する。そんなことよりも、命を救われたことは幸いだった。

ところ構わずねっころがるカイムも、心中は同じはず。

「それよりもシャクス。酷いケガですねえ」

ダンタリオンが見上げると、疲労でガタガタの自分達に比べ、血だらけのシャクスは痛々しかった。

「後少しで倒せたんだがな。次こそは倒して見せる」

死闘だったのだろう。口調にも覇気がなかった。

そこへ、エルフの女王アイ二と、人間の国の王達が姿を見せる。いずれも鎧を纏って。

代表で口を開いたのはエルガム国王だった。

「シャクス、ダンタリオン、話はアイニ女王から聞いた。これまでの非礼、知らずとは言え許して欲しい」

深々と頭を下げられ、“一応”家臣である二人は慌て、

「陛下！おやめ下さい！」

シャクスが言う。

「どうか頭をお上げ下さい。陛下に頭を下げられては私達の立場がありません」

ダンタリオンは座っていた腰を上げた。

「そうはいかぬ。この世界を救う為に、わずかな人数で魔族に挑んだのだ。万が一のことがなくてホッとしておるのだ」

また、ザンボル国王も、

「かつての詫びもしなくてはなるまい。君達を敵だと決めつけ、とんでもない過ちを犯すところだった」

言って、輪廻の塔を見る。

“彼”からも話を聞かねば」

それはきつとケファノスのことだろう。

「アイ二様」

「カイル……わずかな間に顔付きが変わったようだな。逞しい戦士の顔だ」

実の子であるカイルの成長は、母親としてなにより喜ばしい。

出来ることならば、真実を打ち明け抱きしめてやりたかった。

そしてシメリーも。実の子ではなくとも、気持ちは我が子。知らぬシメリーは“母親”の姿に泣き出しそうだった。

「シメリー、無事でなにより」

「お母様……」

シメリーもまた“母親”の胸に飛び込みたかったが、国を出た意味を台なしにしくなく堪えた。

一步、大人になったシメリー。でも、それは同時に我が子として育てて来た娘が手を離れて行く瞬間でもある。きっとシトリも。

「みんなあ~~~~~!!」

そうしていると、塔の方からクダイ達が来る。知らない顔ぶれを二人、連れながら。

鮮烈な真紅の鎧の少年。

深い紫の鎧の騎士。

.....
.....
.....

誰も言葉を発しなかった。

少年が誰かも知らないし、騎士も誰だかわからない。
これまでの言動を考えれば、どちらがケファノスかはわかることではあるが。

重い沈黙を破ったのは、

「世話をかけたな」

紫の騎士。ケファノスだった。

「随分と色男ですねえ。うーん、私のポジションが危ついかも」

それをダンタリオンがにこやかに答えた。

改まって礼を言い合うよりも、普段通りでよかった。

「フン。もっと年寄りかと思ったがな」

シャクスも微笑んで見せた。

アイ二達国王らも、微笑みはしなかったが、敵ではないケファノスを邪険にするようなことは言わなかった。

「そっちの少年は？」

また重苦しくなるのを回避するように、カイクがクダイに聞いた。

「あ、羽竜はりゅうって言って、不死鳥だよ」

説明が不足してる。一番いいのは羽竜本人の口から説明してもらったことなのだが、こつも情報が沢山では整理するのも難しい。

「シスターはどうなさったのです？」

オルマの腕に抱かれたカカベルを見てダンタリオンが気にかけてが、

「まあ……いろいろと」

クダイはそれしか言わなかった。

とにかく、援軍が来た成り行きや、ケファノスのこと。カカベルのことも不死鳥である羽竜のこと。情報が混線してるようで、どうにもならない。

誰もがそう思っていると、

「魔王ケファノス」

ザンボル国王が口を開いた。

「我々人間とエルフ、その他この世界の全ての種族で設立した平和維持軍に貴殿を招き入りたい」

それは、サン・ジェルマン伯爵から世界を守ろうとする全ての種族で構成される究極の軍団。

世界が一つになった奇跡だった。

第六十一章 心知らず

場所はザンボル国。正式にはザンボル共和国。その中庭にクダイ一行はいた。

今ここで世界中の国王達による、サン・ジェルマン伯爵に対抗する手段の話し合いが行われようとしていた。

その会合へケファノスが魔族代表で呼ばれているのだ。もちろん理由は魔族の王だから。

世界の在り方や進み方も話し合われるという。

出席に当たり、ケファノス自身は問題はないのだが、

「僕も着いて行く」

クダイがこう言ってきかないのだ。

「お前が行ってどうする」

素朴な疑問をシャクスが聞いてみると、

「だって、人間はケファノスを敵だって言ってたんだ。またケファノスを虐めたりするかもしれないじゃないか」

と答えた。

やれやれと言わんばかりにみんなが困り果てると、

「クダイ。アンタはジャステイスソードを使える人間なんだよ？魔族側に着いて行けば余計に警戒されるだけさ。それに、この世界の住人じゃない。いつかは自分の世界に帰る身分だろ？アンタが着いて行くのは無責任ってもんだよ」

オルマが言った。

案にもつともな話で、仲間というだけで首を突っ込むのは控えるべきだろう。ましてや論理的に会話の出来る性格ではないのだから。

「なんだよ！ケファノスは仲間じゃないか！今まで一緒に戦って来たのに、オルマはこんなところで見離すのかよ！」

「極端過ぎだよ、クダイ。あたしは別にさあ……………」

「なんだかんだ言って優しい奴だと思ってたのに！」

それじゃあ普段は優しくないと？前頭葉を一瞬過ぎたが、言い聞かせる自信もないのでやめた。

オルマとしてもケファノスを仲間だと思っている。ならなぜクダイを止めるのか？それは、ケファノスも一国一城の主だからだ。

種族は違えど身分が違うのだ。浅はかな考えでケファノスの尊厳を潰すわけにはいかない。

「そういうことです。わかって頂けましたか？」

代わりにダンタリオンが説明したが、クダイは納得してない様子。

「子供だな。まるで」

シャクスにまで毒突かれる始末。

ムスツとしていると、ケファノスが腰を降ろしていた石の椅子から立ち上がり、

「これは魔族の王としての責務だ。お前達とは関係がない。だが、気持ちだけは受け取ろう」

クダイの気持ちが伝わってることを言った。

クダイがそこまでケファノスを擁護したいのは、今まで散々ケファノスを対敵して来た人間が、そんなに簡単に魔王を迎え入れるとは思えないからだ。

同じ人間なのに人間側を信じられない。そんなジレンマがクダイをそうさせるのだ。

見兼ねていたカイクが、木に寄り掛かって、

「そんなに心配なら俺がケファノスに着いて行けばいいだろ」
切り出した。

「他の連中に家臣が付くのに、ケファノスだけが一人っつてのは確かに不利だ。幸い俺はハーフェルフ。人間でも魔族でもエルフでもない中立の立場。魔族側に着いても問題はないはずだ」

「カイク……………」

途端にクダイの顔が明るさを戻す。

「だけど、お母様……………アイ二様も出席するんだよ？怒られないかなあ？」

「俺が正しいと思ってやることだ。アイ二様でも否定は出来ないよ」
逆にカイクを心配するシメリーだが、どこか漲る彼の自信に何も言えなかった。

「後はお前の許可を貰うだけだ。どうだ？ケファノス」

「……………いいだろう。断る理由はない」

ようやく落ち着いた。

「これでいいな？クダイ」

「うん。頼むよ、カイル」

―安心したところで、ケファノス呼びに衛兵が来た。

ケファノスはカイルと特に打ち合わせることもなかったが、行
き際に立ち止まり、

「シスターはどうしてる？」

そう聞いて、

「シトリーが付いてるから大丈夫だよ」

シメリーの言葉を確認すると「そうか」とだけ言っていなくなった。

「あいつ……………ひょっとしてシスターを心配してるのか？」

「でしょうね」

シャクスは意外といった顔をしていたが、ダンタリオンにはそうでもないようだった。

事情は知ってるものの、カカベルの心情を察すればケファノス

が肉体を取り戻したことは手放しでは喜べない。

とは言え、優先すべきはサン・ジェルマンの討伐。カカベルへの配慮は足元にも及ばないのが世界の意見。そしてそれは正しい。

だから仲間である自分達だけは、カカベルを気遣ってやりたい。

「それはそうと、あの羽竜^{はいうりゅう}って奴はどこだ？」

気にかけることが多くて頭が痛くなって来る。

シャクスは辺りを見回してはみたが、羽竜の姿は見えなかった。

「不死鳥の魂を受け継いだとか言ってたけど、詳しく話を聞きたいわね」

「黒仮面とも因縁があるみたいだしな」

オルマもシャクスも、一番気になるのは羽竜のことらしかった。

彼もまた様々な世界を旅しているという。それが原因か生来の性格かはわかり兼ねるが、知らない世界に来て物おじはしないし、態度もでかい。揚句の果てには協調というものを知らないらしい。

全く持って迷惑な奴だ。

「なら僕が捜してくるよ」

そんな迷惑な羽竜を捜しに、クダイは元気に走って行った。

「さて、私達も今のうちにやっておかねばならないことがあります」

ダンタリオンが切り出した。

シャクスもオルマもシメリーも、何の話か聞いていない。

「やっておかなきゃならないって……………何を？」

シメリーは小首を愛らしく傾げた。

「伯爵の攻略法を調べるんです。幸い、ザンボルには巨大図書館があります。調べ甲斐がありますよ」

と、軽く爽やかな笑顔を見せた。

「サン・ジェルマンの攻略法だと？」

「そうです。以前、伯爵には魔法が効かないことを話しましたね？その理由をドミニオンは、伯爵が時の秘法で“時間を身に纏っている”からだと言っていました。そして、伯爵自身の時間は凍結されていると。それを破るには“心”で破るしかないと」

シャクスは釈然としないようで、また噛み付いた。

「魔法が効かないのなら物理的に行けばいい話だ。その為にケファノスの肉体を取り戻したんじゃないのか？」

もつともな意見だが、調べるという作業をしたくないのだ。

聖騎士になったほどだ、頭はいい。だが、聖騎士になってからは、勉強より剣の腕を頼りにして来た。そういう分野は苦手なのだ。

「ええ。確かにそうなんですが……………」

釈然としないのはダンタリオンも同じなようだ。シャクスと理由は違っただろうが。

「あたしもシャクスも、アンタもカイクも強い武器を手に入れた。クダイのジャステイスソードもあるし、あの羽竜って男の子もかなりの腕前みたいだから、頼んでみれば力になってくれるかもしれないか」

「みんなでかかれば魔法なんて効かなくても大丈夫じゃないのお？」

オルマもシャクスに同意見なのは、やはり書物を読みあさるのが苦手だからだ。

シメリーはそうでもなさそうだが、実力のある者達がこれだけいるのだ、サン・ジェルマン一人に手を妬くとは思っていない。

「引つ掛かるんです。ドミニオンはこうも言いました。『サン・ジェルマンは時を操る者。そのカラクリを暴かぬ限り誰も勝利しないと。つまりですね、魔法が効かないというのは、魔法を武器とする私個人の意見でして、もしかすると物理的な攻撃も効かないのではないかと』」

「嫌なことサラっと言う性格、直した方がいいよ」

それが事実だとしたら、サン・ジェルマンには勝てないままになる。

オルマの皮肉も気にせず、ダンタリオンは続けた。

「ここからは私の推察ですが、物理的攻撃や魔法が効かないというのは時の秘法のオマケのようなものであって、本当はもっと別の目的があるんじゃないかと」

「例えば？」

食いついたのはシメリーだけだった。

「そうですねえ。わざわざ自分の身体に影響を与えるのですから……」

いい考えは浮かばなかった。

それでも、物理的攻撃も効かないという推察だけは自信がある。

「とにかくです、時の秘法に関することを四人で調べましょう」

やっぱりそうなるのかと、シャクスとオルマは溜め息を漏らした。

「ささ、早く」

ダンタリオンに急かされ、ザンボルが誇る巨大図書館へと向かうことになった。

時の秘法……後に、それが大きな障害となる。

第六十二章 精神の行方

自分の世界を旅立ってどのくらいの年月が流れただろうか？
十年とは言わないが、それなりに……そう、それなり時間は経った。

それでもまだ旅立った時の十七歳のまま。ヴァルゼ・アークいわく、時間を旅する者は老いが遅くなるという。

羽竜は、今だ決着のつかないヴァルゼ・アーク……この世界では黒仮面と名乗っているあの男のことを考えていた。

いつも先に行くヴァルゼ・アーク。追って必ず同じ世界に辿り着くとは限らない。それだけに、この世界で会えたことには深い想いがある。

「ここにいたんだね」

城壁の上から景色を眺める羽竜を見つけた。

「クダイ……」

「搜したんだ」

「俺になんか用か？」

自分のことで色々話し合われているのを知っている。不死鳥だと。

羽竜本人は不死鳥だとかなんだとか気にはなっていないのだが、ケファノスの肉体が戻ったのは紛れも無く羽竜のおかげ。

感謝されるのはいいが、あれこれ聞かれるのは面倒臭い。

上手く説明する自信が無いのだ。

「用っていうか……みんなが色々話聞きたいって」

毎度このパターンだ。珍しいのはわかるが、特に話すことなんて無い。

「話って言われてもな……」

乗り気じゃない羽竜はまた遠くを眺めた。

「黒仮面ってどんな奴なの？」

空気を読む気もなく、クダイは興味津々に聞いた。

「ああ……ヴァルゼ・アークか。見たまんまの奴だよ。特別キザってわけじゃないけど、女心を掴むのが上手いんだ。それと、思想ってのか？自分の世界観を大事にする奴だよ」

「ふうん。なんだか褒めてるみたいだね」

「そ、そんなわけねーだろ！俺はあいつを倒す為にここにいるんだからな！けなしこそすれ、褒めるわけねーよ！」

でもクダイには何となくわかった。自分も黒仮面と話し、あの謎めいた雰囲気惹かれそうになった。現に、また会いたいとさえ思っている。自分の知らないことを、幻想めいたことをあたかも真実のように語る。

真実なのかもしれないが、まだ信じられない。

きつと羽竜も同じ理屈で惹かれているのだ。

「ヴァルゼ・アーク……って強いのか？」

「あいつは悪魔だ」

「悪魔？」

「悪魔の神様なんだ。確か……重力と空間の神とか言ってた気がする。まあ、あんまり本人は神様呼ばわりされるのが好かないみたいで、魔帝って名乗ってるけど」

「神様……」

とても神様には見えなかったが、言われてみれば深い思慮の向こう側に感じた独特の雰囲気。そこに惹かれてるのかもしれない。

「俺の世界であいつは、宇宙を無に還そうとしてたんだ。無限を操る力、インフィニティ・ドライブで」

「宇宙を無に……なんだか難しい話だね。サン・ジェルマンみたいだ」

「サン・ジェルマンってのはあの初老の男か？」

「うん。時間軸を融合させて、時間を終着させる気なんだよ」

「どうせ入れ知恵したのはヴァルゼ・アークだよ。あいつは探してるんだ」

「探すって何を？」

「宇宙に散って行ったインフィニティ・ドライブ……もしくはそ

れに代わる力さ」

「宇宙を無に還すって、どうしてそんなことしたいんだろ？」

「運命つてのが既に決まってるからだろ」

「そついえばそんなこと言ってたかな。馬鹿げてるよ。運命だとか未来が決まってるとか、じゃあ僕らは何の為に生きてるんだ。そう思うだろ？羽竜」

「ああ」

素っ気ない返事をして羽竜は少し物思いにふけた。

未来や運命が決まってるなんて塵ほどにも思いたくない。しかし、永い時間ヴァルゼ・アークと戦ううちにその思いがそよ風にさえ揺れる。

- 運命は既に決まっている -

力と力の戦いに勝敗は着いていないが、心理戦には優劣が着いている。

頑なまでに全てを無くそうとする魔帝ヴァルゼ・アーク。

彼がサン・ジェルマンに何かを吹き込んだ可能性は高い。ただ、そうなると不自然なことになってくる。

「でも羽竜。もし、サン・ジェルマンが時間を終着させることを叶えるとしたらさ、ヴァルゼ・アーク……だっけ？あの人は他の世界にも行けずにこの世界で果てることにならない？」

「だろうな」

「だろっとなって……………」

「っーかよ、あいつはサン・ジェルマンって野郎がすることを観察したいんだよ。もし、インフィニティ・ドライブに代わる力をサン・ジェルマンが手に入れたら……………」

ゴクリと唾を飲んだ。

「きっとサン・ジェルマンを倒してその力を自分のものにするはずだ」

有り得ない話ではない。ヴァルゼ・アークが本物の神なら、サン・ジェルマンなど相手にならないのかもしれない。

「で、でもだよ？サン・ジェルマンには魔法が効かないんだ。倒すなんて……………」

「魔法じゃなきゃ駄目なのかよ？」

そう言われてみれば他の方法なんて考えたことがない。ケファノスさえ肉体を取り戻せば、うまくゆくと思っていたから。

羽竜の言うことはすごく自然だ。

魔法が駄目なら剣がある。

（でもなんだろう……………本当にそれで倒せるのかな？）

ダンタリオンが抱く疑念を、クダイも抱いていた。
頭を捻って定まらない思考を巡らせていると、

「仮に全ての攻撃が効かないとしても、ヴァルゼ・アークはサン・ジェルマンの倒し方を知ってると思うぜ？」

「言い切れるの？」

「自分が下位に立つことはしない。そういう奴なんだよ」

「魔帝ヴァルゼ・アーク……………かぁ……………」

クダイの胸に去来するのは、成長しようとする自我。それは自惚れにも近い。

精神の未熟さ故、憧れに焦がれ、いつか過ちだったと気付く。
今のクダイは、それを知るわけもなかった。

第六十三章 b e w u n d e r u n k

夢を見た。村が魔族に壊滅されて、一人雨の中ザンボル国の廃教会へと漂流者のように辿り着いた夜。

悲しみと寂しさが心を蝕んで、生きることを拒絶したあの夜だ。これからどうしようなんて考えなかった。死ねばいい。それしか思わなかった。

頼る宛も空腹を満たす術も、渴いた喉を濡らす術も知らなかった。

なによりも、蝕まれた心が枯渇されてゆくことに堪えられなかった。

そう思つて廃教会の十字架を見上げると、そこに深い真紫の鎧を纏つた、白い髪の綺麗な男がいた。

男は憐れむ瞳をくれると、

「生きることを諦めるのか？」

低い声でそう言った。

「だども……魔族に村を破壊され……わだすを残してみんな死んでしまった。わだすにはもう何も……」

人としてあまりに惨めな姿をしてるのに、それでもまだ涙は流れる。

「もう少しだけ……生きてみないか？」

「もう……少し……？」

「死ぬのは簡単だ。だが、今のお前からはまだ絶望を感じない。心

のずっと奥底で、はい上がろうしているんだ」

「だ……だども……」

「生きることを諦める前に、明日を掴む努力をするんだ」

「明日を……掴む……？」

「今日をどんな風に生きたかで明日は姿を変える。忘れてはならん、今日を生きた者にしか明日は来ないのだ。必ず、生きていてよかったと思える日が来る。その日まで………生きる」

ふわりと軽く靡いた白い髪が、それだけなのに品のがよかった。素養のように。

夢は覚め、カカベルは静かに目を開けた。

頬が濡れていて、泣いていたのだとわかった。毎回この夢を見ると涙が流れる。振り切ったと思っていた過去が、まだ自分の中にあるのだ。

「気がついた？」

可愛い声がしてそちらを向くと、

「おはよう、シスター」

シトリーがベッドに横たわる自分を見ていた。

「わだす………」

確か輪廻の塔にいたはず。ケファノスがあ夜の天使だと知り、シヨックを受けたまでは覚えがあるのだが……。

「シスターは気を失っちゃったんだ。」

カカベルの思考を読み取ったように言った。

輪廻の塔を出てからのことも説明した。事細かに。ここがザンボル城であることも。

「迷惑かけて申し訳ねーだ」

晴れない気分だったが、ケファノスの一件で気を遣わせているシトリーに謝意も込めた。

「ぜ、全然！セルビシエへのあの一撃があったからこうして生きるんだもん！迷惑どころか感謝してるよ！」

廃教会ですつと孤独に堪えて来た。だからこんなにも温かい感覚は忘れていた。

シトリーが一生懸命に元気付けようとしているのが、カカベルにはすごくありがたい。

あの夜の夢を見た後は悲しみだけが残るのに、その悲しみがどこかへ行ってしまった。

「ね、ねえ、シスター」

「……………なんだべ？」

「あ、あのさあ……………やっぱりケファノスのこと……………憎い？」

なんて当たり前のことを聞いてるのだろうと自分でも思ってる。

「……………そつたらこと……………」

「わ、わかつてるよ？魔族のせいでシスターの村が壊滅したんだもん、憎いよね。でも……………さあ……………ケファノスは憧れてた天使様だったんでしょ？」

「……………。」

シトリーは事を穏便に済ませたいわけではない。カカベルの憎しみを忘れるなどとは言えない。しかし、憎しみと迷いに苦しむカカベルを見るのが堪えられなかった。

「余計なお世話なのかもしれないけど」

答えなかったカカベルに配慮したのか、付け加えた。

カカベルとは言えば、急に考えをまとめられるわけもなく、シトリーの言葉の真意を理解するのは困難だった。

しばらく沈黙があり、部屋に流れ込む穏やかな風に当たっていた。

互いに何を話したらいいのかわからない。戦いがこれからどうなるのかなんて、二人には蚊帳の外。クダイ達に任せるしかないのだ。だからこの沈黙は耐え難かった。

それを救うようにノック音がして、シトリーが即座に「はい」と反応してドアを開けると、

「やあ。カカベル起きた？」

クダイがいた。

「うん。起きてるよ」

息苦しい空気を換気してくれるようなクダイの笑顔。

シトリーは招き入れ、カカベルのベッドまでエスコートする。

「具合、どう？」

特に具合が悪くて倒れたわけではないのだが、クダイとしてもどう聞いていいかわからなかったのだろう。

「……………まあまあだべ」

体調は悪くないが、心は生憎具合が悪い。もしかしたらそつちを聞いて来たのだろうか？

にしても、饒舌にそれを聞き返す気もなかった。

「そ、そうだよね」

「……………あの不死鳥の少年はどうしただべ？」

苦笑いしたクダイを気の毒に思っ、話を逸らそうと羽竜のことを尋ねた。

「羽竜？羽竜なら寝てる。時間移動は疲れるんだってさ」

なんとも気楽な不死鳥だ。不死鳥とは崇高な存在だと思っていただけに、肩透かしを喰らった気分になる。

いつもの元気がないカカベルは、まただんまりした。

すると、またドアをノックする音がしてシトリーが開けようとする、向こうから先に開けられた。

「シスターはいるか？」

やって来たのはケファノスだった。

「ケファノス！」

悪意のあるような目でカカベルは睨む。

「起きていたか」

「な、何しさ来ただ！？そもそも、レディの部屋さ許可もなく入って来るもんでねーべ！」

「フツ。随分と“元気”だな」

ケファノスにはそう見えるらしい……実際そうかもしれない。これを“元気”と呼ぶのなら。

「わだすはおめさんを許したわけではねーがんな！」

憧れていた天使だからと言って、恨む気持ちは変わらないと言いたいのだろうが、許しを乞おうとは魔王様は思っていない。

「許して欲しいなどと都合のいいことを言つつもりはない。余を殺したいのなら、そのバランスブレーカーで殺せばいい」

「バランスブレーカーで………？だともこれは……！」

「まだ戦いは終わってないんだ。当然一緒に戦ってくれるのだろう？」

「そんなこと言うまでもねーべ！ただし、おめさんと手を組むわけではねー！勘違いするでねーぞ！」

枕元のバランスブレイカーを手にし、振り回すカカベルをクダイとシトリーは危ないからと止めていたが、ケファノスだけは目を細め微笑んだ。

「な、な、何がおかしいだ？！この期に及んでまだ人を小バカにするだか？！」

「いや。頼もしいと思っただけだ」

「キーーーーーッ！！！！その涼風を受けたようなフェイスで言うな！！余計に腹が立つ！！」

カカベルは本気で腹を立てているが、本気になればなるほどケファノスが微笑むから気に入らない。

「クダイさ達がサン・ジェルマンを倒すのにおめさんの力が必要だつて言うから生かしてるだけだかな！忘れたらなんねだ！」

「その堅固さがあれば大丈夫だな」

ケファノスはベッドの上で暴れるカカベルに近寄ると、じっと彼女の瞳を覗く。

「な、な、な、な……」

憎き魔王でも、美形な顔立ちはドキッとさせられる。そんな迂闊な気持ちを見透かされないようにしたいが、顔が勝手に紅潮していく。

「あの日のシスターからは想像出来ないほど立派なシスターになったな」

「わ………わだすはおめさんに褒められるようなことは、し、してね！」

「いいや。いい瞳をしている」

「バ……ババババカでねーか……？」

口説いてるわけではない。心の底からカカベルの成長を讃えたいのだ。

死ぬことを望んでいた少女が、今は世界を救う為に戦っているのだから。

「よ、寄るでね！」

バランスブレイカーをケファノスの鼻先に突き出した。

が、臆する理由はケファノスにはなく、

「忘れるな。神を信じてても奇跡は起こらない。いつだって生きようとする人の心が奇跡を起こすのだ」

踵を返すとそのまま部屋を出て行った。

「ケファノス……………」

シトリーにはケファノスが何を伝えたかったのかわかった。

それは優しさであり、落ち込む力カベルへの励ましでもある。

「よかったね、力カベル」

クダイにも想いは伝わり、そう言う、

「な……………なあにが“よかったね”だ」

わなわなと拳が震える。

「なんなんにもよかったことなどねーべさー!!」

「力、力カベル？」

「おん……………のれケファノスッ!!エラソーに説教など垂れやがって!!言われなくても奇跡でも案山子かかしでも起こしてやんべー!!」

「案山子かかしは関係ないと思うけど」

ボソリと呟いたつもりだったが、

「だんまれクダイさ!!わだすは怒っただ!!あの男をいづがギャフンと言わせねば気が済まねー!!」

もう怒ってるじゃないかと言ったクダイは、以降の力カベルの怒りを一身に浴びていた。

なんとも困った二人だとシトリーも呆れはしたが、早く戦いが

終わって欲しい想いと、戦いが終わってしまえば自分の世界に戻る
だろうクダイへの想いが複雑に絡んでいた。

だが、その想いさえ運命に弄ばれてしまうことなど、クダイに
もシトリーにもわかるわけがなかった。

そして、やがて誰かがこう思い始める。

時間を戻せたなら……………

愚かにも、人は可能性の無いものへ想いを強くする。

第六十四章 魔界將軍バチルス

魔王の玉座は長いこと不在だった。そこに座している者がいた。人ではなく、もちろん魔族。雄々しいメタリックの入った茶色い鎧を纏い、頬杖について睨みを利かせている。その両脇にはアスペルギルスとエンテロがいて、少し距離を置くようにセルビシエが立っている。

睨みを利かせる相手はサン・ジェルマン伯爵と黒仮面。

魔王不在のこの魔界で、今までは同盟の名の下に二人の独壇場だった。だがそれも昨日まで。將軍と四天王から呼ばれるバチルスが復活した今日からは、魔界の支配者は彼なのだ。

サン・ジェルマンと黒仮面はあくまでも“客”。勝手な振る舞いは許されなくなる。

事情をアスペルギルスから聞いたバチルスは、二人に挨拶へ来いと命令したのだ。

サン・ジェルマンはともかく、神である黒仮面がそれに応じるかセルビシエは不安だったが、意外にもすんなり了承したのだった。

「時間軸の融合………か。面白いことを考える。だが、その計画は一旦待つてもらおう」

有無を言わずバチルスは言った。

要するに、自分介さない物事は全て許さないということだ。

アスペルギルス達魔族は、時間軸を融合させようなどとは考えていない。地上を支配下に置くのが目的だ。

「待てと言われまして………これは困りました。“準備”は着々と進んでおります。今更、中止は出来ませんぞ」

腰低くサン・ジェルマンは言った。

抵触せずに言ったのは、ここで魔族を敵にしても利益が無いからで、バチルスの威圧感に負けたわけではない。

「黙れサン・ジェルマン。人間風情がワシに意見など認めん」

自分の領域で好き勝手をされれば、誰だってこんな出方にはなるだろう。

「……………では仕方ありませんな。一度中止致しましょう」

トップハットを被り直し、サン・ジェルマンは一礼してバチルスの前から去る。

黒仮面は特に発言するわけでもなく、踵を返したサン・ジェルマンの後に続いた。

「……………フン。いけ好かなねえ奴だ」

去って行った二人を、エンテロが毒吹く。

どちらかと言えば黒仮面に言ったものだろうが。

「おとなしく計画を中止するとは思えませんが。いかが致しましょう?」

アスペルギルスはバチルスに指示を仰ぐ。

「あの二人のことは逐一見張っておけ」

「御意」

バチルスとてサン・ジェルマンの言葉を鵜呑みになどしていない。

しかし、二人の存在感到、強引にすべきではないと直感が訴えかける。

黒仮面には尚更に危険を感じた。

「それと、サン・ジェルマンが持っている時間構築魔法具。奴から奪え」

バチルスが言うと、火のアスペルギルス、土のエンテロ、水のセルビシエは一礼をして応えた。

「バチルス將軍」

「なんだエンテロ。申してみよ」

「はっ。ケファノス様はどうされます？不死鳥によって肉体を取り戻しています」

「放っておけ。いずれ向こうから来るだろう。それまで敢えて構う必要はない」

「はっ」

そうは言ったが、バチルスの心中はケファノスへの復讐心でたぎっていた。

だからこそ、冷静に事を進めたい。どちらを向いても敵ばかり。足元を留守にするわけにはいかないのだ。

「ワシを殺さなかったこと、必ずや後悔させてやる」

魔王の玉座は、ケファノスを倒してバチルスのもことになる。

「ヨウヘイのこと、突っ込まれなくて助かったな」

バチルスとの面会などたいした労力にはならなかったらしく、黒仮面は戻るなり酒を杯に注いだ。

「所詮は器の小さな男よ。奴が眠りについていたのは、謀叛を起こしケファノスにやられたのだとの噂もある」

「自分のことしか頭にないってことか」

「だから私らのような者を恐がる。得体の知れない力を持つ者を」

バチルスを気にもかけてないのはサン・ジェルマンも同じだった。

黒仮面に渡された酒の注がれた杯に口をつけ、ふうつと息をつく。

「で、計画は中止するのか？おそらく監視されるぞ」

「都合が悪くなれば魔界マジを出ればいい」

時間構築魔法具は既に四つ手元に有る。最後の一つ、バランスブレイカーをクダイ達から奪えば全ての時間構築魔法具が手に入り、時間軸融合が行えるのだ。

「念の為だ、この部屋に結界を張った。ここを出入り出来るのは俺とお前、それとセルビシエだけだ」

「随分の気に入ってるようだな。だが彼女は魔族だ。警戒した方がいい」

サン・ジェルマンはこの大事な時期だからこそ、不確定因子をしょい込みたくない。

「セルビシエは信頼出来る。魔族の情報も仕入れてくれるし、何かと働いてくれるんだ」

「二重スパイとも考えられる」

「クツクツ。老いると用心深くなるようだな」

「若さ故の過ちをよく知っておるからな」

セルビシエの言動や行動を見れば、彼女が黒仮面に特別な気持ちを寄せているのはわかる。多分、それは信用に値する愛であるだろう。サン・ジェルマンが気にするのは、そのセルビシエの気持ちをアスペルギルス達も知っているだろうということ。セルビシエが無意識のうちに利用されているとも考えられる。

一番厄介なパターンなのだ。

敵を欺くにはまず味方から。今のセルビシエはアスペルギルス達にとって仲間ではなくなっている可能性もある。

仕掛けた爆弾が、思わぬ場所で爆発することだって無いとは言えないのだ。

「聞き捨てなりませんわね、サン・ジェルマン」

噂をすればなんとやら。サン・ジェルマンを睨み付けながらセルビシエがやって来た。

「これはこれは。とんだ話を聞かれてしまいましたな」

悪びれもなく言っただけ酒を喉に流す。

「わたくしが仕えるのはヴァルゼ・アーク様ただお一人。バチルス將軍が復活したとは言え、その気持ちに変わりはない。まして、お前なんかと言われる覚えもない」

本気で愛してるからこそ、黒仮面への愛を否定されるような言葉に我慢がならない。

「止せ、セルビシエ。サン・ジェルマンも悪気があって言っただけではない」

「……………はい」

黒仮面に言われたセルビシエは、純情を覗かせるように素直になる。

「サン・ジェルマン。お前が時間軸融合を完成させる為に、セルビシエも一役買ってるんだ。あまり無下にはしないでくれ」

「うむ。少々口が過ぎたな」

黒仮面は大切な協力者。機嫌を損なうわけにもいかない。

「一応、わたくしが監視役を買って出ましたが、將軍はともかくアスペルギルスとエンテロは信用してないかと」

「つまり、どこかにまだ監視役がいるってことだな？」

「申し訳ありません。迂闊にもあの二人に、ヴァルゼ・アーク様への想いを口にしてしまいました」

「アスペルギルスとエンテロ程度なら、その気になればいつでも倒せる。好きにさせておけ」

黒仮面の言葉に安心した。そう言ってもらえるだけでもありがたい。

「では、わたくしは予てからの任務を」

黒仮面の表情が少し曇った。仮面を着けているのだから、眉の動き一つ計れないのだが、なんとなくそう思った。

見えもしないはずの表情を読み取れたことに至福を覚え、セルビシエは快樂にも似たような気持ちになる。

「嫌な任務をさせるが、許してほしい」

どこが嫌なものか。頼りにされたいのだ。

「甘美な一時を楽しんで下さい。エルフの少女、必ず連れて参りましょう」

サン・ジェルマンの計画などどうでもいい。全ては黒仮面の為。この世界を捨て、黒仮面に着いて行く。

もうじきそれが叶うのだ。

そう思い見上げた先には、魔法の球体に包まれ、意識の無いヨウヘイがいた。

第六十五章　ブラインドグークネス

「あははは。そりゃアンタ、それはケファノスなりの優しさだよ」

カカベルとケファノスのやり取りを聞いたオルマは、イマイチよくわかってなかったシトリーにそう教えた。

各国の代表達を交えた豪華な夕食会も済み、二人は中庭にある東屋で夜のお茶会を開いていた。

「あれのどこが優しいの？」

カカベルをからかうような発言をしていたケファノスの気持ちなど、シトリーにはどうしても理解出来ない。

それを優しくさだと言えるオルマは大人の女ということなのか。それさえも知恵熱を出さなければ飲み込めない。

「まあ……何て言うかさあ、仇だと思っていた相手が、生きる希望を与えてくれた人物が同じ人物だって知って、シスターはすごく苦しんでたんだと思うんだ。だからわざと憎まれ口を叩いたのさ」

「だからそのどこが優しいの？」

早口で言われても他に説明のしようがない。

「あたしには上手く説明出来ないかもね」

「なんで？」

「……………」

長年、恋をしてないオルマとて、男のなんたるかは知らないのだ。
ただ飽くなき“大人”としてのコモンセンスだから理解出来たのだ。

単純に優しさ以外の何者でも無い。

「素直にシスターに謝ればいいのに……………わかんないなあ」

「謝ったらシスターはもつと苦しんだと思うよ」

謝られても村が元通りになるわけでもない。少なくとも、カカベルが生きて来た糧の一つは、ケファノスへの怒り。それを無くしてしまっわけにはいかなかった。

カカベルの抱く怒りは、仲間達の愛情によっていつか形を変える。そう信じているからこそなのだろう。
説明しろと言われてもしょうがない。

「アンタも大人になったらわかるよ」

「あゝ！そうやって子供扱いするう！オルマよりは若いけど、一応三十年は生きてるんだから！」

頬が引き攣った。オルマは二十七歳。若い部類には入るが、やはり大人は大人。そのオルマと変わらない……………むしろ三年も多く生きているシトリーは、クダイよりも年下に見える。人間なら十四、五歳と言ったところだろう。

なんだか悔しい。

「アンタもダンタリオンと同じねえ……………」

「ダンタリオンと私のどこが同じだって言うの?!失礼しちゃう!」

「そうじゃなくて……」

嫌なことをサラツと言う辺り。ま、言ったところでまた噛み付かれるのがオチだ。

紅茶の液面に月が映り込む。

夕食会を終えた各国の王達は、明朝自国に帰り、来たるべきサン・ジェルマンとの戦いに備えることになっている。

その会食の席で、オルマ達は英雄だった。

ケファノスは、魔界の王として人間達から改めて認められ、サン・ジェルマンを倒した後、世界平和への協力を要請されるなど、互いに共存していく道に不可欠な人物にされていた。

ダンタリオンは汚名を返上、賢者としての職を取り戻し、また同様にシャクスも聖騎士の称号を取り戻した。

鎧を売った一件は、シャクスの心意気として評価されていたが、本人はひたすら苦笑いをしていた。

以上の三人は、世界的に地位のある者だ。加えてシトリーとシメリーも、エルフ国の王女に違いはなく、讃えられてもなんら不自然ではない。

そしてクダイは異世界から来た勇者として。オルマはその戦士としての実力を。

更に、ハーフェルフのカイムやカカベルも、勇者一行と讃えられ、照れ笑いをしていたのだ。

羽竜はと言うと、無愛想に振る舞っていたのだが、料理が並ぶと目の色が変わり、やたら饒舌に異世界での活躍を語っていた。

数々の羽竜の武勇伝。中でもオルマの印象に残ったのは、大陸の無い世界の話。

そこは一切が海に沈み、またその海は肺呼吸が可能な海であったという。

その世界で、ある青年が企てたことは、海の外に出て世界を再構築すること。至って希望あることだと思うのだが、その世界の人間にとって海の外は禁忌。語ることすら許されなかったという。

青年には悪意は無く、純粋なまでに希望を持っていた。しかし、人類全てが彼を殺したのだと言う。

羽竜の追っている黒仮面は、無知の満ちた世界に興味はないと、何も“せず”に次の世界へ旅立ったとか。

何年か振りの楽しい食事。すぐにまた始まる戦いを前に、不粹で汚したくない。

せめて一夜。恋愛談議に華を咲かすのも悪くないだろう。

なんなら今夜限定で、かつての淡い恋心をゲストに招いてやるうか。きつと盛り上がるはずだ。

「何を笑ってるの？」

「え？あ、ああ……ちょ、ちょっとね……」

シトリーは半笑いのオルマを不思議そうに見ていたが、それがなんであるかは、やはりわからず終いだった。

「ねえ、オルマ」

「ん？どうしたんだい？急に暗い顔して」

「……………戦いが終わったら……………」

シトリーは俯いて、一度言い留まろうとしたのだろうか、唇を軽く噛んでから、

「戦いが終わったら、クダイは自分の世界に帰っちゃうん……………だ

よね」

「……まあ、ここはあいつの世界じゃないからね」

「嫌だなあ………」

さりげなく言おうとしたらしいが、涙が先に落ちた。

「シトリー………」

「でも仕方ないよね。もしクダイがこの世界にいてくれても、人間とエルフじゃ寿命が違うし。クダイがおじいちゃんになっても、その頃私はまだ若い。今のオルマくらいだと思う。釣り合わないもん。無理な恋なんだよね」

オルマは迷った。確かに、クダイがこの世界に残ったとしても、エルフであるシトリーとの恋愛は厳しいだろう。諦めさせるのなら、シトリーが悩んでる今かもしれない。

しかし、そんな権利が自分にあるのだろうか？人間とエルフだって恋愛は成立するんじゃないだろうか？

事実、カイムは人間とエルフの間に生まれた子だ。

大人としての意見を述べるのは容易い。でも、それはきつと間違っている。

そうだ。今夜は恋愛談議に華を咲かすと決めたじゃないか。シトリーの恋の行く末はシトリーが決めればいい。どうせ批難する輩も出て来るだろうし、味方になってやらなきゃ“姉貴”とは言えない。

「シトリー、釣り合わないなんて言っちゃダメだよ」

「だって……」

「だってじゃない！」

ビクツとした。怒られたのかと思った。

「いいかい、シトリー？好きならその想いを貫かなきゃダメだ！例え誰が何て言おうと自分の気持ちを大切にしな！」

「う、うん」

「例え……クダイが帰ってしまうとしても、その日まで好きでいなきゃ、後で後悔するよ！」

自分もそうだったから。シトリーにはそうさせたくない。

オルマの剣幕に、いささか気圧されたシトリーだったが、真剣に答えてくれたことに嬉しかった。

「うん。そうだね。クダイのこと好きな気持ちは、何があっても変わらないもん！ありがとう、オルマ」

なんだか、うじうじしてたことが馬鹿みたいだ。

たった二人のお茶会は、シトリーに自信と勇気を与えた。

終わる時のことなど、考える必要はない。未来なんて、一秒一秒の繋ぎ合わせでしかないのだから。

思い描く明日に行けるよう、今は強く生きたい。

「……………フフフ。居ましたわ。エルフの少女」

東屋を見下ろすセルビシエ。彼女もまた思い描く明日の為に生きている。

何かを掴むような仕草で両手を夜空に翳すと、辺りが凍り始める。

「全ては……ヴァルゼ・アーク様の為に」

第六十六章 夜の訪問者

お茶会もお開きになろうという頃、オルマとシトリーは異変を感じた。

異変はそれとすぐわかるものだった。

辺りが凍りついて行き、昼間の暑さが残る涼しさが、一瞬にしてひんやりとするだけの空間に変わった。

「オルマ」

「わかってる。やれやれだね。“また” ゆっくり休む暇もないのかい」

異様な空間に異様な気配。まるで幽霊のように闇からいである。

「ごきげんよう。綺麗な月夜のお茶会。わたくしも交せて頂けませんかでしょうか？」

お茶を濁すような笑顔は、本来の美貌を疑わせる。

「セルビシエー！」

シトリーは後ずさった拍子に、カップが肘に当たり落ちて音を立て割れた。

「ここにいたのが“貴女”でよかったですわ。輪廻の塔での借りがありますもの。ねえ？ エルフの王女様」

黒いボンテージドレスの腰に下がる鞭を手取る。

地面にだらし無く垂れる鞭は、獲物に飢えた蛇のよう。

「何しに来たの？」

シトリーを庇うように、オルマは一步前に出て言った。

「その王女様を魔界へ招待しようと思ひまして」

「保護者付きなら考えないでもないけど？」

フンと鼻を鳴らして童子切りを抜こうと、慣れた風に手を腰に持ていつてひやりとした。

掴もうとしたモノが無い。

セルビシエから目を離さず、もう一度だけ確かめる。

「……………」

やはり無い。うつかりしていた。おそらく部屋に置きっぱなしだ。

最悪なことに、セルビシエに気付かれてしまった。

「おやまあ。なんと情けないお姿でございましょう」

オルマは「チッ」と舌打ちした。そうするしか他に不甲斐なさを叱責する術がなかった。

「私が魔法で」

状況を把握し、シトリーが申し出るも、

「セルビシエの狙いはなぜかアンタだ。アンタに戦わせるわけには

いけないよ」

オルマは、拳を握り肉弾戦を覚悟しながらも、

「意気揚々と出て来たのはいいけど、ここが敵陣真っ只中ってちゃくんと理解してるのかい？」

まだ勝算は十分にある。

騒ぎを聞き付け、クダイ達が来るはずだ。焦る必要はない。

どんな風に騒いでやろうか。なんてことまで脳内に浮かぶ余裕がある。

せつかく恋愛談議を咲かそうとした夜だ。“女性”らしく悲鳴の一つも上げてみたい。

そんな堅固なはずの勝算も、

「周りをご覧なさいませ」

そう切り出したセルビシエによって打ち碎かれることになる。

「周り？」

改めて見ると、全てが凍っている。とは言え、不思議なことに滑って足元が不安定になることはない。ひんやりと冷気は感じるも、なんだろっ………氷の世界とは違う。

「これは『クウヒョウクウカイ』と言う魔法だそうです」

「クウヒョウクウカイ？ かつたるそんな名前の魔法だねえ。」

「凍っているのは物質ではなく空間。つまり、わたくし達の居るこ

の空間だけが閉ざされているのです。要するに結界ですわ」

「な〜るほど」

助けは呼んでも来ない。そういうことになる。

「オルマ」

「ダメだって。アンタはおとなしくしてて」

シトリーを名指しで……………なんだか嫌な予感がする。

こんな時の嫌な予感というのは、大抵当たるもの。

「邪魔をするなら、まずは貴女からということになりますわよ?」

嫌らしく笑う。セルビシエの絶対の自信が伺える。

「シトリーを連れて行くのなら、最低限あたしは倒すことだね」

「ウフフ。もともとそのつもりですッ!」

鞭が視認出来ない速さでオルマの首に絡まる。

「うぐっ……………」

「オルマ!」

助けようとしたシトリーを、別の鞭が飛んで来て身体を拘束された。

「あらあら。こんなに簡単に事が運ぶなんて。ヴァルゼ・アーク様

もきつとお喜びになりますわ」

醜い笑顔の次は、まるで乙女のように愛らしい笑顔を見せる。

「シ…………シトリー…………」

僅か先のシトリーに触れようとするも、ギュッと鞭を絞められ妨げられる。

「かはっ…………ぐっ…………」

「セルビシエ！お願いやめて！オルマが……………オルマが死んじゃう！！」

容赦なく絞められるオルマの首から、軋み音が聞こえる。

「ウフフ。苦悶の表情が堪りませんもの。やめられるものですか」

「なんて女！腐ってるわ！心が腐ってる！」

「あーっはっはっはっはっ！なんとでもおっしゃいなさいな。貴女達の命なんて、わたくしの玩具程度にもなりませんし、遊んでもらえるだけでも感謝してもらいたいですわ！」

セルビシエの言葉にブチ切れた。

「玩具？だったらあなたはなんなのよ？！二重人格女！！」

「二重人格？わたくしが？」

「黒仮面だっけ？物好きもいとこよ！女の趣味悪すぎ！」

「な……………ッ！」

精神的ダメージを与えるつもりだった。身動きが出来ない以上、魔法の発動も困難。だから怯ませるだけだった。

だが浅知恵過ぎる。触れてはいけないものに触れた報いは、自らを犠牲にすることになる。

「わたくしの侮辱ならまだしも、ヴァルゼ・アーク様の侮辱は許しませんわ！」

グイツと身体ごと引っ張られ、何気なく立っていた大木に叩き付けられる。

あの細腕のどこにこんな力があるのか謎ではあるが、今は謎解きに明け暮れる暇はない。

「これから貴女はヴァルゼ・アーク様にお会いになるのですから、くれぐれも口の聞き方には気品を持って頂きたいですわね」

乙女のような笑みも、醜い笑顔もなく、きつく睨む。

「そうですね。今からレッスン致しましょう。“帝王学”の……………ね」

シトリーはオルマを見る。だが、意識を失うか失わないかの境目にいるようだった。

甘く見ていた。輪廻の塔での勝利はまぐれでしかなかったのに。オルマが童子切りを有していたとしても、変わらない状況だったろう。

セルビシエはその美しい容姿とは別に、魔族の四天王。実力など足元にも及ばない。

（クダイ……………助けて……………）

心の叫びは、堪えられず声になる。

「クダーーーーー……………イッッ……………！」

直後。セルビシエの結界に異変が起きる。

凍ってるはずの空間が裂け、赤い光が射す。

「そんな……………結界が……………？」

セルビシエの目に飛び込んで来たのは……………

「安っぽい結界張って何やってんのかと思えば」

その中に炎を揺らめかせた真紅の鎧を着て、赤い刃の剣を肩に乗せた、

「お前は……………不死鳥！」

羽竜だった。

「女同士の喧嘩にはあんまり首を突っ込みたくねーんだけど……………」

スチャツと音を立て剣を下ろす。

「そうも言ってらんねーようだな」

未だ生かさず殺さず首を絞められているオルマ、涙を流し泣いているシトリー。

クダイも連れて来るべきだったかとも思ったが、言っても始まらない。

「さあて、不法侵入でお仕置きだ」

第六十七章 夷険一節

完璧だと思っていた結界に、突如侵入して来た羽竜。

「そんな……どうやって入って来たっていうの……？この結界は……」

「ヴァルゼ・アークから教わったんだろ？」

「……」

「空間を切り取って凍らせる。切り取って無くなった空間には仮想空間をはめてカバー。だから結界の存在には誰も気がつかない」

「なら……なぜ貴方は気付いたの……？」

「付き合いが長いんでね。アイツとは。アイツの手が加わるものは直感が働くのさ」

そんな単純な理由で強固な結界が……いや、強固だと信じたものが破綻するというのか？

セルビシエにとって黒仮面は絶対。それを揺るがす不死鳥、羽竜。

関わってはいけないと、それこそ直感が働く。

「俺は例え女でも、敵である以上は手加減しない」

左手に握る赤い刃の剣。照準は既にセルビシエの心臓に合わさっている。

「言ってくれますね。納得です。あの方が一目置くだけのことはあります」

黒仮面に着いて行くということは、羽竜とも関わって行かなければならないということ。

しかしそれは先の話。

羽竜が剣を頭の脇で構える。

「動かないで下さい。この女の首を折りますよ?」

人質にされたオルマを見て、

「その前にお前を殺す」

羽竜の目つきが鋭くなる。

見た目には有利な立場に立っているはずのセルビシエなのに、追い詰められている。

「行くぜ!」

羽竜は駆け出した。

「くっつ……」

呻いて、セルビシエはオルマを“投げ付けた”。

セルビシエの鞭から解放されたオルマは、羽竜に受け止められる。

同時に羽竜の動きをも止めた。

「この娘さえ手に入ればここには用は無い！」

シトリーを抱き抱え、セルビシエは結界を解くと、そのまま何事もなかったかのように消え去る。

「待て！」

慌てて剣を投げたが、セルビシエの残像を擦り抜け東屋の石柱に刺さる。

「くそっ！」

ぬかった。鞭のポテンシャルを計れなかった。

人間を軽々と投げ付けるほど鞭を操るとは。

「うっ………シ……シトリー………げほっ、げほっ」

「大丈夫か？しっかりしろ！」

「シトリー………は………？」

「………すまない。連れて行かれた」

羽竜の言葉を聞き終えることなく、オルマは意識を失った。

「止めるなっ！！」

羽竜が一連の出来事をみんなに話すと、クダイは誰よりも先に助けに行くと言い出した。

「落ち着いて下さい。気持ちみんな同じなんです」

頭に血を昇らせた首を、なんとか落ち着かせようと、ダンタリオンは言った。

「落ち着けるわけじゃないか！」

手を伸ばしたダンタリオンを睨み付け、腕を振り払う。

「クダイ！シトリーを助けたいと思うなら冷静になれ！」

シャクスが黙らせるように声を張り上げると、悔し涙を流しクダイは俯いた。

結局、一人では助けに行けない。行きたくとも魔界の場所がわからないのだ。

「羽竜！どうしてシトリーを助けてくれなかったの？！」

責めつけるシメリーから視線を逸らし、羽竜はただ黙っていた。

その態度が気に入らなかったシメリーは、

「不死鳥なんて大袈裟な肩書あるくせに！何にも役に立たないじゃ

ない！」

と、罵声した。

それでも羽竜は何も言わない。決して羽竜に落ち度があったわけではないのだが、冷静さを欠いている二人に話す言い訳もないのだ。

「よせよ、シメリー。羽竜は俺達が気付かなかった結界に気付いてくれたんだ。シトリーは連れ去られたけど、オルマの命は救われた。羽竜が気付かなかつたら、オルマだって殺られてたかもしれないんだ」

カймも羽竜に責任は無いと思っている。むしろ感謝すべきなのだ。羽竜がいなければ、シトリーが連れ去られたことすら気付かないままだったろう。

やり場のない怒りを雲散するのは感心しなかった。

「シメリー、羽竜を責めてもシトリーは戻らない。感情を抑えろ」

そうケファノスが言った時、アイニが入って来た。

「お母様！」

シメリーの堪え切れない感情は、アイニに引き寄せられていくようだったが、

パシンッ！

シメリーの頬をアイニがぶった。

その行動の真意を誰も理解出来ず、嫌な空気が流れた。

「お……お母様……？」

「シメリー、貴女は決意と覚悟を持って国を出たのではないのですか？涙を拭きなさい！泣いてもシトリーは戻って来ません！」

その言葉は母親としてのものではなく、エルフの国を守る王としての言葉。

シメリーは仮にも次期王位継承権を持つ。それは飽くまでシトリーの次の候補なのだが、継承権を持つ以上は、権利が無くなるまで“らしく”振る舞わなければならない。

万が一、シトリーに何かあった場合に備える義務がある。

「アイ二様、いくらなんでも……」

カイクがシメリーを庇おうとすると、

「うっん。いいの。ありがとう」

カイクの袖を引っ張り、シメリーは自分の身分を噛み締めた。

「ごめんなさい。お母様。こんな時だからこそ、冷静にいたるべきなんだよね」

涙を拭いて、改めて羽竜の方を向き、

「私、酷いこと言ったね。ごめんなさい」

「……………別にいいよ。気にしてないから」

軽く流し、話題を振るなど言わんばかりに視線を合わせることを拒んだ。

「ケファノス、事態を知った各国の王達が会議を開くそうだ」

アイニは気丈に振る舞ってはいるが、内心はシトリーを案じて穏やかではないはずだ。

「わかった」

ケファノスは、早くシメリーとカイムの前からアイニを遠ざけてやるうと、一言返事で行こうとする。

「ケファノス！」

名前を呼んだ声はクダイのものだと気付いた。

それはケファノスだけには“味方”でいてほしいという合図。肉体を取り戻してから、政治的な活動に勤しむようにしか見えないケファノス。これからの魔族のことを考えれば当然なのだろうが、クダイにとってはケファノスならわかってくれると信じているのだ。

しかし、ケファノスはクダイに背を向けたまま、

「指示が出るまで仮眠を取れ。それも大切なことだ」

そのまま会議へと向かった。

「俺達も仮眠を取ろう」

カイムが言う。

「そうですね。シスター、すみませんがオルマをお願いします」

ダンタリオンも理解を示し、

「わがった。任せてける」

カカベルも自分に出来ることならと了承した。

「クダイ、ケファノスの言った通りだ。今は身体を……………」

シャクスが言いかけると、

「みんな……………最低だよ」

クダイは怒りをあらわにすることもなく、一人どこかへ行つた。

「どうすんだ？」

「ほつとけ。いつものことだ」

カームはクダイを心配したが、聖騎士としての性か、シャクスはすぐに訪れるだろう戦いに備えることしか頭になかった。

それぞれが、それぞれのことをやる為に散る。

当たり前のことなのだが、それを冷めた目で見ていた者が一人。

「……………」

夷険一節。正しいことのはずなのに、その光が見えない。

羽竜は、そこに残存する空気に違和感を感じていた。

第六十八章 リスキ―

仮眠を取れ？ふざけるな！

クダイは心の中で叫んでいた。

シトリーとオルマがお茶会をしていた東屋。そわそわする気持ち、僅かに残るシトリーの気配を探して徨っている。

「仲間を恨むなよ」

話し掛けて来たのは羽竜だった。

「なんで……………僕がみんなを恨むんだよ」

「そういう顔してたから言っただけだ」

すぐごとやって来ると、東屋に昇る階段に腰を下ろした。

「この世界にはこの世界のルール……………常識がある。お前の仲間は地位の高い奴らばかりか？効率的に物事を考えるのは仕方ないさ」

魔王、賢者、聖騎士、王女。ケファノス達の身分は誰が見ても高い。クダイの抱える不満を羽竜はわかっていた。

「君に何がわかるんだよ。シトリーは僕にとって大事な人だ。……………初恋なんだ」

クダイも羽竜の横に腰を下ろす。

「眠れるわけじゃないじゃないか」

膝に顔を埋める。

「そんなに好きなのか？」

「…………好きだよ。シトリーが笑う度、僕の胸が熱くなるんだ。シトリーがはしゃいでると、僕も楽しくなる」

「…………そうか。悪かったな」

「羽竜が謝ることじゃないよ」

でも、羽竜は申し訳ない気持ちになる。

ヴァルゼ・アークの影がちらつくと、知らず知らず浮足立つ。倒すべき相手だと頭ではわかっているのに、何かを期待している自分がいる。

セルビシエからシトリーを救おうと思えば、それは可能だったはずなのだ。

「ねえ、羽竜」

「あん？」

「食事のとき、いろんな世界のこと話してたけど、僕みたいに他の世界から来た奴とかいた？」

「…………いや。いなかったな。俺が知る限りはな」

「そっか……………」

「なんでそんなこと聞くんのだ？」

「僕、この世界に来て、いつの間にか帰りたくないって思ってる。でも、半分は帰るべきなんだろうって思っただ。もし帰ってしまったら、二度とみんなには会えない。デイメンジョンバルブは故意に作れるものじゃないみたいだし。そう考えると、自分がどうすればいいのかわからない。羽竜みたいに自由に世界を行き来出来るわけじゃないから」

「世界つてのは大きな時間の中に点在してるんだ。一度行ったことがあっても、また行くことが出来る可能性はほとんどゼロだよ。上手く説明出来ないけど、ヴァルゼ・アークがそんなこと言ってた。俺がアイツを追って出会える可能性だって低いんだ。もっとも、アイツは神様だからな、俺よりは確かな確率で好きな世界に行けるみたいだけど」

「……………黒仮面……………ヴァルゼ・アークが言った通り、運命が決まってるのなら、これも運命なのかな……………」

「ケツ。んなこと信じてどーすんだよ。そりゃあ、受け入れ難い現実だってあるだろうけど、それとこれとは別だ。じゃなきゃ生きる意味なんて無くなっちゃう」

意外なところに味方がいてくれた。それがクダイにはありがたかった。

「……………僕はいつも何も出来ない。戦いになっても誰かに助けられ、好きな女の子さえ救いに行けない。ジャステイスソードなんて大層な剣を持つてるのに、何一つ満足なこと出来ないなんて……………」

この世界では、何かを成そうと決意すると、必ず邪魔をされる。それが必然にしろ偶然にしろ、クダイには耐えられなかった。

だから、シトリーだけは早く助けてやりたい。それだけは人の助けがあってもいい。

なのに今回に限って“誰も”そうしないことに腹が立つ。

「シトリーに何かあったら………僕は………」

考えたくもない。何もないと信じていたい。

「……………覚悟はあるか？」

すると、そんなクダイを見て不意に羽竜が言った。

「羽竜？」

「行くんだろ？お姫様を助けに」

羽竜は立ち上がり二、三步前に出る。

「好きな女がピンチなんだ。じつとなんてしてられないよな」

フツ。と笑った。

暗い顔をしていたクダイだが、羽竜の微笑みにつられたように立ち上がる。

「あつたり前だ！じつとしてられるわけないだろ」

「なら決まりだ」

羽竜は六枚の炎翼を広げ、クダイの手を取った。

「場所、わかるの？」

クダイが聞くと、

「人間とは違う気配だ。そこに向かって飛べばいい」

ふわっと浮き、

「飛ばすぜ！」

「オッケー！」

夜の明けない空へ飛び立った。

「ご苦労だった」

黒仮面がそう言うと、セルビシエは思わず微笑んだ。

どんな些細な言葉でも、彼女にとっては大切な褒美なのだ。

「ヴァルゼ・アーク様、バランスブレイカーはいかが致しましょう

？ご命令下されば、すぐにでも奪って参りますが？」

もっと手柄を上げたい。もっと信頼を得たい。

「焦燥だ。そこまでは俺達の仕事じゃない」

「し、しかし……！」

「俺“達”は傍観者だ。この戦いの行く末を、ただ見守るだけでいい」

「それではわたくしは満足致しません！もっと働きたいのです！」

そうしてないと不安になるのだ。

そんな想いを黒仮面は理解している。

「お前にはこれからいくらでも働いてもらっさ。いい子だから言うことを聞いてくれ」

いい子だから……子供扱いされることにさえ心地良さを覚える。

「……………承知しました」

今この至福が、これからも続いてほしい。

こことは違う別の世界で、自分だけはいつまでも黒仮面と一緒にいようと誓う。

「セルビシエ」

「はい」

「戦いは佳境を迎えた。サン・ジェルマンの目的もバランスブレイカーを手に入れることで完遂される。だが、俺の目的は無限さえ操る力を手にすること。時間がどうなろうと知ったことではない。終わらせるのなら、俺がなにもかも終わらせる」

「恐れながら、その時期は明確に？」

「ヨウヘイは今、四つの時間構築魔法具によって一つの道具となっている。奴の役割は、時間の断片たる屍人^{かばねひと}をダークエネルギーに変えること。つまりフィルタリングだ。お前が連れて来たエルフの王女、彼女には更に多くの屍人を集める為の集束機器になってもらう。最終的には有り余るダークエネルギーを時間構築魔法具^{ツール}に与え、正の力を失くした負の時間を作り、一気にバランスブレイカーで破壊する。そのバランスブレイカーを使用する瞬間。それが“時期”だ」

ここまで説明するのだから、そう遠くないうちにそれは実行される。

「それを実行することによって、サン・ジェルマンの言う時間の終着が起きるのですか？」

「奴の理論が正しければの話だ」

黒仮面はセルビシエに近付いて、彼女の髪を指先で遊ぶ。

「まあ黙って見てようじゃないか。どっちに転んでも、全ては俺の手の中だ」

その充ちる自信に、セルビシエは更に心を奪われてゆくのであった。

第六十九章 T O C R Y & a m p ; M A X

「お前も好きだな。またあの男のところに行ってたのかよ。随分ご修身なことで」

「エンテロ……………」

魔王城の長い渡り廊下。セルビシエが一人歩いていると声をかけられた。

今となつては、アスペルギルスにもエンテロにも会いたくない。どうせあれこれ嫌味を言われるだけだろうし。

ましてや、バチルスが復活した以上、気ままというわけにはいなくなっている。

いっそのこと、四天王の肩書など捨ててもいいのだ。

黒仮面が今しばらく二重スパイを演じろと言うのだから、それも叶わない。

「どうせ奴ら、將軍の言つたことなんて無視してるんだろ？」

「さあ？どうでございましょう？」

「とぼけるのか？」

「わかつて聞いているのでしょうか？でしたら敢えてわたくしが申し上げることはありません」

「……………わかんねーな。あの男に惚れたというのはまだ納得する。だからと言って、それだけの理由で魔族を裏切るのか？」

「それはお互い様ではなくて？」

「何？」

「貴方も、アスペルギルスも、シユードモナスも、そしてバチルス將軍も。みんなケファノス様を裏切ったではありませんか。わたくしだけが責められるのは心外でなりませんよ？」

演じろと言われたはずが、つい本音を剥き出す。

「將軍はまだ気付いていない。今ならまだ……………」

「四天王としての責任は果たします。人間とエルフに引導を渡す役目を」

「だが、そううまくは行かない。そう思ってたんだろ」

「魔族は地上を。サン・ジェルマンは時間軸の融合。人間とエルフはそれらを阻止する為。三者三様の夢物語を実現しようとしてるのです。齒車一つ、小石が挟まり噛み違えでもすれば、何が起きるかわからない。それだけは誰にもわかり得ないこと」

「……………なるほどな。黒仮面はサン・ジェルマンの客人だなんて言ってたが、奴は奴の目的があるんだな？」

「言ったでしょう？ 齒車一つ……………そこに小石が挟まることもあると」

「後悔するぞ」

「貴方にとっての後悔が、わたくしの後悔になるとは限りませんわ」
凜とした瞳は、それ以上の言葉をエンテロから奪った。

「エンテロ、貴方も少し考えなさいな。自分自身というものを」

捨て台詞を吐いて去ろうとした時、二人の前に瞬間的にアスペルギルスが現れる。

「二人揃ってたか」

「どうした？」

「客だ」

「客？」

「ああ。不死鳥とジャスティスソードの少年だ」

アスペルギルスが言うと、それまで不機嫌だったエンテロがしたり顔で食いついた

「へえ。二人でかよ？」

「うむ。近くに仲間がいる気配はない」

たった二人の少年が来た理由などアスペルギルスが知るわけもないのだが、エンテロはセルビシエを睨み、

「何かしやがったな？」

「エルフの王女様をさらって来ただけよ」

隠しても無駄だと悟り、あっさりと白状する。

「セルビシエ……………」

アスペルギルスが何か言おうとしたが、何を言おうとしてるかもセルビシエにはわかってる。

どうせエンテロと同じことを言うに決まっているのだ。わざわざ復唱させるまでもなく、

「文句は言わせませんことよ。わたくしにはわたくしの道があります。貴方達にも、バチルス將軍にも従うつもりはありません」

決意表明は、エンテロにそうしたように、アスペルギルスからも言葉を奪う。

「何を言っても無駄だぜ。こいつはもう四天王でも魔族でもない。ただの女だ」

エンテロにそう言われると、セルビシエは微笑し、

「光荣ですわ」

言った。

「……………セルビシエ、そこまで決意が堅いのなら我々が言うことは何もない。だが、きっぱり宣言するまでは……………わかってるな？」

仕事はしてもらう。セルビシエもその気持ちに変わりはない。

“まだ”魔族の一員なのだから。

「果たして、不死鳥とジャスティスソードの少年は、ここまで辿り着けるでしょうか？」

自分が動く最低条件を提示した。

それは黒仮面の命にしか従いたくないセルビシエには、取って置きの実にうまい条件だった。

「ここまで辿り着けないなら、それに越したことはない。だが……」

アスペルギルスが見た窓の外には、赤く燃え上がる炎と金色のオーロラのように緩やかな光。

投じられようとしている小石は運命か奇跡か。

ジャスティスソードに関わった者達が不自然に呑み込まれ始めた。

それはまるで、終末に見る幻想。

第七十章 命を賭ける

不思議な現象が起きた。

羽竜に連れられ来た魔族の住まう国。通称、魔界。

そこへ来て、輪廻の塔にいたほどの数の魔族に出迎えられた。

羽竜は、自身がオーラと呼ぶ気配を立ち上らせて、左利きなのか剣を抜く。

それに習うかのように、クダイもジャスティスソードを抜くと、自身の身体から金色のオーラが立ち上った。

「こんなの初めてだ……………」

「お前の力が解放されてるんだ。クダイ」

「僕の手……………」

ジャスティスソードをぐつと強く握ると、

「キイイイイン」

鳴った。聴覚が捉えるような音ではなく、脳に直接伝わるような音。以前より少し大きく。

「いい剣だな。ジャスティスソードって」

羽竜はジャスティスソードの輝きに、とてつもないポテンシャルの片鱗を見る。

「羽竜だって。赤い刃なんて綺麗じゃないか」

「…………こいつはトランスミグレーションって名前だ」

「輪廻転生…………だよね？」

「不死鳥って呼ばれるようになったのとは、まるで関係無い時期に手に入れたんだ。でも、今思えば必然だったのかもって思う時がある」

しかし、それを認めればヴァルゼ・アークの言う、「運命は既に決まっている」という概念を認めたことになる。

だから時に屈服しかける。

「必然だったとしても、サン・ジェルマンや黒仮面が言う、未来が既に決まっているってのとは違う気がする」

羽竜の心を読んだかのようにクダイは言った。

「…………ああ。そうだな。運命だとか未来だとか、そんなのは俺達が築いて行くもんだ。だから……………」

赤い刃の剣…………トランスミグレーションがジャスティスソードに共鳴する。

羽竜とクダイは顔を見合わせ、

「負けるわけにはいかないっ！……！」

同時に叫び駆け出す。

「お姫様助けるまでへばるなよっ！クダイ！」

「僕のことは大丈夫！これがあるから！」

そう言うと、クダイは目を閉じた。

敵は目の前に迫っている。羽竜は横目でクダイを見た。

「僕は目を閉じると、敵の動きや自分が動くべき軌道が見えるんだ！」

羽竜より先に行く。自分の能力を理解してもらおう為に。

目を閉じているクダイは、視界が無いとは思えぬ機敏な動作で敵の中を突き抜けて行く。

「……………へえ、いい能力持ってんじゃないか」

やる気をそそられ、口角を上げる。

そして、

「なら俺のも見せてやる！」

トランスミグレーションの刃を地面にこすりつけ、一気に振り上げる。

「ディープ・エンド・エクスプロージョン！！」

火柱が地面を裂きながら、前方に向かって突き抜けた。

「やるじゃん！羽竜！」

また目を閉じて、無眼の構えに着く。

羽竜がいると、なんでも出来そうな気分になるから不思議だ。
クダイは、いつになくジャスティスソードから力を感じる。
手の平の毛細血管が、ジャスティスソードの熱で膨脹するよう。
シトリーへの恋心が、より高い次元への戦士へと成長させる。

（シトリー………待つてて！今行くからね！）

恐いものなど、何も無かった。

その頃ザンボル国では、クダイと羽竜がいなくなったことで大騒ぎになっていた。

「たった二人で行ったって言うのか？」

カイムは特定せず、その場の全員……オルマを除いたいつものメンバーに言った。

「だろうな。夜遊びをする心境でもないだろうし」

シャクスは、エルガム国王から再度受け取った、一度は売った聖騎士の鎧を纏いながら答えた。

「俺が連れ戻す」

最後にスカイカリバーを腰に携えて、シャクスはカймを見た。

「連れ戻すって……なら俺も行く」

「いや。カйм、お前はここで戦いの準備を手伝ってくれ」

「シャクス、まさか一人で行く気じゃ……」

「魔界まで馬に乗ればたいした距離じゃない。あの羽竜って奴は、強いだろうから問題はないが、クダイはそうはいかない。せめてクダイだけでも連れ戻す」

聞き分けなければ力ずくで。クダイ相手なら苦勞はしない。

「困りましたねえ。戦いはすぐに始まるというのに」

気持ちはわかるが、クダイ達の勝手な行動は士気に関わる。

ダンタリオンの表情も、曇るしかなかった。

「だ、だども、クダイさの気持ちはわかってやってける！ シトリーさが心配で、居ても立ってもいらねかったにちげねべ！」

「そつだよ！ クダイのこと悪く言う前に、早く連れ戻して来て！」

カカベルとシメリーは、クダイと歳が近いせいか、どうしても感情移入させてしまう。

「余も行こう」

ケファノスがシャクスに言うと、

「ダメだ。お前が行けば面倒なことに成り兼ねない。悪いがここで待っていてくれ」

突っぱねられた。

そしてシャクスは、

「すぐ戻る」

みんなに言い、発とうと馬に乗ろうとした時だった。

「た、大変でございます！」

ケファノス達の世話係を仰せ付けられている、ザンボルの衛兵が大声を上げて来た。

「どうしましたか？」

ハア、ハアと息を切らす衛兵に、ダンタリオンは落ち着き払い言った。

「オ、オルマ様が……」

口走った瞬間、

「オルマがどうかしたのか?!」

シャクスが顔色を変えた。

言い方からしていい話でないことは確かだ。

「はい。オルマ様が、へ、部屋にいないのでございます!」

「な……んだと……」

まさかとは思うが、シャクスは衛兵の胸倉を乱暴に掴み上げる。

「ちゃんと城の中を探したのか?!」

聞かずともわかっている。城中を探してもいなかったから慌てているのだ。それだけではなく、不安を的中させる事実もあるからだろう。

「大勢で探してはいますが、馬が一頭いなくなっているようで……」

シャクスの剣幕に尻込みしながら、とどめを刺す。

「シャクス!」

ダンタリオンの中では確信に変わった。

オルマは、シトリーを救いに魔界へ行つたのだ。

きつと、ダイと羽竜のことは知らないだろう。

「さっきまで寝てたのに……バカが!」

重い鎧をもつとせず、シャクスは馬に跨^{また}がる。

そして何も言わずに馬を走らせ行ってしまった。

「頼みましたよ。シャクス」

今はシャクスに任せるしかない。

ダンタリオンは祈った。どうか、シトリーもクダイも、羽竜もオルマも無事でいてくれと。

サン・ジェルマンとの戦いが、命を賭けであることは誰もが認識している。

なのに……違うのだ。

命を賭ける方向が修正されない。

そう、輪廻の塔から帰ってから少しずつ、それでも目に見えるくらいわかりやすく、未来と言おうか……進む方向がズレている。行こうとしている未来へは行けないのではないか？

ダンタリオンはクダイ達の無事を祈る傍らで、自分に芽生えた不安と不信が気まぐれであればいいと願っていた。

第七十一章 幻想を糧にする男

ジャステイスソードとトランスミグレーションは、対向して来る敵を瞬殺。その威力は各々の存在感を誇示しているようだった。どちらも“普通”の剣ではない。当然と言えば当然のことだろう。

ただ、二つには違いがある。

トランスミグレーションは羽竜との疎通がある。

しかし、ジャステイスソードはクダイを導いているように思えた。

それはクダイの実力が足りないのとは違う。“そういう”剣なのだ。

使い手に災いをもたらすと言われたジャステイスソード。今は意志を持ち、クダイを……

「よう！クダイ！このままじゃキリがねー！ザコはほつといて城に乗り込むぞ！」

「オツケー！わかったよ！」

目的はシトリの救出。それさえ果たせば退却すればいい。

二人は、ジャステイスソードとトランスミグレーションの刃を重ねる。すると、金と赤の光がフラッシュして辺り一面を吹っ飛ばす。

それは互いに無意識の行動で、事前に練習も話し合うこともしていない。言うなれば、ある種の選ばれし人間だけが持ち得る直感。

障害が無くなり、一直線に魔王城の門を抜け城内へ入り込んで、威圧感たっぷりの馬鹿でかい扉を閉めた。

「これで入っては来ないだろ」

羽竜にはわかる。あの手のザコが城内に入ることはないと。

「シトリー……………」

クダイは行き先を決めようと、城内を見渡した。

魔王の住まう場所だけあって、想像を裏切らない暗沌とした雰囲気漂う。

これがケファノスの趣味かどうかは置いとくとして、よくわからない石像だとか、誰が使うんだと聞きたくなるくらい大きな剣と槍。

奥まで延びた広い廊下には、赤い絨毯が敷かれている。

「とりあえずは一本道みたいだな」

静まるクダイに代わって、羽竜がチラツと見ながら言った。

「ここにシトリーがいる」

ここに来て身体が震える。恐怖感からなのか、武者震いなのか、クダイにはそれを知るほどの経験はない。

「ああ。だけど、ここにはヴァルゼ・アークがいる。お前らの宿敵サン・ジェルマンもだ」

シトリーを探せたとしても、生きて帰れる保証はない。それに、二人だけで戦い切ることも難しい。

「びくびくすんなよ。俺もいる」

頼りになる笑顔を羽竜が見せると、

「び、びくびくなんてしてないよ！」

クダイは頼りなく慌てた。

たった二人で来たのは勇み足だったかもと、思わないわけでもないのだが、隣で真つ赤な鎧に身を包む少年が曖昧にしてしまう。

考えてみれば、羽竜は単身でヴァルゼ・アークを追っている。

どんな世界に行こうとも常に一人なのだ。

だから“どんな”状況でも自分が崩れない。

「こっからが本番だ。もたもたするな！」

羽竜はまるで自分事のように、赤い絨毯の上を走る。

「ちょ、ちよつと、羽竜ーっ！！！」

未来を望むのはクダイか、それともジャスティスソードか。

「順調みたいだな」

黒仮面は頭上に浮かぶヨウヘイを見てから、サン・ジェルマンに言った。

ヨウヘイはサン・ジェルマンによって“器”^{かはねびと}とされてしまっている。今はただ、屍人^{かはねびと}を集め、フィルタリングしてダークエネルギーに変えているだけの存在。

そして、セルビシエがさらって来たシトリーは、その下ではリヨウヘイと同じように道具にされていた。

「流石はエルフの王族。魔力が尋常じゃない。おかげで屍人^{かはねびと}を集める時間が短縮出来る」

サン・ジェルマンは満足そうだった。

必要なダークエネルギーがどれだけの量を計るには、時間^ツ構築魔法具に供給すればわかるらしい。

黒仮面はそんなサン・ジェルマンを冷ややかに、

「こんなんで時間が本当に終着するのか？」

「何を今更。時間とは常に“正”の方向へ流れる。屍人^{かはねびと}は時間の断片。言わば排泄のようなもの。その断片が残す力を今ある四つの時間^{ツル}構築魔法具に与えてやると、本来は無い力が作用し時間は“負”の性質に変わるだろう。そして、流れの無くなった“ゼロ”の状態の時、時間軸は融合を始め、そこにバランスブレーカーをブチ込んでやれば……………」

醜い笑顔を見せた。それがサン・ジェルマンの本性。

おのが目的の為ならば、少年少女の命までも糧にする。

「ここまで来たら好きにやればいい。俺は成り行きを見守るだけだ」

「よいのだな？私の目的が達成されるということは、全ての次元が消滅し、時間の無い空間だけが残るということだ。つまり……………」

「それこそ今更だろう。終末を望んだから、お前に宇宙の仕組みを教えたのだ」

「ならば遠慮なく進めさせてもらおう」

黒仮面への気遣いは片鱗も見せなくなった。

黒仮面はフンと鼻で笑い、踵を返し、

「そうだ。羽竜とクダイがやって来たらしいぞ」

伝える。

「不死鳥とクダイが？」

何をしに来たとでも言いたいのだろうか？そんな目つきをしている。

「そのこのエルフのお姫様を助けに来たんだろ」

「アスペルギルス達は？」

こんな時だけ頼るのかと思ったが、利用出来るものは利用する。その精神は自分と変わらない。

「城に侵入されたとかで騒いでいた。クク…………アスペルギルス達にあの二人が止められるとは思えんがな」

「ここまで来ると？」

「若者をナメてかからないことだ。俺達にはない情熱がある」

「情熱……ふつ、そんなもので私を止めることは出来ん。来るのなら私自ら戦うまでだ」

「サン・ジェルマン、若さとは脅威だ。その若さにいつも俺達は足をすくわれる」

サン・ジェルマンは自分の若かりし頃を思い出した。

あの頃、周りの大人達が口にする常識だとか自信など、なんの障害にもならなかった。

それを知りながら、今は立場が逆なのだ。これも全て時間が存在するからだ。

「少しだけ、俺もあいつらと遊ぼうかと思っている。それまで対策を練ることだな」

黒仮面は妖気さえ漂う部屋を出る。

（終末に見る幻想など、なんの興味もない。俺は……）

窓から見える月はフルムーン。

黒仮面はその仮面を外した。

そこには悲愴に犯された瞳がある。

運命を憂い、人の心さえ嘆く瞳。

「俺は、幻想さえも糧にする」

第七十二章 終末への時間制限解除（タイムリミット）

城内は虫の息一つしないほど静まり返っていた。聞こえるのはクダイと羽竜の足音だけ。

だが、それはある結論でもある。

ザコの出迎えがないということは、出て来る敵は決まっているということ。

それは的中する。

「たった二人で来るとは、思い切った行動に踏み切ったな」

黒光りする漆黒の鎧。黒い仮面。

「ヴァルゼ・アーク！」

「自信に満ちるのは遅いことだが、少々過剰になってるんじゃないか……羽竜」

「ケツ。テメーに言われたくねー。なんでもかんでも知ってるようなことばっか言う奴によ」

「フフ。まあ、そのくらいの方がお前らしい。自信の無いお前と遊んでも面白くないからな」

「ホンっとにムカつく野郎だぜ」

黒仮面は、羽竜からクダイに視線を移す。

仮面の奥の瞳がギラリと鋭く光ったような気がして、一瞬ドキッとする。

「クダイ」

「は、はい」

名を呼ばれ、素直に反応してしまう。

「ここを真っ直ぐ進んだところに、位相転移の魔法陣を用意しておいた」

「い、位相………転移？」

「シトリーのいる部屋の前まで連れて行ってくれるだろう」

「………なんで………なんであんたがそんなこと………？」

「惚れた女の為に、命を省みずにここまで来た褒美だ。どうせ焚き付けたのは羽竜だろうが」

「ほれ………僕がシトリーに惚れてるって、ななななんでわかるんだ？！」

「なんでと言われてもな………この世界に来たばかりの羽竜が、女を口説き落としたとは考え難い。とすれば、お前しかいないだろう」

「うぐっ」

軽く言い退けられ、言葉をつぐむ。

「さあ、行け。手遅れになる前に」

輪廻の塔でも道を開けてくれた。その時は思惑があつたのだろうと思つた。

でも今は、手を貸してくれてるかのような言い方。シトリーをさらっておきながら、シトリーを救う手助けを用意している。

罠だつたら……？

信用していいものか迷っていると、

「コイツは小細工はしない。信用しても大丈夫だ」

羽竜がそう言った。

「もちろん、俺がしてやるのはそれだけだ。後はお前の手で救うんだ」

黒仮面の言葉に大きく頷く。

「クダイ、死ぬなよ」

「うん。羽竜もね」

足早に奥へ進むクダイの背中を、羽竜と黒仮面はしばし見ていた。

「相変わらず意味のわかんねーことやる奴だぜ。セルビシエって女、お前の手下だろ。さらわせておいて、今度は助け出す手助けかよ」

「…………俺は義理と義務を使い分ける。あの少女をさらつたのは、サン・ジェルマンへの義理だ。クダイの手助けをしたのは、本分じやなかった義理に対する贖罪にすぎん」

「それがわかんねーって言うてんだよ。だったら最初からやらなきゃいいじゃねーか」

「……………フツ。ま、大人には大人の事情があるのさ。そのうちわかるようになる。お前にもな」

ふうっ、と息を吐く。黒仮面は剣の柄を握り、羽竜を見て微笑む。

「何笑ってんだ？ 気持ちわりーな」

「羽竜、どこまで行けば俺達は満たされると思う？」

「あん？」

「後戻りの出来ない戦いに、誰もが翻弄されて行く。この世界の住人も同じだろう。満たされることなく果てるしかない」

「……………何を言うてんだ？」

「この戦いの最後には、きっと何も残らんだろう」

まるで先を知ってる言い方。例え神であろうと、未来を知る術は無いはずだ。

かつて、ヴァルゼ・アークと戦った宇宙の心という場所。そこにはこれから起こるだろう未来があった。

でもそれは、変え得る未来だった。今でも羽竜は信じていない。未来が決まっているなどと。

「そうやってなんでも見透かすのは、あんたの悪い癖だぜ。もし、あんたの言う通りこの戦いの結末に何も残らないってなら、どうし

てクダイの手助けしたんだよ。ほつときやいいじゃねーか。結局、あんた自身が未だに迷ってるんだ。……………帰ってやれよ。新井達のところ。幸せに暮らせるはずだろ」

「わかってないようだから教えてやる。物語というのは、付与する側の一方通行だ。しかし、物語を質を作るのは読み手なんだよ。言動の強弱、描写されない裏の話。全て読み手の想像と解釈があって成り立つ。俺とお前はどこに行こうと読み手にしかなれない。だがな、俺達の取る行動が、その物語の住人にとって奇跡にもなれば、仇にもなる。よかれと思ってしたことが、思いもしない結果を連れて来ることもあるんだ」

黒仮面は剣を抜いた。

「今日の勉強はこれまでだ。約束通り遊んでやる。遊びとは言っても、お前にとって遊びになるとは限らんぞ？」

「あんたの言うことは、いつも遠回りでわかんねーよ。だけどな……………」

羽竜はトランスミグレーションを一振りして構える。

「あんたが弱虫だってことはよくわかる！」

「クク……………幾度も瞳に刻んで来た終末幻想。そこに未来など無いことを、お前も知ってるはずだ。それでも光を求めるのなら……………力で説得することだ！」

たまに……………思ふことがある。

最初はただ倒す為の敵だった。

何度も剣を交え、何度も互いに思想を語り合った。

いつしか、ヴァルゼ・アークという男に惹かれ、それを超えてみたいと思う強い願い。

男として、戦士として、そう願うことは当たり前なのかもしれない。

けれど、そう願った世界で、終末が回避されたことは一度もない。

その願いがこの世界で疼いている。眠ってればいいものを。

この世界に終末が訪れる。すぐに……。

第七十三章 黄金の正義

オルマの視界の先は、魔族の群れ。それを見て、手綱を強く握る。姿勢を低く、小細工無しの強攻突破に出る。

「止まらないでよ……仲間が懸かってるんだ。一秒も無駄にしたいくないの」

白馬はそれに応えるように、力強く加速する。

シトリーを救う為。オルマは自分の命を運命に捧げた。

「不死鳥は黒仮面が相手をしているようですが、ジャスティスソー
ドの少年は見つかりません」

アスペルギルスはバチルスにありのままを報告した。

「たわけがっ！城に侵入を許しておきながら、その行方がわからんだと？全く持って話にならん！エンテロ！セルビシエ！まさか貴様らまで同じ報告ではなかるうな？」

そう言われると、二人とも黙り込む。

「そうか。同じか。……………セルビシエ、貴様はあの黒仮面とかいう輩と不埒な関係だそうだな？」

動揺が走ると同時に、セルビシエはエンテロを睨んだ。

どうせ告げ口をしたのはエンテロしかいないだろう。

「お、お言葉ではございますが、わたくし“達”は決して不埒な関係には……………」

「愚か者め。隠しても無駄だ」

「……………」

「まあよい。ここで貴様を責めても始まらない。どうせ行き先はサン・ジェルマンのところだろう」

バチルスは何かを考えるようなそぶりをして、

「セルビシエ」

「はい」

「ジャスティスソードの少年がここに来た理由はなんだ？知っているのだろうか？」

「それは……………」

言わなければ殺される。さりげなく聞いてはいるが、試されている。

「……………答えぬか。まあよい。アスペルギルス、エンテロ、貴様らは黒仮面を倒して来い」

「黒仮面を……………ですか？」

エンテロはアスペルギルスの顔を見て、バチルスの真意を読もうとする。

「奴らは招かざる客だ。サン・ジェルマンに限っては利用価値はある。だが、黒仮面は悪影響しか及ぼさないようだ」

バチルスに横目で見られ、セルビシエは釘を刺される。

反抗するようなら、やはり殺されてしまうだろう。

いずれにせよ、黒仮面への接触を禁じられてしまった。

「御意。黒仮面を倒して参りましょう」

アスペルギルスは一礼したが、

「でも、あのクダイって野郎は……………？」

「様子を見るということだろう。サン・ジェルマンがクダイに倒されるも良し。クダイがサン・ジェルマンに倒されれば、それはそれで好都合。そういうことですか？バチルス將軍」

疑問を残したエンテロに、バチルスの真意を告げる。

「そういうことだ。わかったなら行け。黒仮面を始末して来るのだ」

「はっ」

アスペルギルスとエンテロはその場から消えた。

「セルビシエ、貴様はしばらく謹慎だ。別命あるまで部屋から出ることは許さん。見張りもつけておく。いいな？」

「……………わかりました」

黒仮面がアスペルギルスとエンテロにやられるとは思わないが、もはやバチルスに殉ずる必要はなくなった。

仕えるべき主は黒仮面ただ一人と決めている。

不可侵の領域にある淡い恋心は、彼女にも決意と覚悟を与えていた。

黒仮面に言われるがままに、魔法陣で転移した場所は、複雑なレリーフが施された青銅色の扉の前だ。

（シトリー……………）

ジャスティスソードをいつでも振るえるよう右手に握ったまま、左手で扉に触れる。

波紋が立ち、微かに電流のような感覚がクダイにあった。

それが結界であることは、なんとなくわかった。でも、それ以上の“何か”はなく、音も立てずに扉は開く。

「うわっ……………」

むんつと重さのある熱気が出迎えてくれた。

掻き分けるように中へ入ると、

「シトリー!!」

正面に意識を失っているシトリーがいた。

床から一メートルくらいのところを、両手を開いて浮遊“させられ”ている。

更にシトリーの頭上には、

「ヨ……………ヨウヘイ……………」

ガラスのような球体の中にヨウヘイがいた。

熱気は、その球体が発しているもので、まるでクダイが近づくのを拒んでいるようだった。

「結界が効果を発揮しなかったということは、いよいよ本性を表したようだな……………黒仮面は」

「サン・ジェルマン!!」

「ようこそ。ジャスティスソードの使い手、クダイよ」

老紳士はそこにいた。

黒仮面の裏切りを怒るわけでもなく、それすら予測していたよ

うな口調を見せた。

「貴様ツ！シトリーとヨウヘイに何をした？！」

「くくく…。しかるべき役割を果たしてもらってるだけにすぎんよ」

「今すぐ二人を解放しろ！じゃないと……！」

ジャステイスソードの切っ先を向ける。

勝ち負けのことなど頭にない。すぐにも叩き斬ってやりたいところだ。

「それは無理な話だな。見よ、ヨウヘイは屍人かはねびとを集める“器”として大成した。エルフの少女も、ヨウヘイに力を貸して屍人の収集かはねびとを加速させている。若いのによく働いてくれる」

かつて、サン・ジェルマンに出会った時は、品のいい初老の男だと思えた。

だが、今日の前にいるサン・ジェルマンは別人だ。

品位の欠片もない。

「誰もお前の為に働こうなんて思っ
てない！自分勝手な理屈だけで
上手く事が進むなんて思うなよ！」

「……………やってみるか？その伝説の剣、ジャステイスソードで」

サン・ジェルマンは右手に剣を具現する。

「老いたとは言え、かつてはその名を轟かせた騎士。来い。クダイ。
お前に剣の扱い方を教えてやる」

「お前に教わることなんて何もないっ！」

クダイがジャスティスソードを構えると、

・キイイイイン・

この前よりも、更に大きな音が鳴った。

（シトリー、待っててくれよ。絶対、助けてやるからな！）

実力なんて関係ない。

ただ、ジャスティスソードを振るうのみ。

自分の信じる黄金の正義の為に。

第七十四章 necessary

「なんだかんだ言つて、やっぱりクダイのことが心配なのか？」

「カイク」

一人ザンボル城を出たケファノスの前に、カイクが現れた。

「行くんなら行くつて言つてくれよ」

「これはサン・ジェルマンと決着を着ける戦いではない。飽くまでも、クダイ達を連れ戻す為の任務だ。戦力としてお前やダンタリオンには休んでいてもらいたい」

「言つてゐることはわかるぜ。クダイ達が乗り込んだ以上、連れ戻しても、今度はサン・ジェルマン達が最後の引導を渡しに来るだろうしな」

慎重に事を進めたい。

「そうさせない為に、今しばらく時間が必要なのです」

ケファノスでもカイクでもない声がした。

「ダンタリオン」

「あなたが行けば、バチルスが黙っていませんか？ケファノス」

「わかっている。だが、シャクスだけに負担はかけられまい」

「そうですね。彼は確実な戦力。必要な人です」

ダントリオンは月に顔が照らされ、眩しそうに目を細める。

「各国の兵士が、明朝にはザンボル周辺に到着します。それまでは、伯爵達に気付かれたくはないんです」

「だから余が行くのだ」

「お願いします。あなたにもいろいろと事情はあるでしょうが、優先順位を見失いませんよう」

「まさか余が自分を見失うとも思っているのか？」

「いえ。そうではありません。そうではありませんが………何か、嫌な予感がするんです」

これまでに経験したことのない、強烈な不安感。もう無視出来るレベルにはない。

各国の王達が、機転を利かせ自国の兵士を呼んでいたことは幸いだった。一度は帰還し、それから攻める手筈を、急遽変更してまで戦の準備をしてるのだ。

順調に、慎重に進んでいるのだから、必ず上手く行くと信じた

い。
なのに、たった一つの、得体の知れない不安感如きに絞め殺されそうになる。

「わかった。貴様がそこまで言うからには余程のことなのだろう。肝に命じておく」

「お願いします」

ケファノスが馬に跨またがり、そのまま勢いよく走り行く。

「ダンタリオン……………」

「わかっています。きっと私の思い過ごしでしょう。……………きっと」

「見えたっ！」

魔族の群れをかわし、視線の先には城門が見える。

猪突猛進。最後に行く手を塞いだ魔族を、乗っていた馬をジャンプさせてかわし、勢い衰えぬままに城門を突き破った。

突き破ると言っても、頑丈なスチール製の扉に穴を開けることはなく、馬の蹄ひづめが押し開いた形になった。

勢い余った馬は体勢を崩し、オルマを落馬させてしまうが、そこはオルマも無様に終わることはなく、華麗なる宙返りを決め着地した。

「ごめんね。無理させちゃって」

倒れた馬に近寄り、鼻面を優しく撫でてやる。

扉は開いたままだが、魔族の群れが中に入って来れないと知ると、

「ここでゆっくりしてて」

そう言つて城の奥へと進む。

静かな城内は、意外と言えば意外だったが、返つて不気味にも感じる。

外にあれだけ群れていたのだ、とつくにクダイと羽竜が来ていることは察しがつく。と言うか、シャクス達の話聞いていたから、推測するまでもなかった。

闊歩^{かつぽ}を許されたオルマは、誰に邪魔されることなくやがて広いラウンジに到達する。

「お前らは……………」

そこでアスペルギルスとエンテロに出会ってしまう。

驚いたのは二人も同じようで、

「こんなに簡単に侵入を許すとは……………」

アスペルギルスが溜め息を吐く。

「余計な仕事が出来たな」

同調したエンテロが槍を構えたが、

「エンテロ、お前は予定通り黒仮面を始末して来い」

「お、おいおい、お前はどつするんだよ？」

「我は……………」

アスペルギルスはじつとオルマの顔を見て、

「この女を倒す」

はつきりとそう言った。

「冗談じゃないぜ。お前まで勝手なことするつもりかよ？女一人くらい、二人でかかれば……………」

「この女とは輪廻の塔での勝負がまだ着いていない」

「わっかんねーなあ。セルビシエに影響されちまったのか？」

自分ならわかる。強い者との戦いにこだわっているから。しかし、アスペルギルスまでがこんなことを言い出すとは思わなかった。

エンテロの問い掛けに答えることはなく、エンテロ自身も諦めたと言うか、呆れたと言うか、

「好きにしろ。侵入者に変わりはないし、その女の始末には“お前一人”で事足りる””だろ」

既成事実を作ってやった。

アスペルギルスは、

「恩に着る」

仲間であるエンテロにそう言った。

エンテロが走り去るのを待って、

「ジャステイスソードの少年と言い、不死鳥と言い……………何をしに個人でここへ来た？」

「……………やっぱりクダイ達、来てるんだね」

「不死鳥は黒仮面と戦っている。ジャステイスソードの少年は……………おそらくサン・ジェルマンのところだろう。よもや、我々を無視してサン・ジェルマンを倒しに来たとは思えんが？」

「ふうん……………知らないのかい」

「何をだ？」

「アンタの仲間のセルビシエって女が、シトリーをさらったんだよ」

「……………シトリー……………？」

「エルフの女の子だよ。……………なるほどねえ。アンタらとサン・ジェルマンは上手くいってないんだ」

「詮索は無用。そのエルフの少女を助けたいのなら、我を倒すことは避けて通れぬ条件。果たすか、果てるか、運命の赴くがままに戦おうぞ……………女戦士オルマ！」

女、女と呼ばれていたが、ようやく名前で呼んでもらえたようだ。

アスペルギルスは輪廻の塔で見た姿へと変わる。

長い尾。太い牙。後方に曲線を描く二本の角。

「嬉しいねえ。名前を覚えててくれてさ」

オルマはシャンと音を鳴らし童子切りを抜く。

「もう何も失いたくない。誰も失いたくない…………あたしが生きる
為に、みんなが必要なのよ！」

運命が赴くがままに……………違う。そうじゃない。

人が生きて奏でる音が運命でなければならぬ。

運命の名の下に、命が弄もてあそばれていいわけがない。

哀しみを知ってばかりの運命の先。人が見る夢の彼方。

行き着くことが叶わぬ今も、オルマは生き抜くことを望んで歩
いている。

必要なものは、必要なことをしなければ得られない。

第七十五章

The conditional future

「大分、腕を上げたな。羽竜」

トランスミグレーションは黒仮面を捉えはしないものの、黒仮面の剣もまた羽竜を捉えられないでいる。

「よく言っぜ。いつそ、けなしてもらった方がいいくらいだ」

隙を突いた一撃をあっさり受け止められる。

「羽竜。人とは哀しい生き物だ。そうは思わないか？」

「ケツ。また難しいこと言っつもりか？」

「まあ聞け。……人は見なくていい幻想ゆめを見て傷つく。どれだけ時間を費やそうとも、破れた幻想ゆめの続きを誰かが引き継ぐ」

「別にいいじゃねーか。そうやって人は繁栄して来たんだ。俺達やこの世界だけじゃない。全ての世界で言えることだろ」

「あらかじめ用意されてる未来の為に、傷つくことさえプログラムされている。それでもお前はまだ運命を信じるのか？」

「運命を信じるんじゃない。自分を信じるんだ。不可能かもしれない。不確かかもしれない。でも、歩き続ければ何か見つけられるはずだ。あんたはこの世界に終末を見たのかもしれないが、諦めなければ別の未来へ行ける。奇跡なんかより、ずっと信頼出来るぜ」

「……………奇跡なんかより信頼出来る？戯言だな」

「……………つんだと？」

「なぜわからんのだ？！救おうと思って救えた世界はあったか？！いつも俺達は涙を飲まされたはずだ！どんなに手を尽くそうとも、幻想は幻想ゆめでしかない！救えないものを救うことなど出来んのだ！」

「……………なんだよ、あんたにも救いたい世界があったってのか？」

「……………。」

「救えなかったのは、何かが足りなかったからだ！俺達のやること
が、いつも完璧だなんて保証はないだろ！在りもしない……………見えないものを追っかけて、自分勝手に傷ついてんのはあんたじゃないか！救えたものを救えなかった時間に後悔して、それを運命のせいにしてる奴より、ダメかもしれないけど、やれる精一杯のことをやる奴の方がずっとマシだぜ！」

二人の言い分は、誰もが抱くジレンマだった。

一人の人間の心を二つに分けたような二人。
だからこそ惹かれ合う。

「俺もお前に同意見だな」

羽竜と黒仮面の戦いに水を注したのは、エンテロだった。

「なんだお前？」

「俺か？俺は土のエンテロ。四天王の一人だ。ありがたく思え、ア

イツを倒すのに手を貸してやる」

やる気満々で槍を構える。

「断る」

そんなエンテロに、羽竜は冷たく、文字通り断った。

「おい、せっかく手を貸してやるって言ってんだ。素直に借りりや
あいいんだよ」

「足手まといになるだけだ」

「な、なんだとっ?！」

すると、今度はセルビシエが現れる。

「子供にバカにされるようでは、貴方もおしまいではなくて?」

「セルビシエ……………」

「ヴァルゼ・アーク様。バチルス將軍が貴方様を殺そうとしていま
す。わたくしとしましても、魔族に義理を立てる理由が無くなりま
した。どうぞ、遠慮なくわたくしをお使い下さい」

従順な家来とは違った、言うなれば純粹なまでの恋心がそうさせる。
言わせているのだ。

「セルビシエ！本気で裏切る気なんだな！」

「しつこいですわね。わたくしの身も心もヴァルゼ・アーク様のもの。裏切り者呼ばわりされる筋合いはございませんわ!」

甘い声を出したかと思えば、エンテロに対しては辛みしか感じない声色を使う。

「おい!不死鳥!お前からも何とか言ってやれ!」

怒りが収まらないエンテロは、羽竜を巻き込んだ。

何を言っても“女”には勝ちようがないのだ。言葉では。

「なんで俺が……」

黒仮面は笑いを肩で殺し、

「クク……ここに来て状況は俺に不利に働いたか」

「………にしては楽しそうだな。まatarくでもないこと考えついたんだろ」

黒仮面が悪戯な笑みを見せる時は、良からぬことを考えてる時だと決まっている。そう疑わない羽竜は、エンテロを無視して黒仮面ににじり寄る。

「無礼な。下がちなさい!」

殺気を感じたのか、セルビシエが鞭で床を打った。

「ホント………なんつーか、女を手なずけるのはうまいよな。感心するぜ」

「口の減らぬ……！」

羽竜の暴言にムカついたというよりも、自分の知らぬ女の影がちがつくのが嫌だった。

だから言葉より先に鞭が飛んだ。

「フン。あたんねーって」

首を傾けかわした。

「まだ次がありますわ！」

第二波のモーションに入ると、

「もついい。セルビシエ」

黒仮面が止める。

「羽竜」

「あん？」

「人が見た幻想ゆめの果てに何が起こるのか。その目でよく見ておく」とだ

黒仮面とセルビシエの身体が透けていく。

「お前にはその義務がある」

いずれまた現れるのだろうが、今はどこかに行ってしまった。

「あんの野郎………」

羽竜はトランスミグレーションを大きく振るい、溜まったフラストレーションを壁にぶつけた。

「チツ。………まあいいや。………お前で我慢してやるよ」

後ろに立っていたエンテロにそう言った。

「それは俺のセリフだ。手ぶらじゃ帰れねーからな。不死鳥の死体でも持って帰ることにするよ」

エンテロが竜人の姿になり、羽竜と激しくバトルを開始した。

羽竜は思っている。

確かに救えない世界があった。何かが足りなかっただけなのかもしれないが、結局は悲劇を回避出来なかった。

でも、この世界は救える。その根拠は、クダイの存在が羽竜に似てるから。

偶然にこの世界に來たわけではない。見えない力によって導かれて來たのだ。

だから、黒仮面の言う通りにはならない。絶対に救える。その絶対な自信の前には、人の見る幻想も霞んで見える。

天秤に終末と幻想が乗った。それよりも重い意志と祈りがなければ、クダイ達は負ける。

祈りが幻想ゆめを超える時、人は未来をその手に掴めるだろう。

第七十六章 見落とされた力

「そんな……………」

クダイの前に立ちはだかるのはサン・ジェルマンではなかった。
なにより大きく立ちはだかるのは絶望。

既に肉片になっていてもおかしくないくらいに、サン・ジェルマンを斬りつけている。しかし、何度斬りつけても元に戻るのだ。

「ジャステイスソードが……………効かないなんて……………」

うつすら感づいてはいたが、実際目の当たりにしてしまつと、恐怖感すら覚える。

真つ二つに裂いた肉体には、“臓物”の類はなく、黒い煙が出て来る。

それは、サン・ジェルマンの身体が“肉体”ではないことを示唆している。

「私は自分自身の時間を凍結している。ありとあらゆる“接触”を避けることが出来るのだよ」

「幽霊かよ……………」

「そうではない。確かに私は“居る”。もっとも、仕組みを説いたところで理解は出来んだろうが」

これでは話にならない。攻撃が通じない以上、剣を交える意味がなくなっている。

存在はしているのに、生物学上有り得ない存在の仕方。考えれ

は考えるほど不思議なのだが、それを今ここで考え込むわけにもいかず、クダイはある決心をしてサン・ジェルマンに突進する。

「わからん奴だ」

一応、剣でクダイを迎え撃つ。

ジャステイスソードはサン・ジェルマンの剣に音を立てぶつかる。

反動で離れると、すかさず横一閃でサン・ジェルマンの身体を裂く。

黒い煙がもわっと排出する。

サン・ジェルマンは痛みがりもせず、ニヤつくばかり。

クダイが見るのは、黒い煙の向こう側。シトリーのみ。

サン・ジェルマンを斬り裂いたその後、クダイはすぐに走り出し黒い煙され振り払い、シトリーの下へ行く。

「シトリー!!」

シトリーの右肩を強く掴んで名前を呼ぶ。

「シトリー！僕だよ！クダイだよ!!」

目をつむったまま、秘めたる魔力を溢れさせている。

まるで眠り姫。一切の応答を見せなかった。

「お願いだよ……目を開けて返事してくれよ!!」

応えて欲しい。反応して欲しい。小さなアクションでいい。ぴくりともしないシトリーを見て、胸が苦しくなる。

「無駄だ。その娘は時間構築魔法具によって意識を断たれている。呼んだくらいでは……………」

身体を元に戻し、そうサン・ジェルマンが言った矢先、

「……………ダイ……………」

シトリーがゆっくりと目を開いた。

「シトリー……………シトリー！」

「……………クダイ……………」

虚ろながらもクダイの呼びかけに応え出した。

「なんと……………信じられん……………」

サン・ジェルマンの“常識”は覆り、シトリーは目を覚ました。

「クダイ……………私……………？」

「よかった。僕がわかるんだね？」

感情が優先し、思わずシトリーを抱きしめる。

「ク……………ククククダイ??!!!!……………」

置かれてる状況に気付くよりも早く照れがやって来た。

真っ赤な顔には虚ろな瞳は無く、いつものくりつとしたシトリーの瞳だった。

「そうだ……私、セルビシエに連れられて……」

「それは、さらわれてって言うんだよ」

笑顔のクダイからは涙も流れていた。

クダイは涙を一拭いすると、

「逃げよう。シトリーさえ無事ならここに用はない」

「クダイ………うん！逃げよう！」

^{ツール}時間構築魔法具によって意識を断たれていたシトリーは、不自由な部分を残すことなく目覚めている。

「そうはさせん。その娘にはまだ働いてもらわねばなんのだ」

「どけ！サン・ジェルマン！」

「フフ………私には剣も魔法も効かぬのだぞ？その気になればお主を殺すことも可能だということを忘れるなよ」

「やってみるよ」

「………ほう。言うではないか。策でもあると？」

「策？そんなもの必要無い！僕にはこれがある！」

そう言ったクダイは、目を閉じる。

肉体が幻想のものであったとしても、存在はして“居る”とサ

ン・ジェルマンは断言している。

慢心から零れた真実だろう。

シトリーが意識を戻したことで、クダイの気持ちに余裕が出て頭の回転もキレが増したのかもしれない。

かと言って、具体的にどうだとか言えるまでの理論はなく、この場を凌ぐのが関の山であるのは定かだ。

シトリーと、その事実を持って帰ればいい。

「シトリー、走るけど着いて来れる？」

優しく、でも頼もしい口調だった。

「うん。魔法でスピード上げるから。それに……………」

一端、クダイから目を逸らし、

「それに、クダイがそうして欲しいなら、私は大丈夫だから！」

二人は互いに微笑みかけると、

「行くよ！シトリー！」

「うん！-！」

サン・ジェルマン目掛けて突っ込む。やることはさっきと同じこと。真つ二つに裂いて、そのまま外へ出るだけ。

「小僧……………そう簡単にことが上手くいくと思つな！」

世の中をナメてる若者に、わからせてやるかのように言い放ち剣を

再び構える。

「私の野望を、貴様ら如きに止められるものかーっ!!」

駆けて来るクダイを徹底的に潰すつもりで剣を振るうサン・ジェルマンだったが、

「な……………!!」

見えなかった。ジャステイスソードの太刀筋が……………見えなかった。さつきまでは、クダイへ精神的ダメージを与えようと“わざと”斬られていた。

絶対の自信があつたからの遊びが、サン・ジェルマンに冷や汗をかかせる結果になる。

直前まで捉えていたクダイの姿は、気付けばそこにおらず、裂かれた上半身が下半身から落ちた。

「物事って結構、簡単にいくもんなんだよ!」

「もんなんだよ!」

捨て台詞を吐いたクダイの調子に乗った、シトリーにまで言われる始末。

シトリーの手を取る。そして、ヨウヘイを見上げた。

(ヨウヘイ……………)

クダイは、齒を食いしぱりそのままサン・ジェルマンのいた部屋を出て行った。

「お…………おのれ…………小僧めっ…………！！許さんぞ！！」

身体を元に戻すのに、差ほど時間は要しない。

それでもクダイを追わないのは、クダイから得体の知れない力を感じたからだ。

それは人の力ではなかった。

時間を、おのが力とし、数多あまたの戦いをくぐり抜けて来た自負を、
いとも簡単に消し去ってしまうような力。

剣の腕も無い、人としても未熟なクダイがサン・ジェルマンを
震撼させた力。

やがて、その力の前に世界は屈することになる。

第七十七章 代償

一方、オルマとアスペルギルスの戦いは熾烈しれつを極めていた。

オルマは、シトリーを目の前でさらわれた責任を感じて。アスペルギルスは、

「こんなにも戦いに興じてみたいと思ったのは何年ぶりか…」

もやもやとしたものがなんであるか確かめ為に戦う。

「そうかい。でも、あたしには迷惑な話だよ」

「たかだか少女一人の為に、貴様らは命を省みずやって来るのだから理解に苦しむ。エルフの王女だからか？」

「そういうのは関係無いんだよ」

「フ……………だろうな。だとすれば、エルフの兵士が来なければなるまい。では、なんだと言うのだ？まさか愛だなどと語るまいな？」

人間の常套句じょうたうくは、魔族には理解不能な領域。だから、セルビシエの行動にも納得いかなかった。

そんな一言で語られてしまうものならば、いつそ煙に巻かれてしまった方がいい。そのくらい理解に苦しむ言葉なのだ。

「愛……………ねえ。そんな曖昧なもんじゃないよ」

「ほづ。人間であるお前が愛を否定するのか？」

「否定するわけじゃあない。ただ、あたしがシトリーを助けたいは、もつと確かなもんだけさ」

「確かなもの………？」

「絆ってヤツさ」

「………クク。笑わせる。絆だと？愛と大して変わらんではないか」

「いいや。愛つてのは夢みたいなもんさ。だけど絆は違う。確かにそこにあるものなんだよ」

「………わからんな。何が違うのか」

魔族は人間より遙かに長い時間を生きる。その長い時間の中の一瞬だけ、アスペルギルスは人間を理解しようとした。

なぜそんなことを思ったのか、それはアスペルギルス本人にもわからなかった。

「なら次は人間に生まれて来ることだね！」

オルマが仕掛ける。

アスペルギルスはすぐに反応しようとしたが、思い留まりオルマが目先に来る僅かな時間を待つ。

童子切りの刃がアスペルギルスの頬をかすめた。それはオルマの腕の良さではない。アスペルギルスがモーションを小さくしただけのこと。そして、狙うは、

「人間などに興味はない！」

「うわああああっ!!」

アスペルギルスの長い爪が、オルマの目を……………両目を傷つけた。

視界が塞がったことよりも、脳天を突き抜ける激痛で意識が飛びそうになる。

殺される。シトリーを救うことも出来ないまま。

「うぐぐう……………ぐっ……………」

絶叫さえままならない痛みは、戦意喪失させる。

「その目ではもう戦えまい。残念だったな」

オルマの顔面をわしづかみにし持ち上げる。

「愛だとか絆だとか、一体どれほどの価値があるというのか……………」

「命を懸けるだけの価値があるんだよ」

「誰だッ?!」

「人はそれを糧に生きてるんだ」

影がぬつと伸び、アスペルギルスの前に。

「貴様……………聖騎士シャクス!!」

その名を聞いて、オルマは耳を疑った。

(シャクス……………そんな、まさか……………どうして……………)

だが、聞こえた声はシャクスのものであった。

安堵からか、両目から流れる血に混ざって涙が零れる。

間違いなく自分を追って来たのだ。助けて欲しいと思った時に来てくれた。

聖騎士の座を、彼に譲ってよかったと、この時ようやく思えた。

「シャ……………シャクス……………」

勝ち気なオルマの声ではなかった。弱く、行き場の失った声。それはシャクスに火を点ける。

「オルマから手を離せ、アスペルギルス」

スカイカリバーがギリリと鋭く光る。

「聞こえなかったのか？」

アスペルギルスの大きな手の中のオルマの状態を見て、自分が来たのが遅かったと知った時、シャクスの怒りは絶頂に達す。

「俺の女から手を離せと言ってるんだッ！！！」

いつも誰かが犠牲を払う。

それが代償代価ならば、世界に望むものなど何も無い。

第七十八章 絶対領域

「こいつは愉快だ。この女、貴様の女だったのか」

アスペルギルスはオルマをしばし見つめ、

「いいだろう。返してやる」

シャクスの足元に投げる。

そしてシャクスは、すかさずオルマに駆け寄り、上半身を抱き抱えた。

「オルマ……………」

目を潰されたオルマにかける言葉は見当たらなかった。

その空気を察知したのか、温もりの感じる方に頭を動かし微笑んだ。

「いつからアンタの女になったわけ？」

「バカやろう」

それに応えるように、シャクスも微笑み、オルマの手を握った。

「シトリーを……………助けなきゃ」

「わかっている。全て任せておけ」

「……………じゃあ……………お願いするわ」

オルマを壁際まで運んで、壁にもたれさせる。

シャクスは、

「アスペルギルス。シトリーはどこだ？」

オルマが、目を失ってまで助けようとしたのだ、連れて帰るのならシトリーも一緒になければ自分自身も納得出来ない。

「それを聞きたいのなら、サン・ジェルマンに聞くことだ」

自分を倒さぬ限り、望みは叶わぬと言いたげな火のアスペルギルスは、全身に炎を纏う。

「貴様ら人間は、魔族に怯え生きているかのようなことを語る。しかし、我々の魔族方が人間に怯え生きているのだ。個々の能力では人間には勝っているが、絶対的な数では遥かに劣る。ケファノス様は、人間に交渉し、共存の道を模索していた。それを貴様ら人間側が裏切ったことで、我々には深い溝が出来た。我々は負けるわけにはいかんだ！我々魔族にも未来があるのだからな！」

声高な想いは、悲痛を隠し続けた魔族の想い。人間と魔族間の戦争の火種は、サン・ジェルマンが撒いたもの。“人間が裏切るように”仕向けたサン・ジェルマンの思惑に過ぎない。

ならば、互いに戦う理由は無いはず。

だが、シャクスは言わなかった。

アスペルギルスもわかつてのことなのだ。わかつていて人間に戦いを挑んでいる。ケファノスが居なくなったことで、舵の利かなくなった船は航路を見失った。目的を達成するには、人間か魔族のどちらかが地上を支配することで決着を見る。そうするしかないか

った。

「ケファノスを裏切ったのは……………いや、言うまい。それほどまでに決意を堅くしているのなら、血を見ることがでしか終わることなど出来んのだろうしな」

「さすがは聖騎士シャクス。理解が早い。絶対数で劣る我々が未来に行くには、貴様ら人間の数を減らすしかないのだ。……………ゼロまでな」

シャクスはアスペルギルスの言葉に騎士魂を垣間見た。

「アスペルギルスよ、教えてやる。主を裏切っても種を守ろうとする気持ち。それは貴様ら魔族が煙たがる愛というものだ」

「……………愛……………だと？」

「俺は一人の女への愛の為に。貴様は種への愛の為に。命を捧げねばならんだ。……………運命に！」

「……………面白い。我にも愛が存在したのなら、その愛に従事してみるのが一興。命は当の昔に捧げている。……………来いっ！聖騎士シャクスー！」

「申し訳ございません。居場所を追われる結果を招いたのは、わたくしめの失態。どのような処分も覚悟しております。」

遠くに見える魔城。

セルビシエは黒仮面の背中に話した。

「気に病むな。全て、俺の手の中で事は進んでいる。どこにしよう
と結果は変わらん。それに、居場所はここにあるじゃないか」

そう言つて振り向くと、セルビシエの肩に手を乗せた。

「ああ……………ヴァルゼ・アーク様……………勿体ないお言葉」

自責に囚われぬように、気を遣っただけなのはわかっている。それでも嬉しいのだ。

「これは俺の勘だが、この世界はジャスティスソードと深い関係がある」

「ジャスティスソードと……………世界が？」

「ジャスティスソードを誰も扱える者が居なかった時代では、この世界は安定していた。それが、クダイが現れたことで戦火に塗れて行く。ジャスティスソードを使う度に」

「そういえば、あの少年は無眼の構えも使つと、エンテロが申してたのを記憶しております。それも何かの関係があるのでしょうか？」

「瞳を閉じた闇の中で見る光の軌跡。相手の存在、攻撃の道標^{みちしるべ}まで見るらしいな？」

「はい。無眼の構えの時の彼の攻撃は、刹那を超えると」

「……………フッ」

黒仮面が微笑した。その意味するところはただ一つ。

「まさか、無眼の構えがなんであるか、わかったのですか？」

「ああ。だが、ジャステイスソードや無眼の構えを使おうとも、サン・ジェルマンの秘密を暴かぬ限りクダイに勝ち目は無い。問題はそれをどうやって“知る”かだ」

ということとは、サン・ジェルマンの秘密、自己時間の凍結の正体を黒仮面は知っているのだ。

「しかしながら、サン・ジェルマンが負けてしまったら、時間を終着させる力が見れなくなってしまうのでは……………？」

「まあ、黙って見物してようじゃないか。絶対防御の中にいるサン・ジェルマンと、世界で唯一の力を手にするクダイ。二人の駆け引きを」

そう。どんな“絶対”も黒仮面の前では意味を成さない。なぜなら彼の持つ剣の名前、それは絶対支配。

彼の前では全てが平伏す。

第七十九章 アウェー

「羽竜ーっ!!」

“元氣よく” が似つかわしくないこの状況で、クダイは声を張り上げ駆けて来た。

その手には、白く細いシトリーの手が握られている。

「無事助けることが出来たみたいだな」

正直、羽竜もシトリーの安否が気になって仕方なかったのだ。

ニタツと笑った。

「あれ？黒仮面は？」

暢気のんきな奴だ。いや、意外と現金な奴なのか？わからなくはないが、シトリーを助けた途端、あの危機迫る男の顔でなくなっている。

羽竜は、「ま、いいか」と心で呟き、

「都合が悪くなると逃げるんだよ、アイツは」

「ふうん。で、代わりがアイツなんだね？」

エンテロがいる。

いきさつはよくわからないが、羽竜が頑張ってくれていたのは確かだ。

「どうする、クダイ？」

「どうもこうもないよ。シトリーは助けたし、早く帰らないとみんなに怒られるから」

「そうか。なら……………」

クダイとシトリーに確認を取るように見回し、

「逃げるぞっ！」

空を斬るトランスミグレーションから、強大なエネルギーの衝撃波がエンテロに襲い掛かる。

「ぐっ……………なんてパワーだ！」

受け止めるのが精一杯のエンテロの横を一気に駆け抜ける。

「じゃあね、エンテロ！」

クダイは舌を出し、中指を立ててやった。

そのジェスチャーが果たして通用したかは別として、エンテロを逆なでしたことは成功したようで、竜人の顔を曇らせていた。

一時はどうなるかと不安を抱いていたクダイも、シトリーを助けた今は自分でも不思議なくらい、意気揚々と走ることが出来ている。シトリーの手を握ったまま。

その手には、誰より希望を感じる二人の想いがある。

クダイがいてくれれば、シトリーがいてくれるのなら、なんでも出来る気がする。どんな脅威も恐怖にならない気がする。

二人が見つめ合い微笑んだ時、クダイはこの世界に残ろうと決

心した。

シトリーはクダイに着いて行くと心に決めていた。

違う世界に生きる二人には、それは究極の愛の形。

同時に、決して祝福されない愛であることも知っている。

つむじ風の中、愛という言葉だけを頼りに二人は走っていた。

「もうすぐ夜が明けるぞ」

疲れはあるのに眠れなかった。

カイクの投げた言葉は、ダンタリオンに届いているはずなのに、彼は答えなかった。

「大丈夫だべ。シャクスとケファノスも向かっただ、きっとみんな無事で戻って来るだ」

眠れなかったのはカカベルも、そしてシメリーもだった。

「ねえ、ダンタリオン。私達、勝てる戦いをしてるのかな？」

サン・ジェルマンの得体の知れない力。時の秘法。

調べてわかる力ではなかった。

クダイ、ケファノス、シャクス、ダンタリオン、オルマ、カイ

ム、そして羽竜。これだけの実力者が仲間にいるのに、サン・ジェルマンへの対抗手段が見当たらない。もし、クダイ達を本気で倒そうとサン・ジェルマンが考えたら……そう思うと、シメリーは答えを求めずにはいられない。

「まだ全ての書物を調べたわけではありませんし、仮に伯爵が無敵なら、これまでの事があまりに回りくどいやり方だとは思いませんか？ 私見ばかりで恐縮ですが、伯爵には剣も魔法も通じないでしょう。しかし、それは無敵という意味ではなく、時の秘法を使った理由を暴かれない為の副産物によるカモフラージュ。クダイ達が伯爵に戦いを挑まぬ以上、予定外の戦いで手の内は見せないと思います」

こういう理論的な話ならいい。感情的な話は苦手なのだ。だからカイムの話には乗らなかった。

それを察して、カイムの方からダンタリオンの話に乗る。

「剣と魔法以外に、効果のある攻撃方法があるのか？ 残念ながら、クダイ達は物理攻撃しか使えない。羽竜はどうか知らないが、いずれにしても剣が通用しなかったら……」

「そうだよ。もしクダイがシトリーを助け出そうとしてるなら、サン・ジェルマンだって黙ってないと思うよ」

シメリーもカイムに同意見だ。

それに釣られたようにダンタリオンは喋り出す。

「時間を身に纏い、自らの周りの時間を凍結するという解釈を、私は不老に近い状態に肉体を持って行くものだと思っていました。でも、ひょっとしたらそれは間違いないかと、考え直してい

ます」

「もっとわかりやすく言ってける。わだすには教養がねえから難しいだ」

「わかりました。……伯爵が肉体的な無敵を見せる理由は、体力的に人間の壁を超えられなかったというのと、無敵を印象付け私達の士気を下げることが挙げられます。ただそれは、重要な理由ではありません。なぜなら、時の秘法を使った結果に頼った策だからです。時の秘法がもたらす最高の恩恵は、脆弱せいつやくな何かを無敵の肉体で隠すことにあるのではないかと」

もちろん、根拠は無い。これまでのサン・ジェルマンの立ち振る舞い、自分がサン・ジェルマンの立場ならどうするかを考察した結論に過ぎない。

「普通、肉体を無敵にしたのなら、誰に頼らずとも戦えるはず。それに、私達は伯爵の障害でしかありません。目的があるのなら、私達を倒してからの方が都合がいい。そうしないのは、戦うことで秘密を暴かれてしまうことを恐れるからでしょう。伯爵が隠す脆弱せいつやくな何か。それさえ解れば伯爵に隙が出来る」

ダンタリオンには自信がある。サン・ジェルマンはシナリオ通りでなければ戦えない。無敵でありながら、黒仮面やアスペルギルス達を頼るのは、サン・ジェルマンが考えるシナリオには、サン・ジェルマン自身“しか”存在していないからだ。

元から、この戦いそのものが視野に入っていない。アスペルギルス達を利用するのは、シナリオに無いものを相手にさせて、あたかも自身も戦いの当事者かのように見せ掛ける為。

「クダイにはジャステイスソードがあります。ジャステイスソードは未だその正体が謎です。いつ、誰が、どんな目的で造ったのか。そんなものを持つ者を相手に、伯爵も本気では戦えないでしょう。追い詰められたクダイが何を起こすか……誰も想像出来ないでしょうから。まして、シトリーを助けたいと強く願っているのなら、尚更手出しは危険です。問題は伯爵ではなく、黒仮面やアスペルギルス達をかわせるかどうか。それだけです」

理論的な考察はカйм達を少しは安心させる。言葉の魔術というよりも、ダンタリオンの話の上手さだろう。

そして、ある考えがダンタリオンに浮かんだ。

カйм達には完璧に見える理論も、実は内面は根拠もなく、ダンタリオン自身の不安を払拭させる自己満足に近い理論だ。

同じことがサン・ジェルマンにも言えないだろうか？

一見、無敵を誇るサン・ジェルマン。しかし、それは肉体のみに言えること。表面の無敵に惑わされてはいるが、その内面はどうなのだろうか？

（もしかして……………）

そう考えると、臃^{おぼろ}げながらも謎と思っていたもののの実体が見えて来る。

その実体を前に、ダンタリオンの自信は確信へと変わっていた。

第八十章 絆を知る

「ぬうつ……………これほどまでに強いとは……………」

「アスペルギルス、貴様も今日が最期の日だ」

そう宣言したシャクスは、スカイカリバーをアスペルギルスの胸に突き立てた。

「ぐお……………おお……………」

アスペルギルスの太い肋骨ろっこつさえものともせず、スカイカリバーは豆腐でも切るように音も立てなかった。

「……………こんな……………こんなところで……………我が志が……………」

息絶えていくアスペルギルスを見て、その勝利に疑問を残していた。

「オルマ」

壁にもたれるオルマは、穏やかなシャクスの声に安堵した。

「来てくれたんだね」

「なんで一人で来たんだ。なぜ一言言ってくれなかった」

オルマの頬を撫でながら、まぶた瞼にもさりげなく触れる。

ダンタリオンの魔法なら治せるかもしれないと。

一言言ってくれたなら……………こんな結果にはならなかっただろ

う。

一度は愛した女。どうか、失明だけはしないでほしい。

「一言言ったら、付き合ってくれたのかい？」

シャクスの問いに、笑顔で答えた。その笑顔は、今まで見たオルマの笑顔の中で一番“女”らしかった。

「アンタやダンタリオンは国に仕える身分。優先するものがあたし達とは違う。シトリーを助けられるなら、あたしは死んでもいい。そういう覚悟で来たんだ」

「だからと言って、無謀じゃないか！」

「あたしは聖騎士を諦めてエルガムを離れてから、ずっと一人で生きて来た。町も失くなって帰る場所の無い、あたしが見つけた唯一の居場所なんだよ……アンタらは。シトリーもその一人。妹みたいなもんさ。それに、シトリーに何かあつたら、クダイに合わせる顔がないじゃないか」

「オルマ……」

「あの二人には上手くいつてほしいんだよ。あたし達みたいにはなつて欲しくない。いつか、クダイが自分の世界に帰ってしまうとしても……」

「……………バカだよ。お前は」

シャクスはオルマを抱き締めた。

そして、勝利の末に残った疑問。

オルマを傷つけられ、その仇をと戦ったことに後悔はない。

だが、アスペルギルスの想いを知ってしまった。人間と魔族の戦争を仕組んだのがサン・ジェルマンだったとしても、自分は正しい戦いをしたのだろうか？して来たのだろうか？

互いに未来を望んでいたのに、どちらかが滅ぶまで戦うことが正義と言えるのだろうか？

話し合いで解決しないことも多い。それでも、道を作るのはその時代に生きる者。きつと、道はあったはず。

残った疑問は、いつまでもシャクスを苛み続けるだろう。

「シャクス?!」

そこへ、クダイ達がやって来た。シトリーを連れて。

「クダイ!」

無事な姿のシトリーを見て、事が済んだことを知る。

互いに喜びたいところではあったが、クダイの目に飛び込んで来たのは、目から血を流すオルマの姿。

「オル……マ………?」

明らかに軽くない怪我を負っている。

それはシトリーにもわかるものだった。

「オルマ………どう………したの?」

恐る恐る声を発したシトリーの声を聞き、

「シトリー?シトリーなのかい?」

「うん。そうだよ」

「よかった…………無事だったんだね」

シトリーの声を聞いたことがなによりだった。

命を懸けたんだ。目を失っただけで済んだのなら、それは幸いだろう。オルマは自分にそう言い聞かせた。

「まさか私の為に？」

「可愛い妹の為だからね。このくらいなんでもないさ」

シトリーは涙を堪え切れなかった。

自分の為に命を懸けてくれた者がいる。自分の為に目を失った者がいる。

かつてエルフの国を出てクダイ達に着いて行くと決めた時、ケファノスに言われた言葉を思い出す。

・深い懷に護られていたことに感謝しろ・

愛情なんて言葉が安っぽいくらい深い想いに抱かれている。未だに。

「待つて。今、魔法を……………」

出血の量を見れば、魔法でどうにか出来るレベルでないことくらい解る。

傷を塞ぐことは可能でも、失った光を取り戻せる可能性はない。眼球まで傷を負っているのなら。

それを知ってるのは本人のみ。オルマは見えないながらも、シ

トリーの手首を掴んで、

「無駄だよ。魔法で治る傷じゃない」

「でも……………」

「アンタが無事なら、それでいいって」

シトリーはオルマにしがみつき、泣きじゃくるしかなかった。

「長居は無用だ。早く行こうぜ」

羽竜が言くと、シャクスはオルマを抱き上げ、クダイはシトリーの肩を抱いた。

沈黙はすぐに訪れ、目的を果たしながらも晴れない気持ちに、クダイ達は向き合う気にはなれなかった。

第八十一章 運命（前編）

クダイ達は魔王城を出た。そこに最後の難関、魔族の大群が待ち構えていた。

すべきは強攻突破。先頭に立ち道を作るのは、

「俺がやる！」

羽竜。トランスミグレーションを振りかぶり、当然として大地を割る。

群れが左右に別れると同時に、全員が駆け出す。

いつも勝ち気なオルマは、シャクスの腕の中で身を任せ、シリィはクダイに手を握られたまま一緒に走る。

羽竜が雑魚を蹴散らしてくれているおかげで、このまま逃げ切れる。そう思った矢先だった。

「おっと！逃がさねーぜ！」

エンテロが空を飛んで、再び立ちはだかる。

羽竜は急ブレーキをかけたように足を擦りながら止まる。

「野郎！まだやる気か！」

「黙れッ！不死鳥ッ！！やられっぱなしでいられるかッ！」

エンテロにも、意地もあれば責任もある。

おめおめ逃げられるわけにはいかないのだ。

「なら、お望み通り相手してやる！」

トランスミグレーションを構えると、

「待て。羽竜。ここは俺が引き受ける」

シャクスがそう言った。

「あん？なんだよ、いきなり」

真意が解らず、羽竜が振り向くと、唐突にオルマを渡された。

「ちょ、シャクス?!」

オルマは自分がシャクスから羽竜に渡ったことを感じ、怪訝な表情を浮かべたが、

「オルマ、お前は早く帰ってダンタリオンに目を診てもらえ。何かいい方法を知ってるかもしれん」

お構いなくシャクスは言った。

「何考えてるんだよ？」

クダイが聞くと、

「クダイ。一度剣を構えたら、自分を信じるんだ。己の進む道を疑うことなくな」

「シャクス……………」

「俺は若い頃の後悔をずっと引きずって来た。同じ思いをお前にさせたくないんだ」

「だったら、僕も戦うよ!」

「ダメだ」

「な、なんでだよ!」

「サン・ジェルマンがシトリーを狙っている以上、少しでも早くシトリーを遠ざけたい。それに、オルマの目の治療も急ぎたい。お前と羽竜にそれを頼む」

それは、ここで一手の足止めを引き受けるということ。

すっかり囲まれつつある中、シャクスは一人残る判断をした。

「一人じゃ無理だろ」

羽竜が心配して言ったが、

「見くびるな。伊達に聖騎士を名乗っちゃいない」

シャクスはエンテロの前に出た。

「おもしれえ。たった一人で俺とこの数を相手するってか」

エンテロはシャクスの向こう側にいる魔族の群れを見た。

どう考えても無謀無策。自信を見せるシャクスの本気が見てみたくなった。

「いいぜ。通れよ。お前らは逃がしてやる。どうせコイツを倒したら、追っかけて殺すけどな」

エンテロが言うと、

「……………すぐ戻って来るから！」

クダイはそう言った。

羽竜もクダイに習い、シャクスに任せることにした。

「死ぬなよ」

そう告げて。

クダイ達がエンテロを抜けて行くと、スカイカリバーを構える。

「あの世でアスペルギルスが待ってるぞ」

「……………アスペルギルスを倒したのか……………？」

エンテロは驚いた。まさかアスペルギルスが殺られるとは思っていなかったらしい。

「……………ますますおもしろえ。強いとは思っていたが……………へっ、まさかアスペルギルスを倒すとはな。……………気に入った。とことん付き合ってもらうぜ……………シャクス！」

「三途の川を渡る手間賃は払ってやるよ！」

シャクスは、銀貨を一枚取り出し放った。^{ほう}

銀貨は、二人をジャッジするかのよう^{ほう}に回転しながら舞う。

その銀貨が地面に落ちるのを合図に、シャクスとエンテロは戦いを始めた。

魔界を離れ、夜明けの森の中をひたすらに走っていると、脇から馬が飛び出して来た。

「うわっ！」

危うく衝突しそうになった羽竜は、オルマを落とさないようにして尻餅をついた。

「いってえ……………」

なんとかオルマは落とさずに済んだが、結構な衝撃にそれ以上言葉が出なかった。

見上げると、馬上にはケファノスが騎乗していた。

「ケファノス！！」

クダイとシトリーが駆け寄る。

なんとも馬の似合う男だと思う。白い髪がふわっと風に揺れ動く。あらかじめ予定されていたかのように。

「シトリーを助けられたのか」

「うん。だけど……」

クダイは、ようやく起き上がった羽竜の腕の中のオルマを見た。

「ケファノスがいるのかい？」

オルマは羽竜から跳ねて一人で立った。

「目をやられたのか」

「……しゃあないよ。生きてるだけマシだよ」

強がっているのは一目でわかる。

だからクダイ達は何も言わない。

「……深いな」

オルマの^{まぶた}瞼を触り、傷の深さを知る。

もしかしたら。そう思ったクダイの気持ちとは別に、オルマの怪我は大きいものらしい。

「ダンタリオンなら治せるんじゃないかな？ 賢者だし、いろんな魔法使えるだろうから」

いろんな魔法を見たことはないが、賢者としてのスキルは本物だ。信頼度は高い。

そう疑わないクダイを無視して、

「……………覚悟はしておけ。オルマ」

ケファノスは治癒しないだろうことを本人に告げた。

「勲章だよ。あたしの人生最大の」

仲間の為に命を……………自己満足だとはわかっている。大切なのは、それが出来たということ。

だから、帰ったら言ってやろうと思う。シャクスとダンタリオンに。国に仕える者では到底出来ぬ判断だろ？と。

もし、少しでも早く……………世界中の王族がいて、なぜもっと早く動いてくれなかったのか。

恨む気持ちはないが、目を覚ませと言ってやりたい。

そんなんだからサン・ジェルマンに足元をすくわれるのだと。

「ま、助けたのはクダイだけだね」

肩眉を上げ、おどけて見せた。

「そんな……………私、嬉しいよ！私なんかの為に、そこまでしてくれて……………」

「ふふ。ありがとう。シトリー」

また泣き出しそうなシトリーの頭を、意外にもケファノスが二撫でほとして、

「いい“姉”が出来たな」

ニコツとした。

シトリーはただ頷くだけだったが、これからオルマの目の代わりになって生きて行こうと強く誓うのだった。

そして、ケファノスは一人姿の見えないシャクスが気になった。

「シャクスはどうした？」

「俺達を逃がす為に一人で戦ってる。オルマの治療を急ぎたいし、シトリーも狙われてる以上、少しでも早く戻って言われてな。あんた、悪いが加勢に行ってくれ。俺達も後から行く」

羽竜が淡として答えると、

「わかった。お前達はザンボルに戻ってダンタリオンに伝えてくれ」

ケファノスはまた騎乗した。

「ケファノス。早くシャクスのところへ行ってあげて！」

シャクスにまで何かあったらと、シトリーが不安げに言った。

ケファノスは強く頷いて馬を走らせた。

「急ごう。ケファノスとシャクスだけではさすがに心配だ。僕と羽竜だけでも加勢に行かなきゃ」

「ああ。そうだな。急ごう」

クダイに芽生えた不安。羽竜の中にも芽生えていた。

第八十一章 運命 中編

「たいした奴だぜ。人間とは思えない強さだ」

「いい加減、手下じゃなく貴様が来たらどうだ？ エンテロよ」

もう体力の限界だった。クダイ達の去った後、一騎当千を噛ましていたシャクスにも疲労が見える。

それを待っていたかのように、

「クツクツクツ。まだやる気かよ。全く……見上げた根性だ」

槍で手下を押し退ける。

逃げることはないだろう。逃げ切れる確率もままならない。

エンテロの読みは正しい。逃げることを想定しての立ち回りはしていない。

逃げることを思惑に入れていたなら、隙を突かれとづくにやられていただろう。

「そんなに仲間が大切か？ たった一人、後先考えずに居残ってまで……後悔するぞ」

「愚問だな。あいつらは俺にとって掛け替えのない存在だ。生きて欲しい。どこまでもあいつらしく生きてくれるなら、この命惜しくはないっ！」

嘘はない。これまでの一騎当千を手伝ってくれたスカイカリバーに全てを託す。

「…………人間ってのは不憫な生き物だな」

「フツ。変わらんとするがな。人間も、魔族も」

誰かを愛し、未来を求める。それが生あるものの在り方なのだと、シャクスは理解している。

向かう場所は違えど、本質は同じなのだ。

「ならばシャクス！お前の命をもって解らせてもらおう！」

力で正義を語ること。それもまた正義なのだという事とも。

「わたくしは、魔族は滅んでいくのだと思っております」

セルビシエの思慮を、黒仮面は敢えて否定した。

「まだそう決まったわけではあるまい。人間よりも卓越した能力を持つているのだ、むしろ繁栄していくと思うが？」

「身体的な能力の優劣は、種族繁栄に直接の影響はありません。ヴアルゼ・アーク様も同じことを思っているものと存じ上げますが？」

「フツ。では魔族は人間に負けると言うのか？」

「少なくともケファノス様はそう思っていたはず。だから人間との共存を選んだのです。そして、永い時間を生きるエルフも、いずれは滅ぶのでしょうか」

「根拠は？」

「魔族もエルフも、自尊心だけが高いだけで、自分達に欠けているものがあるとは思っていません。しかし人間は、自分達に無いものを理解し、常に求めています。結果、新しい道具や新しい思考を生み出します。この違いは、必ず形になるでしょう」

「だが人間は愚かな生き物だ。争うということを永遠に止められん。繁栄する必要のなかった種族の一つだ。それが、どう間違ったのか、どこの世界でも繁栄してしまう」

「それも繁栄の理由の一つなのかもしれませんよ？」

人間の愚かさを語ろうとすると、つい熱くなる黒仮面を笑顔で宥めた。

セルビシエの考える通り、争う性質が人間を繁栄させて来たのは間違いない。

だが認めたくはなかった。

そう、ただそれだけ。

「人は自分の足りない何かを埋めようとしています。それは決して叶わぬことなのに」

「それが愚かだと言うのだ。その為に傷つけ合い、犠牲を払ってい

く。常に見合った代価が手に入るとは限らないのだ」

……………自分もその一人。

黒仮面は心の中で付け足した。

「不思議なお方です。ヴァルゼ・アーク様は」

「俺のどこが不思議なんだ？」

「未来や運命を否定なさらないのに、それを認める自分は否定しようとしている……………わたくしにはそう見えます」

「矛盾してるじゃないか？」

「それも魅力の一つですわ」

そう言われてしまえば返す言葉もない。

「この世界の行く末に何を残すかは、この世界の住人が決めること。サン・ジェルマンに未来を奪われるのか、決まっている未来へ進むのか……………どちらも代わり映えのないものなのだろうがな」

紡ぐ未来は鏡に映る偶像。

真実を晒しているのに、誰も鏡の中までは入って行けない。

第八十一章 運命（後編）

「俺の勝ちだ」

誇るように宣言したのはエンテロだった。

いや、宣言と言うよりも、既に事が済んだ後。槍の矛先はシャクスの身体を貫いていた。

「……………これまで……………か」

刺さった槍をエンテロが抜くと、聖騎士の象徴である白い鎧が赤く染まる。

崩れ落ちるように倒れ、絶命のカウントダウンが始まったことを意識した。

死ぬ間際でさえ、シャクスが思うのはクダイ達のこと。時間は稼げた。ザンボルまでは着いてないだろうが、そこそ遠くまでは逃げてくれたはず。

「何か言い残すことはあるか？」

皮肉ではなく、善戦した敵への配慮。言い残すことがあるのなら、責任を持って仲間へ伝えてやろうと思っている。

「……………。」

だが、シャクスは何も言わなかった。

息はまだあるが、何も言わない。言えないのではなく、敢えて言わないようにも見えた。

「フン。まあいい。それも聖騎士としての意地だろう」

そう言った時、急に周りが騒がしくなった。

前方の手下達が、弾かれるように宙に舞う。

同時に近づく気配。エンテロには懐かしささえ感じる気配。

その気配の主は、ケファノスだった。

馬を止め、倒れ伏すシャクスもとの下に降り立ち抱き上げた。

「シャクス……………」

エンテロの問い掛けに答えなかったのは、ケファノスの気配を感じて僅かな体力を残していた為だろう。

「ケファノス……………クダイ達は…………？」

「案ずるな。無事ザンボルに向かっている」

「……………そうか……………よかった……………」

「すまない。もっと早く来るべきだった」

「……………いや……………これでいい……………これも運命だ……………がはっ」

血を吐きながら、ケファノスの手を残された精一杯の力で握ると、

「ただ……………クダイのことだけが心残りだ……………何も教えてやれなかった……………」

「そんなことはない。お前の……………聖騎士の魂はクダイにちゃんと伝わっている」

「……………フツ……………あいつは強くなる……………もっとクダイの成長を
見たかった……………」

「後のことは気にするな。余が全て引き受ける」

「ケファノス……………」

「なんだ？」

「クダイ達は俺の弟達も同然だ……………だから……………死なないように……
……………頼む……………」

「……………わかった。約束しよう。何があっても死なせたりはしない」
ケファノスの言葉を聞き届けると、静かに目を閉じ、薄い微笑みを
浮かべ息を引き取った。

「死ぬ間際まで仲間のことがよ」

「貴様には解るまい。命を捨てても守りたいと思う者の気持ちなど」
言い捨てたエンテロを睨みつけ言った。

「これは……………魔王様のお言葉とは思えませんねえ。もっとも、人
間に肩入れしてる時点で解り合うことなど不可能でしょうが」

「エンテロ。今しばらくその命預けておく。次に会う時、余と、余
の“仲間”達がサン・ジェルマンもろとも貴様らを葬ってやる。首
を洗って待っておけ」

シャクスの亡きがらを馬上へ乗せ、それから自分も跨^{また}がった。

「本気で魔族を裏切るおつもりですか？」

「図にのるな。貴様ごときに言われることではない」

走り去るケファノスの姿に見るは、魔王としての背中ではなく、限りなく人間に近づいた一魔族の背中だった。

ザンボルへ無事着いたクダイ達を出迎えたのは、ザンボルの兵士を従えたダンタリオン達だった。

「シトリーー!!」

いち早く双子の姉を目にしたシメリーが飛び出し、ひしつと抱き着いた。

「バカバカバカバカ!シトリーのバカバカバカバカ!」

「…………ごめんね、シメリー」

その様子を端から見るに留まれず、カカベルも駆け寄った。

ダンタリオンとカイクムも、一安心と瞬間思っただが、晴れないクダイと羽竜の表情、二人に手を取られ歩くオルマに違和感を感じた。

そして、愕然とする。

「オルマ……その目は……」

「……その声は、麗しの賢者様かい？」

そんな遊びはいらなかった。

声で判断したということは、見たまんま、目が見えていない……
……そういうことだ。

「説明は後だ。早く見てやってくれ」

羽竜が促すと、ダンタリオンはオルマを抱き上げた。

「やれやれ……今日はいろんな男に抱き上げられるねえ。ま、悪い気はしないけど」

シャクス、羽竜、ダンタリオン。心配されてる気持ち嬉しいのは本当だ。

「ダンタリオン！シャクスとケファノスが……！」

呼び止めるクダイの言いたいことはわかっていた。

「わかっていますよ。カイクム、お願い出来ますか？」

「ああ。行つて来る」

まだ帰らぬ二人の仲間の下へ。もと

「よしっ！クダイ！カイク！俺の手を取れ！」

羽竜が炎翼を広げる。

言われた通りに二人は羽竜の手を取る。

「クダイ！」

「大丈夫。行つて来るよ、シトリー」

日の昇った空へ飛んで行く。

悲報を…………報されるとも知らずに。

運命。人の力の及ばぬ事。

未来。まだ訪れない時。

- 運命は決まっている -

- 未来は決まっている -

努力という力を持ってしても抗あらがえない流れが、人の世には渦巻く。

そして、なにかもが実体の無い何かの支配下にある。

第八十二章 どちらが有利か？

「あなたも無茶をしたものです」

ザンボル城の一室で、オルマの目の傷口を診ている。

ダントリオンに医師としての資格はないが、それなりに知識はあり、外科的な診察ならある程度は可能らしかった。

肝心の傷はと言うと、美人であるオルマを知る者には、決して見せたくはないほど深かった。

まぶた 瞼の上からでも確認出来たケファノスとは違い、魔法で一度まぶた瞼の上から傷口を塞ぐ。それをした後でも、くつきりと残る傷痕が痛々しい。

「治らないんだろ？」

ケファノスが覚悟しろと言ったのだ、予測はしていた。

言えずにいるダントリオンは、普段のニコニコ顔はしていなく、滅多に見せない真剣な表情で歯を食いしばっている。

好きな女へ何もしてやれない無能を呪ってた。

「いいんだよ。シトリーが生きてくれたんだ。これは勲章だよ。」

まあ、シトリーを助けたのはクダイなんだけどね」

「……………もういいです。もういいんですよ……………オルマ」

「ダントリオン？」

「なぜ泣かないのです？これからあなたは、光の無い世界で生きて行かねばならないのですよ？命懸けで助けようとしたシトリーの顔

も、愛したシャクスの顔も……私の……微笑みさえ見れない世界で……これから先、どんな人生が待っているのか。泣いて下さい。私には、あなたを抱きしめることも出来ない」

ダンタリオンの優しさを痛感した。ただ俯き肩を震わせるお調子者を、オルマは自分から包み込む。

ここにも一人。自分を心配してくれる人がいる。

言ってやろうと思つてたことも呑み込む。ダンタリオンは心の中で、自分自身を責めているからだ。

実際、職務を優先させたことを悔いているのが解る。

「……………バカだねえ。男のくせに」

そう言いながらも、甘えて涙の訪問を許した。

森を疾走する馬を上空から見つけた。
それがケファノスであることは明白で、羽竜達はその前に降りた。

「ケファノス！無事だったんだね！」

喜ぶクダイの笑顔を、ケファノスは歓迎出来なかった。

「ん？シャクス……寝てるの？」

疲れて寝てるなどあるものか。

カイムは察してクダイの肩を掴む。

その表情が悲しみに堪えているものだと知り、クダイの表情もまた急変する。

「…………間に合わなかったか」

羽竜が呟いた。不安は的中したのだ。

「余が駆け付けた時には、既に息絶える間際だった」

うなだれるシャクスが生きているのなら、ケファノスに身を任せるようなことはしないだろう。

「冗談言つなよ…………シャクスは聖騎士なんだ…………そんな簡単に死ぬわけないよ…………」

カイムの手を離れ、フラフラと馬上のシャクスを見上げる。

「シャクス…………起きてよ、寝てる場合じゃないよ…………ねえってば！シャクスッ！」

「お前のことだけが心残りだったらしい」

「そんな…………嘘だよ…………嘘だって言つてよ！！」

初めはシャクスを嫌っていたクダイも、今は慕っていたことがわか

る。

ケファノスは、

「クダイ。シャクスの心を継いでいるのはお前だけだ。それを忘れるな」

「うう……………うわああ……………シャクス……………シャクスー……
ー……ッ……！！！」

まだ教わりたいことがたくさんあった。

一人っ子のクダイには、良き兄であり、師匠でもあった。

一人泣き叫ぶクダイに、ケファノス達は何を思うのか。

「来たか。サン・ジェルマン」

バチルスの前に姿を見せた初老の紳士は、いつになく険しい表情を崩さなかった。

その表情の意味するところは、バチルスには十分理解出来た。

「よもや、会って間もないお前さんを頼らねばならぬとは……………人生とは理不尽なものよ」

サン・ジェルマンにもはや恥も外聞もなかった。

思いの他、手強いクダイ達。自分の下から去った黒仮面。一刻でも決着を着けねばならない。

「サン・ジェルマン。貴様の野望に付き合ってやる」

「私の野望を知って言ってるのか？」

「もちろんだ。時間の終着だろう？面白いじゃないか」

面白い？バチルスがそんなことを考えてるとは、百歩譲っても思わない。

「……………知っていながら力を貸すと？見返りは何を求む？」

「ダークエネルギー。強さが欲しい」

「それならお安い御用だ。だが、強くなってどうするのだろうか？」

「ケファノス様に引導を渡す。それだけがワシの望みよ。魔族の未来など興味はない」

それが本心かどうかは胡散臭いところだが、せつかくの協力の申し出を拒む理由もないし、利用出来るのなら大いに利用するだけ。

「まずは最大の邪魔者、黒仮面をどうするかだが……………」

「奴はワシが始末を着けよう」

「甘く見ない方がいい。奴は闇に身を置く者。そう簡単には倒せん」

「だが、ダークエネルギーさえあれば、それも難しい話ではない………違うか？」

その自負があつたからこそ、サン・ジェルマンは黒仮面を傍に置いていられたのだ。なにもかも見透かしている。

「フフ………そういうことだ。では早速計画を立てるとしよう。最後の戦いの………な」

第八十三章 泣けない想い

シャクスの悲報を聞き、誰もが泣き崩れた。シトリーも、シメリーも、カカベルも。涙は見せなかったが、ダンタリオンもかなり落胆していた。

なによりも、オルマは一生涯分くらいの涙を流したかもしれない。

あのシャクスが死んだなんて、誰も信じたくないのだ。
ザンボル国王は、シャクスの死はこれからの人類の礎になるものと、国を上げての盛大な葬儀を執り行ってくれた。
いしすえ

本来なら、シャクスの故郷エルガムに帰ってやるべきことなのだろう。でも、各国の王達がそれでは納得しなかったのだ。

それは誇るべきこと。聖騎士シャクスは世界から認められたのだ。

葬儀は、カカベルの主導で行われた。ケファノスが提案したのだ。

当然、経験のないカカベルは躊躇っていたが、仲間の為にと承諾してくれた。

ザンボルの神父や神官から、何度も段取りを教わり、見事やったのけた。きっとシャクスも喜んでいるだろう。

シャクスの亡きがらは、とても艶のある黒い棺に入れられ、エルガムへ送られることになる。

「シャクス……………」

クダイは涙を腕で拭い、しっかりと見届けようとシャクスの棺を見ていた。

その横で、涙も見せずただ眺めているだけのダンタリオン。

親友の死を悲しんでないわけではないだろうが、しつくり来な

い。

「悲しくないのかよ」

だからこんな聞き方になる。

「そんなことはありません。十分に悲しいですよ」

「じゃあなんで泣かないんだよ」

「なんで……と言われましてもねえ」

ダンタリオンのいつもと変わらない調子がム力つく。もっと泣くものだと思っていた。なのに、クダイの問いに困りながらも、微笑みすら浮かべている。

「シャクスは親友だったんだろ。こんなに薄情な奴だなんて思わなかったよ。ダンタリオンの分まで僕が泣いてやる」

「……………お願いします」

胸の中。きつとクダイにもダンタリオンにも同じ想いがあるはず。

悲しみの重さ故、涙など悲しみの基準にはならない。少なくとも、シャクスの忘れ形見の前で涙は見せられない。そういう想いもあるのだと、クダイは知らない。

- 夜中 -。

嫌味なほど涼しく過ごしやすい夜だった。

シャクスの葬儀も終了し、ザンボルの国も静まり返る。

ふらりとテラスにやって来たダンタリオンは、先客がいたことに気付いた。

「あなたもおいででしたか。ケファノス」

魔王だからだろうか、やけに夜が似合う。

「……………眠れなくてな」

魔界を取り囲むように、既に海の上にも兵を配備している。後は攻め込むだけ。

シャクスの葬儀がありごたごたとしたが、明日には攻め込む時期を決定する。

「私もです」

無理もない。シャクスはダンタリオンの親友。ケファノスにとっても大切な仲間だった。

ダンタリオンはテラスの手摺りに手を着くと、

「シャクスは自分の兄に憧れ聖騎士になりました。非の打ち所も無い人物で、まさに鏡となる人でした。ですが、その兄が戦争で命を落とすと、周囲はシャクスにその代わりを期待したのです」

勝手に話し始めたダンタリオンの話を、ケファノスは黙って聞いていた。

「しかし、シャクスには荷が重い期待でした。いつしか彼は、強くなることで兄の影を追うようになり、自分というものを見失っていたのです。……それが、クダイと出会い、気付けばクダイの為に道を作ってやりたいと思っていたのでしょうか、訓練と称しながら剣を振るう彼は、愛に溢れていたように思えます」

「それはお前も同じではないのか？」

「……………お互い様でしょう」

暗くてよくは見えないが、ダンタリオンは声のトーンとは裏腹に、笑ってはいないようだった。

始まりはどこからなのだろうか。人間と魔族の戦争？ 違う気がした。

始まりは、クダイがジャスティスソードを手にしてからではないだろうか。

あの日から世界がおかしくなっていた。

そして気付けば、交じり合うはずのない者達が隣にいる。

それが成るべくして成った結果であるのなら、シャクスの死もまた、成るべくして成ったこととも言うのか。

「認めたくも信じたくもありませんね」

わなわなと、手摺りを掴む手が揺れている。

力なく呟いたダンタリオンの心中は、ケファノスには手に取るようにわかる。志しを共にする仲間の証拠だろう。

「…………泣きたくば泣くといい。誰も責めはせん」

「…………ありがとうございます」

それでも嘔^{おう}咽^{いん}しながら、静かに友の死と向き合っていた。

第八十四章 黒い力と闇の力

「よう。みんな探してるぜ」

「羽竜………」

「ミーティングだってよ。最後の戦いに向けての」

城内にある噴水広場の片隅で、クダイは空気の原子でも見てるかのよう、虚ろな目で座り込んでいた。

「行けよ」

クダイがシャクスのことで落ち込んでいるのはわかる。だからと言って、羽竜はクダイに同情するつもりはない。

「聞いてんのか？」

「……聞いてるよ。悪いけど、一人にしてくれないか」

はあ……と溜め息が地を這う。

「そいつは出来ない相談だ」

クダイはじつと羽竜を見た。

暴言を吐かれたと思ったのか、少しキツイ目をした。

「僕が参加しても意味ないよ。ケファノスとダンタリオンが出席してれば十分だし」

「……………そんなんじゃシャクスも浮かばねーな」

「何っ？羽竜に何がわかるってんだ！ほっといってくれて言っただろ！うるさいんだよっ！」

勢い余って立ち上がり、羽竜の胸倉を掴む。どこから借りたのか、羽竜には似合わない貴族の服なんか召してるから、余計に腹が立つ。

「大切な仲間が死んだんだ！ミーティング？ふざけんなよ！どいつもこいつも口を暇さえあれば会議ばっかしやがって！シャクスは世界の犠牲になったんだ！もっと悲しんでやっただっていいじゃないか！」

「そういう男だったのか？」

「え？」

「シャクスは、自分の死をいつまでも悲しんでもらいたい。って言うような、女々しい奴なのかって聞いてんだよ」

「それは……………」

「命を捨てて俺達を逃がしたのはなんでだよ？俺達に世界を託したって意味じゃねーのかよ？」

「……………だけど……………僕に何が出来るんだよ。サン・ジェルマンに剣は通用しなかった。魔法も効かない。シトリーは助け出せたけど、もう手詰まりだ。頑張ったけど、正義なんて所詮こんなもんさ。僕達の正義なんて、サン・ジェルマンの足元にも及ばない」

「……………つたく。めんどくせー野郎だぜ」

羽竜は頭をポリポリと掻くと、クダイの下腹をおもいつきり殴り付けた。

「ぐはっ……………」

崩れる寸で髪をわし掴みにし、

「な……………何するんだ……………」

「ム力つくんだよ。大切な仲間が死んで出た言葉が、手詰まりだと？フン、これじゃあシャクスも犬死にだな」

「……………シャクスを馬鹿にするな」

「オメーだろ」

ぐわっとクダイの髪を押し離す。

「それに、正義なんて言葉に振り回されてんじゃねーよ。んなもんな、世界のどこを探したってありやしねーんだよ」

「そ……………そんなことないよ！僕達は、僕の信じる正義の為に戦って来たんだ！」

そこを否定されては、今までの苦勞そのものが否定される。

「なら聞くけどよ、サン・ジェルマンやヴァルゼ・アークには正義

はねーのかよ?」

「あいつらには…………正義なんてきつと無いに決まってる」

「まるでわかってねーな。アイツらはアイツらの正義で戦ってるんだ。そう考えると、正義なんて使う奴によって意味が変わる魔物なんだよ」

クダイを諭したつもりだったが、それはかつて、羽竜が黒仮面ヴァルゼ・アークに言われた言葉だった。

あの時は、今のクダイと同じだった。正義を信じて、それだけがヨリシロだった。それが、永い時間を旅するうちに、生きて行く上での枷かせでしかないと知った。

「まあいいや。そんなに考え込まなくても、ヴァルゼ・アークはサン・ジェルマンの倒し方を絶対に知ってる。必ず手立てはあるはずだ」

顎に手を宛て、羽竜は少し考え込む。そして、

「いいぜ。直接聞いてやる」

「羽竜?!」

「お前も来るだろ? アイツのことだ、どうせその辺で野宿でもしてるだろうぜ」

「野宿って……………」

そんなもんなのかと問い返したいところだが、

「そういう奴なんだよ」

屈託の無い笑顔で腕を掴まれ、

「ちょ……………羽竜!!」

有無を言わず、空へと飛び立った。

「お目覚めですか？」

陽射しと共に、セルビシエの顔が視界を独占した。

「ウフツ。お疲れでしたんですね。深く眠っておいでした」

黒仮面はもたれていた大木から上体を起こすと、

「……………そんなにか？」

そうセルビシエに聞いた。

「はい。“そんなに”でございます」

ケファノスがシャクスの亡きがらを回収したところで去って来た。
それからはあまり覚えていない。

なぜか嬉しそうにしているセルビシエに、

「何かあったのか？」

「いえ。どうしてでございましょう？」

「いや。やけに嬉しそうにしてるからな」

「ああ。それは、ヴァルゼ・アーク様の寝顔が可愛らしかったもので。あっ！素顔を見たわけではございませんので、ご心配なく！」

「……………やれやれ。まるで子供だな。そんなことが嬉しいのか」

「いけませんか？」

「……………いや」

セルビシエが嬉しいのはそれだけではない。もうじき、共に別の世界に行けるからだ。もちろん、サン・ジェルマンの必要とする力が、黒仮面の求む力と同等ならば、一仕事こなさねばならないが。

「……………それにしても腹が減ったな」

「まあ。ヴァルゼ・アーク様ったら」

「？」

「まるで子供ですわ」

「……………」

一人はしゃいでいるのを止めるのも心苦しく、苦笑だけで済ませておいた。

「近くに町がございます。そこで食事を……………」

そう言った矢先だった。どす黒い気配が辺りを包む。

「ヴァルゼ・アーク様……………」

「……………この気配の強さは……………」

ダークエネルギー。時間の断片に籠る暗黒の力。

「気をつける。セルビシエ！」

何か……………来る！

「あ……………あれは！！！」

セルビシエが見たのは、黒い光が何かの形を作って行く様。やがて、それはセルビシエの知る人物へと姿を変える。

「バ……………バチルス將軍！！！」

「セルビシエ……………よくよく裏切るのが好きらしいな」

魔界將軍バチルス。

だが、よく知るバチルスとは気配が明らかに違う。

「バチルス。何をしに来た？」

黒仮面が………焦りを見せている。空腹からではないだろう。きっと、バチルスの異常な気配のせいだ。

「クツクツ。何をしに来ただと？決まっておる。邪魔者と裏切り者の始末に来たのだ」

曲刀を既に手にしている。本気だ。

「ヴァルゼ・アーク様、お下がり下さい。ここはわたくしが………」

「いいや。お前では敵わん」

厄介なことになった。まさかサン・ジェルマンが、ダークエネルギーを使うとは予想していなかった。

ダークエネルギーは貴重だ。シトリーを使って急速に集めはしていたが、時間軸を融合させるには至るほどではない。

それを、ここまでバチルスに与えたのだ。

これでは、セルビシエでなくとも勝てるか危うい。

「覚悟しろ。黒仮面。まずは貴様からだ」

逃げる選択は出来そうにない。

黒仮面はゆっくり剣を抜き、

「俺を甘く見るなよ。貴様らが思うほど弱くはないぞ」

その髪が真っ赤に染まる。それと合わせて、耳の上の側頭部から角が現れた。

「ヴァルゼ・アーク……………様……………？」

バチルスの気配に負けず劣らず、凄まじい気配を醸し出す。かも

セルビシエの知らない“ヴァルゼ・アーク”だ。

「力を隠していたか。クツクツ。まあそうでなくてはつまらん。せつかくのダークエネルギー、存分に試させてもらおう」

ゾクゾクする感覚が背筋を這う。バチルスはその感覚に陶醉しきっている。

「試す前に終わらなければいいがな」

世界の均衡が崩れ始まった。

第八十五章 心情

自分の存在など無に還されてしまうほど、黒仮面とバチルスの戦いは凄まじいものだった。

サポートすら足手まといになるだろうと、セルビシエは黙って見守るしか出来ないでいる。

愛する黒仮面の真の力。卓越した何かではなく、世界に彼自身を刻み込むほど誇示する。

一度黒い刃を振るえば、木々は薙ぎ倒され、大気が振るえ、上空の雲さえも吹き飛ぶ。

それはまさしく神の力だった。

「判断を誤ったな。バチルス。俺を負かすには、お前では役不足だ」

「ぬうう……………っ。信じられん強さだ。これほどとは思わなんだ」

「一体どれだけの時間と世界を旅して来たと思っている？貴様程度の奴なら五万といたよ」

「何を！小生意気なっ！」

黒仮面は極力、行く先々での世界に干渉を控えたいと考えている。干渉すると必ず予期せぬ事態を招き、收拾が着かなくなる。

特に、隠蔽していた強さを表に出すことだけはしたくなかった。

「知ってるか？宇宙には心がある。その宇宙の心が、貴様の運命は俺に倒されると決めているらしい」

左の口角がぐつと上がる。負けるとは思っていない証拠だろう。

「ほざけっ！」

そう思ってないバチルスは、策も無く黒仮面に飛び掛かる。

それは將軍と呼ばれる者にしては、あまりに稚拙な行為。

「ワシは負けんっ！！貴様も、サン・ジェルマンも倒し、時間構築^{トル}魔法具で新たな世界を築くのだっ！！」

自らが好んだ力の及ばぬ事実が、無謀な判断だけを生んでいる。

「所詮は脇役。引っ込んでろ」

軽く言っつて、バチルスの右腕を肩から切り裂いた。

「ぐおおああああーっ！！……………ぬ……………お……………おのれっ！
黒仮面ッ！！」

「違うな。俺の名はヴァルゼ・アーク。魔帝ヴァルゼ・アークだ」

「貴様は……………！貴様だけは八つ裂きにせんと気が済まんっ！！」

「やってみろ。ポーンがキングを一人で追い詰めることはないことを知るだけだ」

自信を誇るのが気に入らない。バチルスは負ける気など毛頭ないが、一矢報いねば逃げ帰ることも出来ない。

「どうした？せっかくの貴重なダークエネルギーが勿体ないぞ」

傷口からダークエネルギーが漏れている。

失態。サン・ジェルマンにも予測出来なかった黒仮面の力の前に、如何様な判断をするか模索していると、ふと“いい”考えがよぎる。

「黒仮面よ……いや、ヴァルゼ・アークと呼んだ方がいいか」

「……フン。何か良からぬことでも思い付いたか？」

「グフフ……一つ聞こう。戦いに犠牲は付き物だよなあ？」

「当然だ」

「だよなあ……なら犠牲になってもらおう……貴様になッ！
！！」

おもいきり込めた魔力を放って来た。それはレーザーのように細い光線ではあるが、威力は申し分ないもの。

黒仮面は向かって来る光線を睨み据え、“余裕”でかわした。風圧で仮面が傷を負ったが、蚊に刺された程度のものくらいにしか思っていない。

魔力を込めた割りに、一直線に飛ぶ光線だった理由。おかしいと思わなかったわけではないが、有利に立つたことが悲劇を招いた。光線は黒仮面を狙ったわけではなかったのだ。“かわしてもら”う”為に魔力を込めただけで、狙いは黒仮面の後ろに立つ……。

「しまっ……避けるッ！セルビシエ！！」

光線が通り過ぎる間際、バチルスと思惑に気付き、振り向き叫んだが、セルビシエの心臓を既に貫通していた。

「あ……………」

痛みは一瞬で、セルビシエ自身、何が起きたのか把握出来ないまま膝から落ちる。

「セルビシエ……………セルビシエ！！」

黒仮面は慌てて駆け寄る。バチルスはその隙を突いて、

「確かに犠牲は頂いた。グフフ。次は必ず貴様も殺す！黒仮面ツ！！」

「待てッ！バチルス！！」

逃げて行つた。

「クソッ！」

歯を食いしばり、不覚を取った自分を責めた。

「……………様……………ヴァルゼ・アーク……………様……………」

「しっかりしろ！何も喋るなッ！」

傷口に手を宛がい、出血を止めようとする黒仮面の手を、セルビシエは弱々しく触れる。

「……………すみません……………わたくし……………」

「すまない。油断した」

判断を誤ったのは自分だった。

セルビシエを遠ざけておくべきだった。

「い……いえ……ただ……」

「ただ？ただ何だ？」

「一緒に……行き……たかった……あなたと……別の世界に……」

「……セルビシエ」

「お願いが……あります……」

「……言ってみろ」

「お……お顔……を……一度……でいい……から……」

黒仮面は仮面を外し、その素顔をセルビシエに晒す。

「……フフ……思った通り……優し……い……お顔……
ヴァルゼ・アーク……様……どう……か……どうか……」

その後の言葉は声にならないまま、セルビシエは目を閉じた。涙を一筋流して。

「セルビシエ……」

魂の無いセルビシエをぐつと抱き寄せ、

「おのれっ！バチルスツ！！断じて許さんぞ！！！」

怒りは頂点に達した。

黒仮面は外した仮面を、セルビシエの顔に被せた。

「あの世で自慢するといい。魔帝に愛された女だと」

口元の開いた仮面に涙が落ち、それを隠すようにセルビシエに口づけをした。

それは長く、熱かった。

そこへ、クダイと羽竜がやって来た。

「尋常じゃない気配を感じたけど……………」

羽竜は言いかけ、辺りを見て、

「先客があつたみたいだな」

そう聞いた。

「あ、あの髪……………」

クダイは、見たことのないくらい鮮やかな赤い髪に見惚れてしまった。

その人物が黒仮面であることは、羽竜の態度を見ればわかるが、やはり状況は把握出来ていない。

そして、黒仮面が口づけをしているセルビシエから、何かが滴る。黒いボンテージドレスを着ている為、最初はそれが何かはわか

らなかったが、草の上に落ちてようやく血液が滴っているのだと解った。

「……………死んでるのか？」

多少、遠慮がちに羽竜が聞く。

「……………無邪気な女だった」

そう答えた黒仮面は、セルビシエを抱いて立ち上がり、クダイと羽竜に振り向き、

「何しに来た？」

そう問う。その姿に、クダイは息を呑む。

赤い髪と二本の長い角。そして、羽竜の持つトランスミグレイションよりも深い紅色の瞳。

悪魔の神だと言った、羽竜の説明に納得した。

「あ、あのですね……………」

「サン・ジェルマンの秘密、教えてくれよ」

クダイを遮り、羽竜が尋ねる。

「……………聞いてどうする？」

「決まってるだろ。倒すんだよ」

「俺がわざわざ教えてやろと思ったのか？」

「思ってねーけど……聞くしかねーだろ。クダイの話じゃ、剣も魔法も通用しねーらしいじゃねーか。時間がねーんだ、教えてくれ」

「断る」

「………なんでだよ。この有様を見る限り、サン・ジェルマンとも手を切れたんだろ？ だったら都合悪いことなんて何も無いはずだぜ」
剣までも通用しないのなら、羽竜であつても倒すのは不可能。回りとくどい言い方をせず、ストレートに聞いたのには、そういう理由がある。

「敵に塩を送るつもりはない。自分達で暴くのだな」

そう言うと、黒い翼を開く。大小合わせて四十八枚の。

「待って下さいっ！」

羽竜が諦めようとしてるのを察し、クダイが呼び止めた。

「お願いします！ こんなことを聞くのは筋違いなことは解っています！ だけど、僕達は勝たなきゃならないんです！」

「………何の為にだ？ ここはお前の世界じゃない。命懸けの戦いをして利益があるのか？」

「利益なんて………僕が戦うのは、仲間の為です！ 仲間の未来と………死んだシャクスの仇を取る為に戦うんです！」

「……………」

サン・ジェルマンと手が切れたとは言え、時間軸を融合する力があるのなら、それを奪うのが目的。その前に倒されてしまえば、自らの野望を台なしにしてしまう。

だが…………

「サン・ジェルマンの使ってる時の秘法とは、常時魔法のことだ。絶えず大量の魔力を循環させておく必要がある。奴は存在しているが、循環している大量の魔力の影響で、一見、無敵に見えるだろうが、魔力の流れを遮ればそこに隙が生まれる」

「その方法は……………」

「俺が教えてやれるのはここまでだ。後は自分達で考えろ」

「あつ！待って……………」

クダイはもう一度呼び止め、

「ありがとうございます！」

深々と頭を下げた。

その様子に、羽竜は驚いていたが、

「……………礼を言われる覚えはない」

冷たくあしらって去った。

「ま、ヒントはもらえたな」

「うん。羽竜、早く帰ろう！仕組みがわかったなら、ケファノスがダンタリオンなら解るかもしれない！」

収穫はあった。これでサン・ジェルマンへの勝機が伺えた。

「よしっ！飛ばすぞ！しっかり掴まれよ、クダイ！」

「最後の戦いだね！」

解き明かされた、時の秘法の仕組み。後はサン・ジェルマンを倒すだけ。

第八十六章　その先へ

「クダ〜イ！羽竜う〜！」

尖んがった耳をピクピクさせながら、居なくなった二人の探索をシメリーはしていた。

カカベルとシトリーも別の方を探索している。なにぶん、広いに輪を掛けた広さのザンボル城。どの場所へ行くのも新地に来たような感覚になる。

「んもうっ！どこ行っちゃったねお？状況読めてんのかしら?!」

ぶつぶつと愚痴り庭園を歩いていると、一人の神官がうつろいついていた。その神官は、シメリーがキョロキョロしている姿を見て、声を掛けて来た。

「どうかしましたかな？お嬢さん」

「あ……」

慌てて耳を隠そうと思ったが、城の敷地内にいるのだから、関係者なのだと思い直し手を下ろした。

「あのう、男の子二人見ませんでした？なんか頼りないのと、やんちゃそうな……」

頼りない〓クダイ。
やんちゃ〓羽竜。

それがシメリーの二人に対するイメージらしい。

「さあて。見んかったな。何せ、ここに来たばかりでね」

「そうですかぁ……………」

来たばかり。きっと他の国の神官なのだろう。

「……………それにしても、今日はこの前と違って穏やかな口調ですな」

「は……………はい？」

神官に知り合いはいない。何を言ってるのか首を傾げていると、

「私を忘れてたなどとは言わさんよ。エルフの王女様」

「だ……………誰……………？」

悪意のある気配。自分が狙われているのだと知る。

「誰？これはおかしな。記憶でも失くしたのか……………」

「……………まさか、サン・ジェルマン?!」

「クッククク。ようやく気付いて頂けましたか」

途端、サン・ジェルマンは魔力でシメリーの自由を奪う。

「あ……………な、何するの?!」

「エルフの王族の魔力。捨て置くと思いましたがな？」

「わ…………わ、私は…………！」

勘違いしている。サン・ジェルマンはシトリーだと思い、シメリーに接している。それが解ってしまったシメリーは、自分がシトリーではないと知れば、彼女をまたさらうのではないかと考え、

「私をさらっても、きっとまたみんなが助けてくれる！そしたら、今度こそ終わりよ！サン・ジェルマン！！」

敢えてシトリーを演じた。

「私が終わる前に世界が……………時間が終わるのだよ」

それに気付かないサン・ジェルマンは、そう言つと、シメリーを連れ去つた。

クダイ達が戻つたのは、それから数時間後。既にシメリーの行方が知れないことで、大騒ぎになっていた。

「何かあつたのかな？」

クダイがのんきな口調を見せると、

「また嫌な予感がするぜ」

羽竜が言った。

「クダイさ！羽竜さ！」

空から降りて来る二人に、カカベルが駆け寄る。その表情から、ただ事でないことは確かだった。

「どこさ行つてただ！」

「どこつて……………」

黒仮面に会つて来たと言つたら、ひょっとしたら怒られるかもと、クダイは口をつぐんだ。話すなら、ケファノスかダンタリオンの方が話が早い。

「それより、なんかあつたのか？」

同じことを思つたのか、羽竜が話を逸らすと、

「んだ！シメリーがさらわれただ！」

「な、なんだつて?!」

「兵士の一人が見てたらしいべ！見慣れない神官と消えるのを！」

「カカベル、それ本当なの?!」

「嘘さ言っでどうすんだ！大体！クダイさと羽竜さが居なくなったのが原因だべさ！みんな探してただぞ！何回もおんなじことやって何考えてるだか！」

「う……………そんなこと言われても……………」

クダイも、それを言われては何も言えない。

そこへ、ケファノスがやって来た。

「クダイ！どこへ行つてた！」

珍しく……………と言うか、初めて口調を荒くしている。相当、心配させたのと、シメリーのことで神経を尖らせている。

「ヴァルゼ・アークのところだよ」

見兼ねて、羽竜が口を挟んだ。

「黒仮面のところか？一体何をしに……………」

「サン・ジェルマンの秘密を知ってるのはアイツだけだ。だから直接聞きに行つて来たんだ」

悪びれもなく羽竜が言った。言い訳をする気はないが、不可抗力なことでクダイが責められるのはいい気分がしないからだ。

「二人ともどこに行つてたんだ？！」

すると、また同じようなことを言いながら、カイルが来た。その後

るにシトリーとダンタリオンもいる。

「クダイ！シメリーが……！」

泣きそうな顔でしがみついて来たシトリーの肩を、クダイはそっと抱きしめ、

「ゴメン。僕達が勝手にいなくなったから……」

シャクスの二の舞には出来ない。そう思い、クダイは全員に、

「でも、サン・ジェルマンの秘密が解ったんだ。次で最後だ。全て終わりに出来る！」

切り出した。

「…………それは本当なのですか？」

確認もしたくなる。ダンタリオンは穏やかに言ったが、顔は驚いているようだった。

「本当だ。ヴァルゼ・アークは嘘は言わない」

羽竜はそう言うと、更に続けた。

「サン・ジェルマンは常時魔法で存在してるとか言ってた。常に魔力を循環させてるから、剣も魔法も通用しないんだって。倒し方まではさすがに教えてくれなかったけどよ、それが解っただけでも光明が射したってことだろ？」

それを受けて、ダンタリオンは、

「……………常時魔法……………ですか。……………わかりました。それは大きな手掛かりです。いずれにしても、シメリーを助けに行かねばなりません。クダイ、あなたの言う通り次が最後の戦いです。行きましょう。サン・ジェルマンのところへ」

「準備はどのくらいかかる？」

「一時間ほどで」

ケファノスが聞くと、そう答え、

「皆さん。一時間後に出陣出来るよう、段取っておきますので、それまで身体を休めておいて下さい」

出陣の約束をする。

それは、例え国が認めなくとも、ここにいる者達だけで戦う意志の表れ。

きつとその一時間で、ダンタリオンが常時魔法……………時の秘法の解除方法を探してくれる。クダイと羽竜はそう期待する。

何度もやり直せたとしても、満足する答えは得られない。だから最後にする。サン・ジェルマンとの戦いに終止符を打たねばならないのだ。

その先の光を見る為に。

第八十七章

r e g r e t & a m p ; t i m e

「始まるんだね」

部屋に入って来た足音と気配で、誰が入って来たのか解る。意外と自分の感覚も宛になるものと、オルマは自画自賛してみた。

「目が見えないのに、中々鋭い感覚ですね。オルマ」

窓際の椅子に座るオルマは、見えるはずのない空を見ている。

ダンタリオンはその脇に立ち、同じ空を眺める。

最後の戦いのわずか一時間前だというのに、あまりに快晴の空。この空とも、同じ命運を分けるのだ。

「戦いの中で、いつの間にか気配を読むのが染み付いてたんだねえ。皮肉にも、目が見えなくなつて、その成果が表れたつてことさ」

目が見えないことに慣れたわけじゃない。つい先日のことなのだ、そう簡単には受け入れられないが、戦いに赴くダンタリオンには余計な心配はかけられない。

「……………シャクスの仇。きつと果たして見せます。ですから、あなたはここで祈っていて下さい」

「ああ。アンタに任せるよ。ダンタリオン。でも、サン・ジェルマンには時の秘法があるんじゃないのかい？アンタやケファノスが居ても、攻撃が通じないんじゃない……………」

「それなら心配ご無用ですよ。クダイと羽竜が、黒仮面に直に聞い

て来てくれました。伯爵の秘密をね」

「信用出来るの？黒仮面は敵だよ？わざわざ教えてくれるなんて、裏が在りそうじゃない？」

「どうでしょうね。羽竜と黒仮面には不思議な絆を感じます。彼らは、敵同士でありながら、お互いを強く信頼しています。裏が在るとは思えません」

「確かに。羽竜の話を聞いてるだけでも、そう思うしね」

強烈な印象を残す二人だから納得してしまう。羽竜は黒仮面を倒す為に追っていると言いながら、平気で彼を頼る。戦うべき状況を使い分けているように。

黒仮面もまた、その気になればいくらでも自分達を追い詰められたはずなのに、彼自身の手でそれをしなかった。まるで、この世界を監視しているかのように。

「シメリーも無事に助けてあげて」

不意にオルマが言った。本当は自分が行きたいのだ。可愛い妹分を、死なせたくないから。

「ええ。解っています」

オルマが拳を強く握っている。何も出来ないことが悔しいのだろう。

「では、行ってきますよ」

「ダンタリオン」

「はい？」

「アンタまで……死なないでよ」

「……もちろんですよ」

そう答えて扉のノブを掴んでから、ダンタリオンはオルマに背を向けたまま、こう聞いてみた。

「オルマ。あなたは時間を戻せたら……そう考えたことはありますか？」

それは唐突な質問で、真意を問えるものではなかった。

「どうしたんだい？急に……」

「……いえ。私はたまに考えるものですから。過ちを正したいとか、後悔のイレースではなくて、もっと根本的なものなのですが……まあ、気にしないで下さい。独り言です」

真意の問えない疑問を残し、ダンタリオンは部屋を出た。

「ダンタリオン………」

扉の閉まる音が、なぜか淋しげだった。

「お呼びですか？アイニ様」

カイムは、アイニに呼ばれ、ザンボル城でのアイニの部屋を訪れた。他人の城とは言え、やはりアイニは女王。それを感じさせない威厳がある。

「フム。入るがよい」

入口付近に立っていたカイムを近くへ呼ぶ。

エルフの国を出てから、随分と逞しい顔付きになった。実の息子であるカイムの成長が、アイニには嬉しかった。ただ、真実は打ち明けられない。飽くまで、女王と従者でしかないらしい。

カイムはと言うと、なぜ自分が呼ばれるのか解らなかった。戦いの前に話すのなら、むしろシトリーだろう。でなければ、二人でとか。それが、呼ばれたのが自分一人なのだから、無駄に警戒してしまう。

「カイム…… お前の活躍はエルフの名に恥じないものだ。この戦いが無事終わったなら、エルフの騎士隊長に任命しようと思う。…

……受けてくれるな？」

ハーフエルフであっても、もはやその立場を擲^や擲する者はいないだろう。そして、母親として何もして来なかったせめてもの罪滅^やぼし。カイムの立場をエルフの中で確立させてやることで、シメリーのカ
イムへの想いも成就させてやれる。そう思っていた。それが叶う。

……はずだった。カイルが拒否する瞬間までは。

「お言葉ですがアイニ様、そのような話をなさる時期ではないのでは？シメリーが連れ去られ、未だその命はサン・ジェルマンの手の中。とても聞く気にはなれません」

「……わ、妾わいわはそのようなつもりで言ったわけでは……」

「アイニ様、これだけは申し上げておきます。私はこの戦いが終わっても、エルフの国へ帰る気はありません」

「な……何を……！」

「いろいろ考えて出した結論です」

カイルの瞳が、厳しくアイニを見つめる。決意した瞳は、アイニの次の言葉を奪う。

「この戦いが終わったら、私はケファノスの下もとに行くつもりです」

「ケファノス……魔族側に着くと言うのか……？！なぜじゃ……なぜ……」

「せっかくハーフエルフとして生まれて来たのです。私にしか出来ないことをしようと」

「お前にしか……出来ないこと……？それは何だ？」

「魔族と人間、強いてはエルフの間を取り持つ大使として働きたいと思っています」

ハーフエルフのカイムだからこそ、中立の立場に立てる舞台がある。
クダイ達との旅が、カイムに生きる道を見出ださせた。ハーフエルフであることが足枷あしかせになっていた一昔前とは違う。ハーフエルフも立派な種族なのだと、世界で唯一人のハーフエルフが誇り高く言った。

「シメリーの気持ちはどうなる？お前を好いている。気付いてないわけではないのだろう？一緒になることも、叶わぬ夢でなくなるのだぞ？」

カイムに良き立場を与えたいと願うのは、これまで何もしてやれなかった母親としてのエゴであることは承知している。それでも、カイムが自分の手から離れて行くことに、アイニは納得出来なかった。

「シメリーとは身分が違います。彼女には、相応の男性がそのうち現れるでしょう」

「その身分を与えたいと申しとおるのが解らぬか？」

「なんとおっしゃられようと、私は私の道を歩きます。今までのご恩。決して忘れません。これが最後の挨拶です。お世話になりました」

エルフという種族との決別。これでスッキリした。心置きなく最後の戦いに赴おもむける。

長く頭を下げた後、アイニを見ることなく部屋を出た。

「カイム……………」

好きで女王になどなったわけではない。王位を継承するはずだったアイニの姉が生きていれば、惚れた人間の男とその間に出来たカイクと三人で生きて行けてたかもしれない。

もしあの時、カイクを我が子と勇気を持って公言出来ていたら……カイクに辛い思いをさせることもなかっただろうし、きっと自分も苦しまなかった。

「ああ………時間が………時間があの日に戻ったなら………」

女王ではなく、カイクの母親として生きる自分を選び直すだろう。

断罪された罪人のように、アイニは苦しむのだった。

第八十八章

A suffering and hope

その後ろ姿に、カカベルはどう声を掛けるか迷う自分に納得がいかなかった。

真紫の鎧。白い髪が気品を漂わせてはいるが、魔王なのだ。

「自分の国に攻め入る気分はどうだべ？」

「シスターか」

「フン、おめさんの国も、わだすの村のように滅ぼされちまうだぞ。いい気味だべ」

本音。……のはずなのに、心が晴れない。戦場になる魔界は、間違いなく壊滅するだろう。それは、願ってもないこと。そう思っているのに。まるで戯言のような自分の言葉が、胸をチクチクと刺激する。

「……………そうだな。シスターがそう思うのなら、そうなのだろう」

カカベルの気持ちは解っている。だから敢えて反論することはない。でも、カカベルにはケファノスのその態度が気に入らない。

「な……………なして何も言わねだ?!」

「だから言ったではないか。その通りだと」

「違うつ！本当はそつたらこと思ってねーくせにっ！わだすと言いかつのが恐いのけ?!ハッ！だとしたら、魔王のくせに情けねーべ

「！」

「……………ああ。恐いな」

「な……………っ！」

「シスター、この戦いが終われば、約束通り余の命を奪うがいい。そのかわり、余を殺した後は忘れることだ」

「忘れる……………つて、何をだ……………？」

「村のことも、余を殺したことも、引きずることなく生きて行け」

「……………っ！バ、バカこくでねえっ！なして、なしてわだすが心配されねばなんねだ！」

「純粹だからだ」

「じ……………純粹……………」

「シスターの目は、他の誰よりも眩しい。汚れなき琥珀の瞳。これから先、決して汚すな」

スツと上がったケファノスの手は、カカベルの頭を撫でると、落ちて着くべき場所へ落ち着いた。

そのままケファノスの足音が聞こえなくなるのを待ってから、膝を床に着く。

「……………なんでだべ……………わだすはケファノスを殺したいのに……………そう思えば思うほど、胸が締め付けられる……………」

誰かを殺してしまいたいほどの気持ちなど、実は重さの無い虚像。
“純粹” だと言ったケファノスは、カカベルが望むままを受け入れるだろう。でもなぜかしつくり来ない。

いや、カカベルは知っている。心の奥深く。ケファノスを殺しても、心は満足出来ないことを。

「……………あの日……………村が滅んだ日に戻れるなら……………わだすは死を選んだのけ……………」

自分に問い掛けるように呟いた。

生きる希望を与えた天使が、魔王ケファノスだと知ってしまったわなかったら……………カカベルは思いもよらないもうひとつの心を知る。

「ケファ……………ノス……………」

キュンと鳴る胸は、乙女の心だった。

（時間を戻せたら……………あの頃に戻れるのか……………？）

羽竜もまた、時間という絶対の力に逆らう夢幻ゆめまぼろしを見ていた。

いくつもの奇跡を目にして来たが、同じ数だけ絶望も見て来た。

夢を見れば、その大きさだけ苦しむ。そんなことをずっと繰り返す宿命は、羽竜の心を蝕んでいる。

（あんたは同じこと考えないのか……………ヴァルゼ・アーク……………）

不死鳥と呼ばれる少年。運命にほだされるように、人としての感情を捨てきれずにいた。

「クダイ……………それ、どうしたの？」

シトリーの前に現れたクダイは、白く高貴な鎧を身に纏っていた。細かい傷も多い。ただ不自然なのは、胸元に穴が開いていること。破損しているのだ。

その理由も、シトリーにはすぐに解った。

「それって、シャクスの……………？」

「うん。サイズを合わせるのにいろいろ部品とか交換したけどね。なんとか着ることが出来たよ」

そう言ったクダイは、どこか誇らしげで、嬉しそうだった。

細かい傷は、シャクスの歴史。誇らしげなものには、それも理由の

一つだろう。

「エルガムの王様がね、僕を聖騎士として認めてくれたんだ。もちろん、ケファノスやダントリオンの口添えもあったのだけど……変……かな？」

照れるように頭を掻く。

「うん。似合ってる。カッコイイよ」

「へへ。ありがとう」

「でも、破損したままでいいの？」

「うん。このままの方が、シャクスと一緒に戦ってるって思えるから」

シャクスが纏っていた時よりも、大分軽装ではあるが、紛れも無い聖騎士の鎧。

「あのさ、シトリー」「ねえ、クダイ」

不意に、二人同時に言葉を発した。

「あ……い、いいよ、シトリー先で」

「え……あ……クダイ先に言つてよ」

「じゃあ……二人一緒に」

せいの。と、息を合わせ、

「僕、この世界に残るよ」「私、クダイの世界と一緒に行く!」

互いの言葉に耳を疑った。

「シトリー……………」

「クダイ……………」

それは、二人の気持ちが通じ合っている証拠。悪い気などするわけもなく、

「帰らないって……………どうして?」

そう聞き返すシトリーの胸は、高鳴りを止められずにいた。

「……………僕さ、こつちの世界が好きなんだ。まあ、不便にも思っけど、みんなといるのが楽しいし、それに……………」

もじもじしながら、

「シトリーが好きだから。一緒にいたいんだ」

真っ赤になったのは、シトリーだった。

「ク、クダイ……………」

「聖騎士としてなんか、まだまだ未熟だけど、君に釣り合う男になる。だから一緒にいて欲しい」

断る理由などない。

「うん。いる。一緒に。私、クダイと一緒にいる！」

無意識にクダイの胸に飛び込むと、優しく包まれ、クダイの瞳に捕われる。

「ク…………クダイ…………？」

「サン・ジェルマンを倒して、シメリーを必ず助けるんだ！」

「……！」

矢先、クダイはシトリの唇を奪った。

「んっ…………ん……………」

最初はびっくりしたシトリも、クダイに身を任せた。

数秒後、唇を離れたクダイは、

「行こう！サン・ジェルマンを倒しに！」

シトリの手をぎゅっと握り走る。

何度も握ったはずの小さくか弱い手は、今日は温かく安らぎをくれた。

後悔あつてこそ現在^{いま}がある。数知れない後悔がクダイを成長させた。

クダイは思う。後悔することを避けてはいけない。後悔しない為に何が出来るか考えることが大切なんだと。

だから時間が戻せたらなどとは思わない。

時間を戻す力があつたなら、今ある全てを犠牲にしてまで、それを行使する勇気が人にはあるのだろうか？

自分という存在。それを問う時、人は少し神に近づく。

第八十九章 今日、明日のために

「ぐう……この漲る力……クックッ……この前は奴の思わぬ実力に失態を見せたが、もう負けぬ。今度こそ奴を倒し、サン・ジェルマンも、ケファノスも、あの世に葬ってくれるわ！」

新たに追加されたダークエネルギーは、バチルスに絶対の自信をもたらししていたが、それを許さない者がいる。

「あの世に行くのは貴様だ。バチルス」

漆黒の鎧に燃えるような赤い髪。

「ヴァルゼ・アーク！」

「俺を動揺させて隙を生む為、わざとセルビシエを狙ったな？」

「クックッ。だったとうだと言った。結局は貴様の不甲斐なさがセルビシエを殺したのだ。慢心というヤツだ。……確か、重力と空間を司る悪魔の神だったな？己の力に慢心する辺りは、正に神と言ふことか」

「黙れ。貴様ごとき烏合と、神のなんたるかを語る気はないが、そんなに神を知りたいのなら教えてやろう……」

悪魔の神は、黒い剣を手にし、

「神を怒らせた罪をなっ！」

「フン。ただか女ひとりの命に感情を乱すような弱虫に神が務まるのなら、いっそワシが神としてこの世界に君臨してやるっ！」

セルビシエの仇討ちを。

神の心は怒りに満ちていた。

憎い演出だった。魔界を取り囲む人間とエルフの軍勢。対峙するは夥しい数の魔族の群れ。おびただ

空は黒い雲に覆われ、所々からオレンジ色の光が見える。

緊張が熱気を呼び、クダイ達の心に決意と覚悟をねだっているようだった。

「後悔はなさいませんか？」

そう聞くダンタリオンの表情も、今日は涼しい笑みを失くしている。

「何をだ」

聞かれた方のケファノスは、いつもと変わらない表情を見せている。緊張とは無縁と言いたげな魔王は、ツンとした態度で応えた。その質問の意味を理解しながら。

「何を？ここはあなたの国です。ご自分の国が戦場になるのですよ？」

「……………困る。……………と言ったら戦いを止めるのか？」

無駄な質問の方こそ止める。と、ケファノスはダンタリオンを睨んだ。

いいわけが無い。魔族とは言え、ケファノスにとっては民。国が戦場になるのは望まぬこと。

「すみません。余計なお世話でした」

心中は察していたが、つい聞かずにはいらなかった。

「ケファノス！ダンタリオン！」

悪い空気が流れかかると、カイルがそれを掃ってくれた。

「準備はオツケーだ。いつでも号令をかけてくれ」

指揮権はダンタリオンにある。ダンタリオンがGOサインを出せば、最後の戦いが始まるのだ。

「カイル、火炎球を用意出来ますか？」

サルンガでそれを作れと頼んでいるのだ。

「りょーかい！」

カイルはサルンガの弦を引き、黒い雲のちりばめられた空へ火炎球

の矢を向ける。

ダンタリオンが命じれば、それを放ち、戦いの合図になる。

「船で待機してる奴らにも一発で解るぜ！」

「ありがとうございます」

だがすぐには命じない。待っているのだ。これまでの戦いの功労者を。

それは、桐山クダイ。別世界から来たジャスティスソードに導かれし者。

「みんな」

そしてクダイは現れた。シトリー、羽竜を連れて。

「待っていましたよ」

ダンタリオンはクダイをじっと見る。

「戦いを始める前に、クダイ、私達はあなたに謝意を述べねばなりません」

「え？ ぼ、僕？」

この状況で謝意を述べられるとは思わなかった。

「あなたは別世界の人間。それでいながら、ここまでよく戦ってくれました」

「そ、そんな！僕は何もしてないよ！いつも、みんなに助けられてばっかだし……」

「そんなことはありません。あなたの存在は、私達に勇気と絆をもたらしてくれました。知らぬ者達が集まり、時に厳しく、時に楽しい旅を経て私達はここにいます。それを実現させたのは、あなたなのです、クダイ」

あまりの褒めっぷりに、照れるクダイを、

「ダンタリオンの言う通りだぜ。“存在”って大切なんだから、そう照れんなって」

カイクも褒めた。

次に、ダンタリオンは羽竜に、

「羽竜。あなたにもです」

「……別になんもしてねーよ」

そう言った羽竜に、ダンタリオンは首を横に振り、

「伯爵の使う、“時の秘法”のカラクリを聞き出してくれたではありませんか」

「カラクリだったって、全てが明かされたとは言えないだろ。常時魔法の断ち切り方までは解ってないんだ」

「それにしてもです、黒仮面はあなただったからこそ、話したのでしょう」

「買い被んなつて。クダイが聞き出したんだ。アイツはクダイの気持ちに応えたんだよ」

どうにも素直に受け入れる気はないらしいが、

「でも、羽竜がいなかったら、黒仮面も話は聞いてくれなかったよ」

クダイに言われ、むず痒いのか、ふうと息を吐くだけだった。

「いずれにせよ、泣いても笑ってもこれが最後だ。どうせなら、笑ってまた会おう」

ケファノスが仕切直すように言った。

その言葉に、みんな頷くと、

「では」

ダンタリオンは再び魔王城を見つめ、

「世界を脅かすサン・ジェルマン伯爵を倒すのです！」

同時に、カイクが矢を放つ。

矢は雲を吹き飛ばすように爆発すると、戦いの火ぶたを切り、軍勢は一斉に魔界へなだれ込む。

サン・ジェルマン伯爵。そして時の秘法。

明かされた秘密が、クダイ達を勝利に導くとは、誰も言っていない。

第九十章 戦友

「バ……………バカな……………っ！これだけのダークエネルギーを帯びたワシが……………敗れる……………のか……………」

見開いたバチルスの目は、ヴァルゼ・アークの足元しか映していない。それは最後に見るこの世の風景でもあった。

「言つたはずだ。貴様の負けは、既に宇宙が決めている。役不足だとな」

「フ……………フフ……………」

「何がおかしい？」

「貴様は……………自分の意志では動いていないということか……………」

「……………どういう意味だ！」

「この前も……………同じようなことをほざいていたが……………所詮、迫り来る結果を恐れ……………ただ流されるままに生きる道化……………貴様さえ……………もつとセルビシエを近くに置いていたのなら……………失うこともなかったということだ……………セルビシエの死は……………貴様にも責任がある……………クックツ……………いずれ貴様にも避けられぬ時が……………来るだろう……………いつまでも逃げられはせんぞ……………運命からな……………」

「死にぞこないにしてはよく喋る。……………消えろっ！」

手の平をバチルスにかざし、存在ごと消し去る。

「……………ゴミがつ！」

だが、そう言いながらも、バチルスの最後の言葉は、バチルス自身のものとは思えなかった。まるで何かがバチルスを媒介にして話していたような……………そんな錯覚を起こすのは、自分の弱さを指摘されたからかもしれない。

そう考えていると、クダイ達が駆け込んで来た。

「ヴァルゼ・アーク！」

羽竜と呼ばれ振り向く。

「遅かったな。バチルスは片付けてやった。後はお前らの仕事だ」

魔帝の姿を初めて見たシトリーは、クダイに寄り添うようにその真っ赤な視線を避けた。

目的を遂げたヴァルゼ・アークは、クダイ達の方へ歩いて来る。当然、クダイ達は剣を構えたが、ケファノスはヴァルゼ・アークに戦う意志が無いことを感じて、立ち尽くすだけだった。

何もせず通り過ぎた頃、ヴァルゼ・アークは口を開く。

「……………羽竜。俺は次の世界に行く。お前は どうする？」

時間を終着させる力を狙っていたはずなのに、この世界から離れると口にした。その真意は、サン・ジェルマンが負けることを知っているかのよう。でなければ、サン・ジェルマンによってあらゆる世界が消えてしまう。

それとも、クダイ達に全てを託し、自分の運命を測っているの

か…………。

「いいのかよ？ここでなら、あんたの望む力が手に入るかしんねーんだぜ？」

だから解りやすいように、羽竜は聞いた。

「サン・ジェルマンの目的は、お前を殺さねば達成されない。奴にお前を殺せるとは思えん。逆を言えば、お前さえいなくなれば、あるいはクダイ達にも勝機はあるのかもしれん」

ヴァルゼ・アークは、この世界で何が起こるか知っている。

飽くまで憶測に過ぎはしないが、羽竜にはそう聞こえた。

「クダイ」

「は、はいつ？！」

「…………正しいことをすれば、人は苦しむ。だから人は正しいことが出来ない。人が過ちを繰り返すのは、正しいことをしても、望んだ結果が待ってるとは限らないからだ。…………だが、これだけは言っておく。お前に全てが委ねられた時、お前はお前の信じる正しいことをすればいい」

「ヴァルゼ・アーク……………」

そして、また歩き出した。

「この世界には…………悲しみが多過ぎる」

そう呟いて闇になった。

「な、なんだったの？」

まるでお化けでも見たような口ぶりで、シトリーがクダイに聞いたが、クダイとて理解に足りてゐるわけではない。

「どんな正義も、多大な犠牲の上の飾りでしかない。そう言いたかったのだろっ」

ケファノスは二人に説いた。

正義という幻想に、惑わされて欲しくないから。

きれいごとだけでは済まぬことばかり。理想と幻想は、時に思い違いされてしまう。理想を追い求めれば、そこは闇の世界なのかもしれない。

「なんだか怖かった」

「大丈夫だよシトリー。あの人は、むやみやたらに命を奪う人じゃないよ。きっと……」

きつと……誰よりも優しさを持っている。そして、悲しみを多く知っている。

「羽竜よ。お前は行かなくていいのか？ 奴を追ってこの世界に来たのだろう？」

ケファノスは迷っている羽竜に言った。

「戦力はあつた方がいいだろ……」

いまひとつ覇気がないのは、サン・ジェルマンの目的に羽竜を殺すことがあると言われたからだ。

自分がいなければ、クダイ達にも勝機はある……自分が残れば、それはクダイ達にとっていい結果にはならないということなのか？

時の秘法のカラクリが完全に解っていないのに、このままクダイ達だけを行かせるのは忍びない。ヴァルゼ・アークを追うのはいつでも出来るし、いつかまた会えるだろう。時間がかかっても。

ならば、答えはひとつ。

「行こうぜ。アイツにはまた会えるだろうし、もう少しだけ手を貸すよ」

「……………そうか。そう決めたのなら、そうするといい」

肉体を取り戻してから、やけに口数の少なくなったケファノスだが、その分、言葉に籠る想いみたいなものは感じられる。

「ありがとう、羽竜」

シトリーが言うと、

「止よせて。そういうの苦手なんだよ。礼なら、せめて、シメリーを助けてからにしてくれ」

また照れた。

「では先を急ぐぞ！サン・ジェルマンさえ倒してしまえば全て終わるのだからな！」

ケファノスが駆け出すと、シトリーと羽竜も続いた。

「羽竜………」

羽竜はすぐにでもヴァルゼ・アークを追いたい。クダイは、羽竜の気持ちをよく解っていた。

羽竜が残ること自分達に不利なことがあるならば、羽竜は、それを見定めてから消える気なのだろう。そこまで想ってくれる羽竜に、クダイは胸が痛かった。

羽竜とヴァルゼ・アークは敵同士だと言う。なのに、あれだけの信頼関係があるのは、幾度も剣を交えて来た好敵手であること、時には戦友であることの他に、二人が同じ世界の住人からだろう。

今、羽竜は淋しさを感じている。次にヴァルゼ・アークに会えるのは、いつになるかわからない。

時間にして十年も追っていると言っていた。二人は、互いに理解者の役割も担っているのだろう。

クダイがこの世界に残りたいと思う気持ちは、こっちでの住人との間に、大きな絆が出来たから。

羽竜の淋しさは、彼を押し潰してしまわないか、クダイにはそれが気掛かりだった。

第九十一章 道

最後の戦い。その大事に、参戦出来ないオルマは、悔しくてたまらなかった。こうしている間にも、クダイはちゃんと戦えているとか、シメリーは無事かなどと考え込んでしまう。

ケファノスがいるから大丈夫だとは思うが、相手はサン・ジェルマン伯爵。三十年前に不意に現れ、当時の人間と魔族間の戦争を収めた伝説的な騎士。素性も知らないたった一人の人間が、世界を救ったのだ。もちろん、当時からケファノスの物分かりの良さも手伝ったのだろう。

それよりも、その話を思い出すと、重なる事実がある。

- クダイの存在 -

そう。まるで三十年前を再現してるかのような現在^{いま}。

当時のサン・ジェルマン伯爵の立場が、今のクダイの立場と重なる。

唐突にこの世界にやって来て、世界の混乱を収めようとしている。

サン・ジェルマン伯爵には、誰も使えない時の秘法に対を成すように、クダイにも誰にも扱えないジャステイスソードと無眼の構えがある。

単に偶然が重なっただけかもしれない。ただ、その可能性は如何なものか。

その考察も、ドアのノックする音で消されてしまった。

「……………誰？」

「わだすだ。カカベルだべ」

「開いてるよ」

ガチャツと音がして、カカベルが入って来た。

「どうかしたのかい？」

「……………なんだか落ち着かねくて。とてもじゃねーが、一人ではいられねだ」

気持ちは解る。クダイ達の安否もそうだが、世界の……………強いては時間軸上に存在する全ての世界の命運が懸かっている。終末のすぐ手前にいるのだ。

「大丈夫だべか……………」

「アンタが祈ってあげれば大丈夫さ」

「……………わだすが祈っても、奇跡は起きねべ」

消極的なのは仕方ないこと。神に仕えることで終末が回避されるのなら、誰も祈ったりはしない。

以前、ケファノスに言われたことが、カカベルの頭の中に浮かぶ。

- 人が繁栄したのは祈らなかったからだ -

自分達の力と知恵だけで生きて来たのだと。そして、祈りは必要だが、都合の悪いことだけ祈りに託すのは間違っていると。

世界に明日を望むなら、自分達の力で掴まねばならない。

カカベルには、宗教のいろはは解らない。でも、ケファノスが間違ったことを言ってるとは思えない。そう考えると、祈る意味を変えてやれば、筋の通る祈りになるのではないかと思えて来る。

「神の奇跡を信じた祈りはしね。だども、クダイ達が自分達の手で勝利を掴んで欲しいとは祈るべ。この世界を生きてるのは神じゃねーべ。わだす達がなんとかすんなねだ」

目の見えないオルマにも、カカベルの表情が弱々しいだけの田舎娘でないことは見えていた。

「シスターらしくなって来たじゃない」

「わだすにはわだすの信念があるべ。“神”と呼ばれる者が、いつも正しいとは限らね」

そして一度言い淀み、

「…………ケファノスみたいに魔王と恐れられる者が言う言葉でも、正しいことは正しい。わだすはそういう教えをして行く。物事の真理とは、そういうことだべ」

「…………いいんじゃない」

フツと笑ったオルマは、カカベルも成長していたのだと実感した。

きつとカカベルは良いシスターになる。女としてもだ。だから戦いが終わったら、カカベルの訛りなまを消してやろうと決めた。そのくらいなら、目の見えない自分にも出来る。ついでに、女のいろはも教えてやろうとも。

「……………そういやさあ、カカベル」

「なんだべ？」

「アンタ、バランスブレーカーはどうしたの？」

時間構築魔法具の一つバランスブレーカー。世界を崩壊させる剣。^{ツール}剣とは言え、ナイフ程度の短剣なのだが、あれがなければサン・ジェルマンの野望も水泡に帰^きす。シメリーをさらって行くのなら、まずバランスブレーカーを奪^うのが当然のように思っていた。

カカベルが持っている分には問題無いのだが、気になったので聞いてみた。

「ああ。あれならダンタリオンに渡しただ」

「え……………ダンタリオンに？」

「んだ。戦いに紛れて、またサン・ジェルマンがここさ来ないとも限らねからって。持ってるわだすが危ねって言ってたべ」

「そう。確かにそうかもね。サン・ジェルマンは真っ向勝負する性格じゃ無さそうだし、安全って言えば安全か」

「んだ」

ただ、サン・ジェルマンが必要としているものが、サン・ジェルマンの近くにあるのが気にかかる。

（お願いだから、みんな無事に帰って来て）

波立つ心に漂いながら、オルマはクダイ達の帰りを待つことしか出来なかった。

サン・ジェルマンを倒す前に、どうしても倒したい奴がいる。

「……………待ってた」

シャクスを殺したエンテロ。

クダイ達四人を相手にする覚悟でいる。

バチルスも倒され、もはやエンテロに戦う理由など無い。命を危険に晒すリスクを負うのは、シャクスの仇討ちを望むだろう気持ちに応える為。

「シケた面してんなあ。それじゃ死んだシャクスが浮かばれないぜ？」

「お前が……………っ！」

クダイの顔つきが変わった。

「ケファノス、羽竜、シトリー、先に行ってて」

退く気はない。その為にシャクスの鎧を纏っているのだ。

「私は残る！」

「シトリー……………」

言っても聞きそうにもない。

「わかった。ここはお前とシトリーに任せる。行くぞ、羽竜」

「……………クダイ、死ぬなよ」

心配そうに見る羽竜に、クダイは、

「僕なら心配いらない。シトリーもしるし、シャクスもいる」

聖騎士の鎧に手を宛てる。

「ケファノス」

そして、ケファノスを呼び止めると、ケファノスは黙って頷き、先を急いだ。

「聖騎士の鎧たあ、カッコつけたじゃないか。その鎧の穴、シャクスが着けていたやつだろ。そっぴゃあ……………お前とも決着が着いてなかったな。確か以前は、負ける気がしないとか吠えてたが、今度はどうだ？あのシャクスが勝てなかったんだ。お前には無理だろ……………クダイ！」

ブウンと空気が震え、エンテロは竜人に変身する。

やはり圧倒される気配だ。

「僕は聖騎士に選ばれたんだ。聖騎士とは、どんな苦難困難にも怯まず、弱き者を導く道標^{みちしるべ}。シャクスの歩いて来た道を、僕も歩く。そして、繋いでゆく！聖騎士の称号と共に！」

この世界で生きて行くとした時から、クダイに迷いはない。

「やれやれ……中々いい面構えじゃないか。短い間に、よく成長したもんだ。だからと言って、勝てるかどうか別だ」

「やってみたら解るさ」

「フハハハッ！やってみたら解る……か」

エンテロの耳にも聞こえる。ジャステイスソードの鳴る音。

「来いっ！俺を倒し、見事シャクスの仇を討ってみろ！」

様子見なんて不粋な戦いはしない。全力でクダイを仕留めに行く。戦いに身を置いたまま、戦う理由を失ってしまったエンテロには、勝ち続けることしか道が無い。

目の前で、クダイが静かに瞼^{まぶた}を閉じた。無眼の構えを使って来る。

ジャステイスソードを構える姿も、随分様になって来た。この前のようにはいかないだろう。

なにより、シャクスの意志を継いだことにより、覚悟が出来た。譲れないものがある時、少年は誇り高い男になる。

第九十二章 不死鳥と悪魔

すぐにでも“敵”が来ることは予測出来ていた。気配を殺すこともせず、来たる敵に備えているわけでもない。

ヨウヘイは魔力の球体の中。そして、シトリーと間違われさらわれて来たシメリーは、

「バカ！アホ！変態！ろくでなしの人で無し！」

魔力の鎖でその身を拘束されながらも、自由を許された口だけはマシガンのように罵声を発していた。

相手はもちろんサン・ジェルマン伯爵。

「迂闊だった……まさかこんなミスを侵すとは」

双子とは言え、シトリーとは性格の違うシメリーは、こんな状況でも自分のペースを崩さない。

「フーンだっ！シトリーと私が双子だなんて知らなかったんでしょ！アゝホアゝゝゝゝホ！」

「くっ……………」

冷静な紳士を演じるのも苦しくなる。

「なんとか言ってみろ！ベゝゝゝゝゝゝだっ！」

舌を出し、王族らしくない顔で盾突く。徹底交戦の構えだ。

「ええいつ！うるさいっ！」

「キャアッ！」

魔力の鎖に電流を流し黙らせる。自分の失態の怒りをもぶつけるように。

「……………いささか予定とは違うが、同じエルフの王族であることに変わりはない。そう、何も変わらん」

一瞬の怒りを抑え、冷静になれよと言わんばかりに言い聞かせる。
後はバランスブレーカーと羽竜の命。そう考えていると、

「予定は変更してもらおうか」

羽竜が単身、やって来た。

「おお……………不死鳥！」

「は……………羽竜！！」

サン・ジェルマンの声を掻き消すようにシメリーが叫んだ。
どこにその体力があるのか感心してしまう。

「一人で来るとは……………仲間はどうした？」

シメリーを無視して、サン・ジェルマンは羽竜に歩み寄る。

「……………入り用だよ」

「フツ…フフ…入り用か。私のところにわざわざお前を寄越すとは、運はまだ私に味方しているようだ」

「俺の命が欲しいんだってな」

「不死鳥の持つエネルギーは、輪廻をもたらす。時間そのものを終わらせるには、輪廻が存在しては困るのだよ」

「なるほど」

羽竜は手を振るい、トランスミグレーションを具現化した。

「なら俺からも一言言わせてもらっ」

「……………聞こっ」

「三十年前、魔族との戦争を一度は終わらせたお前が、なぜ今になってこんなことをする？」

「何を言うのかと思えば……………人は“幻想”を抱かずにはいられない。その“幻想”に終わらせてやろうと言うのだよ。それだけだ」

「幻想？」

「説明してやってもいいが……………それはお前の仲間にしてやることにしよう！」

光の矢が無数に現れ、一斉に羽竜を攻撃する。

そのひとつひとつを、トランスミグレーションで掃い、高く跳んでサン・ジェルマンの後ろを取る。

「もらった！」

トランスミグレーションで真横に裂いたサン・ジェルマンからは、ただ黒い煙が吹き出るだけだった。

「ハッハッハッ！無駄だよ。私は無敵だ。剣も、魔法も受け付けない。……だが、お前さんはどうかない！」

上半身だけが振り返り、わずかな距離から羽竜に剣を振るう。

「時空剣！！」

刃から魔力が放たれ、羽竜は壁に激突した。

「羽竜！！」

シメリーの声を、今度はサン・ジェルマンが掻き消す。

「ハッハッハッハッ！他愛もない！果敢に挑んで来るのは結構だが、私は無敵だ！無駄だと言ったばかりだろう！」

片膝を着いていた羽竜は、ゆっくり立ち上がりながら、

「だったらなぜ輪廻の塔で逃げたんだ」

「……………なに？」

「その自負があるのなら、いつでも俺達を倒せたはずだ。そうしなかったのは、無敵を装う時の秘法にも、欠陥があるからだろう？…

……サン・ジェルマン」

「……………貴様……………誰だ！」

羽竜の口調が……………変わった。落ち着き払う口調に。

羽竜は立ち上がり、サン・ジェルマンを睨み据えながら、剥ぎ取るような仕草でおもいきりその姿を引き剥がした。

「おお……………お……………お前は……………！！！」

「貴様の野望が達成されることは二度とない。年貢の納め時だ、サン・ジェルマン」

羽竜の姿が一変、そこに立つのは、

「ケ……………ケファノスッ！！！」

魔王ケファノスだった。

「憐れな男よ。運はとっくに貴様を見放している」

「なんでだよ?!俺が邪魔なのか?!」

いきり立つ羽竜は、ケファノスに突っ掛かる。

「そうではない。お前の強さは正直、欲しいところだ」

「じゃ、じゃあなんでヴァルゼ・アークを追えなんて言うんだ！」

納得出来なかった。ここまで来て、サン・ジェルマンを目前にして離脱なんてしたくない。

「俺がいなくなれば、サン・ジェルマンの目的は崩れる。だからだろ？それならはつきりそう言ってくれ。迷惑なんだって」

「違う。そうではない」

「何が違うんだ！」

「羽竜。これはさっきクダイと話した結論なんだ」

「……………そっか。何を話してたのかと思えば……………」

「お前はヴァルゼ・アークを追ってこの世界にやって来た。奴がいなくなった今、ここにとどまる理由はないはずだ」

「だから、最後まで俺も手を貸すって」

「クダイはな、お前の気持ちを優先させたいと言っただけだ」

「俺の……………？」

「お前と奴には不思議な絆がある。それはきつと、永い戦いの末に築かれたもの。その絆が、ヴァルゼ・アークを求めている………違うか？羽竜」

そう言われてしまえば否定は出来ない。解ってはいたことだ。

ヴァルゼ・アークの顔を見れば、どこか安心さえ覚えてしまう。倒すべき相手でありながら。

次の世界に行くと言われた時、すぐにでも追いたかった。あの背中をずっと追ってるのだから。

「クダイはお前と出会い変わった。我々には出来なかったことをしてくれた。もう、充分だ。後は余とクダイでなんとかする」

「……………いいのかよ？」

ケファノスは小さく頷き、

「行け。お前にはお前のやるべきことがあるはずだ」

「……………わかった」

羽竜は六枚の炎翼を広げ、衝撃波で壁に穴を開ける。

空が見え、まだ微かにヴァルゼ・アークの気配を感じ取れた。

待つてるのかもしれない。自分が行くのを。

羽竜は穴まで歩いて、

「絶対……勝てよな」

「フツ。言われるまでもない」

「それと……クダイによく言っといてくれ！シトリーと仲良くしろよって！」

「伝えよう」

ケファノスの静かな見送りの中、羽竜は次の世界を目指した。

「来ると思ったよ」

ヴァルゼ・アークが言った。

既に魔帝から黒い髪の“方”に戻っていた。

「来させられたんだよ」

綺麗な花畑だった。その真ん中に土を盛った形跡があり、重そうな石が乗せてある。

「あの女の墓か？」

「そうだ」

あまり触れない方がいいのだろう。セルビシエのことをよく知らない

い羽竜は、彼女の死を汚してしまいそうで口を慎み、話題を変えようとすると、

「同情はするなよ」

「しねーよ」

そう答えた羽竜に、ヴァルゼ・アークは苦笑した。

「こんな世界も珍しい。そうは思わないか？羽竜」

「あん？どういう意味だよ？」

「三十年前、サン・ジェルマンはこの世界の戦争を終わらせたと言っていた。そして、そのサン・ジェルマンが戦いを招き、今度はクダイがこの世界にやって来た。終わりなき輪廻のように」

「はあ………毎度思うんだけどよ、もっと解りやすく言ってくれよな。あれこれ考えるのは性に合^うわねーの知ってんだろ。長い付き合いなんだからよ」

「ハハハ。それは悪かったな」

こんな時、空気を乱してもヴァルゼ・アークは怒らない。羽竜は知っている。

「あんた、知ってて言ってるんだろ」

「フツ。この世界の住人達は、繰り返される戦争と、タイミングよく現れる勇者の存在を欲しがっている。それが全てだ」

「欲しがって手に入れるもんじゃねーと思うけど?」

「人の念とは馬鹿に出来ん。時に奇跡を、時に終末さえ起こす」

「じゃあジャスティスソードってなんなんだ? この世界の住人には扱えない伝説の剣が、クダイには扱えるんだ。理由があるんだろ?」

「今言ったことが答えだ。性^{しょう}に合^あわ^わん^んだ^だろ^ろう^うが、少しは頭^{こゝろ}を使え」

「ケツ。ジャスティスソードの正体、それすら知ってるってことか」

ヴァルゼ・アークはニヤツと笑うだけだった。

そして、空間に穴を開ける。次の世界に行く扉だ。

「この世界のことは、この世界の住人に任せればいい」

その背に、四十八枚の翼が開く。

「来い! 羽竜! 次こそは決着を着けてやる!」

ヴァルゼ・アークは、時空の穴へと飛び込んだ。

「着いて行ってやるぜ! 俺はあんたの背中だけを追ってるんだからな!」

羽竜も飛び込むと、時空の穴は閉じた。

誰かが言った。

- この世は終わりだ -

と。

誰かが言った。

- 救世主は現れる -

と。

人々が願う度、それは叶う。
それだけがこの世界の全て。

第九十三章 終末幻想 前編

「バ……………バカな！一体、何がどうなっているというのだ？！」

枠を飛び越えた理解に、サン・ジェルマンは動揺どころか冷静さを欠落させ、その説明をケファノスに求めた。

「ふ、不死鳥はどこだ？！ケファノス！」

「不死鳥ならもう違う世界に旅立った」

「な……………」

その後言葉は続かなかった。不死鳥たる羽竜が居ないということは、ケファノスが言った通りサン・ジェルマンの野望が叶わぬものとなったということ。

「少し、時間を掛けすぎたな。人を見下すからこういうことになるのだ」

「うぬ……………だ、黙れッ！そもそも、なぜ貴様が不死鳥の姿をしていた？！」

「フッ……………これだよ」

ケファノスがサン・ジェルマンに見せたのは、

「それは……………エルフの……………」

「そうだ。幻影燈だ」

「こ……小細工を……！」

「羽竜もなく、バランスブレーカーもない。もはや貴様の潰えた幻想に振り回されることもないだろう。我がダーインスレイヴの錆に
してやる。観念しろ」

ケファノスが抜いた剣は、鏡のように磨がれた刃。サン・ジェルマンの命を、幻想を奪う刃だ。

「……無駄だと何度言ったらわかる？ 私は時の秘法で守られている。
どんな優れた剣を用いようとも……」

「命を絶てないのなら封印すればいい。未来永劫、外界の空気に触
れることのないようにな」

そのくらいならなんとか出来るだろう。

「そんなこと……出来るものか！」

「やるんだよ」

そう言つて、クダイとシトリーが現れる。傷ついてはいるが、満身
創痍というわけでもなさそうだ。同時に、今ここにいるということ
は、エンテロとの勝負に勝ったことを意味していた。

クダイが横まで来ると、

「仇は討ち取れたみたいだな」

微笑しながらケファノスは言った。

「シャクスに教えてもらったことをしたまだよ」

当たり前のように言う。

「頼もしくなったな」

今、隣にるのがクダイでよかったと思う。エンテロを倒したことでより自信をつけたクダイは、数十分前とは違った顔を見せる。その成長のなんと早いことが。

「くっ……………このままでは……………」

自分を確実に倒しに来ると思っていたからこそ余裕だった。なのに、封印という妥協案を持って来るとは思わなかった。

部の悪いサン・ジェルマンは、四つの時間構築魔法具を手元に集め、フツと消えた。

「あっ！」

クダイが声を上げたが、逃げられてしまった。

「ケファノス！」

「フン。逃げ場所など限られている。クダイ、お前はシメリーを。サン・ジェルマンは余が追う」

「うん」

サン・ジェルマンの行き先を見通しているのか、ケファノスはどこかへ向かって走って行った。

「シメリー！」

シトリーは駆け寄って、魔力の鎖を魔法で断ち切った。

「いったあ……」

「大丈夫？」

「うん。ちょっと手首が痛いだけ」

服のしわを伸ばし、手首をくいつくいつとストレッチさせ、

「ありがとう。助けに来てくれるって信じてたよ」

二人に礼を言った。

「さて……」

そしてクダイは、図上に以前と同様に魔力の球の中で意識をなくしているヨウヘイを見た。

サン・ジェルマンに荷担したとは言っても、友人に変わりはない。助けてやらねばならない。

「クダイ、私達にやらせて」

その心境を悟ったか、シトリーが申し出る。断る理由などない。目には目を。魔力には魔力を。

「お願い……………出来るかな」

クダイが言うと、シトリーとシメリーは頷いた。

二人は両手を繋ぐと、輪の中心に魔力を集中させ始めた。

「う……………」

絶命は免れた。いや、見逃してもらったのだ。クダイに。

エンテロは腹部の傷を押さえ、壁にもたれていた。

最後にとどめを刺さなかったクダイの言葉。

- 僕より弱い奴の命は取らない。それが聖騎士だから -

見事に教え込んだものだ。剣技ではなく、聖騎士のなんたるかを。きっと、事細かに教えたわけでないだろうことは想像出来た。ただ、心というものを刻み込ませたのかもしれない。仇討ちとは、対象の生命を奪って完遂されるもの。なのに、クダイは聖騎士としての品格を取った。ある意味、生命を奪われるよりも苦しい。

「言ってくれな………」

シャクスが羨ましかった。自分の後をしつかりと受け継いでいる者がいて。

「無様な……………」

ふと、暗がりから声がした。顔は見えないが、男の声だ。

「……………誰だ？」

目を凝らしても、男は距離を取ったままなので伺い知れない。

「せめてクダイに致命的な傷は負わせて欲しかった」

嫌な予感がした。寒気立つ気配がエンテロを包み、男は尚、言葉を続ける。

「不死鳥が居なくなった今、成すべきことは世界を壊すことしかなくなつた」

（こいつ……………）

槍を手に立ち上がる。殺されようとしてるからだ。

言葉の内容を聞けば、サン・ジェルマンと思えないでもないが、違う。サン・ジェルマンの声じゃない。

「クダイもクダイ。シャクスの仇討ちなどと意気込みながら、とどめを刺せないとは」

「……………やろう！姿を見せやがれ！」

「何をそんなに怯えているのか……………」

男から強い魔力を感じた。

すると、男との間に鋭く尖った氷が現れ、

「失せてしまえ！」

その氷がエンテロの心臓を貫いた。

「が…………はっ……………」

反撃出来ず、倒れ伏した。

男は勝ち誇るでもなく、さもそれが当たり前かのように、

「脇役は所詮、脇役」

呟いて、魔王城の奥へと進んで行った。

第九十三章 終末幻想 中編

サン・ジェルマンを追ったケファノスが来た場所は、かつてイグノアと対峙した魔王城の地下深く。ずっと真下にマグマがうごめき、それでも熱気が狂ったように蔓延^{はびこ}る。

「出て来い、サン・ジェルマン。貴様の気配は感知している。隠れても無駄だ。」

眼前には、ケファノスが座していた大きな玉座。その後ろは崖。逃げ道はもうない。

ケファノスの呼び掛けに呼応するように、後ろに人の気配を感じた。

「……………カイル！」

それは、カイルだった。

カイルはじつとケファノスを見たまま、一步一步、確実に歩いて来る。警戒しているようにも見える。

「なぜお前がここにいる？」

ケファノスは腰のダインスレイヴに手を掛ける。

「答える！カイル！」

カイルはダインスレイヴが届くか届かないかというところで止まる。

「なぜって……お前が走って行くのが見えたから追い掛けて来たんだよ」

今度は、ケファノスがカイムをじっと見つめる。

「サン・ジェルマンはどうしたよ？」

何も話さないのも空気が悪いので、単刀直入に疑問をぶつけた。

「そのサン・ジェルマンを追ってここに来たのだ」

だが、サン・ジェルマンの気配が消えた。カイムが現れてから。

「で、いたのか？」

「……………いいや」

「逃げられたって言うんじゃないだろうな？ここまで来て、そりゃ勘弁だぜ？」

「ここから逃げることは不可能だ」

ダインスレイヴを鞘から抜き、切っ先をカイムに向ける。

「お、おい……！なんの真似だ！」

カイムもまた、手を後ろに回しサルングを手にする。

そんな一触即発を見定めたところへ、

「観念なさい、カイム」

ダンタリオンも現れた。

「ダ……ダンタリオン！なんだよ、観念しろって！」

観念しなければならないことなんて、何も無い。

「ケファノスは、あなたが伯爵でないかと疑っているですよ。そうですね？ケファノス」

ケファノスは何も言わないが、そういうことなのだろう。

「ま、待てよ！なんで俺が！」

「往生際が悪いですよ。もはやあなたに勝機はない。バランスブレーカーもなく、羽竜もこの世界から居なくなってしまった。負けを認めなさい」

「か、勘弁してくれよ！俺は俺だって！」

ダンタリオンがケファノス同様、鞘から剣を抜く。

「待て」

「どうしました、ケファノス？カイルが伯爵なら、すぐにでも始末しなければなりません」

「そうだな。カイルが伯爵だったらの話だ」

「……………」

「ダンタリオン、ひとつ答えてくれぬか？」

「はい。なんででしょう？」

「羽竜が居なくなったことを、どうしてお前が知っている？」

「……………フツ。何を……………こんなときに揚げ足取りをするおつもりですか？」

「羽竜が居なくなったことは、余の他にクダイとシトリーしかおらぬ。城の外で戦っていたお前達を知ることとは出来ぬはずだ」

ダンタリオンは眉ひとつ動かさず、しばし黙っていたが、

「フツ……………クク……………アッハハハハ！！」

突然、吹き出した。

「やれやれ。私もつまらないミスを犯してしまいましたね。カイムが現れたのは、好都合だったというのに」

何がなんだか解らない様子のカイムだが、自分が利用されかかっていたことくらいは察しがつく。

そして、ケファノスは言った。

「まさかとは思うが、ダンタリオン、お前がサン・ジェルマンだなどと言わんだらうな？」

「フン。もう隠す必要もないようですね」

ダンタリオンの周りに、サン・ジェルマンが持つて逃げたはずの時間^{ツイル}構築魔法具が現れる。

「ええ、そうです。私がサン・ジェルマン伯爵です」

緑色の髪を掻き上げ、名だたる賢者は宿敵の名を堂々と語った。

第九十三章 終末幻想 〱後編〱

「なんて強い魔力に包まれてるわけ！？私とシメリーの魔力をぶつけても壊せないなんて！」

ヨウヘイを包む強い魔力の球。シトリーとシメリーの魔法さえ弾いてしまう。

魔法のことはよく解らないが、シトリーとシメリーはサン・ジエルマンが利用としたほどだ、その二人が壊せないと言っのだからよほどのものなだろう。

「二人共、どいて」

クダイはジャスティスソードを構え、自らの力で試みることにする。中のヨウヘイを傷つけないようにそれが可能かは確実ではないが、このまま放っておくわけにもいかない。

「うおおおっ！！」

助走をつけ、なるべく高く跳ね上がり、振り上げたジャスティスソードを魔力の球に叩き付けた。

バチバチと音を立て、放電が始まる。放魔力とでも言った方が正しいかもしれない。

「くっっ……」

その威力は凄まじく、クダイの腕に電気マッサージでもしてるかのよう刺激を与え、わずか数秒で断念せざるを得なかった。

「クダイ！」

駆け寄るシトリーとシメリーは、治癒魔法で回復させる。どこを？それはクダイの腕。急激な力で紫色に変色していたのだ。おそらくは内出血。毛細血管が耐えられない刺激だったということだ。

「ありがとう。大丈夫だから」

今一度ジャステイスソードを構える。

「今度は本気で行く！」

そう宣言した時だ、

「勘弁してほしいな」

声が辺りに響いた。声の主は、

「ヨ……ヨウヘイ？」

間違いない。聞き覚えは充分にある声だ。

「お前の腕じゃあ、俺ごと真つ二つにされかねーからな。大体お前、器用じゃねーだろ。昔っから」

クダイ達がヨウヘイを見ると、魔力の球の中からこつちを見ている。

魔力の球はヨウヘイの身体に纏わり付き、裸だった彼に薄気味悪い鎧となり形を変えた。

空中に浮いてたヨウヘイは、“慣れた”ように着地する。

「久しぶりだな。クダイ。輪廻の塔ぶりか？随分“らしく”なったじゃないか」

聖騎士の鎧姿のクダイは、ヨウヘイにはどう映ったのか。本音の称賛と取れない言動でもないが、冷やかしにも取れる。はたまた、強い力を手にした自信だという考えも入れておくべきだろう。

悪意に満ちた顔がそう言ってるのだ。

悪い予感がする。そう、戦いを避けられない予感。幾度と感じて来た直感は、信頼度の高い演出だ。

「どうしたよ？そんな顔して。可愛い子ちゃん二人も連れてるんだ、もっと堂々としてろよ……… っても無理かあ？女と手繋いだこともねーんだもんなあ」

饒舌なヨウヘイは、ニヤつくばかり。

「…………… てつきり意識が無いのかと思ってたよ」

一方クダイは、この展開が決して自分に好都合なものでないと解っていた。

「ずっと見てた。この前、お前がそのエルフの女を助けに来た時
もな」

「サン・ジェルマンに利用されて、もう助からないんじゃないかって、心配して損したよ。元氣そうだもんな」

「ハハハッ！俺はいつでも元氣だぜ」

「…………… ならいいさ。そんなことより、もうサン・ジェルマンの言

う時間軸の融合は不可能になった。不死鳥である羽竜が、この世界から居なくなっただけからね。お前もサン・ジェルマンから解放されるんだよ」

「くくく」

「何がおかしいんだよ」

「解放されるも何も、サン・ジェルマンなんて最初から存在しねーよ」

「な……………なんだってッ!？」

クダイが叫ぶと、シトリーとシメリーも顔を見合わせヨウヘイの言葉に耳を疑った。

「動揺させようってそうはいかないぞ!」

「んなつもりねーって」

「お前、時々嘘つくから。信用出来ないね」

信用出来ないのではなく、信じたくないのだ。クダイは自分でも解っている。ヨウヘイが嘘つくことがあっても、こんなところでつまらない嘘を言うことはしない。

「おい、クダイ。そりゃ言い過ぎだろ!俺は嘘じゃなくてジョークを言うのが好きなんだよ」

ふっつ、と溜め息をつく。

「いいぜ。教えてやるよ、真実ってヤツを」

「なんの冗談だそりゃ？ダンタリオン、この場面でそいつはちつと笑えねーよ。そうだろ、ケファノス？」

そう言っただけで見たケファノス自身が言い出しつぺなのだ。

表情険しく、突き抜けるような視線でダンタリオンを見ている。カームとて、ダンタリオンもケファノスも冗談を言ってるとは欠片も思わないが、これまで苦楽を共有して来た仲間が、倒すべき宿敵だとは思いたくない。それならば、詳細に説明、もしくは言い訳とやらを聞かねばならない。

「くそっ！……マジなのかよ！」

ダンタリオンのいつものニヤつく顔が、今は悪巧みを隠そうともしない悪党にしか見えない。

「お話ししますとも。……ですが、正確には私が伯爵そのものであるかは否定させてもらいます。長々と説明を重ねる気はありませんので」

「お前がサン・ジェルマンじゃないなら、サン・ジェルマン自身はどこに行っただんだ!？」

「カイク、そう大きな声を出さないで下さい。……………伯爵は、そもそも生物として存在してるわけではありません。短絡的に言えば、伯爵は人間だとか、魔族とか言っただけでなく、人々の幻想が生ま出した霊的存在です」

「な……………なんだよ……………その霊的存在って……………」

あまりに理解するに遠い事実。ダンタリオンが言っていることが正しいならばだ。

「バカバカしい。サン・ジェルマンが幻想だと？ 奴は確かに居たではないか。会話もした。なにより、奴自身が思考を持ち行動していた。お前がサン・ジェルマンであると言うのならまだ納得もいくが、単なる霊的存在で済まされるのは、少々受け入れ難い話だ」

それはケファノスと同じで、意思を持って動いていて、かつ、会話も成立していた者が、幻想だか霊だか知らないが、にわかには信じるわけにはいかない。

だが、そんなケファノスとカイクを裏切るように、

「しかし真実です。三十年前、この世界の人々は、あなたがた魔族との戦争に苦しんでいました。世界は終わる。そんな絶望が渦巻く中、一方ではきつと誰かが世界を救ってくれると信じていた。それは強く、不変の希望。やがて、人々の想いは形になって現れる。それがあなたがたが追って来たサン・ジェルマン伯爵です」

ダンタリオンは台本でも読んでるように淡々と話した。

「サン・ジェルマンは時間を旅していると言っていた。つまり、奴には過去があり、それは生い立ちがあるということではないか。人々が願っただけで存在が生まれたと言うのなら、何の為にサン・ジェルマンに過去が存在するのだ？」

答えてみると言わんばかりに、ケファノスは質^{ただ}す。

ダンタリオンはと言うと、怯むことなく真っ向からケファノスに立ち向かう。

「伯爵自身、自分が突拍子もなく人々の願いから生まれた存在などと思っ^てないからですよ」

「百歩譲ってお前の言う通りだとして、サン・ジェルマンは今どこにいる？」

「伯爵なら………」

ダンタリオンは時間構築魔法具のひとつである時の聖杯を手元に寄せ、

「ここに」

ブランデーグラスほどしかない聖杯の中に、卓球のボールほどの黒い球体がある。

傾けたグラスの中で、静かに佇んでいる。

「伯爵の正体は人々の幻想。人の見る幻想、願いとは、こつも黒いものですよ」

嬉しそうに話すダンタリオンは、もはや知った仲間ではなかった。

「ま、待ってくれよ、根本的な問題はどうなるんだ？」

カイルがケファノスとダンタリオンの顔を交互に見る。一番不可解な問題があるじゃないかと。

「根本的な問題……とは？」

しらばっくれてるのかどうかは解らないが、ダンタリオンはそう答えた。

「一度は世界を救ったサン・ジェルマンが、なんで時間軸の融合だとかたくらんだんだ？自分が救った世界を無くす必要なんてないだろ？」

「フフ……そのことですか」

「サン・ジェルマンは英雄と讃えられたが、月日が経つにつれ、人々の中では単なる思い出くらいにしかなくなかった。つまりだな、存在理由が無くたってことだ」

ヨウヘイは得意げに語った。

「じゃあ何か？存在理由を作る為、それだけの為にサン・ジェルマンは……………」

「ああ。そうだ」

クダイはあまりに馬鹿げた理由にイラつき、下唇を噛んだ。

「けどな、クダイ。予想外のことが起きたんだよ」

「……………」

「お前さ。ジャステイスソードはサン・ジェルマンにも使えなかった。なのにだ、お前には使えてしまった。そして、世界を案じた人々はお前を召喚した」

「そんな……………僕はケファノスとダンタリオンに無理矢理連れて来られたんだ！」

「召喚される時の裏側なんてそんなもんだろ。もっと言えば、召喚されたのは不死鳥の方かもしれない。お前は……………クダイ、“ジャステイスソードを使える者がいれば”って、願う人々が召喚した条件付きの召喚人さ」

「だから僕だけがジャステイスソードを使えるってのか」

「まあ、その辺の仕組みっていうか、事情はダンタリオンが詳しいと思うぜ」

「え…………ダンタリオン？」

「ああ。お前らの仲間の賢者様だよ」

嫌みつたらしくニヤけ、

「元は、あいつが幻想たるサン・ジェルマンを利用し始めたんだ」

あまりのショックにクダイは何て言えばいいか解らないでいる。

「ハハ！いい顔してんなあ。裏切られたって顔だ。まあ、騙される方が悪いんだけどな」

「なんで…………ダンタリオンが…………？だって、あの廃校で、ダンタリオンはサン・ジェルマンと戦って…………」

「サン・ジェルマン自身は利用されてるなんて思ってねーよ。ダンタリオンは上手く演じて来ただけさ」

「ふざけんなっ！それじゃあ何か？お前とダンタリオンは最初から手を組んでたのか！？」

「…………ああ」

「う…嘘だ！」

「嘘じゃねーって。なんなら聞いてみるよ、本人に」

「……………ひとつ聞かせてくれないか？」

「ん？なんだよ？」

「………… お前の目的はなんだよ？かはねびと 屍人を集めるだけの為にダンタリオンと手を組んでたわけじゃないだろ？」

「フツ。まあな。最初はわけもわからなく巻き込まれたけど…………俺は俺でダンタリオンを利用してたんだよ。俺は、時間に点在する全ての世界を統べる王となる！」

「………… 救いようが無いって、お前のこと言っただろうな」

「何っ？」

「ヨウヘイ、お前がどんな力を持ってるか解らないけどさ……………」

長い会話の末、クダイは決心した。

「お前なんてたいして強くないと思うよ」

「………… クダイッ！」

「助けようなんて考えた俺がバカだった。お前は、ここで倒されるべきなんだ。…………… 僕に！」

こんなに腹の立つこともない。何に腹が立つって、全部だ。…………… クダイは自問自答した。

シトリーとシメリーも“準備”をする。全面的にサポートするつもりだ。

「お前に倒される？笑わせんなって。ジャスティスソードが使える

くだらね、せいぜい」

「黙れよ！僕の大切な仲間の住む世界だ、お前なんかに汚されてたまるか！」

もう、友人などとは呼べない。

真実がどうあれ、正しいと思える道を。

問い質すは、世界を脅かす愚かな友人か。それとも、都合のいいことばかりを願う人々か。

その審判は、クダイの手に委ねられた。

第九十四章 JUSTICE SWORD

「クダイは召喚される運命さだめだったんでしょ」

ヨウヘイがクダイ達に説いていたように、ダンタリオンはケファノスとカイクに説いた。

たまたまそこにクダイがいたから。そんな単純な理由ではないと言う。人々はジャステイスソードを使える騎士を欲しがったのだと言う。

そして、ヨウヘイもクダイに言っていたように、本来、人々の希望となるのは羽竜だったと。

「けどやっぱ解んねー。サン・ジェルマンはわざわざ敵に回ったってことかよ？お前の目的も最初からサン・ジェルマンと同じだったのか？」

「“彼”は、人々の希望が具現化したもの。役目を果たし、行き場を失った結果、今一度、人々から必要とされたかったのかもしれない。私の目的がどうであるかは……いちいち話草にする気はありませんよ」

本音は結局解らず仕舞いだ、サン・ジェルマンの心の奥には、そんな感情があったとしても不思議ではない。

カイクにそんなサン・ジェルマンの心情を読み取ることは出来ない。いかなる理由があったとしても、許されることではない。

「…………で、お前はこれからどうするつもりだ？先にも言ったが、羽竜はもう居ない。不死鳥の命を断つことが必要だったようだが、叶わぬ願いになった。そして、バランスブレーカー。もう負けは決

まっている」

「フツ……フフ……確かに、羽竜が居なければ私の望みは叶わない。しかし、“これ”でこの世界を崩壊させることは出来る」

腰に手を回し、バランスブレーカーを手に取り、ケファノスとカイムに見せる。自慢げにだ。

「バランスブレーカー……！！なぜお前が！」

「こんなこともあるのかと、シスターから拝借して来たのですよ。返す気はありませんけどね。ケファノス、あなたが幻影燈で私を欺いたのは見事でした。ですが、大切なものは常に近くに置いておくべきでしたね」

「世界を崩壊させれば、お前も死ぬ。ただの大規模な心中にしかならんぞ」

「あなたも意外に物分かりが悪いですねえ。世界を残せば、また人々を脅かす者が現れ、また人々は救世主を願う。その繰り返しに終止符を打つのですよ。三十年前、あなたが人々を脅かし、サン・ジエルマンに負けたように、何度も同じことが繰り返されるのです。そんな粗悪な世界など、崩壊してしまった方がいい！」

「オルマさえ殺すのか？愛しているはずだ！」

「一人の女の為に、信念を曲げることは出来ませんよ！」

「失望したぞダンタリオン。実力があリながら、常に裏方に徹することが出来たお前は、誰より頼りになる奴だった。それが……全

て芝居だったとは」

「黙りなさいケファノス！一度きりの正義を貫くのなら、私は鬼にでもなる！そう決めて生きて来た！命を懸け、仲間を失い、傷つき、肉体を蝕みながら平和を取り戻したとしても、一時の英雄！人々の記憶に残れなくなる。それが解らないあなたではないはずだ！人々の願う平和こそ幻想！幻想の為に幻想を生み、翻弄されていくのが英雄の末路！私は認めない！人が平和になることなど！」

バランスブレーカーを除く四つの時間構築魔法具ツールが、ダンタリオン
の前でひとつになる。

球体の中で渦を巻く、エネルギーの塊。それを握り、バランス
ブレーカーを突き立てる。

「終わりだ！望んだ結果とは違ってしまったが、これで世界は崩壊
する……！」

ダンタリオンがバランスブレーカーを振り上げ、球体に突き刺した。

「なんだ！？なんだ！？なんだあ！？口ほどにもないなあ、クダイ
よ！ほらほらほらっ……！」

ダークエネルギーを惜しみ無く飛ばしてくれる。ほとんどをジャステイスソードで弾き、ダメージを受けないでいるが、

「クダイ！どうして攻撃しないのお！？」

「シメリーの言う通りよ！どうして……………」

攻撃に転じれば、クダイを優位に立たせることが出来る。そのくらの魔法ならスキルにある。

もし、ヨウヘイを倒すことに躊躇いがあるのなら……………

「なんだよ、攻めて来いよっ！つまんねーだろ！？お前と戦うの、ずっと楽しみにしてたんだぜ！」

「ヨウヘイ……………」

「チッ。お前ってそういう奴だよな！煮え切らないってか、優柔不断ってか……………まあ、どっちもおんなじか。しゃあねー、これで終わりだ！女と一緒にあの世へ行きなっ！」

重苦しい音を立て、ヨウヘイはダークエネルギーを収束させ、クダイに向けて放った。

「死ねえええッ！……………！」

「死ぬのはお前だ！ヨウヘイ……………」

クダイは瞳を閉じ、光の軌跡を読む。

迫り来るダークエネルギーを、シトリーとシメリーがシールドを張り防ごうと試みたが、あっさり突破される。が、しかし、すぐ

さまクダイがジャステイスソードで縦に裂いた。

綺麗に真つ二つになったダークエネルギーは、本来の軌道を反れ、クダイ達を避けて爆発した。

その間、クダイの前には無防備なヨウヘイが晒された。

きつちり、光の軌跡が描く道を走る。

「う……………うああっ!!」

一秒も満たないうちに目の前に現れたクダイに、ヨウヘイは怯えた。

「お前なんか……………」

「ま、待て!クダイ!俺達……………友……………」

「お前なんか消えちまえ!!」

「ぐわあああああああああああああッ!!!!!!!!!!」

黄金の刃はヨウヘイの心臓を貫いて、クダイの望みを叶えるように、ヨウヘイの肉体を消し飛ばした。

「僕には、正義を貫く責任がある!」

召喚された身であろうと、そうでなかつたと、手にする剣には“正義”が刻まれている。

誰も振るえなかつた“正義”。

その重さが、クダイを成長させて来た。

“正義”の名の下、故に“正義”を貫くのはクダイか、ジャステイスソードか。

たくましく成長したクダイの背中に、もう人の気配は無かった。

第九十五章 満たされなかった条件

「そんなバカなっ!!」

ダンタリオンは憤怒した。四つの時間構築^{ツール}魔法具を合わせた、強力なエネルギーの球体。さしずめエネルギーボールとでも呼ぶべき物体に、カカベルから“拝借”して来たバランスブレーカーを突き刺したのだが、エネルギーボールの中に刃がスツと入るだけ。一向に何も起きない。

願わくば、世界が崩壊して欲しい。そういう“作業”したのだ。物体の硬度がいかほどかは、手にしているダンタリオンにしか計れないが、音も無く入る辺りは、そういった常識は皆無なものなのだろう。

何度もバランスブレーカーを突き刺すも、結果は同じ。何も起きない。

「そんなはずは……!!」

「理屈は知らんが、不具合でもあったようだな」

ケファノスはダーインスレイヴを持ち直して、地面に杖代わりにした。

いかにダンタリオンが魔法に長けた人物とは言え、負ける気はしない。

「くっ………どうして!くそっ!!」

やり場の無い怒りに、バランスブレーカーを地面に叩き付けた。それは浅はかだったかもしれない。

世界を崩壊させる短剣の刃は、地面と接触した瞬間に折れた。
いとも簡単に。

「バ…… バランスブレイカーが……！！」

叩き付けた本人が一番驚いたようだ。柄の部分を持ち上げるも、その無惨な姿に手が震えた。

「はは…… 信じらんねえ…… バランスブレイカーが折れやがった……」

カームも苦笑いするしかなかった。だが、それはダンタリオンの目的が果たせなくなったという事実。

「終わりだな。こんな結末はさすがに余も予想出来なかったが、人の幻想を弄んだ者の末路には相応しい。…… 覚悟を決める。ダンタリオン。クダイはお前を慕っていた。せめてあやつには、お前の悪行を言わないで置いてやる」

「…… く…… くく…… どうせヨウヘイが話してますよ。それに、クダイが負けて死ぬことだって考えられる……」

「奴は死なん」

「ほう。言い切りますね。しかし、クダイが友人であるヨウヘイを相手に非情になれるとは…… 思えません。逆に、返り討ちに合うのが関の山でしょう」

「付き合いが同じだと言うのに、こんなにも見解が違うものだとは……」

「買い被り過ぎるんですよ……そうは思いませんか、ケファノス？」

「どのみち、お前はもう終わりだ。世界は、幻想ではなく真実として君臨する。生きとし生ける者達、全ての母として」

「フン。間違いですか、あなたは。世界は幻想のみを選び、己を守ろうとする。それは、人による終末を避ける為でもあるのです。母として？いいえ、所詮、私達は幻想を生み続ける世界の奴隷。世界に真実など無いのですよ」

追い詰められたダンタリオンは、ケファノスとの会話で冷静さを取り戻したのか、手にしたままのエネルギーボールを見つめ、

「世界が壊せないのなら、世界を支配するまで。地上からあなたの言う生きとし生ける者を消し去り、私もまた……消えましょう！」

エネルギーボールを口に運ぶ。まさかとは思ったが、“食べる”つもりなのだ。

「させるかあつー！！」

嫌な予感がして、カイクがすかさず矢を放つ。それは、躊躇いもなくダンタリオンの命を奪う矢。速度は音速。貫くはずだった。

矢は、ダンタリオンの前でピタリと運動を失う。

「無駄……ですよ」

エネルギーボールを飲み込んだダンタリオンが、矢を止めた。

そして異変はすぐに起きた。

「うぐ……………ぐう……………ぐああ……………ウオアアアアア
アアアアアアア——————ツ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

悶絶するダンタリオンは、ひよっとしたら果ててしまうかもしれない。いや、きっとその波間を漂っていたに違いなかった。

閉じていた瞼を開けると、写真のネガのように白黒が反転した瞳があつた。

そう言うって、ダンタリオンは空中で運動を失ったままの矢を掴み、矢先をカームに向ける。

「いかん！避けるッ！カイクッ！！」

刹那、矢はカイクに向かって飛んで行く。

「……………！！！」

叫ぶ暇はおろか、避ける間もなかった。

矢は、カイクの胸に刺さった。

「カイクッ！！！」

後ろに倒れるカイクの身体を受け止める。

「く……………や…やられちゃった……………」

「喋るなっ！」

ダンタリオンから見れば、滑稽な光景だったに違いない。魔王がハーフエルフを案じているのだから。

「ククク。自分の放った矢に殺されるのだから、本望でしょう」

「ダンタリオンッ！！！」

「怒りなさい！怒り、嘆くといい！神も悪魔も不在のこの世界で、私だけが唯一の存在！いかなる感情も、私にとっては糧になる！」

バランスブレイカーが役目を果たさなかったばかりに、四つの時間構築^{ツイル}魔法具と、人々の幻想、サン・ジェルマンの力がダンタリオンに吸収されてしまった。

すると、頭上にディメンジョンバルブが出現した。

「時間が終わらないのなら、世界に終末を！さあ、追って来なさい！最後の戦いをしようではありませんか！」

ふわっと浮いたダントリオンは、声高な宣言をし、デイメンジョンバルブの中へと姿を消す。

「おのれ……ッ！」

「ケ……ケファノス………」

カイクがケファノスの腕を掴む。

「しっかりしろ！シトリーとシメリーを呼んで来る！」

「ダ……ダメだ………」

「カイク……！」

「お……追え……奴を……ダントリオンを……倒すんだ………」

「し、しかし……！」

「世界に……終末を……？ハハ……ふざけた奴だ……そんなこと……絶対にさせないでくれ……！」

「……………」

「シャクスと……オルマの犠牲を……無駄にするな……！」

「……………わかった。約束する。ダンタリオンは、余が必ず倒す！」

「……………頼む……………ぜ……………」

ケファノスを掴んでいたカイムの手が落ち、死を告げた。

魔王ケファノスは、ダーインスレイヴをその手に握り、ディメンジョンバルブへと向かう。

終末を望む男に、引導を渡す為。

「早かったですね。カイムはちゃんと弔ってやったのですか？」

世界で唯一の存在となったダンタリオンは、ディメンジョンバルブの“中”に立っていた。

四角い石があちこちに浮遊点在し、真ん中には円形の広いリングがある。そこに立っていた。

「貴様に言われる筋合いはない」

「おやおや、“お前”から“貴様”に格下げですか。フフ……………まあいい」

「貴様の存在も記憶も、この時空の彼方に葬ってやる！」

「それはいいアイディアです。是非やってもらいたい」

何を言っても皮肉で返される。

ならばやることはひとつ。目の前の男を倒すだけ。ケファノスはダーインスレイヴを二、三度振るって、構えた。

自分に挑もうとする魔王の姿は、ダンタリオンに自信を与えた。

ここは、世界の果て。幻想の彼方。

「ようこそ……………終末幻想へ」

第九十六章 勇者を待つ魔王

「カイク……………」

息のないカイクを前に、クダイとシトリーとシメリーは立ち尽くしていた。

「カイク様……………嫌……………嫌よ！お願い！生き返って！」

カイクに好意を寄せていたシメリーは、ただひたすらに治癒魔法をかけている。奇跡など起きないことを知って。

「シメリー」

シトリーはシメリーの肩を抱いて、涙を流す場所を貸した。それくらいしかしてやれない。

クダイは、刃の折れたバランスブレイカーを見つけ、拾い上げた。

「どうしてバランスブレイカーがここに？」

無造作に転がっているところは、既にバランスブレイカーが機能しなくなったと取れる。

悪魔の瞳のように見下ろすデイメンジョンバルブからは、ケファノスと、もうひとつ凶悪な気配を感じる。

「ケファノス……………」

行くしかないことくらい解っている。ジャスティスソードが熱を帯

び、クダイを急かしているようだった。

「シトリーとシメリーはここを離れるんだ」

「クダイ」

「ここから先は、何が起きるか解らない。君達を巻き込まない保障も無いんだ」

シトリーに言い聞かせる。

シャクスとカймが死に、オルマは両目を失った。二人には、誰の後も追って欲しくはないのだ。

「生きて……生きて帰って来れる？」

解らない。ヨウヘイの言う通りなら、相手はダンタリオンだ。サイコロの目が1から6までとは限らない。そんなことをやってのける奴だ。

「もちろんだよ」

嘘をついた。だが、こうでも言わなければ聞いてくれないだろう。

「クダイ……カйм様の仇、任せていい……？」

「シメリー……」

「それしか……私には言えないもの」

「うん。きっと」

「……………お願い」

クダイの顔を見ることはなかった。見れば、泣きじゃくり、これから戦おうとするクダイに余計なプレッシャーを与えてしまうから。

「シトリー、あのデイメンジョンバルブまで飛ばせるかい？」

「うん」

シトリーが何やら呪文を唱えると、クダイの足元に魔法陣が描かれ、デイメンジョンバルブまで運ぶ。

「いいね！二人は避難するんだよ！」

ジャステイスソードが熱くなるにつれ、クダイの鼓動も激しさを増す。

進むしかない。いや、進めとジャステイスソードに言われてるのかもしれない。ダンタリオンが黒幕と知った今、かつての仲間に刃を向ける自信は……………問われれば問われるほど、問えば問うほど、突き付けられる正義に心が折れそうにもなる。

ヨウヘイの言ったことが、どうかでたらめであってほしい。

（僕は、鬼になれるだろうか？）

審判の行方は、未だクダイの手の中にある。

頼りにしていた仲間が敵になるというのは、これほどまでに厄介なことだとは思わなかった。

ケファノスの戦いぶりは実に華麗で、卒がない。魔法も織り交ぜ、魔王としてのスキルは全て、嫌みなくらい全面に出している。

単体として見れば、ケファノスは世界で一番強かっただろう。だが今は……

「もう終わりですか？」

ダンタリオンに敵う者はいない。

「フン………まだ始まったばかりではないか」

強がりと言う羽目になるとは………そんな自分に苦笑いをした。

「そうですよ。あっさり死なれては、興冷めしてしまう。ですが、私にはこれがある」

手を翳すと、

「あなたが私に与えてくれた武器。魔槍グランドクロスが」

巨大な槍が姿を現す。

「伯爵に常時魔法が必要なのは、実のところ解っていたのです。そ

の元となる魔力を供給していたのは他でもない、この私自身。ですから、この槍を使うのには気を使いましたよ」

「……………そうだろうな。うつかりすれば、“時の秘法”を切らすことに成り兼ねん。もしそんなことになっていれば、サン・ジェルマンが消えて永遠に居なくなってしまうだろうからな。今の様に」

サン・ジェルマンが姿を消したのは、もしくは保てなくなったのは、ダンタリオンが魔力の供給を止めたからだ。そう考えれば、サン・ジェルマンとの繋がりも合点はいく。

もつとも、本来は人々の希望が具現化したサン・ジェルマンが、《いつ》の時点で“時の秘法”を必要としていたのか、加えて《いつ》からダンタリオンは、魔力をサン・ジェルマンに供給していたのか。

サン・ジェルマンは、自分が幻想であると認識していなかった。ダンタリオンはそう断言している。だとすれば、最低一度はサン・ジェルマンと会っているから、サン・ジェルマンのことを知っているということになる。

また、魔槍グランドクロスを多用出来る魔力は持っていないながら、力をセーブしていた理由はこれで説明がついた。

「しかし解らんことがある。そこまでしなくとも、裏で計画を進めれば、もっと上手くいったはずだ。あわよくば、誰も気付かないまま時間を終着させることも可能だったはず」

結果的に、バランスブレイカーが機能しなかっただけで、それを知るまでは楽に遂行出来たはずなのだ。

「ええ。あなたのおっしゃる通りです」

「では、なぜ…？」

「不死鳥ですよ」

「不死鳥？」

「不死鳥が輪廻をもたらしていることを知ってしまいました。ですから、不死鳥を殺し、輪廻を止めなければ時間の終着は不可能だった。しかし、問題が浮上したのです。不死鳥がどのような存在なのか解りませんでしたから、サン・ジェルマンとヨウヘイの三人だけで捕らえる自信がなかった。だから可能性として、サン・ジェルマン側とあなた達人間側、強いては“私達”側からの複数のアプローチが必要だったのです。そもそも、それ以前に、不死鳥が本当に存在するのも疑わしかった。まあ、さすがに私も、羽竜を見た時は驚きましたが。てつきり“鳥”だとばかり思っていましたからねえ」

言いながらも、羽竜こそが人々が求めた本当の希望であると確信出来た瞬間でもあった。と、思い返す。

クダイは、今考えても、“ジャスティスソードを使える者ならば”という条件付きの希望だと言える。

二つの希望が存在してしまったことが、皮肉にも世界を危機に陥れたのだ。

羽竜が居なければ、ヴァルゼ・アークが“時の秘法”を語るきっかけを作ることなかった。

クダイが居なければ、ヴァルゼ・アークが“時の秘法”を語ることもなかった。

「世界がもつと人間の手の届く場所にあったなら……そう思いませんか？」

「残念だがダンタリオンよ、世界は貴様が望むようには存在出来ん。なぜだかわかるか？」

「……………さあ？なぜでしょう？私には皆目見当もつきません」

「世界の真実を嘆く貴様自身が、世界の産物だからだ」

「……………。」

「世界とは、空間だけを言うのではない。そこにある水や空気、風や塵ひとつに致るまでが世界なのだ。人の知らない様々な恩恵があって、余も貴様もここにいる。それを知りもせず世界を嘆くなど、愚かしいにもほどがある」

「フツ。あなたとなら、あるいは思想を共有出来るのではと思っていましたが、こうも違うものとは」

ダンタリオンは、魔槍グランドクロスを縮小させ、その手に馴染む程度にした。

「来なさい。あなたの首とクダイの首を記念に、世界を崩壊させてあげましょう！」

「どこまでも幻想を見るのは、貴様も同じではないか！」

「結果で証明して見せますよ！」

魔槍グランドクロスをくると回し、ケファノスの懷に飛び込む。その速さは、既にケファノスの手に負えるものではなくなつて

いた。

「私にグランドクロスを与えたこと、後悔することです！」

巨大なだけが魔槍グランドクロスの長所ではない。縮小されても、魔法武器としての能力は高い。ケファノスの鎧とて、豆腐を切るように傷ついていく。

時間構築魔法具の力、サン・ジェルマンの力、魔槍グランドクロス、本来の賢者としての魔力。今のダンタリオンには、強力な手札ばかりが揃っている。

（クダイ……………何をしているのだ……………！）

死ぬのは構わない。しかし、己の命はカカベルへ委ねてある。命を果てるのなら、カカベルの手でなければ。

生きて帰らねばならない。それは義務なのだ。

誰ひとり戻らぬ未来を、帰りを待つ者達に与えてはならないのだ。

勝ち目のない戦いの中、ケファノスが待つのは人々の祈りが召喚した勇者。

第九十七章 託された想い

都合よく事は運ばない。人はそう言う。だがそれは、事を成し得なかった者への、仕置きに過ぎない。都合よく事が運ぶことだって、充分にある。

「あなたの負けです、ケファノス」

魔槍グランドクロスの切っ先が、ケファノスの鼻っ面に突き付けられる。

「……………まだ負けたわけではない！」

「強がり。念仏を唱える時間くらいは与えましょう。なにぶん、慈悲深いものでして」

「黙れ！裏切り者が何を言う！」

「何とでも言うがいい。愛する女さえ裏切ったのだ。今更ですよ」

「それは本心か？」

「はて？質問の真意を伺い兼ねますが？」

「シャクスの死に流した涙。あれさえも偽りだったのかと聞いたのだ」

あの夜のダンタリオンの涙。あれが偽りの涙だったとは、到底思えない。あれは紛れも無くシャクスへの想いだったはず。

「答える！ダンタリオン！貴様は自分の心さえ裏切ったと言っのか！？」

魔槍グランドクロスを手で払い、ダーインスレイヴで真空の刃を放ち危機を逃れた。つかの間ではあるが。

「…………裏切ったとか、偽りだとか。あなたに私の何がわかる？」

「なんだと？」

「私の流した涙が偽りで、私が私自身を裏切ったとして、それでも私は何も変わらない！」

声を荒げ、ケファノスの言葉を振り払い、

「よいかケファノス！人々の見る幻想も、最初は影もない幻だった！時を重ね、気付けば影さえあるあやかし！更に時を重ね、自らの意思さえ持つ幻想！そして今度は、他の世界に住まう現存する者！より具体的に、より力ある形になっていく幻想を、放っておくわけにはいかないのです！」

「…………クダイのことを言ってるのか？それとも羽竜のことか？」

「どちらでも同じこと！そうやって作り出された人々の希望の具現体は、役目を果たすと見向きもされぬ！強欲な人間の道具に過ぎないまま、消されてしまう！」

「ダンタリオン…………まさかお前…………？」

「詮索は無用です。これは人々への戒めの戦い！人々が、二度と幻想を見ることのないように！」

「なるほど。いや、納得がいった。人間でありながら、とてつもない魔力を持つ理由。才能だとばかり思っていたが……………」

黙ってダンタリオンを見つめる。

「フツ。わかつてはいるのです。幻想はどこへ行っても幻想。いつまで経っても幻想だと。それがどんなに苦しいか……………こんな想いは、もう誰にもしてほしくない」

そして、高く飛び上がり、

「終わりにしましょう！私も……………すぐに後を追います！」

魔槍グランドクロスをケファノスの心臓に刺す。

「……………くはっ……………ク……………クダ……………イ……………」

ダインスレイヴを落とし、後ろへ勢い余って吹き飛んで倒れた。カランと無機質な音が、果てる魔王の最後の鼓動。

「語るつもりはなかったのですが……………」

その時、五感を刺激されるような視線を感じ、上を見上げる。

「……………クダイ」

点在する石のひとつに、勇者はいた。

黄金の剣があの特徴の共鳴音を鳴らし続ける中、二人はしばし睨み合うと、クダイの方から飛び降りて来た。

「ヨウヘイが言ったこと、本当だったんだね。ダンタリオン」

ケファノスの身体を抱き起こし言った。

シャクスも、カイクも、最後はケファノス看取られて逝った。同じ様に、今、クダイに看取られようとしている。

「バ……バカが……今頃来おって……」

苦しそうに言いながらも、ケファノスは微笑んでいた。

もう何も言わずともわかりあえる信頼がある仲だ。頼りなく、文句ばかりを吐いていた少年が、今は最後の綱。元々、童顔な面持ちのクダイ。男らしいとは言え、まだ幼さを否定出来ない顔ではあるが、ケファノスは全てを託すに値すると確信している。

「遅くなってごめん……」

「最後まで……心配をかけおって……」

死に行く者の気持ちは今なら解る。思わず触れなくなるものだ。忘れ形見には。

クダイの頬に触れ、

「……倒せ……情けを掛けるな……」

「……っん」

「この命……シスターに預けたというのに……がはっ……」

「ケファノス！」

「クダイ……シャクスの想い……カイムの想い……余の……想い……
確かに託したぞ………」

「わかったよ。確かに、受け取ったから。だから………」

涙を我慢出来なかった。まだ戦いは終わっていないのに。でも、最後の別れだと知ってしまっているから。

「泣き虫め………」

「ケファノス、今までありがとう………後は、僕が引き受けるよ………」

「………フツ………礼を言われることなど………何もしてない………」

「ケファノス………！」

もう、応答はなかった。

「別れは済みましたか？」

「ダンタリオン………ッ！」

波ながらも凄むクダイに、正直、怯みそうになった。どこか、ケファノスに似ていたからだ。

「僕は絶対にお前を許さないっ！」

「…………哀れな。話は聞こえていたのでしょうか？あなたも所詮、この世界の身勝手な人々に呼び出された道具。それでもまだ戦うと？」

「関係ないよ。僕はこの世界が好きなんだ、みんなが好きなんだ！裏切っておいてエラソーに言うな！」

「裏切ったのはこの世界の人々です。…………サン・ジェルマン伯爵を…………私を」

「だからなんだよ！裏切られたら裏切り返すのか！？そんなの…………身勝手なのはダンタリオンの方じゃないか！」

クダイは涙を乱暴に拭い、ジャスティスソードを構えた。

「悲しい世界なんですよ。ここは」

対するダンタリオンは、魔法陣を自分の身体に指先で描くと、

「教えてあげましょう。最後の真実を」

肉体に変化が表れる。氷のような突起した翼が背中に生え、額に第三の目。点在する石が一樣に飛んで来て、ダンタリオンを包むと、大きな怪物に変身した。

「人々の祈りは、かはねびと屍人が叶えるのですよ。」

「なん…………だつて…………？」

「あなたにだけ語る真実です」

蜘蛛のような胴体で戦闘体勢を取る。

「始めましょうか。幻想^{ゆめ}を見る人々への最後の戒めを！」

クダイを生贄^{いけにえ}にする宣言書が読まれた。

クダイを殺すことで、人々の希望を断つことが出来る。
覆い被さるダンタリオンの影に呑み込まれながらも、

「僕は負けない……みんなの想いがある限りっ!!」

瞳を閉じ無眼の構えを取った。

幻想を打ち破る為、悲しみを乗り越え正義の刃を振るうのみ。

「行くぞ！ダンタリオン!!」

終章

思えばこの世界に来てせいぜい一ヶ月くらい。わけも解らぬままに連れられて来た世界は、自然が豊かで、中世を思わせる雰囲気の世界。

魔王に賢者、聖騎士にエルフ、ハーフエルフに勝ち気な女戦士^{なま}。訛りの強いシスター。いろんな仲間と知り合い、生死を懸けた戦いに身を投じて来た。やがてクダイは、この世界で生きて行きたいと思いを始めていた。

自分の世界に微塵の未練もなく、ただ、純粋なまでに生きる場所を見つけた。

その生きる場所を守る為、かつての仲間^に刃を向け挑んでいる。

「それにしても、あなたも立派になりましたねえ。剣ひとつ扱えなかったあなたが、今ではシャクスを思わせるほどまで成長した」

いつの間にか身に付いたような卓越した身体能力は、高いジャンプを可能とする。もしくは、デイメンジョンバルブの中と言う限られた空間がそれを可能としているのかもしれない。が、それでも、グランドクロスで遇われる。いかに無眼の構えを使えど、後一步が及ばない。

「化け物に言われたくない！」

「…………クダイ。あなたは自分の行動が正義だと信じているのです。あなたが、それは本当に正義だと言い切れますか？」

「そんなの…………言い切れるに決まってるじゃないか！」

力を込め、再度ジャスティスソードで攻撃を仕掛けるが、やはり遇われてしまう。

「では、正義とはなんでしょう？」

「何って……………」

「確かに、あなたには大義名分がある。ですがそれは、あなたに都合のいいものではありませんか。それを正義だと呼べるのなら、世界に、宇宙に、一体どれだけの正義があると思います？」

「都合がいい……………そうかもしれない。でも、仲間を騙したり、殺したりすることは、断じて正義なんかじゃないッ！」

「違いますね。正義を貫くには犠牲は必要不可欠。世界を救うとか、誰かを守るとか、そんなものを正義とは言わないんですよ！」

「じゃあ、お前の正義はどこにあるんだ！」

ダントリオンは溜め息を吐いた。クダイに呆れたわけではない。所詮、解ってもらえぬものと嘆いたのだ。

「どんな世界にも“人間”は存在します。いえ、“人間”が存在するから世界がある。そう言うべきでしょう。人間は、自分達にそぐわない都合を嫌い、あたかもそれが“悪”であるかのように位置付ける。自分勝手に解釈出来る正義など、私は認めない。ならば私は、人間が嫌う都合を正義とする。そう決めたのです」

「人間が嫌いなんだな」

「面白い話をして差し上げましょう。……………遠い昔ですが、やはり今と同じように世界を懸けた戦いがありました。人間と……………神と呼ばれ“た”種族の。論じるまでもなく、神の圧勝でした。人口の半数以上を失った人間は、神から逃げる生活を余儀なくされることになったのですが……………」

唐突に語られ始めた話は、お伽話のような神聖な話。

「追い詰められた人間は、やがて祈るのです。“安息の地が欲しい”と。そして祈りは叶えられました」

「誰かが神様を追い払った……………」

ダンタリオンは首を横に振り否定し、

「時間を戻したのです」

そう言った。

「時間を……………？どうやって……………」

「時間には等価交換と言う概念があります。願ったものを手に入れる代わりに、同等の価値のあるものを犠牲にするという条件です。そして、“安息の地”を願った人間の前に、一人の男が現れました。男は神の存在しない世界を手に入れる方法として、時間を遡るのですが……………どうしたと思います？」

“いつも”の口調だった。その口調をもう何年も聞いてないくらい懐かしく思えた。

「神様を……皆殺しにしたとか……」

「フフ。神には勝てなかったのですよ？何度やっても人間が神に勝つことはありません」

「男がそれをしたかもしれないじゃないか！」

「……では解答しましょう。なあに、簡単な答えです。男は時間を遡り、その世界を崩壊させたのですよ」

「……………！！」

「時間を遡った世界と引き換えに、神に支配された世界を、神の“居ない”安息の地を手にしたのです」

言葉が出なかった。言っていることが支離滅裂に聞こえる。

時間を遡る……過去へ行つて、過去そのものを壊して、そして未来を……そう言ってるのだろうか？そう思っていると、ちゃんとした解説を付け加えてくれた。そこは実にダンタリオンらしい。

「時間軸にある過去を崩壊させたエネルギーを利用し、過去があった“その場所”に、全く新しい世界を創造させたのです」

「その“男”って、サン・ジェルマンみたいに幻想なのか？」

「ええ。幻想として誕生しました」

それを聞いた時、ようやく話が見えて来た。繋がったと言っべきか。

「この世界を創造し、そして全ての幻想の始祖……それが私です」

「ダンタリオンが……それじゃあ、時間構築魔法具ツールを造ったベオ
って人に世界の仕組みを教えたのは……」

以前、ケファノスが言っていた。時間構築魔法具ツールを造った巨人王ベオ。彼はもしかしたら世界の創造主に会って、世界の仕組みを聞いたのではないかと。そこにダンタリオンが絡んでいたとは。

「私が教えました。時間を遡った私は、あなたのような生身の人間ではない。存在を維持するには、時間を利用する力を捨てねばならなかった。そんな時、ベオに出会い、彼にこの世界がどういう力でどういった理由で存在しているかを打ち明け、捨てた私の力で時間構築魔法具ツールを造ることを勧めました。その後、彼とは会っていませんでしたから、本当に時間構築魔法具ツールがあるか確信はありませんでした。ですから、バランスブレイカーを見た時は興奮しましたよ。必死に沸き上がる感情を抑えましたが」

そのバランスブレイカーが機能を果たさなかった理由は解らず仕舞いだが、それでも充分だった。

一番警戒していたケファノスを倒し、残るクダイはジャスティスソードと無眼の構えを駆使しても自分に及ばないのだから。

「バランスブレイカーは無くとも、四つの時間構築魔法具ツールは満足な力を与えてくれました。私は、自分が創ったこの世界を自分で壊す！誰にも咎める権利などないのですよ！」

「……………」

「どうしました？黙り込んでしまって」

拳が震える。クダイは齒を食いしぱり、

「僕は神様とかよく解らない。お前がこの世界を創ったってなら、そつなんだろう。でも……自分が創ったから壊してもいいなんて理屈、許すわけにはいかない！」

「……………フツ。フハハハハッ！！許さない？言っただろ、誰にも私を咎める権利はないと！」

「咎めないさ！でも許さない！死んで行っただみんなの為に、僕がお前を裁いてやる！」

「裁く…？私を…？その自信家なところ、シャクスに似て来たじゃないですか。……………生意気な奴め！あの日の人間のように、あなたは私には勝てない！」

「一撃で仕留めることだって出来る！無眼の構えなら！」

クダイは瞼の裏に見える、いくつかの光の軌跡を辿る。その中のひとつでいい。ダンタリオンに届く一筋を見つける為。

「バカめ！ケファノスさえ勝てなかった私に、小わっぱ風情が勝てるかアツ！！！」

大解放した魔力がクダイを襲う。光の軌跡を消してしまうくらい眩しい魔力。しかし、そのおかげで、たったひとつ消えなかった光の軌跡を見つけることが出来た。

「見えたっ！」

ジャスティスソードを振りかぶり、全身全霊を込め……切り裂いた。

「クダイ……………」

ふと、言い知れぬ予感にシトリーは振り返った。

カイムの亡きがらを運び、既に魔王城の外に来ていた。

「大丈夫だよ。信じて待とう。カイム様も……………きっとそう言うてる」

カイムの顔を眺め、シメリーは言う。信じて待つこと以外、自分達に出来ることは無いのだから。

シトリーも同感ではあるが、さっきから付き纏う予感。それは実にシンプルなもの。

- もしかしたら、このままクダイは帰って来ないんじゃないか -

好きだから尚更、そんな不安を覚えてしまつのだろう。

「クダイ……………待ってるからね……………」

満身創痍の身体でもいい。帰還してくれるのなら。自分の腕の中に、ちゃんと帰還してくれるのなら。

既に外の戦いは勝敗が着いている。魔族側が戦意喪失。人間とエルフ側が勝利した。

後は、ただ待つだけだった。

「ケファノスが戻ったらどうするんだい？」

不意をついたオルマの言葉に、カカベルはキョトンとして見せた。

「アンタ、ケファノスのこと好きなんだろ？」

「な、何を言ってるだ！な、ななななしてわだすが……！」

カカベルは、顔が真っ赤になるのは防げなかった。

「見てればわかるよ」

本当はもつと根本的なこと。そもそもが、ケファノスが色男過ぎる。世の女性の理想を実体化したような風貌をしている。嫌うわけがないのだ。

「バカこくでねえ！あいつはわだすの村を……………！」

「でもそれは、ケファノスのせいじゃない。知ってるはずだよ」

「んだども……………！」

「素直になりな。仮に、アンタがケファノスを殺しても何も変わらないし、アンタは人を殺せるような人間じゃない。罪悪感だけが残るだろうよ」

「……………あいつは人でねえべ」

おとなしく皮肉で返した。それは自分が一番解ってることなのだ。

「世界の神官どもは、神の教えなんて本当はどうでもいいのさ。権力にしがみついて、下の者に頭を下げられていればいいって奴らばかり。だからさ、カカベル、アンタだけは真っ直ぐなシスターになつて欲しいんだ」

「オルマ……………」

「ケファノスなら、そういう道を示してくれる。アンタはケファノスに着いて行かなきゃダメなんだ。ま、惚れた男に着いて行くのに理由は要らないか」

「だ、だから、別に惚れてねーべ！」

「アハハハハ！」

こんなやり取りを続けた旅も、クダイ達が戻ることと終わりを告げ

る。そして新しい生活が始まるのだ。

それぞれ、国へ歸つてしまふのだろが、それはこの世界に平和が戻つたなよりの証拠。

失った視力では見えない、これからの未来。

オルマの瞼の裏には、みんなで笑える日の未来が描かれていた。

光の軌跡に乗り、鮮やかに身を翻したクダイは、たったひとつの可能性を持ってジャスティスソードを振り下ろした。

ダンタリオンの肉体に刃が刺さると、デイメンジョンバルブ内の空間が振動を起こす。ジャスティスソードの持つエネルギーが、空間に放出されたのだろう。でもそれは、ダンタリオンに決定的なダメージを与えたということ。

「ウガアアアアアア——ツ!!!!!!!!!!!!」

血しぶきを上げ、よるめく。クダイは血を浴びながらも、結構な高さからの着地を成功させる。

「……やったか!？」

左肩に大きな傷。普通の人間ならとくに死んでもおかしくない。普通……なら。

「ぐう……み……見えなかった……いつの間に跳んでいたと……」

敵に回って、初めて無眼の構えの恐ろしさを知る。剣を振るうようになつて日の浅いクダイにやられてしまうのだ。見事としか言いようがない。……が、もっと恐ろしいことも知る。

「でかくなりすぎたな！次で仕留める！」

最後の一撃の為に構えた。ジャスティスソードが鳴る。

・キイイイン・

漲る力が、勝利を約束する。そんな気がしなくてもなかった。だが、そう思うのはクダイだけではなかったのだ。

「……ククク……アハハハハハッ！！」

突然、大笑いをするダンタリオン。傷の痛さなど消し飛ばすくらいに。

「何がおかしいんだ！」

「クク……これが笑わずにいられますか」

「な……なに？」

「今の一撃で、知ってしまったのですよ。大変な事実を」

勿体振る言い方をしているのは、ダンタリオンにとって有利なことだからだろう。

「私に一撃を与えた時、この空間が大きく揺れました。それは、どうしてだと思いますか？」

「どうして……って……」

「フフ……それはですね……」

「……………」

「あなたの手に握られているジャステイスソード。それこそが……バランスブレイカーだからですよ」

「な……なんだって……！！」

「ジャステイスソードが、私の中にある四つの時間構築魔法具ツールに触れ……世界を壊し掛けた。クク……どうやら、最悪のシナリオが用意されていたみたいですね」

「ジャステイスソードが………バランスブレイカー……！！？」

ジャステイスソードを見る。それが本当なら、ダンタリオンを倒すということは世界を崩壊させるということになる。かと言って、倒さずに逃げても世界はダンタリオンによって壊されるだろう。

つまり、この世界を救う手立てが無くなったのだ。

「さあ、どうします？ジャステイスソードで私を倒しても、私の願いは成就する。私の勝利で物語は幕を閉じるのです！」

（よく考える！何か、何か手はあるはずだ！）

辺りを見回す。そして、ケファノスの剣を見つけ、すかさず取りに行く。

「ほほう。なるほど。ジャスティスソードではなく、魔王の剣ダーインスレイヴで。フツ。ですが果たしてそれで倒せるでしょうか？私を。あなたが無眼の構えを使うのは、ジャスティスソードの賜物だと思いますよ。無眼の構え無しでは、どんなに優れた武器を持っていたとしても、あなたの腕では宝の持ち腐れ。試しにやっこらんない」

「言われなくてもやってやるさ！」

瞼を閉じる。そして集中する。光の軌跡さえ見えれば……しかし結果は悲惨なものだった。

ダーインスレイヴが手から落ち、膝をも落とす。

「そんな……何も見えない……」

「当然の結果です。ジャスティスソードを使えるという条件だけが、あなたがこの世界に存在出来る理由なのですから！」

「……終わった……僕にはもう……」

ダンタリオンが高笑いをする中で、クダイは絶望を知った。自分にはどうすることも出来ない。その時、ヴァルゼ・アークが最後に残した言葉が頭を過ぎる。

・全てがお前の手に委ねられた時、お前はお前の信じる正しいことをすればいい -

人は苦しむから、望む結果が保証されないから正しいことが出来ないのだと。

クダイはおもむろにジャスティスソードを手に立ち上がり、構えた。

「おやおや、まだやるのですか？どうにもならない絶望を前に」

「……………お前なんか壊されてしまっくらいなら……………僕がこの手で世界を壊す！」

何を持って勝利とするか。そう考えた。このままダンタリオンを生かして終わるより、ダンタリオンを確実に倒して終わる。でなければ、死んで行った仲間が浮かばれない。

「狂ったか！」

「覚悟しろ！ダンタリオン！なにもかもを、お前の望む通りにはさせないっ！」

瞼を閉じ、光の軌跡を見る。それは、今までにないくらい確かな軌跡。確信した。勝利出来ると。世界は壊れてしまっかもしれないが、ダンタリオンだけは確実に倒せる。

「お…おのれっ！クダイ！！絶望すら乗り越えるというのかッ！！」

「これで……………」

ダンタリオンの視界から消えたと思えば、目の前に瞬間的に現れる。

「これで終わりだアアアーーーーッ!!!!!!!!!!」

黄金の正義ジャスティスソードは、この世界の創造主ダンタリオンを貫いた。

特章 時空に生まれた幻想

幼い頃の不思議な体験の記憶。いつしか、ものすごく不確かで曖昧な記憶へと変わっている。そんな記憶、きつとみんなもあるんだと思う。妖精を見たとか、小人を見たとか。大人になつてしまえば、見間違えた程度にしか思わなくなつて、海馬の奥底にでも追いやられてるんだろうね。

「行つてきまゝす！」

「クダイ！どこ行くの！？」

「ヨウヘインとこ！夕方には帰るから！」

母さんも同じようなことを考えたことがあるのかな？勢いよく遊びに行った僕に、同じ頃の自分を重ねてるのかも。そんな優しい目で送ってくれた。

ああ、そういえば、日頃の感謝の気持ちを言葉にしたことなんてない。

何も考えず友人の下へ急ぐ足取りは、一端のアスリートにさえ見える。

「うわっ！」

曲がり角。誰かにぶつかり尻餅をつく姿が、我ながらなんとも頼りない。

「大丈夫かい？」

「あ、す、すいません」

差し出された手を遠慮なく掴み、起こされ埃を払う。

「ありがとうございます」

「いいんだよ。僕も考え事しながら歩いてたから気付かなかった」

「こ、こちらこそ！ホントにすいませんでした！」

髪の高い、体格のいい男を見上げ、少し驚いたような表情で頭を下げ、また駆ける。その背中、近いうちに大きな運命を背負うことになるのだが……。

コンクリートで造られたこの世界も、まあ悪くはない。特別嫌いだとは思わない。でも、みんなのいた世界に魅せられてしまった。あの世界にもう一度行きたい。

ダンタリオンは言った。時間には等価交換という概念があると。ひとつの世界を犠牲にすれば、新たな世界を創造することも可能。その可能性を探れば、ひとつの世界を犠牲に、壊れてしまった世界を取り戻すことも出来るかもしれない。

「みんな……」

ジャスティスソードを手に具現し、振りかぶる。

「母さん、そして僕……許して欲しい。僕にはどうしても会いたい人達がいるんだ」

ダンタリオンが成した業。それを今度は僕がやる。

ジャスティスソードがいつになく輝くのは、少ない味方のつもりだろうか。

深呼吸をして、目を閉じる。罪の意識が無いわけじゃないけど、他にどうすることも出来ない。

僕は、ジャスティスソードで地面を叩き切った。

四つの時間構築魔法具の力を吸収したジャスティスソードが、バランスブレイカーとして世界を壊し始める。

「これでいい。これでいいんだ」

大好きな仲間に、大好きなシトリーに会う為に、その時間へ行く為に、僕は過去へやって来たのだから。

終末幻想伝

ジャスティスソード

〈完〉

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0849h/>

終末幻想伝 ジャスティスソード

2010年10月9日03時06分発行